

PeopleSoft®

EnterpriseOne 8.9
基本操作
PeopleBook

2003 年 9 月

PeopleSoft EnterpriseOne 8.9
基本操作 PeopleBook
SKU AC89JCO0309

Copyright 2003 PeopleSoft, Inc. All rights reserved.

本書に含まれるすべての内容は、PeopleSoft, Inc. (以下、「ピープルソフト」) が財産権を有する機密情報です。すべての内容は著作権法により保護されており、該当するピープルソフトとの機密保持契約の対象となります。本書のいかなる部分も、ピープルソフトの書面による事前の許可なく複製、コピー、転載することを禁じます。これには電子媒体、画像、複写物、その他あらゆる記録手段を含みます。

本書の内容は予告なく変更される場合があります。ピープルソフトは本書の内容の正確性について責任を負いません。本書で見つかった誤りは書面にてピープルソフトまでお知らせください。

本書に記載されているソフトウェアは著作権によって保護されており、このソフトウェアの使用許諾契約書に基づいてのみ使用が許諾されます。この使用許諾契約書には、開示情報を含むソフトウェアと本書の使用条件が記載されていますのでよくお読みください。

PeopleSoft、PeopleTools、PS/nVision、PeopleCode、PeopleBooks、PeopleTalk、Vantiveはピープルソフトの登録商標です。Pure Internet Architecture、Intelligent Context Manager、The Real-Time Enterpriseはピープルソフトの商標です。その他すべての会社名および製品名は、それぞれの所有者の商標である場合があります。ここに含まれている内容は予告なく変更されることがあります。

オープンソースの開示

この製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) が開発したソフトウェアが含まれています。Copyright (c) 1999-2000 The Apache Software Foundation. All rights reserved. このソフトウェアは「現状のまま」提供されるものとし、特定の目的に対する商品性および適格性の黙示保証を含む、いかなる明示または黙示の保証も行いません。Apache Software Foundationおよびその供給業者は、損害の発生原因を問わず、責任の根拠が契約、厳格責任、不法行為(過失および故意を含む)のいずれであっても、また損害の可能性が事前に知らされていたとしても、このソフトウェアの使用によって生じたいかなる直接的損害、間接的損害、付随的損害、特別損害、懲罰的損害、結果的損害に関しても一切責任を負いません。これらの損害には、商品またはサービスの代用調達、使用機会の喪失、データまたは利益の損失、事業の中断が含まれますがこれらに限らないものとします。

ピープルソフトは、いかなるオープンソースまたはシェアウェアのソフトウェアおよび文書の使用または頒布に関しても一切責任を負わず、これらのソフトウェアや文書の使用によって生じたいかなる損害についても保証しません。

目次

J.D. Edwards ソフトウェアの概要	1
J.D. Edwards ソフトウェアの機能.....	1
システム・インテグレーション.....	1
基本操作の概要.....	4
J.D. Edwards ソフトウェアの概要	5
Solution Explorer	6
Solution Explorer の処理.....	7
Solution Explorer インターフェイスの理解.....	7
ユーザー環境設定の変更.....	11
Solution Explorer ホームページ.....	13
J.D. Edwards Web サイトへのアクセス.....	13
Solution Explorer からメニューおよびアプリケーションを開く.....	14
タスク・ビューの処理.....	16
タスク・ドキュメンテーション・ウィンドウの処理.....	21
タスク・プロパティの理解.....	22
ユニバーサル・ディレクタの実行.....	22
Web クライアント	25
Web アプリケーションのユーザー・インターフェイス.....	25
J.D. Edwards Web クライアントへのアクセス.....	25
タスク・エクスプローラ.....	27
略式コマンド.....	28
お気に入りタスク・ビュー.....	30
ロール・ベース・タスク・ビュー.....	30
ユーザー・オプション.....	31
タスク・エクスプローラの設定.....	32
タスク・エクスプローラのトラブル・シューティング.....	34
J.D. Edwards Web アプリケーション/レポート.....	34
アプリケーション・ショートカットの送信.....	35
Web アプリケーション・フォーム.....	36
グリッド.....	38
メディア・オブジェクト添付.....	44
アプリケーション・ユーザー・インターフェイス	49
ユーザー・インターフェイスの理解.....	49

メニュー・バー.....	50
ツールバー.....	50
エグジット・バー.....	51
ポップアップ・メニュー.....	52
スクロール・バー.....	53
ビジュアル・アシスト.....	53
ステータス・バー.....	53
オンライン・ヘルプ.....	54
エラー・メッセージ.....	54
フォーム・タイプ.....	56
フォーム上のタブ.....	59
アプリケーション・ユーザー・インターフェイスの処理.....	60
ツールバーの表示変更.....	60
メニュー・バーとツールバーのカスタマイズ.....	61
モードレス処理.....	63
エグジット・バーの処理.....	63
ビジュアル・アシストの処理.....	64
グリッドの処理.....	67
グリッド・フォーマットの処理.....	67
グリッドのフォーマットのカスタマイズ.....	68
グリッドの外観の変更.....	71
カラムおよびローの固定.....	72
グリッドの最大化.....	73
グリッドからのデータのエクスポート.....	73
データのグリッドへのインポート.....	75
グリッドの印刷.....	76
グリッドでのチャートやグラフの作成.....	77
グリッドでのチャートやグラフのカスタマイズ.....	78
ユーザー一時変更.....	79
ユーザー一時変更の理解.....	79
一時変更情報の検索階層.....	80
キャッシュされた一時変更情報.....	80
ユーザー一時変更の処理.....	81
ユーザー一時変更の作成.....	81
フォーム変更後のユーザー一時変更の修正.....	82
レコード.....	84
レコードの検索.....	84
検索条件を使用したレコードの検索.....	85
QBE の使用.....	85
ワイルドカードおよび演算子を使用したレコードの検索.....	86
レコードの処理.....	87

レコードの選択	89
レコードの追加	89
レコードの変更	89
レコードの削除	90
メッセージと待ち行列	91
内部または外部メッセージ	91
ワークフロー・メッセージ	91
待ち行列の理解	92
J.D. Edwards ソフトウェアの待ち行列	92
ワークフロー	92
メッセージの処理	92
ワーク・センターへのアクセス	93
メッセージの表示	93
内部メッセージの送信	94
外部メールの環境設定	98
外部メッセージの送信	99
ショートカットの処理	100
メッセージの改訂	101
メッセージの待ち行列間の移動	102
優先または補助待ち行列へのリダイレクト	102
メッセージの待ち行列へのメッセージの送信指定を取り消すには	103
メッセージのリダイレクト	103
メッセージの削除	104
メッセージの印刷	104
待ち行列の処理	105
ユーザーが閲覧できる待ち行列の指定	106
ユーザーの待ち行列のセキュリティ設定の変更	107
時刻ログと備考入力	108
入社/帰社および退社/外出の入力	108
備考の入力	109
時刻ログの参照	109
メディア・オブジェクトの添付	110
メディア・オブジェクトの処理	111

添付ファイルのチェック	111
メディア・オブジェクトの添付	112
メディア・オブジェクトの検索	115
添付の名前変更	116
メディア・オブジェクトの削除	117
テンプレートの処理	117
メディア・オブジェクト・プロパティの処理	119
メディア・オブジェクトへのメタデータの追加	121
フォーム・レベルでの OLE オブジェクトの添付	122
差し込み印刷ワークベンチ	124
差し込み印刷文書の変更	124
差し込み印刷文書の追加	125
差し込み印刷文書の削除	127
対話型バージョン	128
処理オプションによるバージョン制御	128
対話型バージョンとバッチ・バージョンの違い	129
対話型バージョンの処理	129
対話型バージョンのバージョン詳細の処理	129
対話型バージョンのコピー	132
対話型バージョンの作成	133
バッチ・バージョン	135
バッチ・バージョンの特徴	135
Web クライアントによるバッチ・バージョンの作成	136
バッチ・バージョンの処理	136

バッチ・バージョンの実行.....	137
バッチ・バージョンの処理フォームへのアクセス.....	138
バッチ・バージョンの設計変更.....	138
バッチ・バージョンに対する処理オプションの変更.....	141
データ選択およびデータ順序の設定.....	144
処理オプションのレポート作成.....	146
テーブル変換バージョンのプロパティへのアクセス.....	147
バッチ・バージョンのバージョン詳細.....	148
バッチ・バージョンのコピー.....	150
バッチ・バージョンの作成.....	152
バッチ・バージョンのチェックアウト/チェックイン.....	154
バージョンのチェックアウト・レコードの消去.....	155
バッチ・バージョン・プログラム(P98305)の処理オプションの変更.....	156
バッチ・バージョン・スペックのエンタープライズ・サーバーへの移動.....	157
バージョン・スペックの一時変更.....	158
レポートまたはバージョン用の BrowsER へのアクセス.....	159
処理オプション	160
処理オプションの機能.....	160
処理オプションのタイプ.....	161
処理オプションの例.....	161
処理オプションの処理.....	162
対話型バージョンの処理オプション.....	163
バッチ・バージョンの処理オプション.....	164
マスター・ビジネス関数(MBF)の処理オプションの使用.....	166
ユーザー定義コード	168
UDC、UDC タイプ、およびカテゴリ・コード.....	168
例:住所録のユーザー定義コード.....	169
UDC および UDC タイプの変更.....	170
ユーザー定義コードを変更する場合の注意点.....	170
ユーザー定義コード・テーブル.....	171
ユーザー定義コードのカスタマイズ.....	171
ユーザー定義コードの変更.....	171
ユーザー定義コードの追加.....	173
ユーザー定義コードの削除.....	175
ユーザー定義コード・タイプのカスタマイズ.....	175
ユーザー定義コード・タイプの変更.....	176
ユーザー定義コード・タイプの追加.....	177
ユーザー定義コード・タイプの削除.....	178
ユーザー定義コード記述言語の変更.....	179
CNC の基礎	181
CNC の利点.....	181

ネットワーク中心のソフトウェア	182
柔軟なレバレッジ・テクノロジー	182
ワールドワイドなビジネス・サポート	182
継続作業不要のカスタム・ソリューション	183
CNC の基礎	183
オブジェクト・ストレージ	183
環境	185
パス・コード	186
オブジェクト構成マネージャ(OCM)	186
データ・ソース	188
オブジェクト・デプロイメント	189
ホット・キー	193
テキストの選択	193
キーボードのショートカット	194
移動	194
ボタン	195
カレンダー・ツール用キーボードのショートカット	195
メディア・オブジェクト・テキスト用キーボードのショートカット	195
グリッド内での移動	196
J.D. Edwards ソフトウェアのシステム	197

J.D. Edwards ソフトウェアの概要

J.D.Edwards ソフトウェアは、既存のテクノロジーに縛られることなく、日々変化するテクノロジーおよび業務に対応して、柔軟なソリューションを提供するネットワーク中心のソフトウェアです。

J.D.Edwards のソフトウェアを使用すると、新しいテクノロジーを企業業務のフレームワークに追加することができます。

J.D. Edwards ソフトウェアの機能

J.D.Edwards ソフトウェアには次の機能があります。

- マルチプラットフォーム・コンピューティング。J.D.Edwards のソフトウェアは、異なるプラットフォームで実行可能です。プラットフォームを選ばないので、ネットワーク上でのデータ管理が容易になります。
- 統合されたサプライチェーン。インターネットおよびイントラネットを使用しての従業員、顧客、仕入先との連絡や情報共有が可能です。
- インタオペラビリティ。既存のハードウェア、データベース、およびソフトウェアを活用して、既存の IT 資産およびサードパーティ製品の統合が図れます。
- 適応性。J.D.Edwards ソフトウェアは、複数言語、多通貨、会計基準、およびテクノロジー標準に対応しています。
- ユーザー・フレンドリ。ポイント&クリック、ドラッグ&ドロップ、および入力フォームにより、簡単に使用できます。

システム・インテグレーション

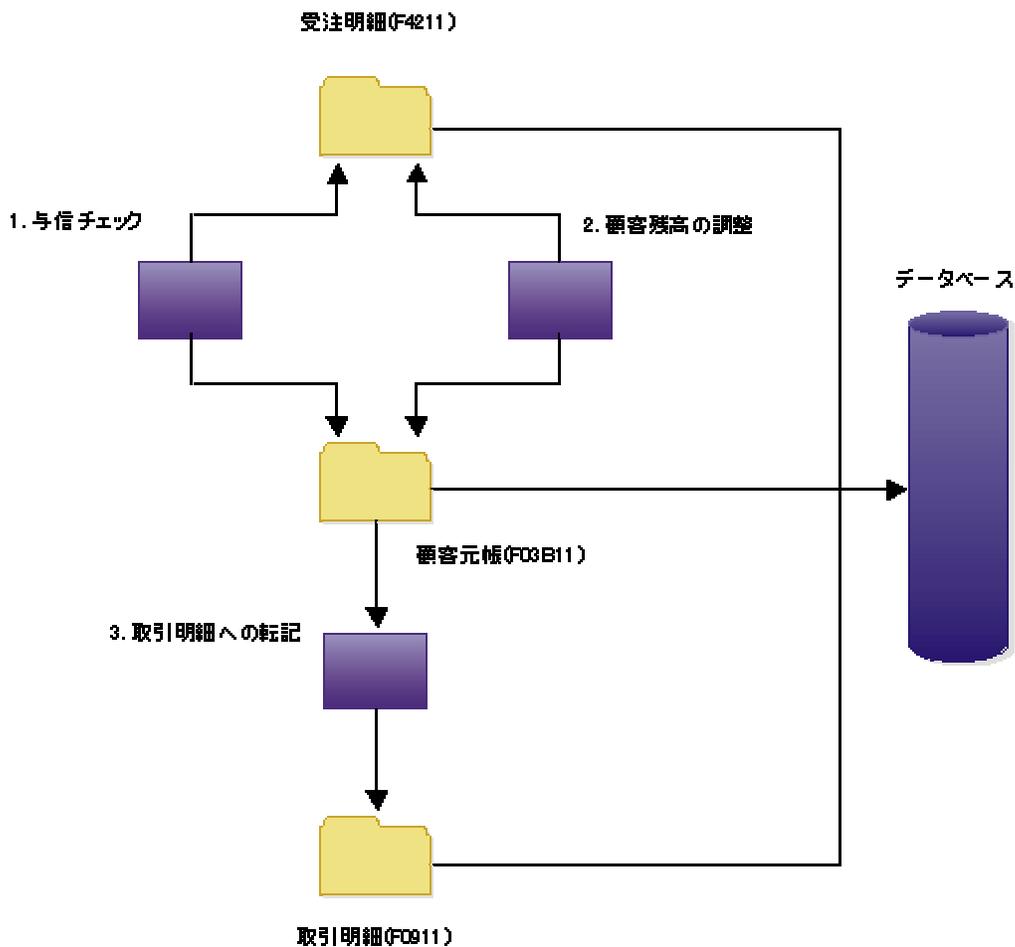
J.D.Edwards ソフトウェアには、エンタープライズ・アプリケーションとカスタマイズ・ツールセットが統合されています。

J.D.Edwards では、ソフトウェアの各グループをアプリケーション・スイートと呼びます。このアプリケーション・スイートは、複数のサイトおよび組織の製造、会計、流通/ロジスティクス、および人事管理をサポートします。どのアプリケーション・スイートをインストールするかは、ビジネスの目的に応じて決めることができます。複雑なビジネス状況では、包括的なソリューションを達成するために複数のアプリケーションを組み合わせ使用できます。

各アプリケーション・スイートは複数のシステム・モジュールで構成されます。たとえば、会計システム・スイートには、売掛管理(システム 03B)、買掛管理(システム 04)、一般会計(システム 09)、および固定資産管理(システム 12)などが含まれます。各システムはそれぞれビジネスの用途に応じたアプリケーション、フォーム、レポート、およびデータベース・テーブルから構成されています。

各システムの機能は統合されているため、さまざまなアプリケーションを実行する場合でも、システムを切り替えることなく実行できます。次の図では、〈受注オーダー入力〉プログラムと売掛管理プログラム間で残高情報やオーダー合計などの顧客データがどのように共有されるかを表しています。図では、〈受注オーダー入力〉プログラムと売掛管理システム間で残高およびオーダー合計などの顧客データがどのように共有されるかを表しています。受注オーダーを入力すると、〈受注オーダー入力〉プログラムは売掛管理システムに情報を渡し、そこで仕訳が総勘定元帳に転記されます。また、〈受注オーダー入力〉プログラムから売掛管理システムに与信チェックをリクエストできます。

共有データおよびロジック

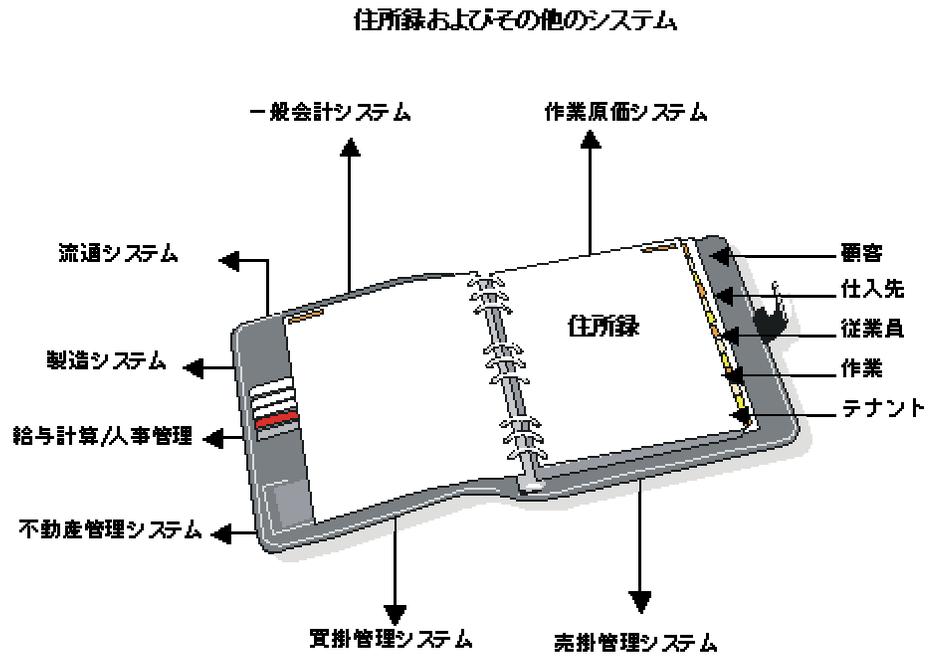


このガイドでは、住所録(システム 01)を参考に J.D.Edwards ソフトウェアの概念と操作方法を説明していきます。住所録は従来のカード・ファイルをオンライン化したデータベースで、名称、住所、電話番号などが保存されており、次の機能があります。

- 検索および報告用に、すべての住所録マスター情報に簡単にアクセスできる。
- 重複レコードをなくし、レコードを効率的に保管する。
- ビジネスユニット割当てや検索タイプ権限によりセキュリティを設定する。
- J.D.Edwards ソフトウェアの他システムと連動する。

住所録システムは J.D.Edwards ソリューションの基盤であり、J.D.Edwards システムの基本概念を実践的に学ぶことができるので、ここで実行するタスクのほとんどは住所録システムの例を使用します。

住所録インターフェイスには、次のシステムが含まれます。



参照

- システムと関連コードのリストについては「J.D.Edwards ソフトウェアのシステム」

基本操作の概要

この『基本操作』では、J.D.Edwards ソフトウェアの統合環境を説明します。概要、図、手順、例を通して、すべてのアプリケーションに共通する操作および機能を説明しています。ガイドは次の内容から構成されます。

J.D. Edwards ソフトウェア入門	さまざまな J.D.Edwards のツールおよびアプリケーションにアクセスするためのエントリ・ポイントとして使用するそれぞれのアプリケーションについて学ぶ。
アプリケーション・ユーザー・インターフェイス	メニュー、フォーム、およびグリッドを含む操作環境を学ぶ。
ユーザー一時変更	アプリケーションの外観を変更して、ビジネスの目的に合うようにカスタマイズする。
レコード	レコードの検索、追加、データベース・レコードの処理、オブジェクトの追加、レコード入力フォームのフォーマットおよび移動方法を学ぶ。
メッセージと待ち行列	ワークセンターを使用して、J.D.Edwards ユーザーや環境外の宛先へメッセージを送受信し、処理する。
メディア・オブジェクトの添付	オブジェクト(テキスト、イメージ、OLE オブジェクト、および J.D.Edwards ソフトウェアのショートカット)をローおよびフォームに添付する。
差し込み印刷ワークベンチ	特定のアプリケーション・ワークフローを通じてフォーム・レターの自動作成をするために、J.D.Edwards ソフトウェアのレコードをサードパーティのワード・プロセッシング文書とマージする。
対話型バージョン・アプリケーション	処理オプションおよび対話型バージョン詳細の変更を通してアプリケーションの変更操作を学ぶ。
レポート用バッチ・バージョン	レポート・バージョンを作成、修正、および印刷する。
処理オプション	キーとなる関数、タイプ、および処理オプションへのアクセスの仕方と使い方を学ぶ。
ユーザー定義コード	ビジネス・ニーズに合うように、フィールドに有効な値をカスタマイズする。
CNC の基礎	J.D.Edwards ソフトウェアのテクニカル・アーキテクチャについての概念と基本を学ぶ。

J.D. Edwards ソフトウェアの概要

J.D. Edwards ERP ソフトウェアは Windows クライアントと Web クライアントをサポートしています。Solution Explorer はメニューを表示し、Windows バージョンの J.D.Edwards アプリケーションを起動する Windows ベースのエクスプローラです。J.D.Edwards Web クライアントは、J.D. Edwards ソフトウェア・アプリケーションとレポートをブラウザで実行できます。

参照

次のトピックを参照してください。

- 「Solution Explorer」
- 「Web クライアント」

Solution Explorer

Solution Explorer は J.D. Edwards ソフトウェアへのゲートウェイを提供するツールとテクノロジーを集めたもので、インプリメンテーションの前でも後でも、変化するビジネス状況に J.D. Edwards ソフトウェアを対応させることが可能です。

Solution Explorer には、次のような他の ERP システムに見られない特長があります。

- 簡単なナビゲーション。Solution Explorer は J.D. Edwards ソフトウェアのプログラムにアクセスするためのカスタマイズ可能な Web ブラウザ・ベースのツールで、内部や外部の Web サイトへのゲートウェイも提供します。タスク・ビュー間でリンクを作成することにより、ナビゲーションを簡単に行うことができます。また、[検索]ツールを使用して、必要なプログラムを検索することもできます。
- 柔軟性。タスクと呼ばれる再利用可能なユニットが Solution Explorer の中心となります。ビジネス・プロセスやテクニカル・プロセスを、これらのタスクをビルディング・ブロックとして作成したりモデル化したりできます。また、これらのプロセスはコストをかけずに変更することができます。
- 変更可能な環境設定。エンドユーザーには日次処理に使用するタスクやプロセスのみを表示するよう、設定できます。システムを使用するユーザーの必要に応じて、表示するタスクを切り替えることができます。
- 操作性。Solution Explorer では、アクティベータと呼ばれる特殊なタスクを作成することにより、フォームのインターコネクトをハードコード化せずにプロセスを作成できます。アクティベータによりユニバーサル・ディレクタが起動され、作成するプロセス全体のインターフェイスが作成されます。ユニバーサル・ディレクタでは、わかりやすい形式でプロセスのステップが表示され、フォーム間のデータのやりとりを定義できます。
- 互換性。Solution Explorer のアーキテクチャは、ソフトウェア開発者やインテグレーション・パートナーがサードパーティのソフトウェアと J.D. Edwards ソフトウェアの両方と互換性のあるカスタム・アクティベータを作成できるように設計されています。
- タスクに関するドキュメンテーション。Solution Explorer のほとんどのタスクにはドキュメンテーション・タスクがあります。タスクで不明な点がある場合に解決法を参照できるようになっています。新しいタスクにも自分でドキュメンテーションを作成できます。ドキュメンテーションには常時アクセスが可能です。

Solution Explorer を使用すると、アイデアをすぐ実行に移すことができます。Solution Explorer は、カスタマイズ可能な統合されたソリューションを提供するだけでなく、絶えず変化するビジネス情勢に対応できるシステムを実現しています。

Solution Explorer の処理

Solution Explorer は、J.D.Edwards ソフトウェアのアプリケーション、レポート、メニュー、および関連ドキュメントやスプレッドシートなど外部オブジェクトへのゲートウェイとなります。これらの項目には、Solution Explorer のさまざまなタスク・ビューからアクセスできます。タスク・ビューにはツリー構造のメニューが表示され、タスク・ビューにはそのメニュー用にアレンジされた項目のみが表示されます。ユーザーは作業目的に応じてタスク・ビューを選択できます。Solution Explorer からは、インターネットまたはイントラネットのどちらにもアクセスできます。

また、Solution Explorer では表示オプションやユーザー・オプションを変更したり、さまざまな方法でメニューを開くことができます。

Solution Explorer インターフェイスの理解

Solution Explorer の外観は、Web ブラウザまたはタスク・ビューを使用しているか、特定の機能を表示または非表示しているかによって異なります。ただし、Solution Explorer インターフェイスの中には、メニュー・バーのように常に使用可能なものもあります。また、ツールバーやステータス・バーなどの機能も、非表示にすることはできますが、常に使用可能です。

Solution Explorer ウィンドウ

Solution Explorer の使用目的に応じて、いくつかのパネルに追加情報を表示することができます。これらのパネルをウィンドウと呼びます。たとえば、タスク・ビューを表示した状態で、タスク・プロパティおよびドキュメンテーションを表示することができます。また、[検索]ツールを使用してメニューを開くことができます。Solution Explorer では、タスク・ビュー、タスクのプロパティ、[検索]ツールで表示されたメニュー、およびドキュメンテーションがそれぞれのウィンドウに表示されます。

タスク・ウィンドウは閉じることはできません。

Solution Explorer ツールバー

頻繁に使用するコマンドは、ツールバーとして提供されています。ツールバー・ボタンは、Web ブラウザ、タスク・ビュー、[検索]ツールのどれを使用しているかによって異なります。システム管理者はツールバーを変更できるので、ツールバーのボタンがこのセクションの説明とは異なる場合もあります。ツールバーは、ウィンドウ・バナーの下に表示されるウィンドウの一番上に表示されます。1 つ以上のウィンドウが表示される場合は、各ウィンドウ上部にそれぞれのツールバーが表示されます(ツールバーのないウィンドウもあります)。

ボタンの上にカーソルを移動させるとボタンがハイライトされ、カーソルの下のボックスには簡単なホバー (Hover) ヘルプが表示されます。正式な記述はフォームのステータス・バーに表示されます。

ツールバーには次の機能があります。ほとんどのツールバーには、以下の機能のうちいくつかが表示されます。

戻る	前に開いた Web ページに戻ります。
編集	タスクのドキュメンテーションに追加したり編集したりします。
検索	[検索] ボタンをクリックすると、入力した条件に基づいて J.D. Edwards ソフトウェアの項目を検索するためのツールが起動します。
フォント・ダウン	ドキュメンテーション・ウィンドウのテキストのフォントを小さいサイズで表示します。
フォント・アップ	ドキュメンテーション・ウィンドウのテキストのフォントを大きいサイズで表示します。
進む	待ち行列に入っている次の Web ページを表示します。
ホーム	システム管理者がホームページに設定した Web ページを表示します。
実行	選択したタスクを実行します。
リンク	リンクされたタスクを 2 番目のウィンドウで実行します。
新規検索	[検索] のすべてのフィールドの内容をクリアします。異なる条件で新しく検索を実行できます。
印刷	[印刷] ボタンは、Web ブラウザのツールバーとタスク・ドキュメンテーション・ウィンドウにあります。ボタンを押すと、現在の Web ブラウザやタスク・ドキュメンテーションのコンテンツをデフォルトのプリンタに送られます。
リフレッシュ	[リフレッシュ] ボタンをクリックすると、表示中の情報が更新されます。Web ブラウザでは、現在の Web ページが再ロードされます。タスク・ビューは実行中のメニューに対する変更が更新されます。タスク・ドキュメンテーション・ウィンドウでは、ドキュメンテーションに対する変更が反映されます。
検索ボタン	システム管理者によって指定された Web サイトにアクセスします。
停止	システム管理者による Web ページのロードを停止します。
ビュー	最近アクセスしたタスク・ビューを表示します。特定のタスク・ビューを選択するには、[タスク・ビュー] ボタンの横の下向き矢印をクリックして、ドロップダウン・メニューから選びます。

▶ ツールバーを表示するには

1. [ビュー]メニューから[表示] - [ツールバー]を選択します。
2. テキストの記述のオン/オフを切り替えるには、[ビュー]メニューで[表示] - [ツールバー・テキスト]を選択します。

メニュー・バー

Solution Explorer では、メニューは 2 つの意味で使われます。1 つは、オプションのドロップダウンまたはポップアップリストの場合です。(Windows アプリケーションによく見られるタイプ)もう 1 つは、J.D.Edwards ソフトウェアのタスクの階層リストの場合です。このタイプのメニューには、ツリー構造で構成されたアプリケーションやレポートがあります。後者のメニューは、タスク・ビューでのみ使用されます。

Solution Explorer の一番上のメニュー・バーには、タスク・ビュー、ツール、またはアプリケーションのオプションにアクセスできるプルダウン・メニューがあります。メニュー・バーには、[ファイル]、[編集]、[ビュー]などがあります。

メニュー・オプションを選択するには、マウスでクリックするか、キーボードによるショートカット・キーを使用します。オプションで下線付き文字が表示されている場合は、[Alt]キーと下線の付いた文字キーを押すことにより、そのオプションにアクセスできます。たとえば、メニュー・バーの[ファイル(F)]には「F」という文字に下線が付いています。[Alt]キーを押したまま「F」を押すと、[ファイル]メニューにアクセスできます。メニュー・バーでは、「ファイル(F)」には「F」という文字に下線が付いています。[Alt]キーを押したまま「F」を押すと、[ファイル]メニューにアクセスできます。

次にメニュー・バーに表示されるメニュー・オプションを示します。システム管理者のアカウント設定によっては、一部のメニュー・オプションにアクセスできない場合もあります。

ファイル プリンタ制御にアクセスしたり、システムを終了したりします。

編集 ショートカットを作成したり、処理オプションを定義したりできます。

表示 Web ブラウザへのアクセス、ツールバーのオン/オフ切替え、タスク・ビューの表示、およびユーザー優先情報の設定が行えます。

ツール 次の項目にアクセスできます。

- 検索
- ワーク・センター
- オブジェクト管理ワークベンチ
- レポート設計
- レポート・バージョン
- イベント・キャプチャ
- アナライザ

アプリケーション 開いているすべての J. D. Edwards アプリケーションのリストにアクセスできます。

ヘルプ オンライン・ヘルプにアクセスできます。

ステータス・バー

ステータス・バーでは、機能の内容、システムのセキュリティ、および J.D. Edwards 環境をすばやく確認することができます。通常、Solution Explorer の一番下に表示されます。

カーソルをステータス・バーの上に置くと、各項目のホバー・ヘルプが表示されます。

Solution Explorer ステータス・バーに表示される情報は、次のとおりです。

- エラー・メッセージ
- 実行中の処理状況に関するメッセージ
- ユーザーID およびログインした環境
- ログイン・ロール

▶ ステータス・バーを表示するには

[ビュー]メニューから[表示]を選択して、[ステータス・バー]をクリックします。

略式コマンド

略式コマンドは、取り外し可能なツールバーです。略式コマンドを使うと、メニューやアプリケーション間を簡単に移動できます。略式コマンドには、次の項目があります。

- J.D. Edwards のデモ・データと共に出荷される略語、または環境に合わせて定義する略語。
たとえば、“OMW”と入力すると、オブジェクト管理ワークベンチが実行され、J.D. Edwards のオブジェクトにアクセスすることができます。
- タスク ID
- プログラム名

Solution Explorer では、略式コマンドを使用して Windows 実行可能ファイル、タスク・ビュー、J.D. Edwards アプリケーションなどを実行できます。メニューを開くために略式コマンドを使用する場合は、Web ブラウザを使用している場合、Solution Explorer がタスク・ビューに切り替わり、(リンク)ウィンドウで選択したメニューがタスク・ビュー・ウィンドウの右側に表示されます。タスク・ビューを指定するには、実行するメニューの前に、内部タスク ID とコロンを入力してください。たとえば、“101:RBM021444”と入力すると、タスク・ビュー・ウィンドウには、リンク・ウィンドウ内の〈マスター・スケジュール〉メニューだけでなく、[エンドユーザー・タスク]タスク・ビューも表示されます。タスク・ビューの内部タスク ID は、タスク・ビューの上にある項目をクリックし、[タスク・プロパティ]ウィンドウの[詳細]タブをクリックすると確定できます。[タスクのプロパティ]ウィンドウを表示するには、[ビュー]メニューから[表示]を選択し、[タスクのプロパティ]を選択します。

フォームを指定するには、アプリケーション ID、|、フォーム ID の順に入力してください。たとえば、“P01012|W01012B”と入力すると、〈住所録の処理〉アプリケーションで〈住所録の処理〉が表示されます。開くフォームのバージョンを指定する場合は、プログラム名、|、バージョン番号の順に入力します。(例:“P01012|W01012B|ZJDE0003”)

注:

略式コマンドのないアプリケーションもあります。この方法でメニューを開く場合は、まず略式コマンドをアクティブにしてください。

▶ 略式コマンドを使用してメニューを開くには

1. 略式コマンド・ツールバーを表示するには、[ビュー]メニューから[表示] - [略式コマンド]を選択します。
2. ツールバーに略式を入力して、[Enter]キーを押します。

お気に入りバー

お気に入りバーは、お気に入りに入れたタスクやフォルダを表示します。このバーは移動可能です。アプリケーションを起動するには、このツールバーのタスクを選択します。

参照

- お気に入りの設定については「お気に入りタスク・ビュー」

▶ お気に入りバーを表示するには

Solution Explorer の[ビュー]メニューから[表示] - [お気に入りバー]をクリックします。

ユーザー環境設定の変更

Solution Explorer の[ビュー]メニューから[ユーザー・オプション]を選択します。〈ユーザー・デフォルトの改訂〉フォームが表示されます。

次のリストでは、〈ユーザー・デフォルトの改訂〉の各ボタンで行う設定について説明します。

- | | |
|-----------------------|--|
| ユーザー・プロファイルの改訂 | 〈ユーザー・プロファイルの改訂〉にアクセスします。プロファイルはシステム管理者のみが変更できますが、ユーザーはこのオプションを使って現在のユーザー・プロファイルを表示できます。 |
| パスワードの変更 | 〈ユーザー・パスワードの改訂〉にアクセスします。このアプリケーションを使うと、システムのパスワードを変更できます。 |
| 投入済み報告書 | 〈サーバーの処理〉にアクセスします。ここでは、投入済みレポートジョブの状況の確認、優先順位の変更、レポート出力の処理、およびエラーの再表示ができます。 |
| ローカル出力の表示 | J.D. Edwards ソフトウェアを実行中のマシンの印刷待ち行列フォルダにアクセスします。このフォルダには、実行した PDF 形式のレポートが保存されています。 |
| デフォルト・プリンタ | 〈デフォルト・プリンタの処理〉にアクセスします。デフォルト・プリンタの設定は、システム管理者だけが変更できます。〈デフォルト・プリンタの処理〉では、デフォルト・プリンタの追加、変更、または状況変更ができます。 |

参照

- ユーザー・プロファイルの変更については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・プロファイル」
- レポートの投入については『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイド
- 『システム・アドミニストレーション』ガイドの「プリンタ・アプリケーションの処理 (Printers アプリケーションの処理)」

▶ パスワードを変更するには

1. Solution Explorer で、[ビュー]メニューから[ユーザー・オプション]を選びます。
2. <ユーザー・デフォルトの改訂>で、[パスワードの変更]をクリックします。
3. <ユーザー・パスワードの改訂>で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 旧パスワード
 - 新パスワード
 - 新パスワード(確認)

フィールド記述

記述	用語解説
旧パスワード	J.D. Edwards システムにサインオンする際に使用するパスワード。<ユーザー・パスワードの改訂>でユーザーが変更できる唯一のフィールドです。J.D. Edwards では、最初にユーザーを設定する際は、パスワードをユーザーIDと同じに設定することをお勧めします。
新パスワード	新しく使用するパスワードを入力します。新しいパスワードを設定する場合は、次の規則に従ってください。 新しいパスワードは前のパスワードとは異なるものを指定する。 ユーザーIDと同じ値には使用しない。 パスワードには6文字以上を使用する。 システム管理者が<システム管理パスワードの改訂>を使用してユーザーのパスワードをリセットする場合、この規則は適用されません。たとえば、システム管理者は新しいパスワードを、ユーザーIDと同じにしたり、“password”にしたりできます。いずれの場合も、新しいパスワードは次のサインオン時から有効になります。
新パスワード(確認)	[新パスワード]フィールドに指定した値を再度入力します。

▶ 1度実行したレポートを再度オンライン表示するには

注:

レポートをオンラインで表示するにはレポート・バージョンを実行してください。レポートの実行については『エンタープライズ・レポート・ライティング』の「レポート用バッチ・バージョン」を参照してください。

1. Solution Explorer の[ビュー]メニューから[ユーザー・オプション]を選択します。
2. 〈ユーザー・デフォルトの改訂〉で[ローカル出力の表示]をクリックします。
3. [ファイルを開く]でファイルを選択して[開く]をクリックします。

PDF 形式のレポートが表示されます。エラー・ログなどのログ・ファイルも表示できます。ログ・ファイルを表示する場合は、[ファイル・タイプ]フィールドで UBE ログ・ファイルを指定します。

キャッシュの除去

システムおよびインターネットの一時ファイルは、キャッシュに保管されます。

▶ キャッシュを除去するには

1. Solution Explorer の[ビュー]メニューから[ユーザー・オプション]を選択します。
2. 〈ユーザー・デフォルトの改訂〉の[リンク]バーの三角マークをクリックします。
3. [フォーム]メニューをポイントして、[キャッシュの除去]を選択します。

Solution Explorer ホームページ

Solution Explorer は J.D. Edwards ソフトウェアのメニューを表示するとともに、ここから関連ドキュメントなどの外部オブジェクトにアクセスすることもできます。Solution Explorer からは、インターネットおよびイントラネットのどちらにもアクセスできます。システム管理者は Solution Explorer ホームページを自由に設定できます。このページは、ユーザーがシステムにログオンしたときに最初に表示されるページになります。

▶ Solution Explorer ホームページにアクセスするには

Solution Explorer の[ビュー]メニューから[ホーム・ページ]を選択します。

J.D. Edwards Web サイトへのアクセス

Solution Explorer から J.D. Edwards の Web サイトにアクセスすることができます。J.D. Edwards Web サイトでは、J.D. Edwards の製品/サービスに関する情報や会社情報を提供しています。

▶ J.D. Edwards Web サイトにアクセスするには

Solution Explorer の[ヘルプ]メニューから[J.D. Edwards ウェブサイト]をポイントして、[J.D. Edwards ホームページ]を選択してください。

Solution Explorer からメニューおよびアプリケーションを開く

Solution Explorer では、メニューは 2 つの意味で使われます。1 つはドロップダウンまたはポップアップする選択リスト(Windows アプリケーションで一般的に使われる名称)のことを指し、もう 1 つはアプリケーションやレポートを整理するために J.D. Edwards のタスク・ビューで使用されているツリー構造の項目を指します。このタイプのメニューを J.D. Edwards システムではタスクと呼びます。

タスク・ビューでメニューをナビゲートして目的のタスクを見つけたら、そこでアプリケーションを起動したり、レポートを実行したりできます。メニューの検索や表示には、いくつかの方法があります。

注:

略式コマンドを使ってメニューやアプリケーションを開くこともできます。詳しくは「略式コマンド」を参照してください。

タスク・ビューのメニュー・ツリー構造の理解

J.D. Edwards システムのアプリケーションやレポートは、タスク・ビューからアクセスしやすいようにツリー構造で分類されています。タスク・ビューを開くと、Solution Explorer の左ペインにメニューがツリー構造で表示されます。メニューの左にプラス(+)記号が付いている場合は、展開してその下のメニューを表示できます。マイナス(-)記号が付いている場合は、すでに展開されていることを意味します。

メニューを展開するには次の 2 つの方法があります。

- プラス(+)記号またはマイナス(-)記号をクリックする。
- メニューのテキストをダブルクリックする。たとえば、〈基本設定〉というメニューのテキスト部分をダブルクリックすると、そのメニューが展開されたり、折りたたまれたりします。

タスク・ビューからのアプリケーションの起動

タスクと呼ばれるメニュー選択肢の多くは、アクティブにすると、アプリケーションを起動したりレポートを投入したりできます。アクティブにするには、次のいずれかを実行します。

- タスク・アイコンまたはテキストをダブルクリックする。
- タスクをクリックして、ツールバーで[実行]ボタンをクリックする。

タスクの中には、処理オプションを指定したり、バージョンを選択したり、データ選択を行うものがあります。これらを設定するには、タスクを右クリックしてポップアップ・メニューから[プロンプト]を選び、該当オプションを選択します。タスクに設定されていないオプションはグレー表示されます。

[検索]ツールを使ってメニューとアプリケーションを開く

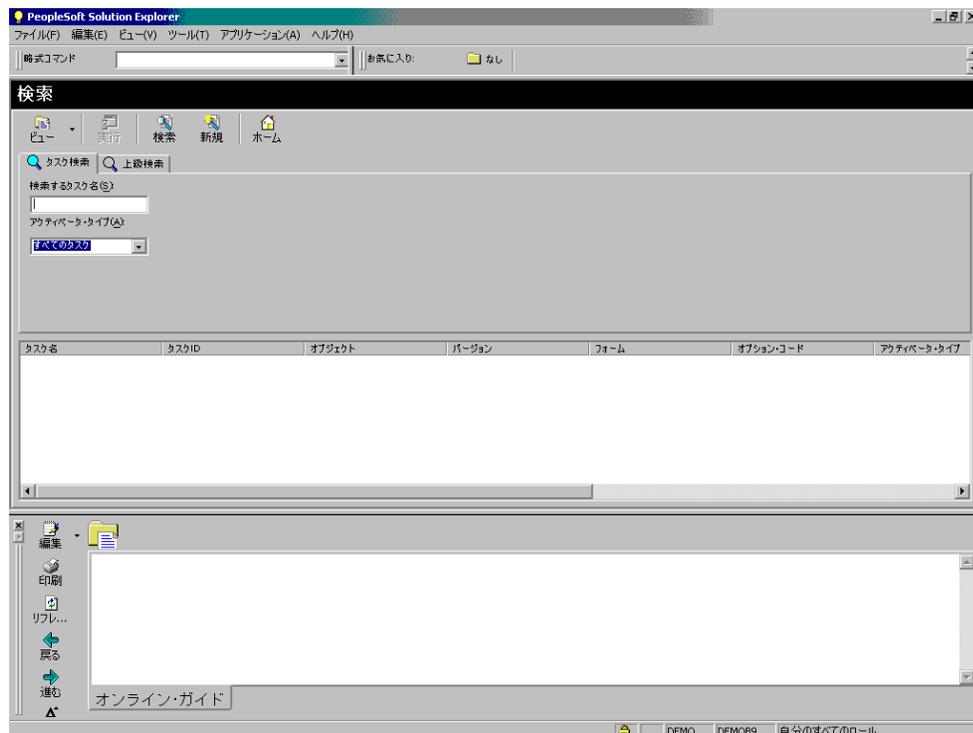
アプリケーション、メニュー、およびレポートなどを検索するには、[検索]ツールが使用できます。[検索]ツールを使用すると、探したい項目名をすべて覚えていなくても検索することができます。検索ツールにはタスク検索と上級検索の2種類があります。タスク検索では、タスク名(記述)を使用して検索します。上級検索では、オブジェクト名、オブジェクト・コード、最終変更日と時刻、またはこれらの組合せに基づいて検索できます。

▶ [検索]ツールを使ってタスク検索を行うには

1. [ツール]メニューから[検索]を選択します。
2. [タスク検索]タブをクリックします。
3. [検索するタスク名]フィールドに検索する項目名を入力し、ツールバー上の[検索]ボタンをクリックします。

検索する項目がアクティベータで、タイプ(ビジネスまたはテクニカル)がわかっている場合、[アクティベータ・タイプ]フィールドでアクティベータの種類を指定し、検索範囲を絞ることができます。

項目名が完全にはわからない場合、項目名の一部を入力すると、それに一致するすべてのメニューとアプリケーションが表示されます。たとえば“住所録”と入力すると、〈住所録カテゴリ・コード〉メニューと〈住所録の改訂〉アプリケーションを含むリストが表示されます。



4. 〈検索〉で、実行する項目をダブルクリックします。

アプリケーションをダブルクリックするとアプリケーションが起動します。レポートをダブルクリックすると、レポートの処理が開始されます。タスクをハイライトして、[実行]ボタンをクリックしても同じことができます。処理オプションを設定(使用可能な場合)するには、タスクを右クリックしてポップアップ・メニューから[プロンプト]をポイントし、該当するオプションを選択します。

メニューをダブルクリックすると、メニューが保管されているタスク・ビューが表示されます。ダブルクリックしたメニューは、タスク・ビュー・ウィンドウの右側のウィンドウ(リンク・ウィンドウ)に表示されます。

▶ [検索]ツールを使って上級検索を行うには

1. [ツール]メニューから[検索]を選択します。
2. [上級検索]タブをクリックします。
3. 次のフィールドの1つまたは複数に入力し、ツールバーで[検索]ボタンをクリックしてください。
 - オブジェクト名
 - システム・コード
 - 最終更新日
4. 実行する項目をダブルクリックします。

アプリケーションをダブルクリックするとアプリケーションが起動します。レポートをダブルクリックすると、レポートの処理が開始されます。処理オプションによっては、レポートのバージョンを選択したり、他のパラメータを設定したりする必要があります。

メニューをダブルクリックすると、メニューが保管されているタスク・ビューが表示されます。ダブルクリックしたメニューは、タスク・ビュー・ウィンドウの右側のウィンドウ(リンク・ウィンドウ)に表示されます。

タスク・ビューの処理

Solution Explorer では、複数のタスク・ビューから J.D. Edwards メニューおよびアプリケーションにアクセスできます。Solution Explorer のタスク・ビューには、システムのジョブを完了するためのプロセスを表す特別なタスク・リレーションシップが含まれます。タスク・ビューのタスクからは、アプリケーションを起動したり、子タスクを表示したり、別のタスク・ビューへリンクしたりできます。

特定のタスク・ビューを表示するには、[ビュー]メニューから[タスク・ビュー]をポイントし、使用するタスク・ビューを選択します。

注:

システムの設定によっては、ここで説明してあるタスク・ビューが使用できない場合もあります。また、ここで説明されていないタスク・ビューが使用できる場合もあります。

参照

- その他のタスク・ビューについては『Solution Explorer』ガイドの「タスク・ビューの設定」
- タスク・ビューでのメニューおよびアプリケーションの起動については『基本操作』ガイドの「Solution Explorer からメニューおよびアプリケーションを開く」

エンドユーザー・タスク用タスク・ビュー

エンドユーザー・タスク用のタスク・ビューには、特定のユーザー・ロールに基づいたメニューが表示されます。たとえば、あるユーザーに購買担当のロールを割り当てた場合、エンドユーザー・タスク・ビューには、このロールに関連付けられたメニュー(購買に関連するメニュー)のみが含まれます。

ユーザーに割り当てるロールおよびエンドユーザー・タスク・ビューに表示するタスクは、システム管理者が設定します。

▶ ロールを適用するには

1. Solution Explorer の[ビュー]メニューから[タスク・ビュー] - [エンドユーザー・タスク]を選択します。タスク・メニューを右クリックし、ポップアップ・メニューから[ロール別に表示]を選択します。
〈ロール別に表示〉フォームが表示されます。グリッドにはアクセス可能なすべてのロールが表示されます。
2. 適用するロールをハイライトして、[選択]をクリックします。

J.D. Edwards メニュー用タスク・ビュー

J.D. Edwards メニュー用タスク・ビューには、J.D. Edwards アプリケーション・スイートがツリー構造で表示されます。

J.D. Edwards トレーニング用タスク・ビュー

J.D. Edwards トレーニングのタスク・ビューでは、トレーニング・センターで受講可能なすべてのコースが表示されます。各製品パーティカルのトレーニング・パスおよびコースの説明も入手できます。

お気に入り用タスク・ビュー

最も頻繁に使用するタスクはお気に入り用タスク・ビューに追加しておく、簡単にアクセスできて便利です。お気に入りタスク・ビューに作成したタスクは、使いやすいように整理することができます。

お気に入りに保存した項目は、お気に入りバーに登録されるので、項目にアクセスするためにお気に入りビューに戻る必要はありません。お気に入りバーを表示するには、[ビュー]メニューから[表示] - [お気に入りバー]を選択します。

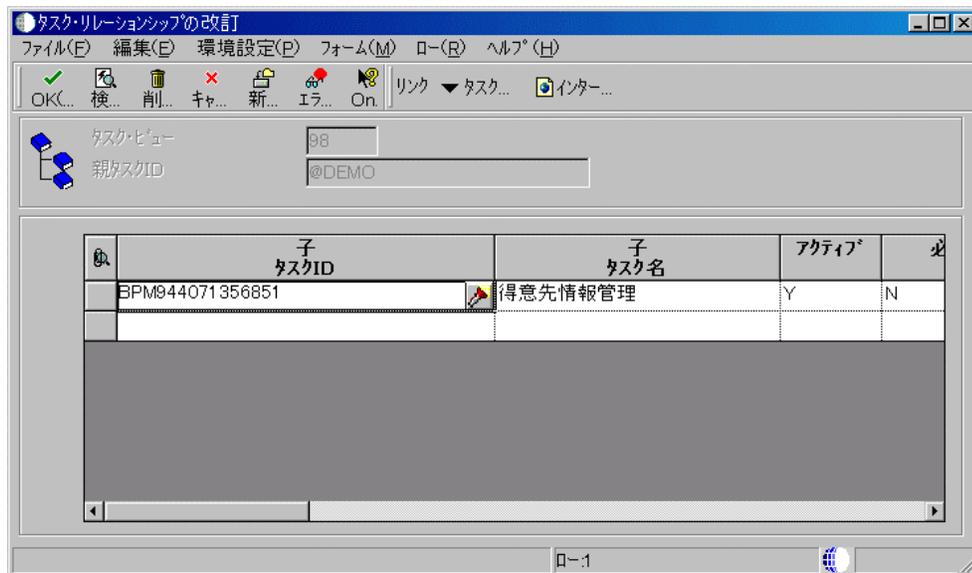
既存のタスクを追加するには、クリックするか、[送る...]を使用します。また、タスク名がわかっている場合はお気に入り直接挿入できます。[お気に入り]に新規タスクを追加することもできます。たとえばレポートのバージョンを作成した場合、そのタスクを自分のお気に入りに追加することにより、このレポート・バージョンに簡単にアクセスできます。J.D. Edwards システムのプログラムを起動するタスク以外に、別のタスクのプレースホルダーとなるタスクを作成することもできます。これらのタスクは、子タスクを置いたときにノードとなります。プレースホルダー・タスクは、タスク・ビューのタスクを整理するのに役立ちます。

▶ **タスクまたはノードをお気に入りに追加するには**

- 追加するタスクを右クリックし、ポップアップ・メニューから[送る...]を選択します。
 選択した内容がお気に入りに追加されます。
 お気に入りにノードを追加した場合は、お気に入りタスク・ビューに矢印アイコン付きで表示されます。
- ノードからタスクにアクセスするには、ノードを右クリックしてポップアップ・メニューから[リンク]をクリックしてください。すると、ノード内のタスクがリンク・ウィンドウに表示されます。

▶ **[既存のタスクを挿入...]を使用してタスクをお気に入りに追加するには**

- お気に入り用タスク・ビューで、追加したい場所のすぐ上のタスクを選択します。
- 選択したタスクを右クリックし、ポップアップ・メニューから[既存タスクの挿入]を選びます。



- 〈タスク・リレーションシップの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - 子タスク ID
 - 必須
 お気に入りにには同時に複数のタスクを追加できます。

4. [OK]をクリックします。

グリッドに複数のタスクを追加した場合、これらのタスクはすべてお気に入りに追加され
ます。

注:

子タスクのないタスクの下にタスクを追加する場合は、[OK]をクリックすると、〈タスク・リ
レーションシップの改訂〉フォームがクリアされ、フォームが開いた状態のまま残ります。
[キャンセル]をクリックすると、フォームが閉じます。追加したタスクはタスク・ビュー・メニューに
表示されます。

フィールド記述

記述	用語解説
子タスク ID	タスクを識別する名前。タスクは、アクティビティ、プロセス、手順を指定するユ ーザー定義オブジェクトです。タスク・リレーションシップは、ビジネス・プロセス を表す親子リレーションシップです。
必須	タスクを必須としてマークすると、ユニバーサルディレクタ処理内、またはアク ティベータとして使用される際に、そのタスクが実行されます。

▶ 新規タスクをお気に入りに作成するには

1. 作成したいタスクに適用するオブジェクトを選びます。(例:レポート・バージョン)
2. Solution Explorer のお気に入りビューで、新しいタスクを追加する場所のすぐ上のタスクを
選択してください。
3. 選択したタスクを右クリックし、ポップアップ・メニューから[新規タスクの挿入]を選びます。
4. ステップを完了すると新規タスクが作成されます。

注:

新規タスクの作成方法については『Solution Explorer』ガイドの「タスクの作成」を参照してく
ださい。

▶ プレースホルダー・タスクを作成するには

1. Solution Explorer のお気に入りビューで、プレースホルダー・タスクを追加する場所のすぐ
上のタスクを選択してください。
2. 選択したタスクを右クリックし、ポップアップ・メニューから[新規タスクの挿入...]を選びます。
〈タスクの改訂〉フォームが表示されます。
3. [タスク名]フィールドにプレースホルダー・タスク名を入力します。

4. [共通]タブをクリックし、[システム・コード]フィールドにシステム・コードを入力します。
[アクティベータ・タイプ]は空白にしてください。[必須]が選択解除されており[アクティブ]オプションが選択されていることを確認してください。
5. [実行可能]タブをクリックし、[フォルダ]を選択します。
6. [OK]をクリックします。

▶ お気に入りを整理するには

お気に入りにタスクまたはフォルダを追加した後で、お気に入りタスク・ビューで次のいずれかを実行してください。

- お気に入りからタスクを削除するには、タスクを右クリックし、ポップアップ・メニューから[リレーションシップの削除]を選択します。リレーションシップを削除するかどうか、確認フォームが表示されます。親タスクを削除すると、子タスクもすべてお気に入りから削除されます。このようにリレーションシップを削除しても、システム上のタスク自体には影響ありません。お気に入りから削除されるのみです。
- タスクやフォルダを(サブタスクまたはサブフォルダとして)別のタスクまたはフォルダの子の中に作成するには、該当するタスクやフォルダをそのタスクやフォルダにドラッグします。これにより、お気に入りタスク・ビューのツリー構造が変更されます。

ロール・ベースのタスク・ビューの処理

システム管理者は、必要なタスクにアクセスしやすいように、別バージョンのタスク・ビューを作成できます。ロール・ベースのバージョンを作成すると、事前定義されたフィルタがタスク・ビュー・メニューに適用されます。たとえば、タスク・ビューのメニューが顧客と仕入先の両方に関するタスクが表示されている場合、どちらかのロールに関連するタスク(顧客関連タスクまたは仕入先関連タスク)だけを表示するよう設定できます。

タスク・ビューには複数のロールを設定できますが、実際にはフィルタ処理されるツリーの親タスクから各ロール用のタスクにリンクされます。ロールを適用する前に選択したツリーの親タスクは、「ルート」と呼ばれます。

注:

ロールは、ロールを適用する前にタスク・ビューで表示されたリレーションシップをいつまでも一時変更するわけではありません。データの表示方法を変更するだけです。初期ビューとロール・ビューを切り替えても、ビュー内のタスクには影響ありません。

タスク・ビューにはロール・ベースでないものもあります。

▶ ロール・ベース・タスク・ビューで異なるロールを表示するには

1. Solution Explorer で、[ビュー]メニューから[タスク・ビュー] - [エンドユーザー・タスク]を選び、メニューのタスクを右クリックし、ポップアップ・メニューから[ロール別に表示]を選択します。
2. <ロール別に表示>で、適用するルールを選んで[選択]をクリックします。
ロールが適用されたタスク・ビューが表示されます(子タスクは折りたたまれています)。
3. 親タスクを展開して、このロールで使用可能なタスクを表示します。

タスク・ドキュメンテーション・ウィンドウの処理

ドキュメンテーション・ウィンドウには、選択した情報が表示されます。ウィンドウにはドキュメンテーション・タイプを分類するタブが付きます。Solution Explorer のタスク・ドキュメンテーションの多くは事前定義されていますが、タスクに関する文書を自分で作成することもできます。タスク・ドキュメンテーションを表示するには、[ビュー]メニューから[表示]を選択し、[タスク・ドキュメンテーション]を選択します。

注:

タスクの種類により、表示されるタブは異なります。

参照

- ドキュメンテーションの作成については『Solution Explorer』ガイドの「Documenting Tasks (タスクの文書化)」

サマリー

[サマリー]タブには、タスクの概要が表示されます。タスクの目的、システムへの統合の仕方、システムに含まれる処理などが含まれます。[サマリー]タブでタスクの使用方法が説明されることもあります。

詳細

[詳細]タブでは、タスクを完了するための手順が表示されます。このドキュメンテーションでは、指示にある特定のステップや、処理を完了するのに関連する例についてのコメントも含まれます。

はじめる前に

[はじめる前に]タブでは、タスクが別の処理、プログラム、およびシステムに与える影響についてのドキュメンテーションが表示されます。また、タスクを開始する前に完了しておくステップも含まれます。[はじめる前に]タブのドキュメンテーションには、タスクを完了したときの予測される結果が説明されている場合もあります。たとえば、処理中に失敗した場合の結果も説明されます。

備考

[備考]タブでは、タスクに関する情報が説明されます。たとえば、購買オーダー・プロセスを変更した場合、変更した理由を[備考]に書き込むことができます。

提供品目

[提供品目]タブでは、タスクに関連するドキュメンテーションへのリンクが表示されます。たとえば、コミットする文書へのリンクを作成して、完成した場合にどのような外観になるか見ることができます。

カスタム

既存のカテゴリに一致しないドキュメンテーションを作成または修正する場合は、カスタムドキュメンテーションを作成できます。ユーザーは、システムをビジネスの目的に適用させることができます。

タスク・プロパティの理解

タスク・ビュー・ウィンドウおよびリンク・ウィンドウで選択した項目についてのシステム情報は、[タスクのプロパティ]ウィンドウで確認できます。[タスクのプロパティ]ウィンドウを表示するには、[ビュー]メニューから[表示]をポイントし、[タスクのプロパティ]を選択します。

[タスクのプロパティ]ウィンドウには、[基本]、[中級]、[上級]の3つのタブがあります。各タブに異なるレベルのシステム情報が表示されます。[タスクのプロパティ]ウィンドウには、次のような情報が表示されます。

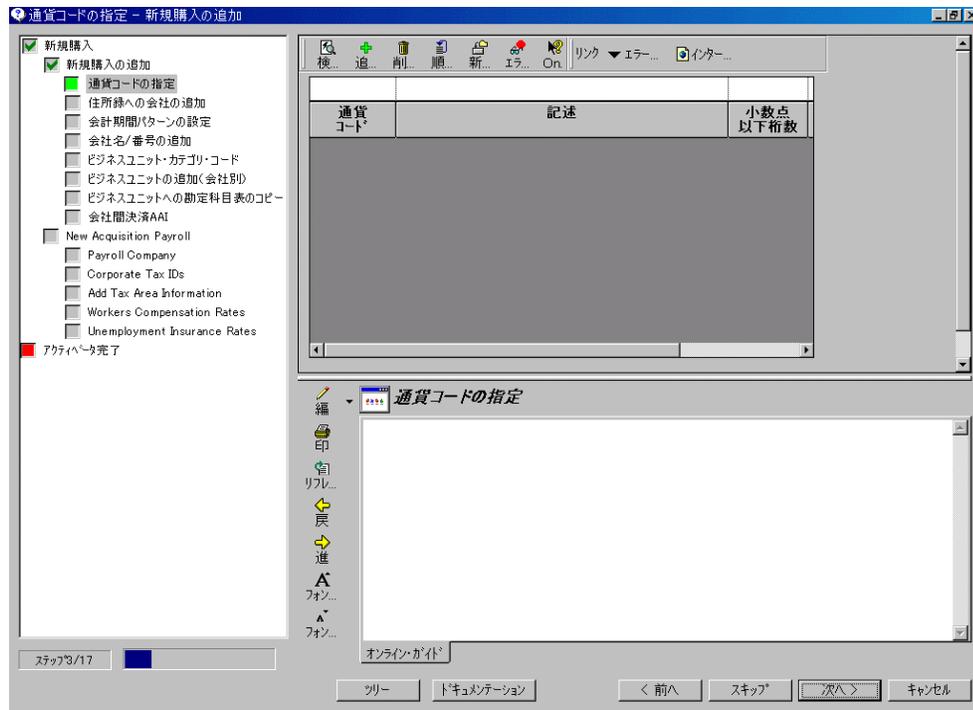
- アクティベータ・タイプは[基本]タブにあります。アクティベータ・ビューを使用する場合や[検索]でアクティベータ・タイプを検索したい場合に役立ちます。
- バージョンは[中級]タブにあります。
- オブジェクト名は[中級]タブにあります。
- リンクは[中級]タブにあります。オブジェクトが別のオブジェクトにリンクされている場合、ツールバーのリンク・ボタンで2番目のオブジェクトを実行することができます。
- タスク ID は[上級]タブにあります。オブジェクトのタスク ID がわかっている場合、[略式コマンド]フィールドに入力することにより、タスクを直接起動できます。

ユニバーサル・ディレクタの実行

Solution Explorer には、アイコンの左に電球のアイコンがあるものがあります。これらのタスクを起動すると、自動的にユニバーサル・ディレクタが実行されます。ユニバーサル・ディレクタにより、共通のインターフェイスを使用して主なタスクをステップごとに実行することができます。

たとえば、新しい顧客をシステムに入力するタスクに「新規顧客入力」という名前を付けます。これをユニバーサル・ディレクタのタスクとして設定した場合、最初のステップでは顧客の住所録レコードの追加フォームが表示されます。次に顧客マスター・レコードの追加フォームが表示され、最後に受注オーダーの入力フォームが表示されます。ユニバーサル・ディレクタは、各ステップで必要なアプリケーションを自動的に起動します。

ユニバーサル・ディレクタでは、タスクの完了までに必要なステップが左側に表示されます。ステップを完了すると、そのステップに完了マークが付けられます。リストに表示されている前のステップに戻ったり、次に進んだり、スキップすることもできます。また、ヘルプやステップを参照するためにドキュメンテーション・ウィンドウを表示することもできます。



〈ユニバーサル・ディレクタ〉フォームの下のボタンには、次の機能があります。

- ツリー** 現在行っているプロセスのステップを表示するウィンドウを表示したり隠したりします。
- ドキュメンテーション** ドキュメンテーション・ウィンドウを表示したり隠したりします。
- 前へ** 前のタスクに戻ります。
- スキップ** 現在のタスクをスキップし、次のタスクへ進みます。スキップしたステップは、ツリー・ウィンドウで赤いダッシュで表示されます。
- 次へ** 次のタスクへ進みます。通常、[前へ]ボタンと合わせて使用します。
- キャンセル** ユニバーサル・ディレクタを中止して閉じます。

▶ ユニバーサル・ディレクタを実行するには

1. Solution Explorer のタスク・ビューで、左に電球アイコンのついたタスクを選択します。
2. ツールバーで[実行]ボタンをクリックします。
ユニバーサル・ディレクタが実行されます。
3. 左ペインに表示されたタスクを順に実行します。1 つのステップが完了したら[次へ]ボタンをクリックして、次のステップに進みます。

Web クライアント

J.D. Edwards Web クライアントは、J.D.Edwards ソフトウェア・アプリケーションとレポートへの Web ベースのゲートウェイです。J.D.Edwards Web クライアントは以下の処理を実行します。

Web アプリケーションのユーザー・インターフェイス

ほとんどの J.D. Edwards アプリケーションが Web 環境で実行できます。プラットフォームの違いから若干インターフェイスが異なる場合がありますが、Web アプリケーションは Windows バージョンと同じ機能を備えています。

J.D. Edwards の Web ベース・アプリケーションは JAS サーバーにより実行されます。JAS サーバーは、J.D. Edwards システムを実行するときにシステム管理者により設定されます。ただし、ほとんどの場合、Web と Windows 版のそれぞれのアプリケーションは同じデータベース・テーブルを参照するため、システムによっては、どちらのユーザーも同じシステムを同時に使用でき、すべての変更をリアルタイムで確認することができます。さらに、JAS サーバーはモバイル・デバイスと通信可能なため、モバイル・デバイスから J.D. Edwards アプリケーションにアクセスすることもできます。

システム管理者の ERP セキュリティ設定またはポータルが実行されているかどうかによって、ユーザーは、Web クライアントに直接ログオンすることも、J.D. Edwards ポータルを通してログオンすることもできます。どちらの場合も、ユーザーはタスク・エクスプローラを通して J.D. Edwards アプリケーションにアクセスできます。Web クライアントに直接ログインするユーザーは、タスク・エクスプローラにはスタンドアロンのインターフェイスとしてアクセスしますが、ポータルを通してログインするユーザーには、ポータル・コンポーネントを通してタスク・エクスプローラにアクセスします。タスク・エクスプローラは、Windows バージョンの Solution Explorer に相当するもので、同等の機能を備えています。

J.D. Edwards Web クライアントへのアクセス

Web ブラウザから J.D. Edwards ソフトウェアにアクセスする際のプロセスは、社内ネットワークのファイルやアプリケーションにアクセスするのと類似しています。通常、コンピュータを起動したり社内ネットワーク・ディレクトリにアクセスする場合、ネットワーク・リソースにアクセス権のあるユーザーであることが認証された上でログインが許可されます。ログインが許可されたユーザーは、ネットワークのファイルやアプリケーションにアクセスできます。これと同様、J.D. Edwards アプリケーションを実行するには、J.D. Edwards ソフトウェアへのゲートウェイである Web クライアントにまずログインする必要があります。

Web クライアントにログインするには、社内イントラネットにアクセスでき、コンピュータに Web ブラウザがインストールされており、かつシステム管理者によってアカウントが設定されていることが必要です。モバイル・デバイスを使用してアクセスする場合は、アカウントの設定のみでログインできます。アカウントの設定時に、システム管理者はユーザーID とパスワードを設定します。

通常、Web クライアントの起動時にはユーザーID とパスワードの入力が必要になります。ただし、システム管理者は、ユーザーにはログイン・プロセスがバイパスされるように見える設定にすることも可能です。ただし、ほとんどの場合、セキュリティ上の理由からシステム管理者はユーザーにパスワードを入力させることによりログインを許可する設定にします。

Web クライアントにログインすると、最初にタスク・エクスプローラが表示されます。J.D. Edwards のアプリケーションやレポート、その他の機能には、タスク・エクスプローラを通じてアクセスします。

J.D. Edwards Web クライアントへのログインは、社内ネットワークへのログインに似ていますが、ログオフの方法は異なります。ほとんどの場合、ネットワーク接続からログオフする場合は、コンピュータをシャットダウンするだけで済みますが、J.D. Edwards Web クライアントにログインした場合は、作業が完了した時点で Web クライアントからログオフする必要があります。Web ブラウザを閉じたり、コンピュータやモバイル・デバイスをシャットダウンするだけでは不十分です。Web ブラウザを閉じたり、コンピュータをシャットダウンする前に、J.D. Edwards Web クライアントからログオフすることを忘れないようにしてください。

注:

タスク・エクスプローラには J.D. Edwards ポータルからもアクセスできます。この場合、ユーザーはすでにポータルにログインしているため、再度タスク・エクスプローラにログインする必要はありません。ログオフ時もポータルからログオフするだけで十分で、タスク・エクスプローラからログオフする必要はありません。

▶ **J.D. Edwards Web クライアントからログオフするには**

タスク・エクスプローラで、[ログアウト]をクリックします。

▶ **J.D. Edwards Web クライアントにログインするには**

1. Web ブラウザを起動して J.D. Edwards Web ログイン画面を表示します。

J.D. Edwards Web クライアントにログインする方法は、システム管理者が決定します。たとえば URL を入力したり、アイコンをクリックしたり、ブラウザのお気に入りフォルダを使ったりしてログインする方法があります。J.D. Edwards Web ログイン画面を表示できない場合は、システム管理者に連絡してください。

2. 次のフィールドに値を入力します。

- ユーザーID
- パスワード

3. システム管理者によって特定の環境にログインするよう指定されている場合は、[ログイン詳細]をクリックして次のフィールドに値を入力してください。

- 環境

4. [ログイン]をクリックします。

タスク・エクスプローラが表示されます。

タスク・エクスプローラ

タスク・エクスプローラは J.D. Edwards アプリケーションやレポート、その他の機能を Web ブラウザで実行する際の最初の画面です。J.D. Edwards Web クライアントにログインすると、ワークステーションまたはモバイル・デバイスでタスク・エクスプローラが自動的に表示されます。J.D. Edwards ポータルからアクセスする際も、タスク・エクスプローラ・コンポーネントを通してアクセスします。

タスク・エクスプローラに J.D. Edwards ポータルからではなく、直接アクセスする場合、右上に[ログアウト]ボタンが表示されます。タスク・エクスプローラでの作業が終わったら、[ログアウト]をクリックします。

タスク・エクスプローラの上部には、ハイパーリンクやボタン、ドロップダウン・メニューのあるバーがあります。タスク・エクスプローラではメニューが論理的なツリー構造で表示されるので、実行するアプリケーションを簡単に探すことができます。ツリーには、アプリケーションの他にも、ショートカットやリンクなどのオブジェクトが配置されています。このため、ツリーのすべてのオブジェクトがタスクと呼ばれます。つまり、ツリーに配置されたフォルダやアプリケーション(レポートを含む)、リンク、ショートカットは、すべてタスクです。フォルダをクリックすると、そのフォルダが展開された状態に表示が変わります。

論理的なタスクのまとまりを、タスク・ビューと呼びます。ログインすると、タスク・エクスプローラにはデフォルトのタスク・ビューが表示されます(定義されている場合)。デフォルトのタスク・ビューが定義されていない場合は、J.D. Edwards メニューが表示されます。タスク・ビューのタスクがショートカットでない限り、1 つのタスク・ビューのツリー内から別のタスク・ビューのツリー内へはジャンプできません。タスク・ビューを切り替えるには[タスク・ビュー]フィールドを使用します。ただし、システムの設定によっては[タスク・ビュー]フィールドが表示されない場合もあります。

タスク・ビューと(ツリーを展開したときに表示される)ツリー・ビューとは次元が別であることに注意してください。ツリー・ビューは更新されても、タスク・ビューを移動したわけではありません。タスク・エクスプローラに関するガイドでは、フォルダをクリックするたびに更新されるツリー・ビューを単にビューと呼んでいます。

システム管理者は、Solution Explorer と J.D. Edwards ERP セキュリティ・アプリケーションを使ってユーザー・アカウントを管理したり、タスク・エクスプローラを設定したりします。

参照

- タスク・ビューの設定については『Solution Explorer』ガイドの初期設定に関するトピック
- エンド・ユーザーが設定できるタスク・エクスプローラの機能については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「Solution Explorer セキュリティ」

▶ デフォルトのタスク・ビューを変更するには

1. タスク・エクスプローラで、[タスク・ビュー]フィールドのドロップダウン・メニューからデフォルトのタスク・ビューに設定するタスク・ビューを選択します。
2. [デフォルトとして保存]をクリックします。

▶ タスク・エクスプローラ内を移動するには

1. タスク・エクスプローラで、[タスク・ビュー]フィールドのドロップ・ダウン・リストから使用するタスク・ビューを選択します。画面にはタスク・ビューのルート・ツリーが表示されます。
2. 目的のフォルダ・アイコンをクリックします。

ビューがリフレッシュされ、ツリーにはクリックしたタスクとその下にあるタスクのみが表示されます。タスク・エクスプローラのツリー・パスの最後には現在のフォルダ名が追加され、親フォルダはハイパーリンクになります。さらに、タスク・ビューのツリー構造を開くと、タスク・ビューにより、ツリー・パスの最後に現在のフォルダ名が追加され、その前の親フォルダ名がハイパーリンクにされていきます。この表示により、現在のフォルダに至るまでのパスがわかり、過去のビューへのリンクをクリックすることにより簡単に戻ることができます。

3. 現在のビューから前のビューに戻るには、前のビューのハイパーリンクをクリックしてください。

注:

前のタスク・ビューに戻る場合は、ブラウザの[戻る]ボタンは使わないでください。

略式コマンド

略式コマンドは、特定のタスク(フォルダやアプリケーション、レポート)に直接アクセスできます。略式コマンドを使うと、メニューやアプリケーション間を簡単に移動できます。略式コマンドには、次の項目があります。

- J.D. Edwards のデモ・データと共に出荷される略語、または環境に合わせて定義する略語。たとえば、“BV”と入力すると、バッチ・バージョン・アプリケーションにアクセスしてレポートを実行できます。
- タスク ID
- プログラム ID

略式コマンドを使用するには、[略式コマンド]フィールドに略式コマンドを入力して、[Enter]キーを押します。

システム管理者によるアカウント・セキュリティ設定によっては、[略式コマンド]フィールドを表示されない場合があります。

タスク・エクスプローラでは J.D.Edwards の略式コマンドを使用して、タスク・ビューや J.D. Edwards アプリケーションなどを起動できます。タスク・ビューを指定するには、実行するメニューの前に、内部タスク ID とコロンの(:)を入力してください。たとえば、“TV:98”と入力すると、お気に入りタスク・ビューにアクセスできます。

[略式コマンド]フィールドを使用して特定のメニューにアクセスすることもできます。タスク・ビューはメニューと個々のタスクから構成されています。タスク・エクスプローラには特別なフォーマットはなく、アプリケーション開発者はユーザーが使いやすいようにタスクをツリー構造に分類することができます。メニューにアクセスするとは、タスク・ビュー内の特定の場所にアクセスすることを意味します。略式コマンドを使用して特定のメニューにアクセスするには、そのメニュー ID を[略式コマンド]フィールドに入力します。たとえば“G0”と入力すると、〈基本設定〉メニューにアクセスできます。

略式コマンドを使用してプログラムを直接実行するには、[略式コマンド]フィールドにプログラム ID を入力します。プログラムをフォームを指定して直接実行するには、“プログラム ID|フォーム ID”と入力します。たとえば、“P01012|W01012”と入力すると、〈住所録の処理〉プログラムの〈住所録の処理〉フォームが表示されます。プログラムをバージョンを指定して直接実行するには、“プログラム ID|バージョン ID”と入力します。(例:“P01012|ZJDE0003”)

特定の内部タスク ID やメニューID、プログラム ID についてはシステム管理者にお問い合わせください。

注:

略式コマンドのないプログラムもあります。

▶ プログラムを実行するには

1. タスク・エクスプローラで、実行するプログラム・タスクを表示します。
2. 処理オプションやバージョンを指定しないでプログラムを実行するには、タスク名をクリックします。
対話型プログラムの場合は、プログラムがただちに実行されます。レポートの場合、バージョンを選択せずに実行すると、〈バッチ・バージョンの処理〉が表示されるので、そのグリッドから実行するバージョンを選択します。
3. 対話型プログラムの処理オプションやバージョンを指定して実行するには、タスク名の右にある緑色の矢印にカーソルを置いて、[処理オプション...]または[バージョン...]を選択します。
メニュー・オプションが斜体で表示されている場合は、そのオプションが使用できないことを意味します。

対話型プログラムの場合は、処理オプションの設定を完了した時点で、またはバージョンを選択した時点でプログラムが起動します。

4. レポートの処理オプション、バージョン、データ選択を指定するには、タスク名の横にある緑色の矢印の上にカーソルを置くと次のオプションが表示されます。
 - 処理オプション
 - バージョン
 - データ選択
 - データ選択および処理オプション

メニュー・オプションが斜体で表示されている場合は、そのオプションが使用できないことを意味します。

[バージョン]を選択すると、〈バッチ・バージョンの処理〉が表示され、使用するバージョンを選択できます。バージョンを選択すると、次に〈バージョン・プロンプト〉が表示されます。[プロンプト]オプションを必要に応じて選択し、[投入]をクリックします。次に[プリンタの選択]で必要なオプションを指定して、[OK]をクリックします。

参照

- J.D. Edwards ERP アプリケーションの実行方法については「対話型バージョン」
- J.D. Edwards レポートの実行方法については「バッチ・バージョン」
- 処理オプションの設定方法については「処理オプション」

お気に入りタスク・ビュー

お気に入りタスク・ビューにはタスクへのリンクを追加できます。頻繁に使用するタスクは、お気に入りタスク・ビューに追加しておく、すばやくアクセスできて便利です。

お気に入りタスク・ビューは、ユーザーごとに設定できます。ユーザーAがお気に入りタスク・ビューまたはビューに加えた変更は、他のユーザーには反映されません。同じユーザーが同じ環境に Windows クライアントと Web クライアントを使用してログインした場合、Solution Explorer とタスク・エクスプローラのお気に入りタスク・ビューには同じタスク・ツリーが表示されます。

システム管理者によるアカウント・セキュリティ設定によって、お気に入りタスク・ビューを表示したり変更したりできない場合があります。

▶ お気に入りタスク・ビューにアクセスするには

タスク Explorer で、[タスク・ビュー] フィールドのドロップ・ダウン・リストから[お気に入り]を選択します。

▶ お気に入りタスク・ビューにタスクを追加するには

1. タスク Explorer で、お気に入りタスク・ビューに追加するタスクを表示します。
2. タスクの横にある矢印にカーソルを置いて[送る...]を選択します。

ロール・ベース・タスク・ビュー

システム管理者は、ユーザーが必要なタスクにアクセスしやすいように、ロール・ベースのタスク・ビューを作成できます。ロールとは、ユーザーを職種や役割に応じて分類するための区分です。システム管理者は、アカウントの作成時にユーザーにロールを割り当てます。ロール・ベース・タスク・ビューには、特定の業務を遂行するのに必要なタスクだけが表示されます。

▶ ロールベース・タスク・ビューにアクセスするには

1. タスク・エクスプローラで、[タスク・ビュー]メニューから[エンドユーザー・タスク] (ロールベース・タスク・ビューの1つ)を選択します。
表示されるタスク・ビューは、デフォルト・ロール用のビューです。
2. 異なるロールベース・タスク・ビューを表示するには、[ロール]をクリックしてロールを変更します。
[ロール]メニューには、システム管理者によってユーザーに割り当てられたロール(複数可)が表示されます。

ユーザー・オプション

タスク・エクスプローラで、[ビュー]メニューから[ユーザー・オプション]を選択すると、〈ユーザー・デフォルトの改訂〉フォームが表示されます。次のリストでは、〈ユーザー・デフォルトの改訂〉の各ボタンについて説明します。

ボタン	説明
ユーザー・プロファイルの改訂	〈ユーザー・プロファイルの改訂〉プログラム(P0092)にアクセスします。プロファイルはシステム管理者のみが変更できます。
ローカル出力の表示	J.D. Edwards ソフトウェアを実行中のマシンの印刷待ち行列フォルダにアクセスします。
投入済みレポート	〈サーバーの処理〉プログラム(P989116)にアクセスします。ここでは、投入済みレポートジョブの状況の確認、優先順位の変更、レポート出力の処理、およびエラーの再表示ができます。
メニューの改訂	タスク・エクスプローラでは使用できません。
パスワードの変更	〈ユーザー・セキュリティ〉プログラム(P980WSEC)にアクセスすると、パスワードを変更できます。
デフォルト・プリンタ	〈プリンタ〉プログラム(P98616)にアクセスします。デフォルト・プリンタの設定は、システム管理者だけが変更できます。

参照

- ユーザー・プロファイルの変更については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・プロファイル」
- PrintQese ディレクトリへのアクセスについては「レポートの出力を表示するには」
- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「レポートの投入」
- 『Web アプリケーション設計』ガイドの「パスワードを変更するには」
- デフォルト・プリンタの設定変更については『エンタープライズ・レポート・ライティング』の「プリンタ定義プログラムの処理」

▶ パスワードを変更するには

1. タスク・エクスプローラで[ユーザー・オプション]を選択します。
2. 〈ユーザー・デフォルトの改訂〉で[パスワードの変更]をクリックします。
3. 〈ユーザー・パスワードの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 旧パスワード
 - 新パスワード
 - 新パスワード(確認)

▶ 一度実行したレポートを再度オンライン表示するには

レポートをオンラインで表示するにはレポート・バージョンを実行してください。

1. タスク・エクスプローラで[ユーザー・オプション]を選択します。
2. 〈ユーザー・デフォルトの改訂〉で、[ローカル出力の表示]をクリックします。
3. [ファイルを開く]でファイルを選び、[開く]をクリックします。

PDF 形式のレポートが表示されます。エラー・ログなどの表示ログ・ファイルも表示できます。これを実行するには、[ファイル・タイプ]フィールドで UBE ログ・ファイルを指定します。

参照

- レポートの実行については『エンタープライズ・レポート・ライティング・ガイド』の「レポートの投入」

タスク・エクスプローラの設定

システム管理者は、次のタスクを実行してタスク・エクスプローラを設定および管理します。

- Windows ワークステーションで Solution Explorer を設定する。
- 正しいテーブルを参照するようにタスク・エクスプローラを設定する。
- Solution Explorer を使ってロールを作成する。
- Solution Explorer を使ってタスク・ビューを作成する。
- セキュリティ・ワークベンチを使ってセキュリティを設定する。

ユーザーが OneWorld エクスプローラを使用して J.D. Edwards アプリケーションにアクセスしている場合でも、タスク・エクスプローラのロールやタスク・ビューは Solution Explorer で設定する必要があります。システム管理者は、ユーザーが OneWorld エクスプローラを実行している場合、タスク・エクスプローラが OneWorld エクスプローラ・メニュー・テーブル(F008x)を参照するように設定する必要があります。ユーザーが Solution Explorer を実行している場合は、タスク・エクスプローラがさまざまな Solution Explorer 用メニュー・テーブル(F900x)を参照するように設定する必要があります。J.D. Edwards ERP 9、ERP 8、または OneWorld Xe を使用している場合は、Solution Explorer とその関連テーブルを使用することをお勧めします。OneWorld エクスプローラ・メニュー・テーブルを使用した場合、ユーザーがアクセスできるタスク・ビューは OneWorld メニューだけに限定されます。

テーブルを切り替えるためのテンプレート・ファイルとして、J.D. Edwards では 2 つのファイル (taskexplorer.properties.owmenu および taskexplorer.properties.activera)を提供しています。

OneWorld メニュー・テーブルを参照するように設定するには、taskexplorer.properties.owmenu の内容を taskexplorer.properties にコピーします。Solution Explorer テーブルを参照するように設定するには、taskexplorer.properties.activera の内容を taskexplorer.properties にコピーします。デフォルトでは、taskexplorer.properties は Solution Explorer テーブルを参照するように設定されています。

ロールベースのタスク・ビューは、Solution Explorer およびタスク・エクスプローラの最も便利なツールの 1 つです。ロールベースのタスク・ビューを設定するには、まずロールを設定します。次にユーザーの必要に応じて、タスク・ビューを変更することができます。ロールやタスク・ビューの設定は、Solution Explorer を使用して行います。ロールとタスク・ビューの設定については『Solution Explore』ガイドを参照してください。ロールや複数タスク・ビューの機能は、Solution Explorer テーブルを使用するため、OneWorld メニュー・テーブルを参照する設定の場合は利用できません。

Solution Explorer およびタスク・エクスプローラのセキュリティ・オプションの設定は、セキュリティ・ワークベンチ(P00950)の〈Solution Explorer セキュリティ改訂の処理〉フォームで行います。タスク・エクスプローラでは、エクスプローラ、お気に入り、略式コマンド/検索に関する設定のみが該当します。このフォームでは次のアクセス制御が行えます。

- アクセス制限のあるタスク・ビューへのアクセス
- お気に入りリストの表示および変更
- 略式コマンド機能へのアクセス（[検索]ツールはタスク・エクスプローラでは使用できません）

これらのアクセス制御はロールやユーザー別にセキュリティを設定できます。

略式コマンドは、タスク・エクスプローラが OneWorld テーブルをポイントしている場合は、略式コマンド(00/FP)のユーザー定義コードが参照され、タスク・エクスプローラが Solution Explorer テーブルをポイントしている場合は、ActivEra 略式コマンド(H90/FP)のユーザー定義コードが参照されます。

参照

- ユーザーにタスク・エクスプローラ・タスク・ビューやお気に入りタスク・ビュー、略式コマンドへのアクセスを許可する方法については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「Solution Explorer セキュリティ」
- ロールの作成と管理については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ユーザー・ロールの設定」
- タスク・ビューの作成と変更については『Solution Explorer』ガイドの「タスク・ビューの設定」
- タスク・ビューに含めるタスクの変更とタスクにロールを適用する方法については、『Solution Explorer』ガイドの「タスクの設定」

▶ タスク・エクスプローラの参照テーブルを設定するには

1. WebSphere の J.D. Edwards インスタンスを停止します。
2. Web サーバーで、`¥$.¥webclient¥taskexplorer¥`に移動します。

タスク・エクスプローラの実行方法、および使用するテーブル・セットは `taskexplorer.properties` ファイルで指定します。デフォルトでは、タスク・エクスプローラは Solution Explorer テーブルを参照するように設定されています。

注意:

下記の方法以外では、`taskexplorer.properties`、`δ` 変更しないでください。

3. `taskexplorer.properties` を `taskexplorer.properties.def` に名前変更します。
4. タスク・エクスプローラが OneWorld メニュー・テーブルを参照するように設定するには、`taskexplorer.properties.owmenu`、`1-¼` 'O' を `taskexplorer.properties` に変更します。
5. タスク・エクスプローラが Solution Explorer テーブルを参照するように設定するには、`taskexplorer.properties.activera`、`1-¼` 'O' を `taskexplorer.properties` に変更します。
6. WebSphere の J.D. Edwards インスタンスを開始します。

タスク・エクスプローラのトラブル・シューティング

エンド・ユーザーとしてタスク・エクスプローラでの作業中に問題が発生した場合は、IT サポートまたはシステム管理者に連絡してください。

システム管理者は、タスク・エクスプローラが表示されていない場合、次のログを検討してください。

- JAS.log を検討して、すべてのドライバが登録されていることを確認します。データベース接続にエラー (SQL 例外など) がないかどうか確認します。
- JAS.ini ファイルで DEBUG=TRUE を設定し、JASDEBUG.log で API アクティビティにエラーがないかどうか確認します。
- STDOUT.log、STDERR.log、STDOUT.log を検討します。これらのログには、エントリ・ポイント・フォームのルックアップに関連するエラーなど、タスク・エクスプローラに固有な情報が含まれています。

ログのロケーションは JAS.ini ファイルで指定されています。

J.D. Edwards Web アプリケーション/レポート

J.D. Edwards Web クライアントでは、さまざまなアプリケーション、レポート、オブジェクトにアクセスできます。通常、これらのオブジェクトにはタスク・エクスプローラからアクセスします。

▶ プログラムを実行するには

1. タスク・エクスプローラで、実行するタスクを表示します。
2. 処理オプションやバージョンを定義せずにプログラムを実行するには、タスク名をクリックします。
対話型プログラムの場合は、プログラムがただちに実行されます。レポートの場合、バージョンを選択せずに実行すると、〈バッチ・バージョンの処理〉が表示されるので、そのグリッドから実行するバージョンを選択します。

3. 対話型プログラムの処理オプションやバージョンを指定して実行するには、タスク名の右にある緑色の矢印にカーソルを置いて、[処理オプション...]または[バージョン...]を選択します。
メニュー・オプションが斜体で表示されている場合は、アプリケーションにはそのオプションが使用できないことを意味します。

対話型プログラムの場合は、処理オプションの設定を完了した時点で、またはバージョンを選択した時点でプログラムが起動します。

4. レポートの処理オプション、バージョン、データ選択を指定するには、タスク名の横にある緑色の矢印の上にカーソルを置くと次のオプションが表示されます。
 - 値
 - バージョン
 - データ選択
 - データ選択および処理オプション

メニュー・オプションが斜体で表示されている場合は、レポートにはそのオプションが使用できないことを意味します。

[バージョン]を選択すると、〈バッチ・バージョンの処理〉が表示され、使用するバージョンを選択できます。バージョンを選択すると、次に〈バージョン・プロンプト〉が表示されます。[プロンプト]オプションを必要に応じて選択し、[投入]をクリックします。次に[プリンタの選択]で必要なオプションを指定して、[OK]をクリックします。

参照

- J.D. Edwards ERP アプリケーションの実行については「対話型バージョン・アプリケーション」
- J.D. Edwards レポートの実行については「レポート用バッチ・バージョン」
- 処理オプションの使用については「処理オプション」

アプリケーション・ショートカットの送信

J.D. Edwards Web クライアントから、現在開いているアプリケーション・フォームのショートカットを送信できます。受信者は、電子メールのショートカットをダブルクリックすることにより、そのアプリケーション・フォームにアクセスできます。

注:

J.D. Edwards ERP では、ショートカットを送信して Windows および Web クライアントのアプリケーションを起動できます。ショートカットを送信する前に、ショートカットの受信者が Windows クライアントと Web クライアントのどちらのクライアント・バージョンを使用しているか確認してください。ただし、ショートカットの優先情報は Windows クライアント上でのみ設定できます。

▶ アプリケーション・フォームにショートカットを送信するには

1. タスク・エクスプローラから送信するフォームにアクセスします。
2. [ツール]をクリックして[ショートカットの送信]を選択します。
3. 〈ショートカットの送信〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - 住所番号/ユーザー/ロール/配布リスト

注:

配布リストに含まれているユーザーにショートカットを送信する場合は、[住所番号/ユーザー/ロール/配布リスト]のビジュアル・アシストをクリックし、[配布リスト]オプションを選択します。表示された配布リストから送信先の配布リスト番号を選択します。[配布リスト]オプションを選択せずに配布リスト番号を入力した場合、ショートカットは配布リストの住所番号に送られるだけで、配布リストに登録されたユーザーには送信されません。

- メールボックス
メッセージを送信するメールボックス/待ち行列を選択します。

- 件名

[件名]行に件名を入力します。

4. ショートカットにメッセージを添付する場合、フォーム下のテキスト・ボックスに入力します。
5. [OK]をクリックし、ショートカットを送信します。

受信者のワーク・センターまたはサードパーティの電子メールのメール・ボックスにショートカットが送信されます。

Web アプリケーション・フォーム

J.D. Edwards ERP アプリケーションでは対話型のフォームを使用できます。アプリケーションを実行すると、まずデフォルトのフォームが表示されます。ユーザーのアクションに応じてその他のフォームが表示されます。一度に表示されるフォームは 1 つだけです。フォーム間を移動する場合は、ブラウザの[戻る]や[進む]ボタンではなくフォームのボタンを使用してください。

J.D. Edwards のフォームは次のコンポーネントから構成されています。

- タイトル・バー
- ボタン
- ラジオ・ボタン/チェックボックス
- ハイパーリンク
- タブ
- フィールド
- グリッド
- ツリー・コントロール

タイトル・バー

タイトル・バーはアプリケーションの一番上に表示されます。左側にはアプリケーションの名前を表示され、右側にはヘルプ・ボタンが 3 つ表示されます。これらのボタンは、バージョン情報、オンライン・ヘルプ、項目ヘルプにアクセスできます。

ボタン/メニュー

ボタンは、ツールバーとタイトル・バーの両方にあります。フォームの中央に表示されることもあります。ボタンをクリックすると、フォームに入力した情報を保存してフォームを閉じたり、他のプログラムを実行するなどの操作が行われます。

右下に赤い矢印のあるボタンは、メニュー・オプションが存在することを示しています。ボタンをクリックすると、メニューが表示されます。

通常、フォームに入力した情報は、[OK]や[投入]などのボタンをクリックするまで処理されません。

主な操作ボタンには次のものがあります。この中にはフォームによっては表示されないボタンもあります。

- [選択] - グリッド行を選択して[選択]をクリックすると、詳細情報フォームを開いたり、レポートを実行するなど、そのレコードに関する処理を行います。

- [検索] - 検索条件フィールドに値を入力して[検索]をクリックすると、グリッドに検索結果が表示されます。
- [追加] - グリッドに新しいレコードを追加します。通常、新しく表示される入力フォームにレコードを入力します。
- [削除] - グリッドのレコードをハイライトし、[削除]をクリックしてテーブルから削除します。
- [コピー] - グリッドのレコードをハイライトして[コピー]をクリックすると、ハイライトしたレコードと同じ内容のレコードが新しく作成されます。
- [OK] - フォームのフィールドに値を入力したら、[OK]をクリックして情報を保存します。
- [キャンセル] - フォームを閉じます。[OK]や[検索]とは異なり、[キャンセル]をクリックするとフォームに入力したデータは保存されません。
- [閉じる] - フォームを閉じます。アプリケーションのデフォルト・フォームで作業時に[閉じる]をクリックするとアプリケーションが閉じます。

主な操作メニューには次のものがあります。フォームによっては表示されないメニューもあります。

- [ロー] - 選択したグリッドのレコードに適用するオプションが含まれます。
- [フォーム] - フォーム固有のオプション(例: フォームの添付ファイルの表示)の他にも、アプリケーション内での別のフォームへのリンクを含みます。
- [ツール] - J.D. Edwards のほとんどのアプリケーションに標準のオプションが含まれています。たとえば、ユーザー・オプション、ジョブやレポートの投入機能、グリッドの内容のスプレッドシートへのエクスポートなどがあります。

フィールド/グリッド

フィールドとグリッドにデータを入力すると、データが表示されます。グリッドはテーブルのような外観で、いくつかのカラムに情報が表示されます。各ローには異なるレコードが表示されます。フィールドには一度に1つのデータしか表示されません。使用不可(グレー表示されている)フィールドでは、表示されるデータを変更できません。また、ドロップダウンの矢印があるフィールドもあります。この矢印をクリックすると、選択するオプションが表示されます。

フィールドをクリックすると、フィールドの右側にボタンが表示されることがあります。このボタンはフラッシュライト、電卓、またはカレンダーの場合があります。このボタンはビジュアル・アシストと呼ばれます。ビジュアル・アシストをクリックすると、フィールドに入力する値を検索することができます。また、システム情報を検索するフォームが表示されます。たとえば、Windows クライアントではシステムにログインする際に環境を指定しますが、[環境]フィールドのビジュアル・アシストをクリックして、使用可能な環境リストからログインする環境を選択すれば、手入力による入力ミスを防ぐことができます。電卓ボタンの場合は、電卓を使用して計算して、その結果値をフィールドに入力できます。カレンダー・アイコンの場合は、カレンダーから選択した日付がフィールドに入力されます。

フォームのフィールドは、入力が必要なものや任意のものがあります。たとえば、検索フォームの条件フィールドは任意フィールドで、検索条件を限定するために使用します。条件フィールドに値を指定しない場合は"*"と入力します。*は、そのフィールドに対してすべての値が有効であることを示します。

ツリー・コントロール

ツリー・コントロールは2つの画面のように見えます。片方は、ファイルやアプリケーションなど、オブジェクトの階層構造を表示します。もう片方は、階層のオブジェクトに応じて表示されます。

▶ フォームでヘルプを表示するには

すべてのヘルプ・ボタンは J.D. Edwards Web フォームでは右上の隅に表示されます。ボタンの上にカーソルを置くと、名前が表示されます。

1. ID やアプリケーション、ソフトウェア・バージョンなどの情報を表示するには、[J.D. Edwards 情報]をクリックしてください。
2. 現在のアプリケーションの使用方法については、[ヘルプ]をクリックしてください。
3. 特定のフィールドについての情報を表示するには、[項目ヘルプ]をクリックしてください。カーソルの横に疑問符マーク(?)が表示されます。
4. フィールドをクリックすると情報が表示されます。フィールドのどの番号もクリックできます。
5. 終了したら、[項目ヘルプ]を再度クリックしてください。カーソルの横の疑問符が表示されなくなったら、フォームの使用を続行できます。

グリッド

J.D. Edwards の多くのフォームにはグリッドがあります。グリッドにはデータが表示されます。アプリケーションによっては、グリッドのデータを追加、変更、削除することができます。

グリッドのあるアプリケーションを実行すると、最初はグリッドは空です。検索を実行してグリッドに値を入力していきます。検索を実行するには、[検索]をクリックします。ほとんどの場合、検索条件を設定せずに[検索]をクリックすると、ビジネス・ビューのデータがすべて表示されます。検索条件を指定しないと検索を実行できない場合もあります。

J.D. Edwards では、検索条件を指定するさまざまな方法があります。ほとんどのグリッドの一番上には、ブランク行があります。これは QBE と呼ばれます。QBE フィールドに値を入力して[検索]をクリックすると、その条件に基づいて検索が行われます。たとえば、従業員情報をリストするアプリケーションでは、[名字]カラムでフィールドに“Abbot”と入力すると、システムからは名字が Abbot という従業員のみ返されます。他のカラムにデータを入力してさらに検索を絞り込むこともできます。グリッドに「市」というカラムがある場合、市の名前を入力すると、名字が Abbot で、住所が指定した市である従業員のデータがグリッドに表示されます。

QBE の他にも、多くのフォームにはグリッドの上に条件フィールドが表示されています。これらのフィールドにデータを入力すると、検索を絞ることができます。さらに、ラジオ・ボタンやチェックボックスを使って検索条件を絞ることのできるフォームもあります。たとえば受注オーダーを処理する場合、該当するチェックボックスをオンにすることにより、完了オーダーだけを表示することができます。

通常、QBE フィールドと条件フィールドにはワイルドカード(*)を使用できます。最初の例で、名字の最初の文字が M の従業員をすべて表示するには、[名字]カラムに“M*”と入力します。さらに、多くのフィールドにはビジュアル・アシストが組み込まれています。ビジュアル・アシストをクリックすると、有効な値を検索したり、その場で計算したりできます。

検索条件は、検索のたびに変更できます。QBE および見出し域の検索フィールドに検索条件を入力したり、その他のオプションを選択して[検索]をクリックすると、これらすべての検索条件に該当するレコードがグリッドに表示されます。グレー表示されている検索フィールドは、条件指定には使用できません。

システム管理者は、グリッドに一度に一定数のレコードしか取り込まないように設定することがあります。検索条件に該当するレコードが表示行数よりも多く存在する場合、グリッドの一番上にロー・カウンタと上下矢印が表示されます。この上下矢印を使用すると、次のレコードが読み込まれたり、前に読み込まれたレコードを再表示できます。カウンタにより、現在リストのどのレコードが表示されているかがわかります。たとえば、最初にグリッドを読み込むと、カウンタには「レコード 1 - 10」と表示されます。下矢印をクリックすると、次の 10 件が読み込まれ、「レコード 11 - 20」と表示されます。

グリッドの特定レコードを処理するには、ローの左にあるラジオ・ボタンまたはチェックボックスをオンにします。グリッドのローがハイライトされ、選択されていることがわかります。次に、[ロー]をクリックしてデータ処理のオプション・リストを表示します。一番下には添付を表示するメニューもあります。グリッドの左端がラジオ・ボタンではなく、チェックボックスの場合、複数のローを選択できます。ただしその場合、[ロー]メニューでは 1 つのローを選択した場合と異なり、一部のオプションしか選択できない場合があります。

グリッドにはデータの表示のみを行うものと、データを入力できるグリッドがあります。入力可能なグリッドは、別フォームになっているのが普通ですが、グリッドが小さなグリッドにデータを直接入力できる場合もあります。グリッドには、データを手入力することも、Microsoft Excel スプレッドシートからインポートすることもできます。グリッドにレコードをインポートするには、スプレッドシートで指定した範囲がグリッドのカラムと完全に一致している必要があります。ほとんどのグリッドでは、レコードを Microsoft Excel や Word ファイルにエクスポートすることができます。

グリッドの外観は変更可能です。グリッドは最大化して表示することもできます。カラムの色も変更でき、カラム・テキストに色やフォーマットを適用することもできます。カラムの表示順序やソート順序、カラム幅も変更できます。1 つのフォームに複数のグリッド・フォーマットを作成して、同じデータを異なる表示形式で表示することもできます。

▶ グリッド・レコードを Microsoft Excel や Word にエクスポートするには

1. グリッドのあるアプリケーションを起動し、[検索]をクリックしてグリッドにレコードを読み込みます。
2. 次のいずれかを実行します。
 - グリッド・レコードを Excel にエクスポートするには、[ツール]をクリックして[Excel にエクスポート]をクリックします。
 - グリッド・レコードを Word にエクスポートするには、[ツール]をクリックして[Word にエクスポート]をクリックします。
3. エクスポート・アシスタントを使って、範囲の最初または最後のセルをクリックし、エクスポートするデータの範囲を指定します。

たとえば、グリッドに 4 つのカラムと 3 つのローがあり、最初の 3 つのカラムと最初の 2 つのローのみエクスポートする場合、最初のローの最初のセルをクリックしてから 2 番目のローにある 3 番目のセルをクリックします。

セルをビューに読み込むには、グリッドのスクロール・バーを使用してください。一度に読み込まれるローは数件です。グリッドの一番上にある上下矢印を使うと、さらにローのデータが取り込まれたり、前に取り込まれたローの設定に戻ることができます。

違うセルをクリックした場合は、[リセットの選択]をクリックしてください。

4. [続行]をクリックします。
選択したグリッドの内容が、適切なファイル・タイプにエクスポートされて表示されます。

▶ Microsoft Excel スプレッドシートをグリッドにインポートするには

1. データを直接入力できるグリッドのあるアプリケーションを実行します。
2. [ツール]をクリックして[Excel からインポート]を選択します。
3. [Excel アシスタントからのインポート]で、インポートする Excel スプレッド・シートを検索するには[検索]をクリックします。
4. 次のフィールドに値を入力します。
 - インポートするワークシート
インポートするデータを含むワークシートの名前を入力します。
 - 開始セル・カラム
インポートするデータの範囲の最初のセルにあるスプレッドシート・カラム文字を入力します。
 - 開始セル・ロー
インポートするデータの範囲の最初のセルにあるスプレッドシート・ロー番号を入力します。
 - 終了セル・カラム
インポートするデータの範囲の最後のセルにあるスプレッドシート・カラム文字を入力します。
 - 終了セル・ロー
インポートするデータの範囲の最後のセルにあるスプレッドシート・ロー番号を入力します。
5. [インポート]をクリックします。
選択したデータがインポートされます。

▶ グリッド・フォーマットを作成するには

デフォルトのフォーマットを再び使用するには、新規フォーマットを保存する前に変更前のグリッドを保存しておきます。変更前に保存しなかった場合は、新規フォーマットを削除し、アプリケーションを終了してアプリケーションに再びアクセスすると、デフォルトのグリッド・フォーマットが表示されます。

1. 新しいグリッド・フォーマットを作成するアプリケーションを実行して、[グリッドのカスタマイズ]をクリックしてください。
2. [グリッド・フォーマットの選択]で、[作成]をクリックします。
3. [グリッド・フォーマット]名で、フォーマットの名前を入力します。
4. 必要に応じて残りのオプションにも値を入力して、[OK]をクリックします。
5. モバイル・デバイスのデフォルト・フォーマットとしてグリッド・フォーマットを使用するには、作成したフォーマットをクリックして[モバイル・デバイスのデフォルト]を選択します。
6. [閉じる]をクリックします。

▶ モバイル・デバイスのグリッド・フォーマットを作成するには

1. Web クライアントを使用して、モバイル・デバイスのグリッド・フォーマットを作成するアプリケーションを実行します。
2. [グリッドのカスタマイズ]をクリックして、モバイル・デバイスに使用するフォーマットを選択します。

フォーマットをまだ作成していない場合は、ここで作成してください。Web ベースのフォーマットを作成する場合にも、同じステップに従ってください。ただし、表示するカラムやカラム幅、カラムやテキストの色などを指定する場合に、ほとんどのモバイル・デバイスで提供されるスペースや色オプションは限られています。

3. [モバイル・デバイスのデフォルト]をクリックして[閉じる]をクリックしてください。

▶ グリッド・フォーマットを適用するには

グリッドのあるフォームで、[グリッドのカスタマイズ]の横にあるドロップダウン・リストからグリッドを選択してください。

グリッド・フォーマットを適用する前に、グリッドを作成しておきます。

▶ グリッド・フォーマットを変更するには

1. 変更するグリッド・フォーマットを含むアプリケーションを実行して、[グリッドのカスタマイズ]をクリックします。
2. [グリッド・フォーマットの選択]で、変更するグリッド・フォーマットを選択して[変更]をクリックします。
3. グリッド・フォーマットの名前を変更するには、[グリッド・フォーマット名]に新しい名前を入力します。
4. 必要に応じてグリッドの要素を変更し、[OK]をクリックします。
5. [閉じる]をクリックします。

▶ グリッド・フォーマットを削除するには

1. グリッドのあるフォームで、[グリッドのカスタマイズ]をクリックします。
2. [グリッド・フォーマットの選択]で、削除するグリッド・フォーマットを選択して[削除]をクリックします。

グリッド・フォーマットがリストから表示されなくなります。

3. [閉じる]をクリックします。

▶ グリッド・カラムを表示/非表示するには

1. 変更するグリッドを含むアプリケーションを実行します。
2. [グリッドのカスタマイズ]をクリックして、新規フォーマットを作成するか、変更する既存のフォーマットを選択します。
3. [グリッドのカスタマイズ]で、[表示および順序]セクションまでスクロールします。

4. グリッドにカラムを表示しないようにするには、[表示および順序]リストを選択して、左矢印をクリックします。
5. グリッドにカラムを表示させるには、[使用可能なカラム]リストからカラムを選択して右矢印をクリックします。
6. 上下矢印を使用して、グリッドでカラムを表示する順序を変更します。
7. 完了したら、[OK]をクリックして[閉じる]をクリックします。

▶ グリッド・カラムを再設定するには

1. 変更するグリッドを含むアプリケーションを実行します。
2. [グリッドのカスタマイズ]をクリックして、新規フォーマットを作成するか、変更する既存のフォーマットを選択します。
3. [グリッドのカスタマイズ]で、[表示および順序]セクションまでスクロールします。
4. [表示および順序]リストで、カラム名をクリックして上下矢印を使用してリストを上下に移動します。

リストではカラムは上から下に表示されます。つまり、リストの1番目のカラムはグリッドで最初に表示されます。2番目のカラムは2番目に表示されます。
5. ステップ4を繰り返して、他のカラムも移動してください。
6. 完了したら、[OK]をクリックして[閉じる]をクリックします。

▶ グリッドの色とフォントを設定するには

1. 変更するグリッドを含むアプリケーションを実行します。
2. [グリッドのカスタマイズ]をクリックして、新規フォーマットを作成するか、変更する既存のフォーマットを選択します。
3. [グリッドのカスタマイズ]で、[表示および順序]セクションまでスクロールします。
4. [表示および順序]リストでカラム名をクリックします。
[選択したカラム]フィールドにカラム名が表示されます。
5. 背景色をカラムに適用するには、[カラムの色]の下にあるパレットで色をクリックしてください。
選択した色の16進数の値が[カラムの色]フィールドに表示されます。
6. 色をカラムのテキストに適用するには、[テキストの色]の下にあるパレットで色をクリックしてください。
選択した色の16進数の値が[テキストの色]フィールドに表示されます。
7. カラムのテキストにフォント・スタイル(太字や斜体)を適用するには、適用するスタイルを[テキスト・オプション]リストでクリックしてください。
8. [スタイルの更新]をクリックします。
[選択したカラム]フィールドが更新され、どのように見えるか示されます。[表示および順序]リストでは、カラム名の横に「+」が表示されます。ユーザー定義フォーマットが絡むに適用されることを示します。

9. ステップの 4 から 8 を繰り返して、その他のカラムのフォーマットにも適用します。
10. 完了したら、[OK]をクリックして[閉じる]をクリックします。

▶ グリッドのカラム幅を変更するには

1. 変更するグリッドを含むアプリケーションを実行します。
2. [グリッドのカスタマイズ]をクリックして、新規フォーマットを作成するか、変更する既存のフォーマットを選択します。
3. [グリッドのカスタマイズ]で、[表示および順序]セクションまでスクロールします。
4. [表示および順序]リストでカラム名をクリックします。
[選択したカラム]フィールドにカラム名が表示されます。
5. [カラムの幅]フィールドに数値(%)を入力します。
この値はカラムに割り当てるスペースの割合です。カラムに基づくデータ項目に定義された幅に基いて割り当てられます。入力できる値は 25 から 400 までです。
6. 完了したら、[OK]をクリックして[閉じる]をクリックします。

▶ グリッドのソート順序を変更するには

1. 変更するグリッドを含むアプリケーションを実行します。
2. [グリッドのカスタマイズ]をクリックして、新規フォーマットを作成するか、変更する既存のフォーマットを選択します。
3. [グリッドのカスタマイズ]で、[データ順序設定]セクションまでスクロールします。
4. カラムをソートする場合、[使用可能なカラム]でカラム名をクリックして右矢印をクリックします。
[使用可能なカラム]から[順序づけられたカラム]にカラム名が移動されます。

カラムはグリッドに含まれる必要があります。カラム名はソートする前に[表示および順序]に表示されていないとなりません。
5. カラムをソートする場合、[順序づけられたカラム]でカラム名をクリックして左矢印をクリックします。
[順序づけられたカラム]から[使用可能なカラム]にカラム名が移動されます。
6. ソート順序を再編成するには、[順序づけられたカラム]の下にある上下矢印を使用して、カラム名を再編成してください。
最初にリストの一番上のカラムでソートされ、上から 2 番目のカラムで次にソートされます。
7. カラムを昇順でソートする場合は、[順序づけられたカラム]で名前をクリックして[昇順]をクリックします。
[昇順]を空白のままにすると、カラムは降順でソートされます。

昇順でソートされるカラム名の横に A という文字が表示されます。降順でソートされるカラム名の横には D という文字が表示されます。

- 完了したら、[OK]をクリックして[閉じる]をクリックします。

メディア・オブジェクト添付

J.D. Edwards ソフトウェアのメディア・オブジェクトおよびイメージ機能を使用すると、現在紙ベースで配布している情報も含め、アプリケーションに情報を添付することができます。たとえば、テキストを使用してある仕訳入力に関する特殊な状況を説明することができます。メディア・オブジェクト機能を使用すると、J.D. Edwards ソフトウェアのアプリケーション、フォームやロー、およびオブジェクト・ライブラリアンのオブジェクトに情報を添付することができます。メディア・オブジェクトで使用できるイメージ機能により、さらに効率よく情報を保存することができます。

また、OneWorld 中のグリッドのローやフォーム自体にオブジェクトをリンクさせることができます。グリッドのローやフォームに添付できるオブジェクトには次のタイプがあります。

テキスト メディア・オブジェクトにはワード・プロセッシング機能があり、添付を作成できます。たとえば、テキスト添付により、フォームの記入方法やレコードに関する追加情報を添付することができます。

イメージ Windows のイメージファイルには、.BMP、.GIF、および.JPG があります。このようなファイルは、電子ファイルから作成された場合と紙の伝票をスキャナで入力した画像の場合があります。添付できるイメージは、システム管理者により最初にイメージ待ち行列に添付されます。

OLE メディア・オブジェクトには、OLE 標準に合ったファイルを使用できます。OLE を使用すると、異なるプログラム間でのリンクを作成できます。このリンクを使用して、あるプログラムのオブジェクトを別のプログラムに保存することができます。J.D. Edwards のソフトウェアは、OLE オブジェクトを添付するのに必要なリンクを提供します。

OLE メディア・オブジェクトは、ベース・フォーム・レベルで添付します。フォームのベース・レベルにオブジェクトを添付する際には、オブジェクトはフォーム上に表示される 1 データではなくフォーム自体に添付されます。OLE ファイルはグリッドのローまたはフォームにリンクすることができますが、ファイル自体は別のディレクトリに保存されます。OLE がリンクするアプリケーションについて持つファイル情報は、リンクするファイルへのパス情報だけです。

使用できるのは、OLE オブジェクトとして正しく登録してインストールしたものに限りません。

URL/ファイル メディア・オブジェクトとして、Web ページの URL またはその他のファイルへのリンクを作成することもできます。フォームで URL メディア・オブジェクトをコントロール・オブジェクトに添付すると、その Web ページがフォームの一部として表示されます。URL をフォームまたはオブジェクト・ライブラリアンのオブジェクトに添付すると、そのメディア・オブジェクトはその URL へのリンクとなります。ファイルはイメージ待ち行列に常駐しているものを使用することも、ローカルやネットワーク・ファイルを添付することもできます。

メディア・オブジェクトをフォームに添付してフォーム上で異なるデータにアクセスする場合、添付ファイルが使用できないことがあります。たとえば、オーダー番号 2002 に関するデータを含む詳細フォームにメディア・オブジェクトを添付すると、オーダー番号 3003 のデータにアクセスしたときに表示される詳細フォームには、この添付ファイルは表示されません。ベース・フォーム(上記の場合は、詳細フォーム)は同じでも、フォームに関連付けられているデータのオーダー番号により異なるためです。オーダー番号は添付ファイルが保管されているロケーションへのキーになっています。

フォーム・レベルでファイルが添付されているフォームには、ステータス・バーの右にペーパークリップ・アイコンが表示されます。ベース・フォーム・レベルで OLE オブジェクトが添付されたフォームでは、ステータス・バーの右に文書アイコンが表示されます。

ユーザーが検索を行ってグリッド・ローにレコードを表示させた時点では、そのレコードに対して添付ファイルが存在するかどうかは表示されません。レコードに添付ファイルがあるかどうかを確認するには、添付を検索する必要があります。システムでは、現在グリッドにロードされているレコードの添付のみ検索されます。[検索]ボタンをクリックすると、フォームにより添付ファイルの参照状況が再設定されます。グリッド・レコードの添付を表示するには、再度検索を実行してください。

メディア・オブジェクト・ビューアを使用するとオブジェクトに既に添付されているメディア・オブジェクトを調べたり、新しいメディア・オブジェクトを追加したりできます。メディア・オブジェクトのワークスペースは、2つのパネルに分割されています。左のパネルはアイコン・パネルで、右のパネルはビューア・パネルです。以前にレコードに添付されたファイルはアイコン・パネルに表示されます。添付を表示するには、添付アイコンをクリックすると、ビューア・パネルに内容が表示されます。オブジェクトには、複数の添付を含めることができます。

テンプレートを使用すると、頻繁に使用するメディア・オブジェクト用のフォーマットを定義しておくことができます。テンプレートにはイメージやショートカットなど、添付オブジェクトを含むこともできます。たとえば、メモ用のレターヘッドや標準フォームを作成することができます。テンプレートはシステム管理者によって作成されます。

参照

- Web クライアントでメディア・オブジェクトを添付する方法については『Web アプリケーション設計』ガイドの「メディア・オブジェクトの添付」
- テキスト・テンプレートの作成については「テンプレートの処理」
- メディア・オブジェクトを処理するフォームの設定については『アプリケーション設計』の「メディア・オブジェクトの処理」
- システム管理者が J.D. Edwards ERP ソフトウェアでメディア・オブジェクトを使用可能にする方法については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「メディア・オブジェクトおよびイメージング」

▶ 添付を表示するには

1. グリッドのあるアプリケーションを実行して、[検索]をクリックしてグリッドにレコードを入力します。
2. 拡大鏡とペーパークリップのあるボタンとをクリックします。(ボタンはカラム見出しの左にあります。)

添付ファイルのあるレコードのローには、グリッドの左にペーパークリップが表示されます。

リフレッシュや検索、前のレコード・設定のビューに戻る場合は、そのつど添付を検索する必要があります。

3. ペーパークリップ・アイコンの付いたボタンをクリックして、ローの添付を表示します。
4. メディア・オブジェクト・ビューアで、表示するメディア・オブジェクトに対応する左カラムにあるオブジェクトをクリックします。
5. 完了したら[キャンセル]をクリックします。

▶ テキストを添付するには

1. グリッドのあるアプリケーションを実行して、[検索]をクリックします。
2. 添付を追加するローで、グリッドの左にあるボタンをクリックします。
3. 〈メディア・オブジェクト〉で、[テキスト]をクリックします。
4. ビューア・パネルでテキストを入力します。
ビューア・パネルの上部にあるフォーマット・ツールを使用すると、注テキストのフォーマットを調整できます。
5. [戻る]をクリックすると、アプリケーションに戻ります。

▶ テンプレートを使用してテキストを添付するには

1. グリッドのあるアプリケーションを実行して、[検索]をクリックします。
2. 添付を追加するローで、グリッドの左にあるボタンをクリックします。
3. 〈メディア・オブジェクト〉で、[テキスト]をクリックします。
システムにより、新しいブランクのテキスト・オブジェクトが作成されます。
4. [テンプレート]をクリックします。
5. 〈メディア・オブジェクト・テンプレートの処理〉で、[検索]をクリックしてグリッドを読み込みます。
6. 使用するテンプレートを選択して[選択]をクリックします。
テンプレートがメディア・オブジェクトのワークスペースに表示されます。
7. ビューア・パネルでテキストを入力します。
ビューア・パネルの上部にあるフォーマット・ツールを使用すると、注テキストのフォーマットを調整できます。
8. アプリケーションに戻るには、[戻る]をクリックします。

▶ イメージを添付するには

1. グリッドのあるアプリケーションを実行して、[検索]をクリックします。
2. 添付を追加するローで、グリッドの左にあるボタンをクリックします。
3. 〈メディア・オブジェクト〉で、[イメージ]をクリックします。
4. プルダウン・メニューから[イメージ]を選択します。
5. 添付するイメージをクリックします。
イメージをプレビューするには、[プレビュー]をクリックしてイメージをクリックします。
6. [追加]をクリックします。
7. アプリケーションに戻るには、[戻る]をクリックします。

▶ URL またはファイルを添付するには

1. グリッドのあるアプリケーションを実行して、[検索]をクリックします。
2. 添付を追加するローで、グリッドの左にあるボタンをクリックします。
3. 〈メディア・オブジェクト〉で、[URL/ファイル]をクリックします。
4. イメージ待ち行列に常駐しているファイルを添付するには、次の手順に従ってください。
 - a. [待ち行列]をクリックします。
 - b. プルダウン・メニューから[イメージ]を選択します。
 - c. 添付するファイルをクリックします。

ファイルをプレビューするには、[プレビュー]をクリックしてファイルをクリックします。
5. 別の場所にあるファイルまたは URL を添付するには、次の手順に従ってください。
 - a. [URL/ファイル]を選択します。
 - b. URL 名またはファイル名とロケーションを入力して、[参照]をクリックしてファイルを検索します。
 - c. ファイルをプレビューするには、[URL/ファイルのプレビュー]をクリックします。
6. [追加]をクリックします。
7. アプリケーションに戻るには、[戻る]をクリックします。

▶ OLE オブジェクトを添付するには

1. グリッドのあるアプリケーションを実行して、[検索]をクリックします。
2. 添付を追加するローで、グリッドの左にあるボタンをクリックします。
3. 〈メディア・オブジェクト〉で、[OLE]をクリックします。
4. 新規オブジェクトを作成するには、〈オブジェクトの挿入〉で[オブジェクトの種類]を1つを選択します。

ワークステーションまたはネットワークにインストールされている機能によって、システムごとに選択項目が異なります。
5. オブジェクトを作成します。
6. 既存のオブジェクトを添付するには、[ファイルから]を選択して、システムから添付するオブジェクトを検索して[OK]をクリックします。

添付オブジェクトを新規に作成するか既存のオブジェクトを添付するかによって、オブジェクトに関連付けられたアプリケーションがビューア・パネルに表示されるときに、ブランクのワークスペースが表示されるか既存のオブジェクトが表示されるかという違いがあります。

メニュー・バーには、埋め込まれたアプリケーションのメニュー・バーが表示されます。たとえば Excel ワークシートを選択する場合、メニュー・バーに Excel 用メニューが表示されます。
7. アプリケーションに戻るには、[戻る]をクリックします。

▶ 添付オブジェクトへのリンクを解除するには

注:

添付オブジェクトへのリンクを解除すると、添付オブジェクトはグリッドに表示されなくなります。ただし、添付オブジェクトへのリンクを解除しても、メディア・オブジェクトそのものは削除されません。

1. グリッドのあるアプリケーションを起動して、[検索]をクリックします。グリッドにはレコードが表示されます。
2. 拡大鏡とペーパークリップのあるボタンをクリックします。(ボタンはカラム見出しの左にあります。)

添付ファイルのあるレコードのローには、グリッドの左にペーパークリップが表示されます。

リフレッシュや検索、前のレコード・設定のビューに戻る場合は、そのつど添付を検索する必要があります。

3. ペーパークリップ・アイコンの付いたボタンをクリックして、ローに添付されたファイルを表示します。
4. メディア・オブジェクト・ビューアで、左カラムに表示されているオブジェクト・アイコンをクリックします。
5. [削除]をクリックします。
メディア・オブジェクトのアイコンが表示されなくなります。
6. [キャンセル]をクリックします。

アプリケーション・ユーザー・インターフェイス

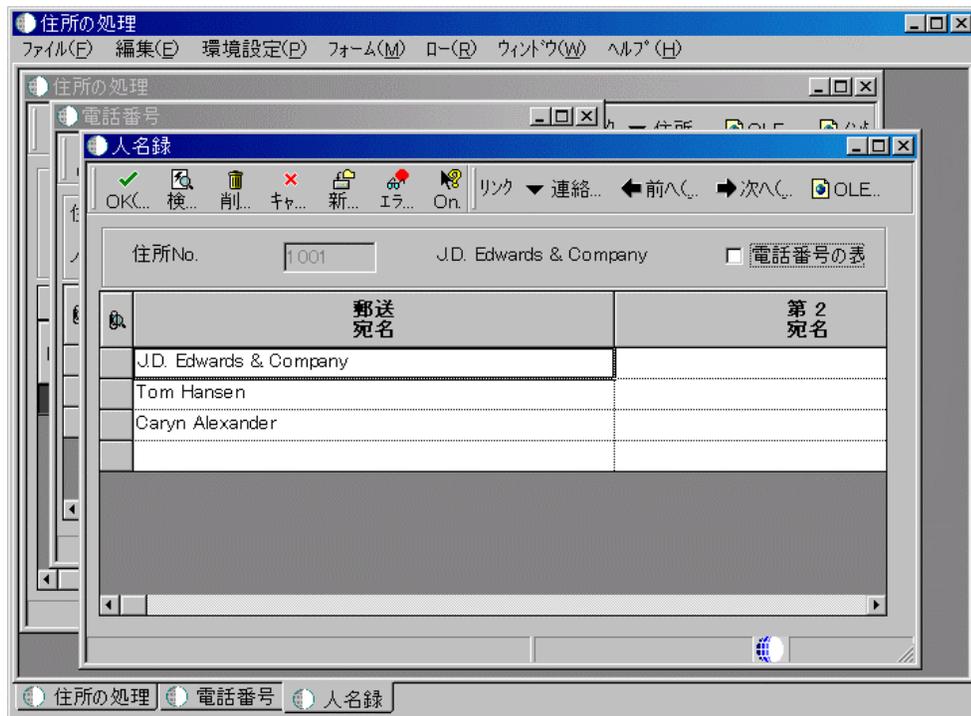
アプリケーション・ユーザー・インターフェイスには、次の機能が含まれています。

- ビジュアル・アシストは、フォーム上の特定フィールドの選択可能な値を表示します。
- エグジット・バーの各アイコンをクリックすると、メッセージ、メディア・オブジェクト、およびアプリケーションに関連付けられたフォームなど、システム内の他の領域にアクセスできます。
- オンライン・ヘルプでは、タスクを完了するための手順を説明しています。
- フォーム・タイプは各フォームの機能を表します。
- グリッドにはレコードが表示されます。

ユーザー・インターフェイスの理解

アプリケーションには、J.D. Edwards アプリケーション・フォームがあります。タスク・エクスプローラからアプリケーション・ワークスペースを開き、フォームを使ってアプリケーションにアクセスすることができます。アプリケーション・ワークスペースとは、アプリケーション内のすべての関連フォームが表示される領域のことです。

次の例では、フォームが開かれているアプリケーション・ワークスペースを示します。



特定のアプリケーションでは、モードレス処理機能を使用することができます。モードレス処理とは、フォームをマウスでクリックしてアプリケーション内の開いているフォームを移動できる機能のことです。たとえば、住所録システムで〈日次処理〉を選び、〈住所録の改訂〉を選択します。〈住所録の改訂〉をクリックすると、まず〈住所の処理〉が表示されます。そこでレコードをハイライトして[ロー]メニューから〈人名録〉を開くことができます。フォームをクリックするだけで、これらのフォーム間を移動することができます。また、アプリケーション・ワークスペースの最下部にタブが表示されます。タブをクリックするとそのフォームがアクティブになります。アプリケーションの複数のフォーム間を移動することで、業務に必要な各フォーム情報を表示することができます。

参照

- 「オフライン処理」

メニュー・バー

アプリケーション・ワークスペースに表示されるメニュー・バーは、使用中のフォームによって決まります。メニュー・バーにはプルダウンがあり、アプリケーションのオプションが表示されます。マウスまたはキーボードを使用して、表示されているメニューからメニューおよびオプションを選択してください。フォームのタイプによって、メニューとオプションが変わります。

メニュー・バーで使用できる機能と定義は次のとおりです。

ファイル	[ファイル]メニューから、レコードの[選択]、[追加]、[検索]、[削除]、[閉じる]などを選択できます。
編集	クリップボードの情報から[切り抜き]、[コピー]、[貼り付け]を行うことができます。
環境設定	[環境設定]メニューからエグジット・バーを選択して、外部オブジェクトの添付、フォーム表示のカスタマイズ、グリッドの変更などができます。
フォーム	[フォーム]メニューを使うと、現在のフォームに関連する別のフォームにアクセスできます。
ロー	グリッドで選択したローに固有な情報にアクセスできます。たとえば[ロー]メニューからオブジェクトの添付、表示を選択レコードに対して行います。
レポート	[レポート]メニューを使うと、アプリケーションに関連するレポートにアクセスできます。
ウィンドウ	アプリケーション内で開かれているフォームを表示します。
ヘルプ	[ヘルプ]メニューを使って、特定のアプリケーションのオンライン・ヘルプにアクセスできます。

ツールバー

ツールバーを使うと、頻繁に使用するコマンドにアクセスできます。ボタンの上にカーソルを移動させると、カーソルの下の黄色いボックスに簡単なヘルプ記述が、またフォームのステータス・バーに正式な記述が表示されます。

J.D. Edwards ソフトウェアには、すべてのフォームに対するツールバーの標準機能と表示フォーマットが備わっています。メニュー・バーの表示や機能性は、カスタマイズして各フォームのフォーマットを使いやすくすることもできます。ツールバーのボタンの使い方に慣れると、システムの操作が簡単になります。標準のツールバー・ボタンとその機能は次のとおりです。

Select	1 つまたは複数のレコードを選択し、対応するフォームを開きます。
検索	指定した検索条件に一致するデータベースの項目をすべて表示します。
Add	新規レコードを追加できる新規フォームを開きます。
コピー	表示フォームで[コピー]ボタンを使ってレコード全体をコピーする。すでにあるレコードに固有なものを除いて、すべてのフィールドを新規レコードにコピーします。 改訂フォームで[コピー]ボタンを使って、新規フォームに対するフィールドを選択します。その他のすべてのフィールドにはデータを入力する必要があります。新規フォームで、既存のレコードからコピーしたフィールドを修正することができます。
削除	表示フォームから、関連フォームのレコードをすべて、または一部の情報を削除する。 使用しているアプリケーションによっては、[削除]ボタンを押すと、関連情報も削除される場合があります。たとえば、住所録レコードを削除する場合、そのレコードの電話番号も削除されず。 子レコードの削除については、該当するアプリケーションのユーザーガイドを参照してください。
閉じる	フォームを閉じます。
OK	フォーム上にあるデータを使用します。
キャンセル	このフォームで行った追加、改訂、または削除を無視してフォームを閉じて前のフォームに戻ります。
J.D. Edwards 情報	[オンライン・サポート情報]で、現在のフォームについての情報(プログラムおよびフォーム ID など)が表示されます。ソフトウェアに問題がある場合、[カスタマー・サポート]ボタンをクリックするとフォームが表示され、問題の内容を入力して J.D. Edwards に送信することができます。このフォームでは、特定の問題について入力できます。

[リンク]ツールバーにはボタン・リストがあり、J.D. Edwards ソフトウェアおよびインターネットの他の領域にアクセスできます。下向き矢印は、ハイパー・ボタンになっており、この下向き矢印を押すと、メニュー・バーにあるオプションおよびインターネットへのリンクへアクセスが可能です。

ハイパー・ボタンの機能はフォームによって異なります。たとえば、データ入力フォームを開いたり、フォームを開いてオブジェクトをレコードへ添付することができます。

ハイパー・ボタンをクリックしたときに開くデフォルトのフォームは、下向き矢印を使用して前回アクセスしたものに変わります。この機能により、頻繁に使用するフォームへリンクするようにハイパー・ボタンを設定することができます。

エグジット・バー

エグジット・バーを使用すると、他のプログラムおよび現在のアプリケーション内のその他のフォームにもアクセスできます。エグジット・バーを使用すると、オンライン電卓、メッセージ処理およびインターネットにアクセスできます。また、表示しているフォームのショートカットを作成できます。エグジット・バーを有効/無効にするには、[環境設定]から[エグジット・バー]を選択します。

次のカテゴリがエグジット・バーに表示されます。

- ツール
- [環境設定]メニューから[ヘルプ]メニューまでの間に表示されるメニュー([ウィンドウ]のメニューを除く)

エグジット・バーにある[ロー]、[レポート]のようなカテゴリ・ボタンは、メニュー・バー上のメニューと同じです。対応するメニュー・バー項目が使用できる場合にだけエグジット・バーのアイコンが表示されます。エグジット・バーの[ツール]メニューは、メニュー・バーには表示されませんが、ハイパー・ボタン・ツールの下には同じ選択項目が表示されます。

[ツール]メニューにある標準ボタンは次のとおりです。

カレンダー	カレンダーが表示されます。日付を選択し、[OK]をクリックします。
電卓	計算用の電卓が表示されます。[電卓]でマウスかキーボードを使って計算を実行し、[OK]をクリックします。
Work Center	従業員ワーク・センターにアクセスします。従業員ワーク・センターは、J.D. Edwards 電子メールのメッセージに使用するアプリケーションです。
内部メール	〈内部メールの送信〉フォームが表示されます。このフォームを使って、社内の J.D. Edwards ソフトウェア・ユーザーにメッセージを送信できます。
外部メール	〈外部メールの送信〉フォームを表示します(外部メール用にメッセージの送信を設定している場合)。このフォームを使って、J.D. Edwards のソフトウェアを使用していないメール・ユーザーにメッセージを送信できます。
インターネット	インターネットにリンクします。インターネット・ブラウザが開きます。
ショートカットの作成	表示しているフォームのショートカットをデスクトップに作成します。たとえば、〈住所録の処理〉フォームで[ショートカットの作成]ボタンをクリックすると、ショートカットがデスクトップに作成されます。
ショートカットの送信	表示していたフォームのメッセージに添付されたショートカットと共に〈外部メールの送信〉フォームを表示します。社内の他の J.D. Edwards ソフトウェアのユーザーにショートカットを送信できます。

参照

- メッセージおよびワーク・センターについては「メッセージと待ち行列」

ポップアップ・メニュー

ポップアップ・メニューを使用すると、フォームの特定情報に直接アクセスできます。グリッドなどのフォームの特定エリアでマウスの右ボタンをクリックすると、そのエリアで使用可能なオプションのリストが表示されます。たとえば、グリッドをカスタマイズする場合、このメニューを表示してフォントや背景色などを変更することができます。

スクロール・バー

スクロール・バーは、表示されているフォームの範囲外にも情報が含まれる場合、フォームの右側または下側に表示されます。バーをスクロールするとさらに情報を表示できます。マウスを1度クリックすると1レコード分だけ上下に移動します。マウスをクリックしたままにすると、さらにレコードがスクロールされます。

スクロール・バーがスクロール・ボックスにある場合、フォームで表示可能な情報がどこにあるかが示されます。スクロール・ボックスをクリックしたままにするか、ボックス上で領域をクリックしてください。

ビジュアル・アシスト

ビジュアル・アシストをクリックすると、フィールドに対して事前定義されたリストが表示されます。[検索]ボタン、[電卓]ボタン、または[カレンダー]ボタンなどの使用可能な補足ツールにもアクセスするビジュアル・アシストもあります。これらのツールは、自動的に情報をフィールドに入力し処理します。電卓やカレンダーは[ツール]メニューから使用することもできます。

検索

特定のフィールドでは検索ボタンが使用できます。住所番号やユーザー定義コードをリスト表示することにより、特定項目の検索を簡単にします。このボタンにはアイコンが表示されます。

たとえば、請求書入力を行う場合があります。〈請求書入力〉フォームを使用する場合、顧客番号が不明だとします。この場合、[顧客番号]フィールドをクリックすると、ビジュアル・アシストが表示されます。このビジュアル・アシストをクリックすると、検索フォームが表示されて顧客の名前が検索できます。

電卓

計算用の電卓が表示されます。

カレンダー

カレンダーが表示されます。カレンダーを使用して特定の日付を選択できます。

ステータス・バー

ステータス・バーは、フォームの一番下に表示されます。このバーには J.D. Edwards ソフトウェア上の現在のロケーションに関する情報が表示されます。

次の情報がステータス・バーに記載されます。

- メニュー・オプションの記述
- レコード検索の状況および検索を停止するための[停止]ボタン
- エラー・メッセージ

オンライン・ヘルプ

オンライン・ヘルプを使うと、フィールドおよびフォームに関する情報を参照できます。また、フィールドやフォームの使い方についてのタスクの説明が表示されます。

ツールバーの[ヘルプ]ボタン、または[ヘルプ]メニューの次のオプションからヘルプにアクセスすることができます。

Contents J.D. Edwards ヘルプ・システムにアクセスします。ヘルプには J.D. Edwards ERP ガイドのすべての内容が含まれています。特定のトピックをすべてのガイドから検索することも、特定のガイドから検索することもできます。

エラーの表示 フォームに関する最初のエラー・メッセージまたは警告メッセージが表示されます。

次のエラー フォームに関する次のエラーに移動します。

J.D. Edwards 情報 プログラムおよびフォーム ID 情報を含めたメニューまたはフォームに関する情報が表示されます。ソフトウェアに問題がある場合、[カスタマー・サポート]ボタンをクリックするとフォームが表示され、問題の内容を入力して J.D. Edwards に送信することができます。このフォームでは、特定の問題について入力できます。

フィールド・レベル・ヘルプへのアクセス

フィールドレベルヘルプを使用して、フォーム内のフィールドに関する詳細記述を参照します。ここには、フィールドの定義や、フィールドに使用可能な値やフィールド長などの変数が説明されています。

▶ フィールド・レベル・ヘルプにアクセスするには

1. ヘルプを表示したいフィールドにカーソルを置きます。
2. 次のいずれかを実行します。
 - [F1]キーを押します。
 - マウスの右ボタンをクリックして、メニューから[ポップヒント]を選択します。
フィールドに関するヘルプがポップアップ・メニューに表示されます。
3. フォームをクリックするか、任意のキーを押してポップアップ・メニューを終了します。

エラー・メッセージ

システムで使用できない値を入力した場合、そのフィールドが赤い色でハイライトされ、ステータス・バーに次の項目が表示されます。

- エラーの記述
- このフォームに関するエラーおよび警告の番号

フォームにエラーまたは警告が1つ以上ある場合は、[F7]キーを押して次のエラーまたは警告へ移動することができます。フォームの最下部にあるステータス・バーに、エラーまたは警告が記述されます。エラー・メッセージ・ウィンドウへアクセスして、エラー・メッセージを検討することもできます。

▶ エラー・メッセージを検討するには

1. エラーが表示されている該当フォームで、次のいずれかを実行してください。
 - [ヘルプ]メニューから[エラーの表示]を選択します。
 - [F8]キーを押します。
 - ツールバーで[表示]ボタンをクリックします。
 - フォームの下にある赤いマークをクリックします。
2. フォームの下に表示されるエラー・メッセージ・ウィンドウでエラーを選んで、マウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューで[全記述]を選択します。

エラーの原因とその解決方法が表示されます。
3. デスクトップをクリックするか、任意のキーを押して記述を閉じます。
4. マウスの右ボタンをクリックして[詳細]を選択すると、エラー識別番号およびエラーによって影響がでる機能を検討できます。
5. <エラーおよび警告の詳細>で情報を検討した後、[閉じる]をクリックしてエラー・メッセージ情報を終了します。
6. エラー・メッセージ・ウィンドウを閉じるには、マウスの右ボタンをクリックして[閉じる]を選びます。

エラー・メッセージ・ウィンドウを閉じる前に、エラー時にビープ音を発するオーディオ・シグナルをオンにすることができます。
7. ビープ音をオンにするには、エラー・メッセージのウィンドウでマウスの右ボタンをクリックして、[エラー音]を選択します。

ポップアップ・ウィンドウで[エラー音]の横にチェックマークが表示されます。[エラー音]を再びクリックするとチェックマークが消えます。

▶ エラー・メッセージ・ウィンドウを変更するには

1. エラー・メッセージ・ウィンドウの少し上で、マウスの左ボタンをクリックしたままにします。

メッセージ・ウィンドウの周りにボックスが表示されます。
2. メッセージ・ウィンドウを適当な場所へ移動して、マウスのボタンを放します。

メッセージ・ウィンドウが ERP フォームから離れます。
3. カーソルをメッセージ・ウィンドウの端に置いて、サイズを調整します。カーソルが両方向矢印に変わると、ウィンドウのサイズ調整ができます。

ウィンドウが ERP フォームにアタッチしている場合も、サイズの調整は可能です。カーソルをウィンドウとフォームの間の黒いライン上に置きます。カーソルが両方向矢印に変わると、ウィンドウのサイズ調整ができます。

フォーム・タイプ

アプリケーションでは、さまざまなタイプのフォームを使用します。どのフォームからアプリケーションを使用する場合でもフォームの特徴は同じです。

検索/表示フォーム

検索/表示フォームは、すべてのアプリケーションへのエントリー・ポイントです。QBE を使用することにより、グリッドのどのフィールドを使っても検索が可能です。検索/表示フォームの標準タイトルは、「～の処理」です。[～]には、それぞれのビジネス・タスク固有の情報が示されます。検索/表示フォームでは、既存のレコードを追加、削除することはできません。

検索/表示フォームを使用して実行できる処理は、次のとおりです。

- グリッドでの複数レコードの検索、表示、および選択
- レコードを追加、変更、表示するためのフォームへの移動

次の例では、検索タイプを E(従業員)に指定してすべての名前を検索する検索/表示フォームを表示しています。

住所 No.	名称	詳細住所	産業分類
1001	J.D. Edwards & Company		
2006	Walters, Annette		
2049	McLind, Rod		
2111	Ingram, Paul		
2275	Nguyen, Daniel		
2428	Escalante, George		
2479	Ellis, Jody A.		
4800	Josephson, Michael		

検索/選択フォーム

検索/選択フォームは、値を検索してその値をフィールドに返します。グリッドには、データベース・テーブルに保管されている有効な値が表示されます。そのグリッドから値を選択して[選択]ボタンを押すと、値が自動的に呼び出した元のフィールドに返されます。たとえば、フィールドにユーザー定義コードを入力する場合、ビジュアル・アシストを使うと、ユーザー定義コードを表示する検索/選択フォームが表示されます。リストから項目を選択すると、その値がフィールドに返されます。このフォームに表示されるデータを編集することはできません。

次の例では検索/選択フォームを示しています。



見出し詳細フォーム/見出しなし詳細フォーム

〈見出し詳細〉フォームおよび〈見出しなし詳細〉フォームには、グリッド・エリア、[OK]ボタン、および[キャンセル]ボタンがあります。これらのフォームを使うと複数のレコードを変更できます。〈見出し詳細〉フォームには、2つのビジネス・ビューからの情報が含まれるため、より詳細な情報をフォームに表示できます。〈見出しなし詳細〉フォーム上のデータは1つのテーブルに存在しています。フォームの上部には、グリッドの全レコードに共通なデータが表示されます。

〈見出し詳細〉フォームおよび〈見出しなし詳細〉フォームを使用して実行できる処理は、次のとおりです。

- 複数レコードの表示
- レコードの参照
- レコードの追加

- レコードの変更
- レコードの削除

修正/検査フォーム

このフォームにはグリッドは含まれません。前のフォームでレコードを選択した場合、修正/検査フォームには、そのレコードに対するデータが表示されます。レコードを追加する場合、デフォルト値を除けば、修正/検査フォームには何も表示されません。

修正/検査フォームを使用して実行できる処理は、次のとおりです。

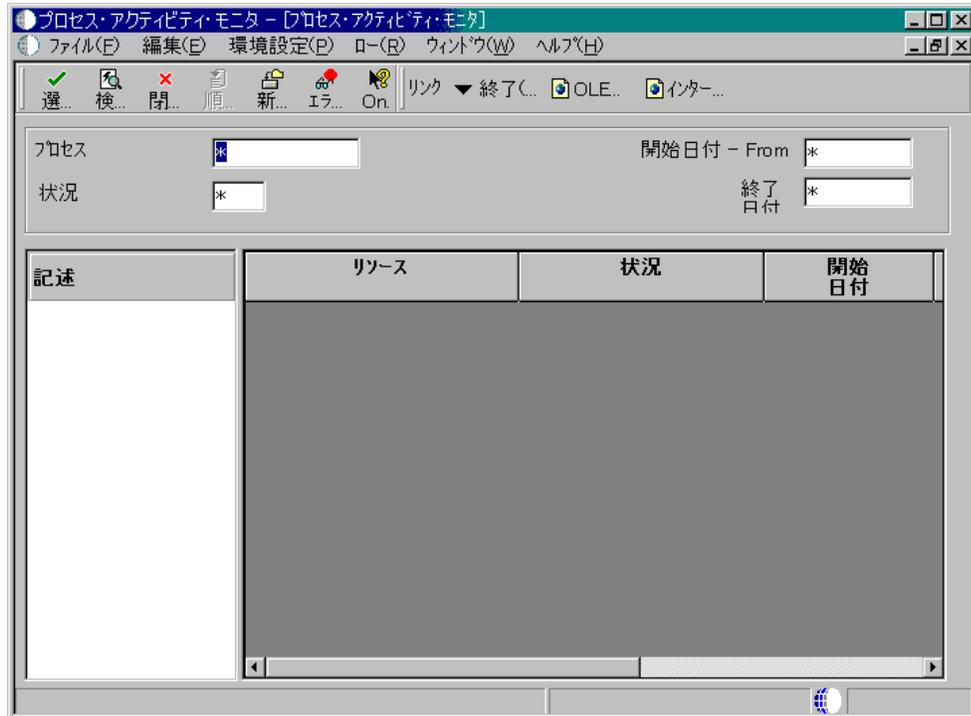
- (単一)レコードの表示
- レコードの追加
- レコードの変更

次のズは、修正/検査フォームの例です。

親/子フォーム

親/子フォームは、1つのフォームでアプリケーション内の住所の親/子関係を示すものです。フォーム左側には、リスト項目が表示されます。フォームの右側には、左側で選択された項目に関連した情報が表示されます。親/子フォームは、ドラッグ&ドロップ機能をサポートしています。このフォームには、[選択]ボタンと[閉じる]ボタンがあります。

次の図は、親/子フォームの例です。



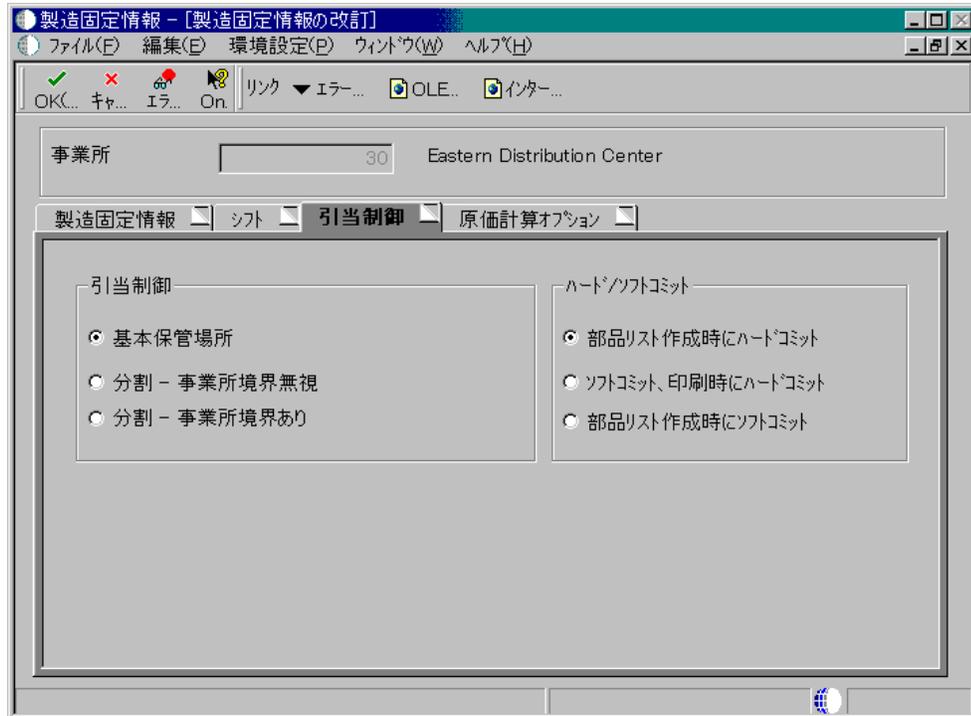
表示域の幅は変更することができます。

メッセージ・ボックス

メッセージ・ボックスには、J.D. Edwards での処理に関する情報が含まれています。たとえば、レコードを削除する場合、メッセージ・ボックスが表示され、オブジェクトの削除を確認します。メッセージ・ボックスにはシステムで発生するイベントの情報も含まれることがあります。

フォーム上のタブ

フォームにはタブ付きのものがあります。各タブではフィールドの論理グループが表示されます。使用するアプリケーションにグループ分けされるフィールドが多数あり、論理的にグループ分けされる場合に表示されます。タブでグループ分けされると、フィールドの検索と入力が簡単になります。詳しくは、使用するアプリケーションのガイドを参照してください。



タブ間を移動するには、次のいずれかを実行してください。

- タブ見出しをクリックするとそのフォームが前面に表示されます。
- カーソルがタブの見出しにある場合は、左および右の矢印キーを押してください。タブのフォームの最後のフィールドで[Tab]キーを押すと、タブの見出しに移動できます。
- [Ctrl]+[Tab]キーまたは[Ctrl]+[Shift]+[Tab]キーを押してください。

これらのタブは、J.D. Edwards エクスプローラや作成するグリッド・フォーマットとは別です。

参照

- J.D. Edwards Solution Explorer タブについては「タブの作成」
- グリッドのフォーマットについては「フォーマットの作成」

アプリケーション・ユーザー・インターフェイスの処理

J.D. Edwards ERP 機能を使用して、ユーザー独自のインターフェイスを作成したり、処理したりすることができます。さらに、エグジット・バーやオンライン電卓などの追加機能を使用すると、日々の業務に必要な処理を簡潔にすることができます。

ツールバーの表示変更

[リンク]ツールバーを移動して、ツールバーを広げたり、メイン・ツールバーの下に表示することができます。

▶ ツールバーの表示を変更するには

1. フォーム内のツールバーで、[リンク]にカーソルを置いてマウスの左ボタンをクリックしたままにします。
2. 次のいずれかを実行します。
 - カーソルを左右のどちらかに移動させ、リンク・セクションの表示幅を調整する。
 - カーソルを下向きに移動させ、ツールバー・ボタンの下にリンク・セクションの全体を表示させる。

メニュー・バーとツールバーのカスタマイズ

メニュー・バーおよびツールバーをカスタマイズして、各フォームの外観とパフォーマンスを修正できます。ツールバーをカスタマイズすると、ヒント・ボックスとステータス・バーのヘルプ・ボックスにヘルプ・メッセージが表示されます。このヘルプ・メッセージは実際のフォームでボタンに対して表示されます。ボタン・ボックスでは、各カテゴリについて使用可能なボタンを表示します。

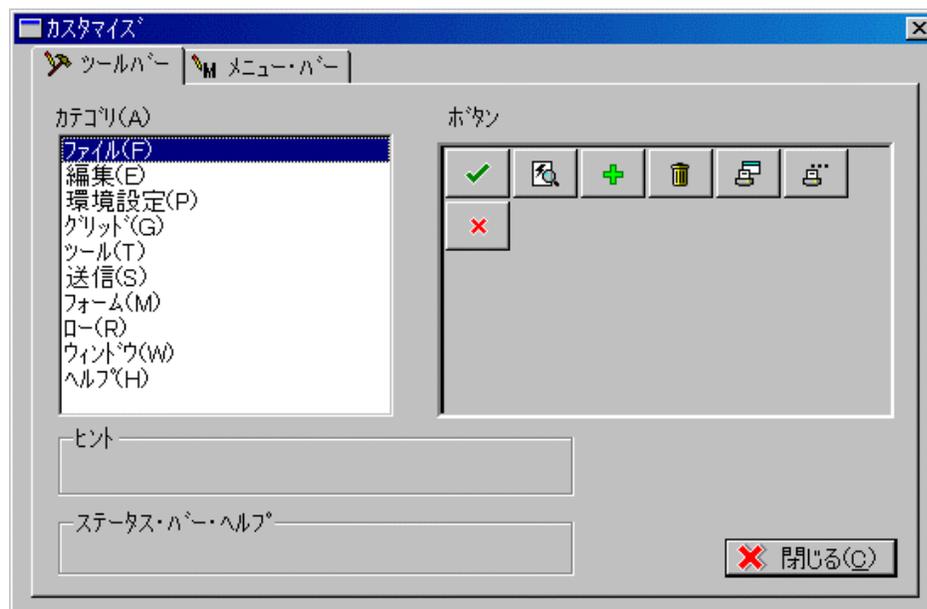
メニューとツールバーをカスタマイズする場合には、次の制約があります。

- 複数のメニューまたはツールバーの追加はできない。
- フォーム・レベルでのメニュー・オプションおよびツールバー項目の削除はできるが、システムからは既存のメニューまたはツールバーを削除できない。
- メニューには既存の項目を重複して作成できない。

〈カスタマイズ〉フォームに記号(&)が付いている場合、その記号の後に続く文字は、メニュー・バー・コマンドのアクセラレータ・キーを示します。

▶ ツールバーをカスタマイズするには

1. ツールバーのあるフォームで[環境設定]メニューから[カスタマイズ]を選択します。
2. 〈カスタマイズ〉で、[ツールバー]タブをクリックします。



3. [カスタマイズ]の[カテゴリ]リストからカテゴリを選択します。
4. [ボタン]ボックスから項目をクリックし、ツールバーにドラッグします。
5. ツールバーからボタンを削除するには、ボタンをクリックして[カスタマイズ]の[ボタン]フィールドにドラッグします。

▶ メニュー・バーをカスタマイズするには

1. ツールバーのあるフォームで、[環境設定]メニューから[カスタマイズ]を選択します。



2. [カスタマイズ]で、[メニュー・バー]をクリックします。
3. [カテゴリ]リストで項目に追加するメニューを選択します。
[メニュー項目]リストには使用可能な項目および区切りバーが表示されます。フォームの右側のリストに現在のメニュー項目が示されます。
4. [メニュー項目]リストで追加する項目を選択します。
5. 右側のリスト・ボックスで項目を選択すると、その下に新規項目が表示されます。項目を選択しない場合は、新規項目はリストの一番下に表示されます。
6. 右矢印ボタンをクリックして、ユーザーのメニュー項目を追加します。
選択済みの項目は、右側のリストのハイライトされた項目の下に表示されます。文字の前の記号(&)はアクセラレータ・キーを示します。新規メニュー項目の上にくる現在のメニュー項目を選択していない場合、デフォルトでは新規メニュー項目は、現在のメニュー項目のリストの最後に追加されます。
7. リスト項目を削除するには、右側のリストの項目を選択して左向きの矢印をクリックします。
8. [閉じる]をクリックし、変更を確認します。

モードレス処理

アプリケーションによっては、複数フォームを開いてそのフォーム間を移動し、情報交換することができます。たとえば住所録システムでは、〈住所の処理〉フォームから〈電話番号〉および〈人名録〉フォームを開き、同時に3つのフォームを表示させることができます。別のフォームの情報を参照しながら各フォームの情報を確認することもできます。[ウインドウ]メニューでは、ユーザーのフォーム表示をカスタマイズできます。

▶ フォーム間を移動するには

モードレス処理をサポートしているフォームで複数のフォームを開き、次のいずれかを実行します。

- タブをクリックして、そのフォームを前面に表示する。
- [ウインドウ]メニューからフォーム名を選択して、そのフォームを前面に表示させる。
- 部分的に隠れているフォームをクリックして、すべて表示させる。

▶ フォームを整列するには

1. モードレス処理をサポートしているフォームで、[ウインドウ]メニューから次のいずれかを選択します。
 - 重ねて表示
 - 左右に並べて表示
 - 上下に並べて表示
2. カーソルが両方向矢印になるまで、フォームの端から端までカーソルを移動させます。
3. マウスの左ボタンをクリックしたままカーソルを移動させて、幅を調整します。

エグジット・バーの処理

エグジット・バーを表示させると、アプリケーション内のその他のフォーム、他のアプリケーション、オンライン・カレンダー、電卓、メッセージ、インターネットなどに簡単にアクセスできます。最初は、エグジット・バーが親ウインドウの左側に表示されますが、バーを右側に移動したり、フォームからバーを分離することができます。バーを分離するとフォームをいったん終了して再び開いたときに、エグジット・バーはフォーム左側のデフォルト位置に表示されます。エグジット・バーはサイズを変更することもできます。サインオフしても、エグジット・バーの表示/非表示の設定は保存されます。

アプリケーションで現在使用しているアプリケーションに応じて、[環境設定]メニューと[ヘルプ]メニューの間に表示されるツールバーやメニューを表示できます。[フォーム]メニューまたは[ロー]メニューがアクティブなフォームでメニューに表示されない限り、オプションはフォーム・バーやロー・バーには表示されません。

▶ エグジット・バーを表示するには

[環境設定]メニューから[エグジット・バー]を選択してください。

▶ エグジット・バーを移動するには

1. エグジット・バーの境界をクリックしたままにします。
2. 次のいずれかを実行します。
 - ボックスをフォームの右側に移動させます。
 - ボックスをフォームの左側に移動させます。

▶ エグジット・バーを分離させるには

エグジット・バーのあるアプリケーションで、次のいずれかを実行します。

- エグジット・バーの上の境界をダブルクリックします。
- エグジット・バーの上の境界をクリックしたまま、エグジット・バー(グレーのボックス)をフォームの中心に移動させます。

▶ エグジット・バーのサイズを変更するには

1. カーソルが両方向矢印になるまで、エグジット・バーの右端までカーソルを移動させます。
2. クリックし、広げたい幅まで枠線をドラッグします。

▶ エグジット・バーを使って機能またはアプリケーションを開くには

1. エグジット・バーで表示するバーのカテゴリ(ツールなど)をクリックします。
2. アクティブなエグジット・バーで、該当する機能またはアプリケーションのボタンをクリックします。

ビジュアル・アシストの処理

J.D. Edwards ソフトウェアにはタスクを完了するのに役立つルールがあります。たとえば、オンライン電卓にアクセスして計算結果を数値フィールドに反映させたり、オンライン・カレンダーに特定日付を入力してアクセスできます。レコードでフィールド特定値を入力する場合は、ビジュアル・アシストを使用してフィールドに対する有効値を指定することができます。

▶ 電卓を使用するには

キーボードで電卓を操作する前に[Num Lock]キーをオンにします。

1. 計算が必要な数値フィールド付きのフォームで、そのフィールドをクリックします。
2. [電卓]ボタンをクリックします。
3. [電卓]で、マウスかキーボードを使って計算します。
テンキーを使用する場合、[Num Lock]をオンにしてください。
4. [OK]をクリックします。
計算結果が選択フィールドに入力されます。

▶ **カレンダーを使用するには**

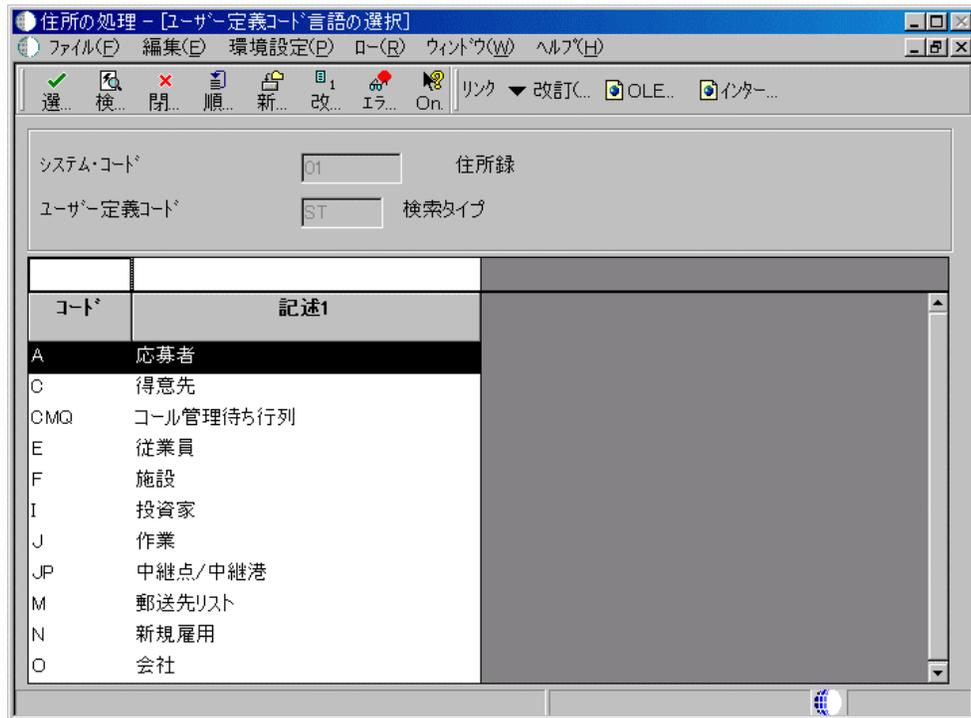
1. 日付フィールド付きフォームで、そのフィールドをクリックします。
2. [カレンダー]ボタンをクリックします。
3. [カレンダー]で、ドロップ・ダウン・リストから年と月を選択します。
4. カレンダーで日付をクリックし、[OK]を押します。
選択フィールドに日付が表示されます。

▶ **ビジュアル・アシストを使用するには**

1. フォームでフィールドをクリックして、ビジュアル・アシスト・ボタンが表示されたら、そのボタンをクリックします。

次のいずれかの1つが表示されます。

- ユーザー定義コード・フォーム



- レコード検索フォーム



- バージョンを選んで[選択]をクリックします。
前のフォームで選択された内容が表示されます。

▶ **見出しフィールドでビジュアル・アシストにアクセスするには**

- ビジュアル・アシストにアクセスするフィールドで、マウスの右ボタンをクリックします。
- ポップアップ・メニューから[ビジュアル・アシスト]を選びます。
該当するビジュアル・アシストが表示されます。

▶ **グリッドでビジュアル・アシストにアクセスするには**

- ビジュアル・アシストにアクセスするフィールドでクリックし、マウスの右ボタンをクリックします。
- ポップアップ・メニューから[セル] - [ビジュアル・アシスト]を選びます。
該当するビジュアル・アシストが表示されます。

グリッドの処理

グリッドは、カラムの情報タイプを定義する記述カラム見出し、カラム、ローおよびロー見出しから構成されます。各ローは1つのレコードを示します。グリッドは次のようにカスタマイズできます。

- 複数のビューを作成して、ローやカラムのフォーマットを変更する。
- フォントのプロパティを変更する。
- カラーのプロパティを変更する。
- 同時に多くの情報を表示させるためにグリッドを分離または拡大させる。
- グリッドの倍率を調整する。
- 特定のカラムまたはローを固定させ、グリッド内をスクロールしてもそのカラムやローは残るようにする。

グリッドをカスタマイズしたら、フォーマットを作成して、ユーザーIDに基づいた変更を保存できます。このフォーマットは、システムにサインオンするたびにロードされます。

グリッドは Windows 上の表計算シートやワード・プロセッシング・アプリケーションへエクスポートすることができます。逆に、J.D. Edwards ERP アプリケーションのグリッドへ表計算ソフトからデータをインポートすることもできます。

グリッド内容は印刷もできます。

グリッド・フォーマットの処理

グリッドのフォーマットを作成すると、ソート順序、フォント、色、倍率などの変更を保存できます。たとえば、複数のフォーマットを作成、保存して、同じグリッドを表示方法を変えて表示できます。新しく作成したフォーマットの最上部にタブが表示されます。複数のフォーマットがある場合、タブをクリックするとビューを切り替えられます。

フォーマットを作成すると、名前を変更したりシステムから削除したりできます。ユーザーIDを入力する時点で、ワークステーションでのセッションに対してカスタム・フォーマットがロードされます。さらに、作成したグリッド・フォーマットからチャートやグラフを作成することもできます。

▶ グリッド・フォーマットを作成するには

注:

デフォルトのフォーマットを再び使用するには、新規フォーマットを保存する前に変更前のグリッドを保存しておきます。変更前に保存しなかった場合は、新規フォーマットを削除し、アプリケーションを終了してアプリケーションに再びアクセスすると、デフォルトのグリッドが表示されます。

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[フォーマット] - [新規フォーマット]を選びます。
3. [新規フォーマット]で、フォーマット名を入力します。

システムから割り当てられた名前を使用することも、自分で別の名前を割り当てることもできます。

4. フォーマット・タイプで[グリッド・フォーマット]を選択し、[OK]をクリックします。
5. グリッドのビューを表示するには、そのグリッドのタブをクリックします。

▶ グリッド・フォーマット名を変更するには

1. グリッドの(フォーマット)タブ付きのフォームで、(フォーマット)タブを選択します。
2. グリッドでマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
3. ポップアップ・メニューから[フォーマット] - [フォーマット名の変更]を選びます。
4. [フォーマット名の変更]でフォーマット名を変更し、[OK]をクリックします。

▶ グリッド・フォーマットを削除するには

1. グリッドの(フォーマット)タブ付きのフォームで、(フォーマット)タブを選択します。
2. グリッドでマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
3. ポップアップ・メニューから[フォーマット] - [フォーマットの削除]を選びます。
フォーマットのタブが削除されます。

グリッドのフォーマットのカスタマイズ

グリッドのフォーマットを設定してカラムとローの順番をカスタマイズできます。カスタマイズには、カラムの並び替えまたは別のキーによるローのソートなどがあります。たとえば、頻繁に使用するカラムを後ろから前面に移動することができます。カラムとローのサイズを変更して表示する情報幅を変えたり、新しいソート基準を使ってリストのレコードを表示したりできます。グリッド上では、どのカラムでもレコードのソートに使用できます。各フォーマットにはフォーマットに固有のソート順序がサポートされます。

自動リターン機能を使用すると、グリッドのカラムを確定し、タブを使用してセルから出るときに、次のローの最初のセルに自動的に移動することができます。

▶ グリッド・カラムを再設定するには

1. 移動させるカラム見出し上で、マウスの左ボタンをクリックしたままにします。
カーソルが、両方向矢印のカラムになります。
2. カラムを新しい位置に移動します。
3. マウスボタンを放します。
カラムは、マウス・ボタンを放したカラムの横に移動します。

▶ グリッドのソート順序を変更するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[グリッド] - [順序]を選びます。

3. <グリッド・ローのソート順選択>で、次のいずれかの方法でソート順序を変更します。
 - [使用可能なカラム]リストでカラムを選び、フォームの下にある右矢印ボタンをクリックします。
[ソートされたカラム]リストによってレコード順序が表示されます。
 - すべてのカラムをソートする場合は、フォームの一番下にある 2 重右矢印をクリックしてください。
 - ソートに使用するカラム指定を削除するには、[ソートされたカラム]リストからカラムを選択し、左矢印ボタンをクリックします。すべてのカラムを削除するには 2 重左矢印をクリックしてください。
[使用可能なカラム]のリストが表示されます。
4. カラムのソート順序を変更するには、[ソートされたカラム]でカラムを選択し、次のいずれかのボタンをクリックしてください。
 - ローを上に移動
ソート順序で一度に 1 カラム分上に移動する
 - ローを下に移動
ソート順序で一度に 1 カラム分下に移動する
 - 最上部に移動
ソート順序の一番上にカラムを移動する
 - 最下部に移動
ソート順序の一番下にカラムを移動する
5. カラムでレコードの表示を変更するには、[ソートされたカラム]リストで、各カラムの右にある[A/D]フィールドをクリックします。
 - A
レコードが昇順で表示されます。
 - D
レコードが降順で表示されます。
6. [OK]をクリックします。
グリッドが変更されます。

▶ **グリッド・カラムのサイズを変更するには**

1. 調整するカラムの右端にカーソルを移動します。
カーソルは、上下矢印に変わります。
2. 右端をドラッグしてカラム幅を調整します。
3. マウスボタンを放します。

▶ グリッド・ローのサイズを変更するには

注:

サイズを変更できるのは、グリッド・ロー見出しのあるローだけです。ロー見出しとは、添付を示すペーパー・クリップ・アイコンが表示される、グリッドの左側の部分のことです。

1. グリッド・ロー見出し(最初のカラムの左側部分)の2つのローの間で、クリックしたままにします。
カーソルは、上下矢印に変わります。
2. クリックし、上端をドラッグしてロー幅を調整します。
3. マウスボタンを放します。

次のアイコンが、ロー見出しカラムに表示され、改訂フォームに特定の情報が表示されます。

ロック(鍵) 最初のカラムの上にロックが表示されている場合は、保護フィールド内にあることを示します。このフィールドの情報は変更できません。

ペーパークリップ ペーパークリップは、レコードへの添付ファイルとしてのメディア・オブジェクトがあることを示しています。
ペーパークリップは、添付ファイルをチェックする場合、添付ファイルのあるレコードの横にだけ表示されます。

参照

- テキスト、イメージ、OLE オブジェクトの追加およびレコードへのショートカットの作成については「メディア・オブジェクト」

▶ グリッドの自動リターンを設定するには

注:

自動リターン機能を使用すると、グリッドのカラムを確定し、タブを使用してセルから出るときに、次のローの最初のセルに自動的に移動することができます。たとえば、類似する情報を大量に入力するが使わないカラムには入力しない場合には、カラムを並び替えることができます。[自動リターン]を最後のカラムに設定して情報を入力して、カラムのセルからタブを使用し、自動的に次のローの先頭に移動できます。[自動リターン]は、入力可能なグリッドのみに設定します。

1. 最後のカラムとして設定するカラム内のセルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[カラム] - [自動リターン]を選びます。
カラムの右端に色付きの線が表示されたら、カラムに[自動リターン]が設定されています。タブを使用してカラムから出る場合は、カーソルは常に次のローの最初のセルに移動します。

3. [自動リターン]を削除するには、自動リターンを設定するカラムでこの処理を繰り返します。
色付きの線が表示されなくなり、グリッドに対する自動リターンの設定が解除されます。

グリッドの外観の変更

グリッドの色とフォントはカスタマイズできます。たとえば、特定の情報をハイライトしたり、目的に応じて調整したりすることができます。グリッドは、倍率を変更して同時に表示するロー数を増やしたり、重要な情報だけを表示することもできます。

▶ グリッドのフォントを変更するには

注:

フォントは、個々のカラムやグリッド全体で変更することができます。

1. フォントを変更するカラムで右クリックし、ポップアップメニューを表示します。
グリッド全体のフォントを変更する場合は、グリッド内であればカーソルがどこにあっても変更できます。
2. ポップアップ・メニューから次のいずれかを実行します。
 - [カラム] - [フォント]を選び、カラムのフォントを変更します。
 - [グリッド] - [フォント]を選び、カラムのフォントを変更します。タイトルのフォントを変更するには、カーソルはカラム・タイトル上にある必要があります。
3. [フォント]で、フォントの種類、スタイル、サイズ、色、および効果などの属性を選択します。
4. [OK]をクリックします。

▶ グリッドの背景色を変更するには

注:

背景色は、個々のカラムやグリッド全体で変更できます。

1. 背景色を変更するカラムで右クリックし、ポップアップメニューを表示します。
グリッド全体の背景色を変更する場合は、グリッド内であればカーソルがどこにあっても変更できます。
2. ポップアップ・メニューから次のいずれかを実行します。
 - [カラム] - [カラー]を選んで、カラムの色を変更します。
 - [カラム] - [カラー]を選んで、グリッドの色を変更します。
3. [色]で色を選択して、[OK]をクリックします。

▶ グリッドの倍率を変更するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[グリッド] - [ズーム]を選びます。
3. [ズーム]で、倍率ボックスから事前設定の倍率の中から選択するか、次のフィールドに情報を入力します。
 - カスタム
4. [OK]をクリックします。

カラムおよびローの固定

カラムおよびローを固定すると、特定のカラムやローをある位置にロックして、長いリストをスクロールしても情報が常に見えます。カラム見出しだけを固定して、実際のレコードは固定しないでおくこともできます。固定した部分は濃い赤色で表示されます。

▶ カラムおよびローを固定するには

注:

ローを固定すると、そのローの上側にあるすべてのカラムとロー、およびカラムの左側にあるすべてのカラムが固定されます。線が表示されてその領域が固定されたことを示します。また、グリッド中のカラム見出しに対して次のタスクを実行して、カラムだけを固定することもできます。ただし、ローを固定するには、少なくともカラムを1つは固定する必要があります。

1. グリッド付きフォームで、固定するカラムとローで右クリックし、ポップアップメニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[カラム]を選択し、[固定/解除]を選びます。
固定したカラムの右側とローの下側に赤い線が表示されます。
3. 変更を確認するには、右側や下へスクロールします。
固定したカラムとローが表示されている状態になります。

▶ カラムおよびローを解除するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[カラム]を選択し、[固定/解除]を選びます。
赤色の線は表示されなくなります。
3. 右側にスクロールさせてテストします。
スクロールすると、今まで固定させていたカラムが左方向に移動していきます。

グリッドの最大化

グリッドは親ウィンドウの中で最大化することができます。メニュー・バーとツールバーはグリッドの上側にそのまま残ります。グリッドのサイズを復元するとフォームはデフォルトの外観に戻ります。

▶ グリッドを最大化するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[グリッド] - [最大化/復元]を選びます。
親ウィンドウの中でグリッドが最大化されます。
3. さらにグリッドを広く表示できるようにするには、親ウィンドウそのものを最大化するか、サイズを変更します。

▶ グリッドを復元するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[グリッド] - [最大化/復元]を選びます。
フォームはデフォルトの設定に復元されます。

フォームを閉じて再び開いたときにも、フォームはデフォルトの設定に戻ります。

グリッドからのデータのエキスポート

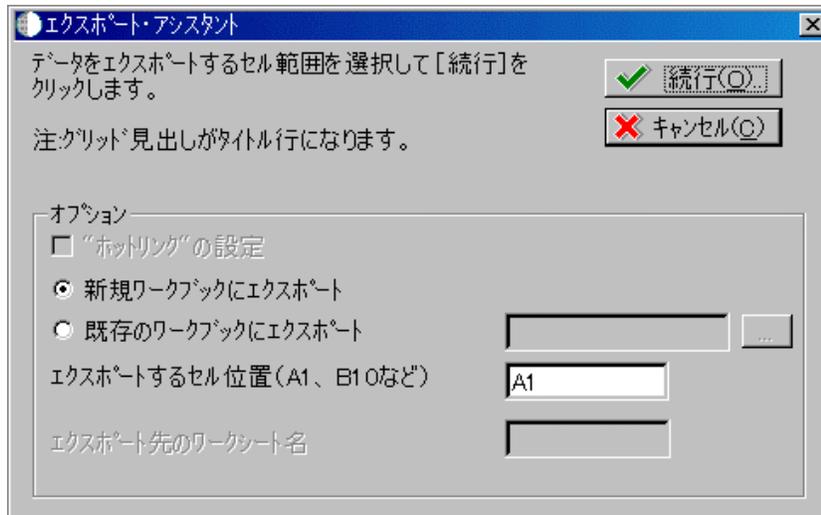
グリッドの内容は、サードパーティ(他社)製の表計算ソフトやワープロ・アプリケーションにエキスポートできます。また、アプリケーション間のホットリンクを作成することもできます。ホットリンクを使用すると、接続した2つのアプリケーションでデータを同時に更新できます。サードパーティ製の表計算ソフト中のデータを更新すると、J.D. Edwards ERP のグリッドのデータも更新されます。J.D. Edwards ERP のグリッドを使って情報が入力できない場合は、ホットリンクは作成できません。

J.D. Edwards ERP には、サードパーティ製のアプリケーションがユーザーのワークステーションにインストールされていなくてもそのメニューは表示されているので注意してください。インストールされていないサードパーティ製のアプリケーションにデータをエキスポートしようとすると、エラー・メッセージが表示され、そのアプリケーションがそのワークステーションで使用できないことを示します。

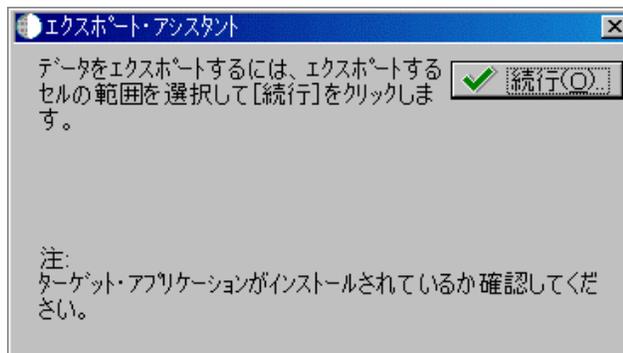
▶ グリッドからデータをエキスポートするには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[エキスポート]を選択し、サードパーティ(他社)アプリケーションを選びます。

スプレッドシートを選択すると、次の〈エキスポート・アシスタント〉フォームが表示されます。



エクスポートする先のワード・プロセッシング・アプリケーションを選択すると(エクスポート・アシスタント)が表示されます。



3. 必要に応じて次の処理を行ってください。
 - J.D. Edwards ERP のグリッドを使って入力できないときは、ホットリンク・チェックボックスが使用できない場合を除いて、サードパーティ製のスプレッドシートにホットリンクを作成してください。そうでない場合は、ホットリンクのチェックボックスが無効になります。
 - 新しいワークシートへのエクスポート
 - 既存のワークシートへのエクスポート
 - エクスポートするワークシート名の指定
 - スプレッドシート・セル住所フィールドの指定
4. グリッドで、エクスポートするセルの範囲を選択します。
5. [続行]をクリックしてアプリケーションを開始し、選択したデータをエクスポートします。

データのグリッドへのインポート

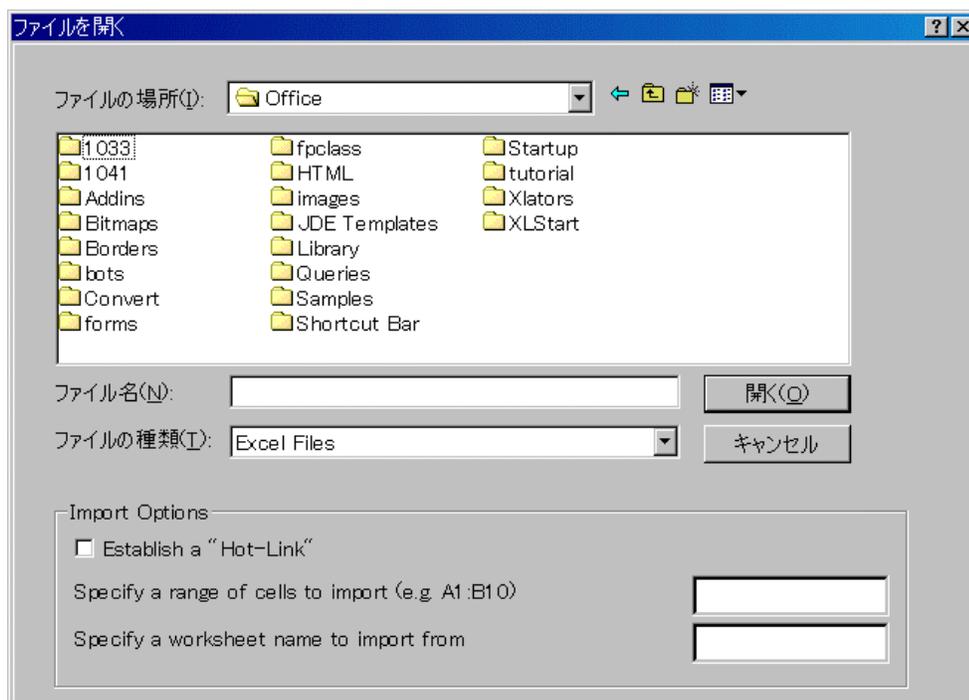
サードパーティ製の表計算ソフトから J.D. Edwards ERP のグリッドにデータをインポートすることもできます。また、アプリケーション間のホットリンクを作成することもできます。ホットリンクを使用すると、接続した 2 つのアプリケーションでデータを同時に更新できます。サードパーティ製の表計算ソフト中のデータを更新すると、J.D. Edwards ERP のグリッドのデータも更新されます。

J.D. Edwards ERP には、サードパーティ製のアプリケーションがユーザーのワークステーションにインストールされていなくてもそのメニューは表示されているので注意してください。サードパーティ製アプリケーションにデータをインポートしようとする、エラー・メッセージが表示され、そのアプリケーションがそのワークステーションで使用できないことを示します。

サードパーティ製の製品からグリッドへインポートする場合は、インポートするセルの範囲を指定する必要があります。範囲を指定する場合は、Ax:Bx というように指定します。たとえば、D3 から G6 までの範囲のセルをインポートする場合は、“D3:G6”とタイプします。

▶ データをグリッドにインポートするには

1. グリッドのあるフォームで、マウスの右ボタンをクリックしてポップアップ・メニューを表示します。
2. [インポート]メニューからサードパーティ(他社)アプリケーションを選択します。



3. [ファイルを開く]で次の処理を行ってください。
 - ファイル名の指定
 - インポートするセル位置の指定
 - インポートする先のファイル名の指定

4. 必要に応じて次の処理を行ってください。
 - ファイルの種類
 - “ホットリンク”の設定
5. [開く]をクリックしてデータを J.D. Edwards ERP のグリッドへ送ります。
ロックされたセルにはインポートしたデータを使用できません。

グリッドの印刷

グリッド内容は直接プリンタに印刷することができます。複数のローを選択できるフォームでセル範囲を指定します。印刷時には余白も調整できます。

▶ グリッドを印刷するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックして、ポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[グリッド] - [印刷]を選びます。



3. [ページ・セットアップ]ダイアログボックスで、[タイトルとグリッドライン]にある次のいずれかのオプションを選択します。
 - ロー見出し
 - カラム見出し
 - 印刷枠
 - 垂直線
 - 水平線
 - 白黒のみ

[プレビュー]には、選択したオプションが表示されます。

4. [ページ順序]で、次のいずれかのオプションを選択してください。
 - ロー、カラムの順
 - カラム、ローの順
5. [ページ中央]で、次のいずれかのオプションを選択してください。
 - 縦
 - 横
6. 必要に応じて次のタスクを実行します。
 - [プロファイルに設定を保存]を選択すると、後の印刷ジョブ用に設定を保存できます。
 - [マージン]に値を入力すると、ページ余白が調整されます。
7. Click OK.

グリッドでのチャートやグラフの作成

フォームのグリッドには、チャートやグラフを作成してグラフィック・データのように表示することができます。異なるデータ・タイプを選択し、特定の項目どうしの相違点や関連性を表示できます。

はじめる前に

- グリッドのカスタム・フォーマットを作成してください。「グリッド・フォーマットの処理」を参照してください。

▶ グリッドでチャートやグラフを作成するには

1. グリッド上でマウスの右ボタンをクリックしてポップアップ・メニューを表示します。
2. ポップアップ・メニューから[フォーマット] - [新規フォーマット]を選びます。
3. フォーマットの名称を入力します。
4. タイプに[グラフ・フォーマット]を選択し、[OK]をクリックします。

作成した各フォーマットに対してグリッドの最上部にタブが表示されます。グラフのタブにはアイコンが含まれています。

〈グラフ・アシスタント〉フォームが表示されます。

5. グリッドで、データとしてグラフに使うセル範囲を選択します。
最初のカラムのロー・データは、X 軸または Y 軸のラベル付けに使用してください。
6. 〈グラフ・アシスタント〉で、[続行]をクリックしてグラフを作成します。
グラフが表示されます。

グリッドでのチャートやグラフのカスタマイズ

チャートやグラフを作成したら、テキストをわかりやすいようにカスタマイズできます。ただし、レコード・フィールドのラベル名を変更することはできません。このラベル情報は、グラフ処理機能が作成するのではなく、システムによってグリッド・レコードから直接コピーされます。

▶ グリッドでチャートやグラフをカスタマイズするには

1. グラフで右クリックして表示されたメニューから、次のグラフ・タイプのいずれかを選びます。
 - 3D 棒グラフ
 - 縦棒グラフ
 - 積上げ棒グラフ
 - 3D 面グラフ
 - 面グラフ
 - 層グラフ
 - 3D 円グラフ
 - 円グラフ
 - 線グラフ

ユーザー一時変更

〈ユーザー一時変更〉プログラム (P98950) を使用すると、アプリケーションの外観を変更してビジネスの目的に合うようにカスタマイズできます。ユーザー一時変更の中には、OLE (Object Linking and Embedding) をフォームに添付するなど、ソフトウェアをアップグレードしても影響のないものがあります。これは、使用しているユーザー一時変更が新しいリリースにマージされるためです。その他のユーザー一時変更には、グリッドやツールバーのフォーマットなど、リリースが新しくなった場合にユーザー一時変更をそのまま継続して使用するか削除するか、選択できるものもあります。

ユーザー一時変更の理解

ユーザー一時変更で変更されるのはアプリケーションの外観だけです。アプリケーションの機能には影響ありません。一時変更はユーザーID 別、グループ ID 別、またはキーワード (*PUBLIC) 別に設定できます。一時変更をユーザーID 別に設定すると、ワークステーションにサインオンするときに、設定されたユーザーにのみ有効となります。グループ ID 別に設定すると、ユーザー・プロファイルでそのグループのメンバーとして設定されたユーザーにのみ有効となります。*PUBLIC 別に設定すると、すべてのユーザーに有効となります。グループ ID または *PUBLIC に設定すると、各ユーザーの一時変更はサインオンしたワークステーションにかかわらず、有効となります。このように、グループまたは *PUBLIC で一時変更しても、各ユーザーはそれぞれの目的に応じてカスタマイズすることができます。たとえば、ユーザーはフォームでテキストを検索する場合、大きなフォントにして検索しやすくすることができます。このような変更は他のユーザーに影響を与えません。

システムでは、このような変更はユーザー一時変更テーブル (F98950) に保存されます。システムは、一時変更をユーザーID 別またはグループ ID 別にトラッキングするため、変更内容はどのワークステーションにサインオンしていても反映されます。ユーザー一時変更を使用すると次のような変更が可能です。

- グリッド順序の再設定
- ローおよびカラムのソート順序の変更
- カラムおよびローの固定
- カラムやローの移動およびサイズ変更
- 最大化とフォント・サイズの変更
- アプリケーションにチャートまたはグラフを追加したり、OLE 自動機能をサポートするサードパーティ製のソフトを埋め込む

次の一時変更はローカルだけで有効です。これはワークステーション一時変更ということができます。システムによりこれらの一時変更がワークステーションに保管されます。したがって、この一時変更は特定のワークステーションでのみ有効になります。

- 親および子ウィンドウのサイズ変更
- 親ウィンドウの変更
- フォームでのフォント変更
- フォームの最大化
- エグジット・バーを表示するには

参照

- アプリケーション・ユーザー・インターフェイスの変更については「アプリケーション・ユーザー・インターフェイス」

一時変更情報の検索階層

アプリケーションの実行中、システムは検索階層を使ってユーザー一時変更を検索します。検索はアプリケーション、フォーム、バージョンおよび言語の組み合わせで実行されます。

ユーザー ID 特定のアプリケーションにアクセスする場合、ユーザーID を基にアプリケーションの一時変更が検索されます。

グループ 一時変更は、ユーザーID ではなくグループ・レベルで検索されます。買掛管理グループに属する場合、そのグループの一時変更が検索されます。

***PUBLIC** アプリケーションの一時変更がグループ・レベルで検索されない場合、*PUBLIC に対する一時変更で検索されます。*PUBLIC レベルで一時変更が見つからない場合、一時変更なしがデフォルトとなります。

キャッシュされた一時変更情報

J.D. Edwards のアプリケーション・フォームを初めて起動すると、ユーザー一時変更テーブル (F98950) が読み込まれ、ワークステーションにディスク・キャッシュが作成されます。このテーブルには、メニュー、ボタン、およびフォーマットなど、フォームに固有な情報が含まれます。各フォームの要素を取り込むのに何度もデータベースにアクセスする必要がないため、このキャッシュはネットワークパフォーマンスを向上するのに使われます。

ただし、システム管理者またはユーザーが〈ユーザー一時変更〉(P98950) を使ってユーザー一時変更を行った場合、一時変更情報はキャッシュ・テーブルではなくユーザー一時変更テーブル (F98950) に直接書き込まれます。システムは常にキャッシュされた情報から一時変更を読み込むため、ユーザーがシステムを終了して再起動するまでユーザー一時変更は有効になりません。キャッシュされたテーブルは再起動時にリフレッシュされます。

たとえば、タブを追加してユーザー一時変更に関連付けて仕訳入力を変更するとします。まずタブを作成し〈ユーザー一時変更〉プログラム (P98950) を使ってユーザー・プロファイルに関連付けます。ただし、仕訳フォームのレコードはすぐには見るできません。これは、ユーザー一時変更はユーザー一時変更テーブルに保存されるが、システムはキャッシュされた情報を参照するためです。これによって、ユーザー一時変更テーブル (F98950) に保存されていないローカルのフォーム変更を作成および使用する機能に影響することはありません。

同じユーザーID を 2 人に与えなければならない場合は、システムではユーザー一時変更が共有されません。この場合、ユーザーが 2 人ともほぼ同じ時刻にシステムにサインオンすると、最初にサインオンしたユーザーはユーザー一時変更を見ることができますが、2 番目にサインオンしたユーザーは見ることができません。さらに、同時セッション中、最初に変更を行うユーザーはユーザー一時変更テーブル (F98950) レコードを変更できますが、ID でサインオンしたその他のユーザーはテーブルにアクセスできません。

ユーザー一時変更の処理

ユーザーID、グループID、または*PUBLICに対してユーザー一時変更を作成できます。ユーザー一時変更はどのワークステーションにサインオンしたときでも有効になります。

ソフトウェアの更新によりユーザー一時変更を設定しておいたフォームが変更された場合、システムは、変更されたフォームにユーザー一時変更をマージしようとします。ただし、ユーザー一時変更の再設定が必要な場合もあるので、ユーザー一時変更が正しく反映されているかどうか確認する必要があります。

ユーザー一時変更の作成

個人のユーザー一時変更を作成し、一時変更をエンタープライズ・サーバーに常駐させることもできます。この一時変更は、どのワークステーションにサインオンしても有効です。グループ一時変更を作成するには、まずユーザーの一時変更を作成してからそれをグループ一時変更に変更して、グループ内または会社全体(*PUBLIC)に対して有効にします。

▶ ユーザー一時変更を作成するには

1. 一時変更を作成する対象アプリケーション(伝票入力など)を選択します。
2. フォームに対してグリッドのカラムやローの再編成などの変更を加えます。アプリケーションを終了する際にここで設定した変更は、自分のユーザーIDに関するユーザー一時変更として保存されます。

▶ ユーザーの一時変更をグループ一時変更に変更するには

1. 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)で〈ユーザー一時変更〉(P98950)を選びます。
2. 〈ユーザー一時変更〉で、グループに対して反映させるユーザー一時変更レコードを検索して選択します。

注:

一時変更のタイプが正しいかどうか確認してください。使用可能な2つのタイプは、GF(グリッドタブフォーマット一時変更)とHC(メニュー/ツールバー一時変更)があります。グリッドタブを別のユーザーに展開するにはGFレコードを選択します。メニュー・バーまたはツールバーに対する変更を展開するにはHCレコードを選択します。〈ユーザー一時変更の処理〉フォームで右にスクロールすると一時変更タイプを確認できます。

3. [コピー]をクリックします。
4. 〈コピーの一時変更〉で次のフィールドに入力します。
 - ユーザー/グループ
[ユーザー/グループ]フィールドには、ユーザー一時変更を反映させる対象グループ、または*PUBLICと入力します。ユーザー一時変更をグループまたは会社全体にコピーします。

J.D. Edwards のデモ・バージョンをコピーして変更し、そのバージョンでデモ・バージョンと同じユーザー一時変更を使用する場合は、ユーザー/グループは変更せずにそのまま使用します。新しいバージョンにはカスタマイズしたことがわかるような名前を付けます。

- バージョン ID

別のバージョンに設定されたユーザー一時変更をコピーするには、バージョン名を入力します。ユーザー一時変更は作成されません。

- 言語

有効な言語コードを入力して、指定したユーザーおよびアプリケーションに対してユーザー一時変更する言語を指定します。

5. バージョンをコピーまたは変更した場合は、コピーした個々のユーザー一時変更レコードは削除してください。

削除することにより、ログインしたときに表示される一時変更がユーザーID に特定の一時変更ではなく、その時点で属しているグループの一時変更であることが確認できます。

注:

変更した各フォームに対して一時変更レコードが作成されます。

6. [OK]をクリックします。

フォーム変更後のユーザー一時変更の修正

ワークステーションにパッケージをインストールした後で、新しいパッケージに含まれるフォームが変更されていて、インストール前に行ったグリッドまたはメニュー/ツールバーに対するユーザー一時変更との間に不整合が起こることがあります。たとえば、ユーザー一時変更のあるグリッドに新しいカラムが追加されることがあります。パッケージをインストールした後で最初に変更されたフォームにアクセスしたときに初めて、新しくインストールされたフォームと既存のユーザー一時変更との違いがわかります。ユーザー一時変更を修正して新しいカラムを含めるか、ユーザー一時変更を削除するかどうかユーザーに確認します。変更されたフォームとユーザー一時変更との違いを修正できないときは、ユーザー一時変更が自動的に削除されます。

これは、フォームに変更を加えてもその他のユーザー一時変更(フォームへの OLE 添付など)には影響がないためです。この修正は、グリッドおよびメニュー/ツールバーのユーザー一時変更に対してのみ行われます。

▶ フォーム変更後のユーザー一時変更を修正するには

パッケージをインストールして、新しくインストールしたフォームとユーザー一時変更との間に相違がある場合は、最初にメッセージ・ボックスが表示されます。このボックスでは、そのフォームのユーザー一時変更を削除するか、または変更したフォームに一致するようユーザー一時変更を修正するかどうかを確認します。

表示されるメッセージ・ボックスで次のいずれかを実行します。

- ユーザー一時変更を削除するには[削除]をクリックします。

そのフォームに対するユーザー一時変更が削除されます。ユーザー一時変更の作成プロセスに従って、ユーザー一時変更を再び追加できます。

- ユーザー一時変更の修正を行うには[修正]をクリックします。

新しくインストールされたフォームからの変更とそのフォームのユーザー一時変更とをマージしようとします。成功した場合は、マージが完了した後で、フォームのユーザー一時変更が正常に機能するかどうか確認してください。違いを修正しようとしてグリッド・フォーマットまたはメニュー/ツールバーのカスタマイズに問題があった場合は、そのフォームに対するユーザー一時変更を削除してください。〈ユーザー一時変更の処理〉フォームで使用するユーザー一時変更を選択し、[削除]をクリックします。

変更をユーザー一時変更とマージできない場合、そのフォームに対するユーザー一時変更が自動的に削除されます。ユーザー一時変更の作成プロセスに従って、ユーザー一時変更を再び追加できます。

レコード

データベースは、レコードを単位に情報を管理します。通常、各レコードには1つ以上の情報が含まれます。たとえば、ドミニク・アボット (Dominique Abbott) というデータは、J.D. Edwards ERP の1レコードに存在するデータです。住所録アプリケーション・システムでこのデータにアクセスする場合、表示されるレコードには、電話番号や住所情報が含まれています。システムでは、これらの情報をすべて1つのレコードとして保存することもできます。一部を基本レコード、残りを補助レコードとして保存することもできます。この相互関係タイプは、システム全体に適用されます。

システムでは、すべてのレコードをデータベース・テーブルに保管しています。各レコードには、レコードをテーブルにリンクするキーが少なくとも1つ必要です。これらのキーは固有の識別子として機能し、レコードを識別するのに必要です。たとえば、住所録システムでは住所番号をキーとして、各レコードを識別します。このため、各住所番号は固有なものにしてください。新しいレコードを作成する場合は、キー・フィールドへのデータ入力必須です。何も入力しないと、エラーになります。キー・フィールドに入力した情報は、後で編集できません。キー・フィールド情報を変更するには、新しいレコードを作成する必要があります。

メディア・オブジェクトを使用して、テキストやグラフィック、他のオブジェクトをレコードに添付することができます。たとえば、ある仕訳入力に関する特殊な状況についてテキストを添付して説明することができます。レコードには描画、動画、その他のオブジェクトを添付することも可能です。

参照

- メディア・オブジェクトのレコード添付については「メディア・オブジェクト添付」

レコードの検索

レコードを検索するには検索/表示フォームのグリッドを使います。グリッドには、検索結果が表示されます。グリッド内のレコードは、検討、コピー、更新、または削除できます。選択条件に一致するレコードがカラム・タイトルの下のグリッドに表示されます。

検索/表示フォームでは、[検索] ボタンをクリックすることですべてのレコードを表示できます。隠れている場合はスクロールを使用します。パフォーマンスを向上させるために、システムでは一度にロードされるレコード数は1ページ分です。グリッドに表示されているレコードのみが、テーブルから取り込まれています。スクロールダウンすると、新しいレコードが取り込まれます。レコード件数およびシステム・リソースによって、すべてのレコードをロードするのに時間がかかる場合があります。ただし、検索条件を絞ることで取り込まれるレコードを限定することができます。次のリストは検索条件の定義方法です。

- フォームの最上部にあるフィルタ・フィールドを使用する。たとえば、フィルタ・フィールドに情報を入力して、従業員レコードだけを検索する場合です。
- QBE を使用して、固有名詞や住所番号、名称範囲や番号などの条件に基づき、1つ以上のカラムで検索する。
- ワイルドカードを使って、フィルタ・フィールドおよび QBE を使った検索条件を修正する。

検索条件を使用したレコードの検索

検索条件を使用すると、特定のレコード・タイプのレコードのみを検索できます。たとえば、[名称検索]や[検索タイプ]のようなフィルタ・フィールドに情報を入力することにより、名前が A で始まる従業員のみを検索することができます。

▶ 選択条件を使用してレコードを検索するには

〈日次処理〉メニュー(G01)から〈住所録の改訂〉を選択することもできます。

1. 〈住所の処理〉で、次のフィールドに値を入力します。

- 検索タイプ

検索タイプがわからない場合は検索ボタンを使用して、ユーザー定義コードのリストを参照します。

2. [検索]ボタンをクリックします。

検索条件に一致するレコードのリストが表示されます。

フィールド記述

記述	用語解説
検索タイプ	検索する住所録レコードのタイプを指定するユーザー定義コード(01/ST) E = 従業員 X = 元従業員 V = 仕入先 C = 顧客 P = 見込顧客 M = 郵送先一覧 TAX = 納税先

参照

- ビジュアル・アシスト検索ボタンについては「ビジュアル・アシストの処理」

QBE の使用

検索条件を絞るには、QBE を使用してください。たとえば名前で検索する場合は、グリッドの[名称]カラムの上にある QBE フィールドを使用してください。

QBE に入力する情報はカラムで使用可能な値を使用してください。有効でないとレコードは検索されません。使用できない(グレー表示されている)カラムでは検索できないため、値を入力することはできません。

QBE の中には検索時の動作が異なる場合があります。ツールのフォームには、1 つ以上のフィールドに値を入力した後、タブを使って行の最後に移動させると[検索]ボタンをクリックするのと同じ結果になるフォームもあります。

▶ QBE を使用するには

検索に使用する文字を QBE の該当するカラムに入力します。

たとえば〈住所録の改訂〉プログラム(P01012)で、検索する名前の一部またはすべてを QBE の[名称]カラムに入力して、[検索]をクリックします。

検索条件に一致したレコードがグリッドに表示されます。

ワイルドカードおよび演算子を使用したレコードの検索

1 つ以上の文字を使用する代わりに、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使うことができます。アスタリスク(*)を使うと検索条件が広がります。たとえば、QBE の名称カラムに“abb*”と入力すると、“abb”で始まるすべてのレコードが表示されます。また、QBE に“*bb*”と入力すると、“bb*”という文字が間に含まれているレコードがすべて検索されます。

値による検索では、演算子とセットで使う方法もあります。たとえば、QBE の[住所番号]カラムに“<87”と入力すると、住所番号の 87 以下のものが指定されます。QBE の[名称]カラムに“<b”と入力すると、“a”で始まる名称を指定することになります。

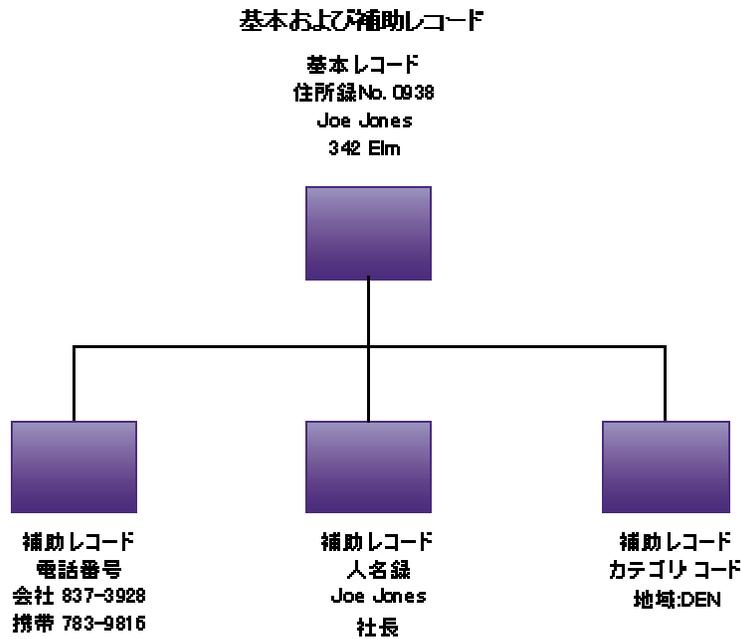
QBE で有効な値は次のとおりです。

- < より小さい
- <= ~以下
- > より大きい
- >= ~以上
- ! 等しくない

検索フィールドに値を入力して[検索]ボタンをクリックすると、検索条件に一致するレコードが検索されます。

レコードの処理

レコードの多くは、J.D. Edwards アプリケーション内で相互に関連しています。つまり、補助レコードまたはそれ自体にある情報を追加、削除、保存することで基本レコードを変更することができます。たとえば、基本レコードまたはマスター・レコードには従業員の氏名や住所を含めることができます。電話番号などの追加情報は、補助レコードに存在します。



J.D. Edwards ソフトウェアは、イベント・ドリブンです。イベント・ドリブンとは、ボタンをクリックする、フィールドにタブで移動する、またはメニューやリストから選択するなどのアクションによりデータの変更が行われることを表します。ただし、[OK]ボタンをクリックするか[Enter]キーを押してフォームを終了するまでは、変更内容はデータベースには保存されません。関連フォームに変更を入力してからその前のフォームに反映させ、そこで[OK]ボタンをクリックして初めて変更(内容)が保存されます。

レコードの処理をする場合は、次の点に注意してください。

基本および補助レコードの相互関係	レコードをデータベースに追加する場合は、基本レコードを追加してから補助レコードを追加します。補助レコードをデータベースに追加する前に、そのレコードに基本レコードが作成されている必要があります。
レコードの処理	レコードの変更、追加、および削除方法は、どのシステムを使用していても同じです。レコードの変更を行えるフォームには2つのタイプがあります。 <ul style="list-style-type: none">・ 〈住所録の改訂〉などの単一レコード・フォーム・ 〈電話番号〉などの複数レコード・フォーム
追加	レコードを追加する際にそのレコードに[自動採番]フィールドがある場合は、番号は自動的に加算されます。 検索/表示フォームにレコードを追加するときは[追加]をクリックします。表示されるブランクのフォームに値を入力してください。値の入力が完了したら[OK]をクリックしてください。 入力必須フィールドに値を入力しなかった場合、[OK]ボタンを押した時点でそのレコードが赤くハイライトされます。
変更	〈住所の処理〉の[住所番号]などのようにフィールドが保護されている場合は、変更できません。
コピー	レコードをコピーしても、すべてのフィールドが新しいレコードにコピーされるとは限りません。レコードを固有にするために、新規レコードの特定フィールドが変更されません。
削除	〈住所の処理〉などの検索/表示フォームで、削除するローをハイライトします。削除する各ローに対して確認メッセージが表示されます。 〈電話番号〉などの複数レコード・フォームの場合、グリッド中の特定のロー全体を選択してローを削除する必要があります。 〈住所録の改訂〉などの単一レコード・フォームからレコードを削除することはできません。レコードはグリッドからしか削除できません。 親レコードを削除すると関連フォームの情報も削除されます。子レコードの削除については、該当するアプリケーションのユーザーガイドを参照してください。
日付	ユーザー・プロファイルに応じて日付の妥当性チェックが行われます。ユーザー・プロファイルには Windows または J.D. Edwards ソフトウェアの設定を使用できます。
タブを使用して必須フィールドを終了する	タブを使用して必須フィールドを終了する場合、フィールドの値の妥当性チェックが行われます。フィールドの内容が正しくない場合はエラー・メッセージが表示されません。
ユーザー定義コード	ユーザー定義コードの妥当性チェックが行われます。
勘定科目コード	勘定科目コードの妥当性チェックが行われます。

レコードの選択

レコードを選択する理由は、さまざまです。従業員の住所と電話番号を変更する場合などがあります。表示フォームからレコード(複数可)を選択して、改訂フォームで情報を変更することができます。

レコードを選択する方法には次の 2 つがあります。

- レコードをクリックしてハイライトさせ、[選択]ボタンをクリックして対応するフォームを開く。
- レコードをダブルクリックして、そのレコードに関する該当するフォームを開く。

▶ レコードを選択するには

1. 該当する検索/表示フォームで、レコードを検索します。
2. レコードをダブルクリックして、改訂フォームを表示させます。
3. 改訂フォームで、レコードを改訂して[OK]をクリックします。

複数レコードを選択した場合、2 番目のレコードが表示されます。選択したレコードが表示されない場合は[次へ]ボタンをクリックしてください。必要に応じてこの処理を繰り返してください。

4. 終了したら[OK]をクリックし、変更内容を保存してください。[キャンセル]をクリックすると保存せずに終了します。

参照

- レコードまたはレコードの設定について詳しくは「レコードの検索」

レコードの追加

レコードをデータベースに追加する場合は、基本レコードを追加してから補助レコードを追加します。

▶ レコードを追加するには

1. 検索/表示フォームで[追加]をクリックすると、ブランクの改訂フォームが開きます。
2. 新規レコードの情報を入力します。
3. [OK]をクリックします。

レコードを追加すると、自動採番機能を使用している住所録レコードや仕訳入力、購買オーダー、その他の伝票に対しては自動的に番号が付けられます。

レコードの変更

J.D. Edwards ERP では、アプリケーションをリクエストすると検索/表示フォームが表示されます。検索/表示フォームで、実行するアクションを選択します。実行するボタンまたは機能を選択すると、レコード変更用の別のフォームが表示されます。

あるフィールドから別のフィールドへ移動する際に、フォームに反映された変更を参照することができます。フィールドに無効な値を入力すると、エラーが表示されます。そのエラーを修正してから[OK]をクリックしてください。そのエラーを修正してから[OK]をクリックしてください。[OK]をクリックするとデータベースに変更が保存されます。

検索/表示フォームでは、レコード内容を変更することはできません。検索/表示フォームの[選択]ボタンを押した後で表示されるフォームで変更してください。

▶ レコードを変更するには

1. 該当する検索/表示フォームで、レコードを検索します。
レコードをダブルクリックするか、ハイライトして[選択]ボタンをクリックします。
2. 必要に応じて、改訂フォームで情報を改訂します。
3. [OK]をクリックして改訂を反映させます。

レコードの削除

レコードをデータベースから削除する場合があります。たとえば、ある仕入先との取引を解消する場合などです。アプリケーションによっては、基本レコードを削除すると、電話番号などに関する補助レコードも削除されることがあります。子レコードの削除については、該当するアプリケーションのユーザーガイドを参照してください。

▶ 基本レコードを削除するには

1. 該当する検索/表示フォームで、1 つまたは複数のレコードを選択します。
2. [削除]をクリックします。
削除を確認するプロンプトが表示されます。

メッセージと待ち行列

J.D. Edwards ERP アプリケーションのワーク・センターを使用すると、メッセージを管理したり、待ち行列に入れておくことができます。J.D. Edwards ERP では、電子メール・メッセージの送受信ができます。メッセージには、J.D. Edwards ERP ユーザーからのもの、外部からのもの、またはワークフロー・プロセスによるものが含まれます。

メッセージは J.D. Edwards ERP のデフォルト待ち行列(メッセージの保管場所)に入れておいたり、別の待ち行列を設定してそこに保管することもできます。このセクションでは、メッセージと待ち行列の扱い方を説明します。外出先など時刻ログに備考を追加することもできます。

内部または外部メッセージ

J.D. Edwards ソフトウェアでは、電子メール・メッセージは次のように分類または処理されます。

内部メッセージ 内部メッセージは、〈ワーク・センター〉を利用して J.D. Edwards ソフトウェア内ユーザー間で送受信されます。

外部メッセージ 外部メッセージは、J.D. Edwards ソフトウェア・ユーザーと外部のユーザーとの間で送受信されます。外部メッセージには、サードパーティ製の電子メール用ソフトウェア・パッケージが使用されます。

システム管理者によってアカウントが設定され、内部または外部メールが送受信されます。ただし、この設定にかかわらず内部メッセージとして送信されるメッセージもあります。投入済み UBE ジョブの通知などがこの例です。

参照

- サードパーティの電子メール・システム用に J.D. Edwards ERP 電子メール環境を設定する方法については、「外部メールの環境設定」

ワークフロー・メッセージ

内部/外部メッセージの送受信の他に、アクション・メッセージを受信できます。このメッセージは、システム・ワークフロー・プロセスにより自動的に送信されるタイプのメッセージです。

アクション・メッセージ ワークフロー処理ではアクション・メッセージが生成されます。これは相手にアクションを起こさせるメッセージで、顧客レコード変更の承認または拒否の回答を求めるものなどがこれにあたります。稲妻の絵のアイコンが付いたメッセージはアクション・メッセージです。

アクション・メッセージを開くとショートカット・アイコンがあり、これをクリックするとアプリケーション・ヘリンクします。情報そのものではなくショートカットなので、クリックするたびにその時点で最新の情報をデータベースから検索することができます。

アクション・メッセージを特定の待ち行列に送信するよう、ワークフローを設定できます。

参照

- ワークフロー・システムおよびメッセージを送信するワークフロー・プロセスのプログラミングについては『エンタープライズ・ワークフロー』ガイド
- 特定のアプリケーション(スイート)内にあるワークフロー・プロセス(与信限度額の承認プロセスなど)については該当するアプリケーションのガイド

待ち行列の理解

待ち行列は、〈ワーク・センター〉でメッセージを管理するフォルダを意味します。メッセージは、優先メールまたは投入済みジョブというように分類されます。待ち行列を通して、ユーザーはワークフロー・プロセスで特定のアクティビティを承認または拒否できます。待ち行列は、実際にはユーザー定義コードであり、待ち行列はユーザー定義コードを設定するのと同じように設定できます。

J.D. Edwards ソフトウェアの待ち行列

J.D. Edwards ソフトウェアには次の待ち行列があります。

送信済み 他のユーザーに送ったメッセージ

削除済み 削除したメッセージ。削除したメッセージは表示することはできますが、他の待ち行列に移すことはできません。

システム管理者は、削除されたメッセージをシステム上から除去する権限を持っています。削除メッセージの除去は、通常、定期的または事前に連絡した日程で行います。また、自分の削除済み待ち行列からさらに削除すれば、そのメッセージを除去することができます。

投入済みジョブ バッチ処理に投入したジョブに対して生成されたメッセージです(例:総勘定元帳転記)

ワークフロー

ワークフローには事前定義済みの待ち行列がいくつかありますが、自分が作成したプロセスにより生成されるメッセージを保存するカスタム待ち行列を設定することもできます。たとえば、与信限度額承認プロセスにより生成されるメッセージの待ち行列を設定することがあります。この待ち行列には、顧客の与信限度額に関連する承認または拒否メッセージが保存または受信されます。ユーザーは、その待ち行列を開いてメッセージに回答します。

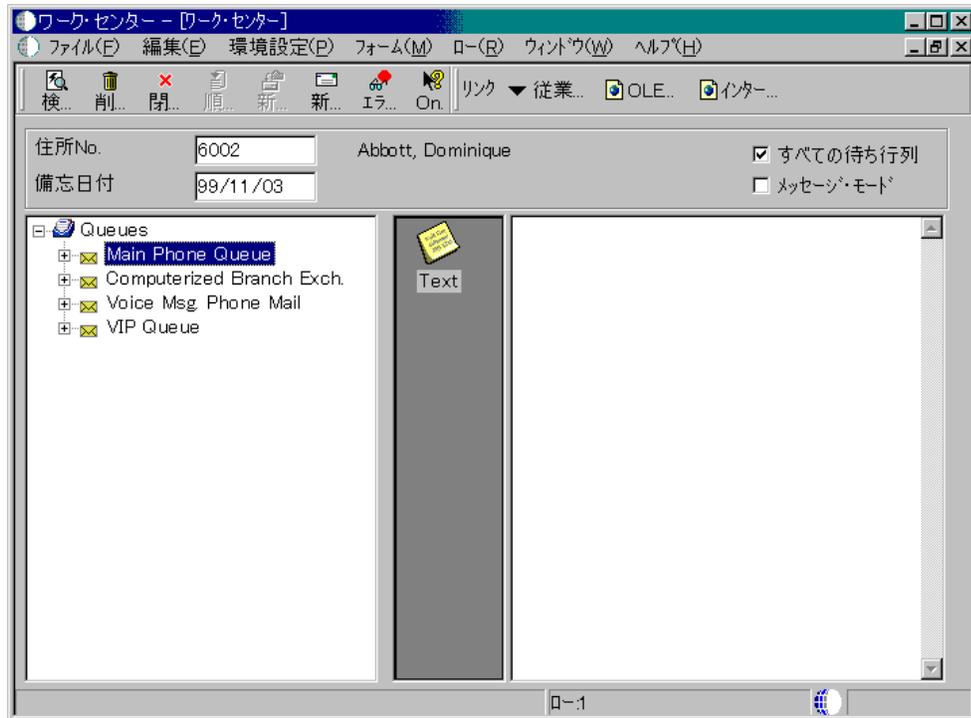
メッセージの処理

〈ワーク・センター〉を使うと、J.D. Edwards ERP システム内外で内部および外部電子メールの送受信を行えます。外部メッセージを送る場合には、〈ワーク・センター〉からサードパーティ製の電子メール用ソフトウェアにアクセスします。メッセージは、改訂、別のユーザーへの転送、待ち行列への転送、ショートカットの添付、印刷および削除ができます。

ワーク・センターへのアクセス

〈ワーク・センター〉は、J.D. Edwards 内の電子メールのハブ(中継点)として機能します。また、メッセージと待ち行列を管理します。〈従業員ワーク・センター〉にアクセスするには次の方法があります。

- 〈ワークフロー管理〉メニュー(G02)から〈従業員ワーク・センター〉を選択します。
〈ワーク・センター〉フォームが、表示されます。



- エグジツト・バー(どのアプリケーションからでも可)で、[ツール]から[ワーク・センター]を選びます。このバーを表示するには、エグジツト・バーを表示しておいてください。
- アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから [ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

メッセージの表示

メッセージはワーク・センターに表示されます。送信されたメッセージは、[Queues(待ち行列)]の [Personal In-Basket(個人情報)]に表示されるか、または設定によっては、[優先メールおよび補助待ち行列]に表示されます。ワークフロー・プロセスにより送信されたワークフロー・メッセージまたはアクション・メッセージも表示できます。

注:

メッセージを表示できない場合は、住所録番号および待ち行列が表示されるように待ち行列セキュリティが正しく設定されているかどうか確認してください。

参照

- 待ち行列セキュリティについては「ユーザー待ち行列のセキュリティの変更」
- 優先および補助待ち行列の設定については「優先または補助待ち行列へのリダイレクト」
- ワークフロー・メッセージについては『エンタープライズ・ワークフロー』ガイドの「J.D. Edwards ワークフロー・ツールの概要」

▶ メッセージを表示するには

1. アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから [ツール]を選択して[ワーク・センター]を選びます。
2. 〈ワーク・センター〉で、メッセージを含む待ち行列の 1 つをクリックしてください。
待ち行列のメッセージが表示されます。新しいメッセージは太字で表示されます。
3. 表示するメッセージをクリックします。
〈ワーク・センター〉フォームの右領域にメッセージが表示されます。

内部メッセージの送信

内部電子メールは、J.D. Edwards ソフトウェアの別ユーザーにメッセージを送信する場合に使用します。メッセージに[備忘日付]を割り当てると、送信日付を指定することができます。[備忘日付]欄に入力された日時になると、システムが自動的にそのメッセージを送信します。備忘日付は、オフィス不在の日に自分のメッセージを送信したい場合や、ミーティングや重要事項が近づいたときに通知を表示させたい場合に便利です。

内部メッセージには、添付ファイルを添付して送信することもできます。ファイルや、OLE (Object Linking and Embedding) 標準の OLE リンク(ワープロ文書やスプレッドシートなど)が添付できます。

1 人または複数の受信者にメッセージを送信できます。複数の受信者にメッセージを送信する場合は、クイックリストや事前定義された配布リスト、ロールなどを使うことができます。

▶ 内部メールを 1 人の受信者に送信するには

1. アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから [ツール]を選択して[送信] - [内部メール]を選びます。
2. 〈内部メールの送信〉で、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックしてに値を入力します。
 - 送信先住所番号/ユーザー/ロール

3. 〈住所番号/ユーザー/ロール〉で受信者検索オプションを次から選択して[OK]をクリックします。
 - 住所番号
 - ユーザー
4. 送信先をハイライトして[選択]をクリックします。
5. 次のフィールドにメッセージの件名を入力します。
 - 件名
6. 必要に応じて次のフィールドに値を入力します(任意)。
 - タイプ 2
 - メールボックス
 - マーケティング
 - リード・ソース
 - コピーの保存
 - 受信通知
 - 住所
 - 連絡先
 - 備忘日付
 - 電話番号
7. フォームの下にあるテキスト領域にメッセージを入力します。
8. メッセージに添付するものがある場合は、Text(テキスト)アイコンを右クリックします。
9. 表示されたオプションから[新規]を選び、次のいずれかを選択します。
 - イメージ
 - OLE
 - ショートカット
 - URL/ファイル
10. [OK]をクリックし、メッセージを送信します。

前の画面に戻ります。コピーを保存するように選択すると、送信済みのメッセージのコピーが保存され、メッセージを送信したときの待ち行列内で開くことができます。

参照

- 添付するオブジェクト・タイプについては「メディア・オブジェクトの処理」
- メディア・オブジェクトについては『システム・アドミニストレーション』ガイド

フィールド記述

記述	用語解説
送信先住所番号/ユーザー/ロール	<p><ワークセンター>に表示する待ち行列およびユーザーをフィルタするオプション。次のいずれかのオプションを選択する必要があります。</p> <p>住所番号 この住所番号に関連付けられたすべての待ち行列およびユーザーが表示されます。デフォルトは住所番号です。</p> <p>ユーザー ユーザーの住所番号に関連付けられたすべての待ち行列が表示されます。</p> <p>ロール ロールの住所番号に関連付けられたすべての待ち行列が表示されます。</p> <p>関連付けられた親番号にすべてのワークセンターのロジックが実行されません。このため、すべてのユーザーおよびロールには住所番号が関連付けておく必要があります。</p>
送信先	住所番号は、住所録システムのエントリを識別する番号です。従業員、応募者、参加者、顧客、仕入先、テナント、保管場所などを識別するために使用します。
コピーの保存	この機能が使用可能となっている場合、メールボックスのメッセージは、将来に参照したり、次のメール作成用に保存されます。
受信通知	このボックスをチェックすると、送信されたメッセージが送信先によって読み込まれる際に、送信元に対して、メッセージを読んだことを伝えるメッセージを返信します。
送信者	電子メールもしくはインターネット・メッセージの送信者。
連絡先	メッセージを残した個人に関する会社の名前
件名 住所	<p>メッセージの簡略記述または件名。</p> <p>親会社の住所番号。特定の住所を親会社または所在地と関連付けるために使用されます。ここに入力した値は、住所録組織構造マスター(F0150)で構造タイプがブランクのレコードを更新します。住所録マスター(F0101)にある番号を使用してください。親番号のある住所録レコードの例には次のようなものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">○ 親会社のある子会社○ 本社のある支店○ 請負業者が働く作業現場
備忘日付 電話番号	<p>活動メッセージ日付、支払約束日付、備忘日付など。</p> <p>メッセージを残した個人の電話番号</p>

▶ **クイック・リストの送信先にメッセージを送信するには**

1. アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール]を選択して[送信] - [内部メール]を選びます。
2. 〈内部メールの送信〉で、[フォーム]メニューから[クイック・リスト]をクリックします。
3. クイック・リストに含める各宛先について次のフィールドのいずれかを入力し、[OK]をクリックします。
 - 名称
 - 住所 No.
4. 内部メッセージを送信する各ステップを実行します。

注:
クイック・リストは保存できません。

▶ **配布リスト送信先へメッセージを送信するには**

1. アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール]を選択して[送信] - [内部メール]を選びます。
2. 〈内部メールの送信〉で、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックします。
 - 送信先住所番号/ユーザー/ロール
3. 〈住所番号/ユーザー/ロール〉で、次のオプションを選択して[OK]をクリックします。これにより配布リストの住所番号が検索されます。
 - 住所番号
4. 配布リストの住所番号レコードをハイライトして[選択]をクリックします。
5. 内部メッセージを送信する各ステップを実行します。

参照

- 配布リストの情報入力については『エンタープライズ・ワークフロー管理』ガイドの「配布リストの理解」

▶ **ロールのメンバーへメッセージを送信するには**

1. アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール]を選択して[送信] - [内部メール]を選びます。
2. 〈内部メールの送信〉で、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックします。
 - 送信先住所番号/ユーザー/ロール

3. 〈住所番号/ユーザー/ロール〉で、次のオプションを選択して[OK]をクリックします。
 - ロール
4. 使用するロール・レコードをハイライトして[選択]をクリックします。
5. 内部メッセージを送信する各ステップを実行します。

外部メールの環境設定

外部メールをサード・パーティ製の電子メール・システムに送信する前に、送信元のメール・アドレスを指定する必要があります。システムでは、メッセージの送信元が「差出人」として使用されます。最初に送信するときに差出人アドレスが指定されていない場合は、指定するようプロンプトが表示されます。環境は、〈メール環境設定の更新〉フォームを使用して設定することもできます。

参照

- サードパーティ(他社)製電子メール・システムの使用については『エンタープライズ・ワークフロー管理』ガイドの「サードパーティ(他社)製の電子メール・システムの使用」

▶ 外部メールの環境設定を行うには

〈ワークフロー管理〉メニュー(G02)から〈従業員待ち行列マネージャ〉プログラム(Windows クライアント = P012501、Web クライアント = P012503)を選択します。

1. 〈従業員待ち行列マネージャ〉で、外部メール優先情報を適用する住所番号を検索し、[ロー]メニューから[環境設定]を選択します。
2. 〈メール環境設定の更新〉で、次のフィールドに必要な内容を入力し、[OK]をクリックしてください。
 - 電子メール環境設定
ビジュアル・アシストをクリックして、外部メッセージに使用するサードパーティの電子メールシステムを選択します。
 - 電子メールアドレス
サードパーティの電子メールアドレスを入力します。

フィールド記述

記述	用語解説
電子メール環境設定	<p>メッセージの送受信に使用するソフトウェアを指定するユーザー定義コード (01/EP)。有効な値は次のとおりです。</p> <p>ブランク 電子メールを使用しない。内部メッセージのみ送受信するユーザーに割り当てます。</p> <p>1 JDEM メッセージ・システム。この設定で送受信されるすべてのメッセージは J. D. Edwards データベースのローカルにあります。電子メール(インターネット)にはアクセスできません。</p> <p>2 Microsoft Exchange。Exchange を使って内部および外部メッセージを送受信するユーザーに割り当てます。ワークセンターから Exchange にアクセスすることができます。</p> <p>3 Microsoft Outlook。Outlook を使って内部および外部メッセージを送受信するユーザーに割り当てます。ワークセンターから Outlook にアクセスすることができます。</p> <p>4 その他。Lotus Notes など、Microsoft 以外のサードパーティの電子メールシステムを使って内部および外部メッセージを送受信するユーザーに割り当てます。</p>
電子メールアドレス	<p>テキスト入力フィールドで、40 文字まで入力できます。</p> <p>--- フォーム固有 --- 外部メッセージの送信と受信に使用する電子メールの住所を入力してください。</p>

外部メッセージの送信

外部メッセージは、J.D. Edwards ERP のユーザーや〈ワーク・センター〉のユーザーだけでなく、サードパーティ電子メール・システムを使用するユーザーにも送信されます。外部メッセージを送信する際には、イメージや URL、ファイルも添付できます。

▶ 外部メッセージを送信するには

1. アプリケーション(どのアプリケーションからでも可)で[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール]を選択して[送信] - [外部メール]を選びます。
2. 外部メッセージを送信する設定を行っていない場合、〈メール環境設定の更新〉フォームが表示されます。次の手順を実行してください。
 - a. 次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックして、使用するサードパーティのメッセージ・システムを選択します。
 - 電子メール環境設定
 - b. 次のフィールドにサードパーティ(他社)製の電子メール製品のアドレス・プロファイルに登録してある電子メール・アドレスを入力します。
 - 電子メールアドレス
 - c. [OK]をクリックします。
3. 〈外部メールの送信〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - 宛先
 - 件名
4. 次のフィールドへの入力は任意です。
 - CC(ユーザー)
5. メッセージを入力し、[OK]をクリックしてメッセージを送信します。

ショートカットの処理

J.D. Edwards ERP メッセージ・システムを使うと、J.D. Edwards ERP アプリケーションへのショートカットを含むメッセージを送信できます。ショートカットを送信する場合、確認や承認を求めるメッセージと共に送信することができます。たとえば、顧客のレコードに加えた変更に対し、管理者の承認を得なければならない場合があります。ショートカットを添付して送っておけば、管理者はそのショートカットのアイコンをクリックするだけですぐに該当レコードを確認することができます。ショートカット付きのメッセージを送信すると、そのショートカットがリンクしているレコードのキーが相手に送信されます。相手はそのショートカット・アイコンをクリックすると、アプリケーションが起動し、該当レコードが取り込まれます。

J.D. Edwards ERP システムではワークフローを使って、アプリケーションへのショートカットの付いたメッセージを自動的に送信します。このタイプのメッセージはアクション・メッセージと呼ばれ、受信者にショートカットを開いてトランザクションの情報を確認したり承認したりさせます。

J.D. Edwards ソフトウェアは Windows および Web クライアントをサポートしているため、メッセージには Windows と Web のどちらかのアプリケーションを含めることができます。アプリケーションを Windows クライアントまたは Web クライアントのどちらのショートカットから実行するかを電子メールの環境設定で指定できます。

ショートカット優先情報の設定

アプリケーションを Windows クライアントまたは Web クライアントのどちらのショートカットから実行するかを電子メールの環境設定で指定できます。

▶ ショートカットの環境設定を設定するには

〈ワークフロー管理〉メニュー(G02)から〈従業員待ち行列マネージャ〉プログラム(Windows = P012501、Web = P012503)を選択します。

1. 〈従業員待ち行列マネージャ〉で、ショートカットの優先情報を適用する住所番号を検索し、[ロー]メニューから[環境設定]を選択します。
2. 〈メール環境設定の更新〉で、次のフィールドのビジュアル・アシストをクリックしてアプリケーションのショートカット・タイプを(Windows または Web)を指定します。
 - ショートカット・クライアント・タイプ
3. [OK]をクリックします。

▶ ショートカットを送信するには

ショートカットを作成するアプリケーションから、送信するレコードを表示します。

1. [リンク]ボタンの下向き三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] [ショートカットの送信]を選びます。

〈内部メールの送信〉フォームがアプリケーションへのショートカット付きで開きます。
2. 〈ショートカットの送信〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - 住所 No./ユーザー/ロール/配布リスト
 - メール・ボックス(内部メッセージのみ)
 - 件名
3. メッセージを入力します。
4. [OK]をクリックし、メッセージを送信します。

メッセージの改訂

待ち行列のメッセージは改訂できます。実際のメッセージが開かれ、テキストの変更や追加ができます。

▶ メッセージを改訂するには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉で、改訂するメッセージを選びます。
2. [ロー]メニューから[メッセージの改訂]を選択します。

3. 〈メッセージの改訂〉フォームで、次のフィールドに値を入力し、[OK]をクリックします。
 - 送信元
 - 連絡先
 - 件名
 - 電話番号
 - 備忘録日付
 - Text(テキスト領域)

メッセージの待ち行列間の移動

メッセージは、ある待ち行列から別の待ち行列へ移動することができます。たとえば、自分の優先待ち行列にあるメッセージを個人用リスト(Personal To Do List)の待ち行列に移動することができます。

▶ メッセージを他の待ち行列に移動するには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉上にメッセージを移動する先の待ち行列が表示されていない場合は、[すべての待ち行列]チェックボックスをクリックします。
2. 移動先の待ち行列にメッセージをドラッグします。

1 つ以上のメッセージを移動するには、[Shift]キーを押したまま各メッセージでクリックし、移動先の待ち行列へメッセージをドラッグします。ハイライトされたメッセージはすべて待ち行列に移動されます。
3. 移動されたかどうか確認するには、移動先の待ち行列をダブルクリックして内容を確認します。

優先または補助待ち行列へのリダイレクト

受け取ったメッセージは、自分の優先待ち行列にリダイレクトすることができます。この設定を 1 度行くと、その後と同じ送信元から届くメッセージはすべて直接、優先メール待ち行列に入ります。また、届いたメッセージを自分の補助待ち行列にリダイレクトすることもできます。

メッセージのリダイレクト先を優先待ち行列または補助待ち行列に変更するには、メッセージの移動用のステップではなく、このセクションで説明しているステップを順に実行してください。メッセージを移動しても個々のメッセージの場所が変わるだけですが、メッセージを優先メール待ち行列、補助待ち行列にリダイレクトすると、同じところから送られてくるメッセージは設定を解除しない限り、すべてそのリダイレクト先に送り続けられます。

メッセージを「アーカイブ済み」待ち行列や「削除済み」待ち行列に移動することはできますが、その後同じ送信者からのメッセージは、その待ち行列にはリダイレクトできません。「アーカイブ済み」待ち行列や「削除済み」待ち行列へのメッセージの移動は、1 つ 1 つ手作業で行う必要があります。

複数の送信者からのメッセージを優先待ち行列や補助待ち行列へリダイレクトすることができます。また、メッセージが特定の待ち行列にリダイレクトされないようにすることもできます。

▶ 優先メールまたは補助待ち行列にメッセージをリダイレクトするには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉で、優先または補助待ち行列にメッセージをリダイレクトするメッセージを選択します。
2. [ロー]メニューから次の1つを選択します。
 - 優先度
 - 第2メール
3. ターゲットの待ち行列をダブルクリックし、移動されたかどうか確認します。

今後、同じユーザーからのメッセージは、すべてこの選択した待ち行列に届きます。他のユーザーのメッセージをリダイレクトする場合も同じ手順を繰り返します。

メッセージの待ち行列へのメッセージの送信指定を取り消すには

あるメッセージを自動的に優先メール待ち行列に向ける必要がなくなった場合は、中止することができます。

▶ 特定の待ち行列へのメッセージの送信指定を取り消すには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉で、自動送信を取り消すメッセージを選びます。
2. [ロー]メニューから[除去]を選択します。
3. 特定の送信者からの他のメッセージを優先または補助待ち行列から削除します。

削除した送信者からのメッセージを優先メールまたは補助待ち行列に保存しているうちは、その送信者からのメッセージは同じ待ち行列に表示され続けます。

メッセージのリダイレクト

既にオリジナルのメッセージが送信された後に、そのメッセージを別のユーザーに再度割り当てることができます。この処理により、メッセージが表示される待ち行列が変更されます。たとえば、ジム(Jim)に送ったメッセージをベティ(Betty)に送り直すことができます。このメッセージは、ベティ(Betty)の待ち行列に保管され、ジム(Jim)の待ち行列からは消えます。受信したメッセージも再度割り当てることができます。

待ち行列セキュリティで可能な場合にだけ、別のユーザーの待ち行列に再度割り当てることができます。

▶ メッセージを再度割り当てるには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉で、再度割り当てるメッセージを選び、[ロー]メニューから[再割り当て]を選択します。

2. 〈メッセージの割当て〉で次のフィールドに必要な内容を入力し、[OK]をクリックしてください。

- 住所番号/ユーザー/ロール
- 待ち行列指定子

フィールド記述

記述	用語解説
住所番号/ユーザー/ロール	<p>〈ワークセンター〉に表示する待ち行列およびユーザーをフィルタするオプション。次のいずれかのオプションを選択する必要があります。</p> <p>住所番号 この住所番号に関連付けられたすべての待ち行列およびユーザーが表示されます。デフォルトは住所番号です。</p> <p>ユーザー ユーザーの住所番号に関連付けられたすべての待ち行列が表示されます。</p> <p>ロール ロールの住所番号に関連付けられたすべての待ち行列が表示されます。</p> <p>関連付けられた親番号にすべてのワークセンターのロジックが実行されます。このため、すべてのユーザーおよびロールには住所番号が関連付けておく必要があります。</p>
待ち行列指定子	メッセージ送信に使用する待ち行列に関連付けられたメールボックスを指定するフィールド。

メッセージの削除

[削除済み(Deleted)]待ち行列に移動したメッセージは元に戻すことはできません。システム管理者がシステム上から除去するまでは、メッセージは[削除済み(Deleted)]待ち行列に残ります。削除メッセージの除去は通常、定期的または事前に連絡した日程で行います。自分の[削除済み]待ち行列からさらに削除すれば、そのメッセージを除去することができます。

▶ メッセージを削除するには

1. [削除済み(Deleted)]待ち行列にドラッグします。または選択してから[削除]ボタンをクリックします。
2. 1つ以上のメッセージを移動するには、[Shift]キーを押したまま各メッセージをクリックします。

メッセージの印刷

メッセージを印刷しておきたい場合は、どの待ち行列からでもメッセージを印刷することができます。印刷には次の2種類があります。

- メッセージの印刷
待ち行列のメッセージは印刷することができます。

- 待ち行列内のすべてのメッセージをリストアップしたレポートの印刷

このレポートには各メッセージの要約も含まれています。メッセージのレポートには次の2つの種類があります。

- メッセージ・センター— 要約
- メッセージ・センター— 詳細

これらのレポートには、メッセージの件名の他にメッセージの送信者/受信者が表示されます。詳細レポートにはメッセージの内容も印刷されます。

▶ メッセージを印刷するには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉で、印刷するメッセージを選択します。
2. [ロー]メニューから[印刷]を選択します。
3. 〈レポート出力定義〉で、[OK]をクリックします。

▶ 待ち行列内のすべてのメッセージをリストアップしたレポートを印刷するには

[リンク]ボタンの下向きの三角形をクリックし、プルダウンされたオプションから[ツール] - [ワーク・センター]を選びます。

1. 〈ワーク・センター〉で、印刷するメッセージを選択します。
2. [フォーム]メニューから[印刷]を選択します。
3. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、バージョンを選択してレポートの印刷を実行します。

待ち行列の処理

待ち行列は、ワーク・センターで複数のメッセージを関連付ける方法でもあります。新しい待ち行列を作成またはセキュリティを追加して待ち行列を管理する方法を説明します。メッセージには、ショートカットや待ち行列を追加することもできます。

ユーザー定義コードを設定する際に、システムの待ち行列を設定します。次のタスクでは、待ち行列の作成、および既存の待ち行列の変更を説明します。

▶ 待ち行列を設定するには

〈ワークフロー・ユーザー定義コード〉プログラム(G02411)で〈従業員タスク待ち行列〉を選びます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈ユーザー定義コード〉のグリッドで、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックしてください。
 - コード
待ち行列に固有な番号を入力します。

- 記述 1
待ち行列に固有な番号を入力します。
- 記述 2
- 特殊取扱
- ハードコード
フィールドに“N”と入力します。

フィールド記述

記述 コード	用語解説
記述 1	ユーザー定義名称または備考。
記述 2	J.D. Edwards システム中のフィールドをさらに記述または説明する追加テキスト。
特殊取扱コード	<p>特定のユーザー定義コードの値に対して、特別の処理条件を指定するコード。このフィールドに入力する値は、各ユーザー定義コード・タイプに対して固有にしてください。</p> <p>特殊取扱コードはさまざまに使用されます。たとえば、使用言語に定義された特殊取扱コードは、その言語がダブルバイトかどうか、または大文字が含まれていないかどうかを指定します。このフィールドをアクティブにするには、プログラミングが必要です。</p>
ハードコード	<p>ユーザー定義コードがハードコード化されているかどうかを示すコード。チェックマークの場合、選択されていればハードコードされていることを意味します。有効な値は次のとおりです。</p> <p>Y ハードコードされている</p> <p>N ハードコードではない</p>

ユーザーが閲覧できる待ち行列の指定

待ち行列内でユーザーまたはユーザーグループのセキュリティ状況を変更できます。ユーザーに権限を与えてグループ内の待ち行列をモニタリングしたり、特定の待ち行列へのユーザーのアクセスを拒否したりできます。

セキュリティは、ユーザー別、配布リスト別、またはロールに追加できます。たとえば、特定の待ち行列内で管理者がすべての待ち行列を監視するように設定することができます。または、リスト内のユーザーが特定の待ち行列をモニタリングすることができるように配布リストまたはロール別に設定することもできます。

配布リストの数名にだけ待ち行列へのアクセスを与える場合は、配布リストおよびユーザーの住所番号を入力して、特定の配布リストのユーザーだけがアクセスできる待ち行列を設定できます。

▶ ユーザーが閲覧できる待ち行列を指定するには

〈ワークフロー管理セットアップ〉メニュー(G0241)から〈待ち行列セキュリティ〉を選びます。

1. 〈ワークフロー・メッセージ・セキュリティの処理〉で、[追加]をクリックします。
2. 〈メッセージ・セキュリティの改訂〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - ユーザー
 - グループ/ロール
3. 次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックし、閲覧できる待ち行列を指定します。
 - 権限 Y/N

フィールド記述

記述	用語解説
ユーザー	ワークフローシステム内のユーザー。グループの場合もあります。
グループ/ロール	ワークフロー・システムで使用するユーザー・グループの ID。ワークフロー・システムで複数ユーザーを一度に指定するための住所番号です。
権限 Y/N	ユーザーにセキュリティ情報を変更する権限があるかどうかを示します。 --- フォーム固有 --- ワークフローの場合、ワークセンターで他の待ち行列を表示するかどうかを示します。

ユーザーの待ち行列のセキュリティ設定の変更

待ち行列へのユーザーアクセスを拒否したり、グループに対して閲覧可能な特定の待ち行列内ですべてのメッセージを表示できるようすることができます。

[パブリック・セキュリティ]オプションを設定した場合は、その待ち行列にはすべてのユーザーがアクセスできます。たとえば、[パブリック・セキュリティ]オプションを選んで回収管理待ち行列へのアクセス権を与えると、そのシステムを使用するすべてのユーザーが待ち行列のメッセージをすべて表示できます。

▶ 待ち行列のセキュリティ設定をユーザーごとに変更するには

〈ワークフロー管理セットアップ〉メニュー(G0241)から〈待ち行列セキュリティ〉を選びます。

1. 〈ワークフロー・メッセージ・セキュリティの処理〉で、そのユーザーのレコードを選んで[追加]をクリックします。
2. 〈ワークフロー・メッセージ・セキュリティの改訂〉で、次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - *PUBLIC アクセス

このオプションを選ぶと、[ユーザー]および[グループ]フィールドが保護されます。これは、システムのすべてのユーザーに特定の待ち行列へのアクセス権を与えようとしているためです。

- 権限 Y/N

ユーザー・フィールドへの入力完了すると、[パブリック・セキュリティ]フィールドが保護されます。

フィールド記述

記述	用語解説
*PUBLIC アクセス	ワークフローのセキュリティ・レコードで、すべてのユーザーまたは*PUBLICユーザーが特定の待ち行列にアクセスできるように設定できます。このオプションを選択した待ち行列には*PUBLICレコードが書き込まれます。これにより、この待ち行列にあるすべてのユーザーのメッセージを見ることができます。

時刻ログと備考入力

〈ワーク・センター〉では、勤務状況を他のユーザーに知らせることができます。[チェックイン]および[チェックアウト]オプションを使うと、サインオンまたはサインアウトの時刻を記録することができます。チェックアウトには備考を追加することができます。〈時刻ログ〉フォームでこの情報は表示できます。

出社/帰社および退社/外出の入力

出社/帰社・退社/外出の入力を行うと、誰がどこにいるかがわかります。退社/外出を入力する際は、備考、戻り日付も付け加えることができます。[備考]フィールドに何も入力しなかった場合は自動的に帰宅と入力されます。[戻り日付]を入力しなかった場合は、自動的に次の勤務日の日付が入力されます。〈時刻ログ〉フォームに表示される出社および退社の情報については、この後で説明します。

▶ 出社/帰社・退社/外出を入力するには

〈ワークフロー管理〉メニュー(G02)から〈従業員待ち行列マネージャ〉を選択します。

1. 〈従業員待ち行列マネージャの処理〉で、レコードを検索/選択してください。
2. [ロー]メニューから次の1つを選択します。
 - チェックイン
 - チェックアウト

出社または退社を選ぶたびに状況が更新され、〈時刻ログ〉フォームで確認することができます。

備考の入力

行き先や連絡先など詳しい情報は備考欄に加えることができます。たとえば「ミーティング中」、「休暇中」、「連絡先電話番号は…」などと入力しておくことができます。既存の備考は更新できます。

▶ 備考を入力するには

〈ワークフロー管理〉メニュー(G02)から〈従業員待ち行列マネージャ〉を選択します。

1. 〈従業員待ち行列マネージャの処理〉で、レコードを検索/選択してください。
2. [ロー]メニューから[備考]を選択します。
3. 〈チェックイン/アウトおよび備考の更新〉で[備考の更新]のチェックボックスをクリックします。
4. 次のフィールドに備考を入力します。
 - 備考
5. 次のフィールドは任意です。
 - 戻り時刻
 - 戻り日付
6. [OK]をクリックします。
7. 備考を参照するには、〈従業員待ち行列の処理〉で[検索]をクリックします。

時刻ログの参照

入社/帰社・退社/外出の時刻や備考の内容は、自分を含めすべてのユーザーのものも参照することができます。

▶ 時刻ログを参照するには

〈ワークフロー管理〉メニュー(G02)から〈従業員待ち行列マネージャ〉を選択します。

1. 〈従業員待ち行列マネージャの処理〉で、時刻ログを表示する従業員レコードを選びます。
2. [ロー]メニューから[時刻ログ]を選択します。

メディア・オブジェクトの添付

J.D. Edwards ソフトウェアのメディア・オブジェクトおよびイメージ機能を使用すると、現在紙ベースで配布している情報も簡単にアプリケーションに添付できます。メディア・オブジェクト機能を使用すると、J.D. Edwards ソフトウェアのアプリケーション、フォームやロー、およびオブジェクト・ライブラリアンのオブジェクトに情報を添付することができます。メディア・オブジェクトによるイメージ機能により、さらに効率よく情報を保存することができます。

また、OneWorld 中のグリッドのローやフォーム自体にオブジェクトをリンクさせることができます。グリッドのローやフォームに添付できるオブジェクトには次のタイプがあります。

テキスト メディア・オブジェクトにはワード・プロセッシング機能があり、添付を作成できます。たとえば、テキスト添付により、フォームの記入方法やレコードに関する追加情報を添付することができます。

イメージ Windows のイメージファイルには、.BMP、.GIF、および.JPG があります。このようなファイルは、電子ファイルから作成された場合と紙の伝票をスキャナで入力した画像の場合があります。

OLE メディア・オブジェクトには、OLE 標準に合ったファイルを使用できます。OLE を使用すると、異なるプログラム間でのリンクを作成できます。このリンクを使用して、あるプログラムのオブジェクトを別のプログラムに保存することができます。J.D. Edwards のソフトウェアは、OLE オブジェクトを添付するのに必要なリンクを提供します。

OLE メディア・オブジェクトは、ベース・フォーム・レベルで添付します。フォームのベース・レベルにオブジェクトを添付する際には、オブジェクトはフォーム上に表示される 1 データではなくフォーム自体に添付されます。OLE ファイルはグリッドのローまたはフォームにリンクすることができますが、ファイル自体は別のディレクトリに保存されます。OLE がリンクするアプリケーションについて持つファイル情報は、リンクするファイルへのパス情報だけです。

使用できるのは、OLE オブジェクトとして正しく登録してインストールしたものに限りません。

JDE ショートカット JDE のショートカットは J.D. Edwards ソフトウェアのアプリケーションを開くリンクです。メディア・オブジェクト内で添付できるのは、J.D. Edwards ソフトウェアのショートカットだけです。サードパーティ・アプリケーションへのショートカットは添付できません。

URL/ファイル メディア・オブジェクトとして、Web ページの URL またはその他のファイルへのリンクを作成することもできます。フォームで URL メディア・オブジェクトをコントロール・オブジェクトに添付すると、その Web ページがフォームの一部として表示されます。URL をフォームまたはオブジェクト・ライブラリアンのオブジェクトに添付すると、そのメディア・オブジェクトはその URL へのリンクとなります。

システム管理者はテンプレートも設定することができます。テンプレートにはイメージやショートカットなど、添付オブジェクトを含むこともできます。たとえば、メモ用のレターヘッドや標準フォームを作成することができます。また、ショートカットを作成してテンプレートに加え、テンプレートに追加する情報の特定データを使用するアプリケーションへのアクセス経路を作ることができます。

参照

- システム管理については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「メディア・オブジェクトおよびイメージング」

メディア・オブジェクトの処理

メディア・オブジェクト機能を使用すると、テキスト、グラフィック、およびその他のオブジェクトをフォームやレコードに追加することができます。たとえば、テキストを使用してある仕訳入力に関する特殊な状況を説明することができます。フォームやレコードに描画、動画、その他のオブジェクトを添付することもできます。ポップアップ・メニューからは、添付用のテンプレートにアクセスしたり、メディア・オブジェクト・フォームのプロパティを設定するオプションにアクセスしたりできます。

メディア・オブジェクトをフォームに添付してフォーム上で異なるデータにアクセスする場合、添付ファイルが使用できないことがあります。たとえば、オーダー番号 2002 に関するデータを含む詳細フォームにメディア・オブジェクトを添付すると、オーダー番号 3003 のデータにアクセスしたときに表示される詳細フォームには、この添付ファイルは表示されません。ベース・フォーム(上記の場合は、詳細フォーム)は同じでも、フォームに関連付けられているデータのオーダー番号により異なるためです。オーダー番号は添付ファイルが保管されているロケーションへのキーになっています。

J.D. Edwards ソフトウェアは OLE をサポートしています。OLE を使用すると、異なるプログラム間でのリンクを作成できます。このリンクを使用して、あるプログラムのオブジェクトを別のプログラムに保存することができます。システムでは OLE オブジェクトを添付するのに必要なリンクが提供されます。OLE オブジェクトは、メディア・オブジェクトとしてフォームのベース・レベルに添付することができます。オブジェクトをフォームのベース・レベルに添付した際は、オブジェクトはフォーム上に表示されるデータではなく、フォーム自体に添付されます。

フォーム・レベルでファイルが添付されているフォームには、ステータス・バーの右にペーパークリップ・アイコンが表示されます。ベース・フォーム・レベルで OLE オブジェクトが添付されたフォームでは、ステータス・バーの右に文書アイコンで表示されます。

ユーザーが検索を行ってグリッド・ローにレコードを表示させた時点では、そのレコードに対して添付ファイルが存在するかどうかは表示されません。レコードに対して添付ファイルが存在するか確認するには、システムがユーザーのワークステーションにロードしたレコードをすべてチェックする方法と、個々のレコードをチェックする方法があります。

テキスト機能には、メモの作成、参照、編集、削除に使用するワード・プロセッシング機能があります。テキスト添付ファイルを作成する際にテンプレートを設定することもできます。テンプレートを使用すると、頻繁に使用するメディア・オブジェクト用のフォーマットを定義しておくことができます。

添付ファイルのチェック

レコードに対して添付ファイルがあるかどうかをチェックするには、まず、通常どおりレコードの検索を実行します。添付ファイルのチェックは、同時に 1 つまたは複数レコードに対して行うことができます。システムでは、ユーザーがワークステーションにロードしたレコードに対してのみ行われます。最初に[検索]ボタンをクリックして表示された複数レコードのみが、ワークステーションにロードされています。ページボタンを使用するとレコードがさらに表示されます。

[検索]ボタンをクリックすると、フォームにより添付ファイルの参照状況が再設定されます。添付ファイルの検索ボタンを再度クリックして、グリッド・レコードの添付ファイルがあるかどうかを確認してください。

▶ すべての添付ファイルをチェックするには

ファイル添付機能が使用できるフォームで、ロー見出しとカラム見出しの交差するセルのアイコンをクリックします。このアイコンは、拡大鏡/ペーパークリップの絵です。

添付ファイルのあるレコードのロー見出しにペーパークリップのアイコンが表示されます。

▶ 単一ローおよび複数ローの添付ファイルをチェックするには

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、グリッド・ローのロー見出しをクリックします。
ローに添付ファイルがある場合は、ロー見出しにペーパークリップのアイコンが表示されます。
2. 矢印キーを使って上下に移動させることにより、隣接したローの添付ファイルを検索できます。

メディア・オブジェクトの添付

添付機能を使用すると、テキスト、写真、図面、スプレッドシート、画面イメージ、音声、アプリケーションへのショートカットをフォームおよびグリッド・ローに添付できます。たとえば、請求書のイメージを仕訳レコードに、法的文書を契約記述レコードに、または処理を説明する記述テキストをフォームに添付する場合などがあります。フォームの中には添付ファイル機能が使用できないものもあります。

注:

添付ファイルは、システム管理者がメディア・オブジェクト待ち行列を作成し、マップするまで作成できません。詳しくは『システム・アドミニストレーション』ガイドの「メディア・オブジェクトおよびイメージング」を参照してください。

テキストを入力すると、段落フォーマットを設定してスペルチェックを実行できます。J.D. Edwards のソフトウェアは、OLE をサポートしています。

▶ テキストを添付するには

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - テキストをフォームに添付するには、[フォーム]メニューから[添付]を選択します。
フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - テキストをグリッド・ローに添付するには、ローを選んで[ロー]メニューから[添付]を選択します。

メディア・オブジェクトのワークスペースは、2つのパネルに分割されています。左のパネルはアイコン・パネルで、右のパネルはビューア・パネルです。以前にレコードに添付されたファイルはアイコン・パネルに表示されます。

2. 次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[新規] - [テキスト]を選びます。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[新規] - [テキスト]を選びます。
3. ビューア・パネルでテキストを入力します。
4. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

テキストの書式は、ビューア・パネルの上部にあるフォーマット・ツールにより設定できます。

▶ イメージを添付するには

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - イメージをフォームに添付するには、[フォーム]メニューで[添付]を選択します。

フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - イメージをグリッド行に添付するには、[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. メディア・オブジェクトで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[新規] - [イメージ]を選択します。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[新規] - [イメージ]を選びます。
3. 次のオプションを実行します。
 - 待ち行列名
 - ファイルのタイプ

[プレビュー]オプションはデフォルトでチェックされているので、選択したイメージの例が表示されます。このオプションを切り替えると、プレビュー・イメージを表示したり非表示したりできます。
4. イメージを選択して[OK]をクリックします。

グラフィック・フォーマットがシステムでサポートされている場合、ビューア・パネルにイメージが表示されます。
5. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

フィールド記述

フィールド	説明
待ち行列名	イメージファイルが存在するディレクトリの名称
ファイルのタイプ	システムがサポートしているファイル拡張子のリスト。Windows ビットマップの場合は、.bmp、.gif、.jpg などがあります。

▶ OLE オブジェクトを添付するには

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - OLE オブジェクトをフォームに添付するには、[フォーム]メニューで[添付]を選択します。
フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - OLE オブジェクトをグリッド・ローに添付するには、ローを選択して[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. メディア・オブジェクトで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[新規] - [OLE]を選びます。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[新規] - [OLE]を選択します。
3. 新規オブジェクトを作成するには、〈Insert Object(オブジェクトの挿入)〉で[オブジェクトの種類]を1つを選択します。
ワークステーションまたはネットワークにインストールされている機能によって、システムごとに選択項目が異なります。
4. オブジェクトを作成します。
5. 既存のオブジェクトを添付するには、[ファイルから]を選択して、システムから添付するオブジェクトを検索して[OK]をクリックします。
添付オブジェクトを新規に作成するか既存のオブジェクトを添付するかによって、オブジェクトに関連付けられたアプリケーションがビューア・パネルに表示されるときに、ブランクのワークスペースが表示されるか既存のオブジェクトが表示されるかという違いがあります。
メニュー・バーには、埋め込まれたアプリケーションのメニュー・バーが表示されます。たとえば Excel ワークシートを選択する場合、メニュー・バーに Excel 用メニューが表示されます。
6. ビューア・パネルのオブジェクトを編集します。
7. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

▶ ショートカットを添付するには

ショートカットを添付して、レコードから関連するアプリケーションに直接アクセスすることができます。

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - ショートカットをフォームに添付するには、[フォーム]メニューで[添付]を選択します。
フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - ショートカットをグリッド・ローに添付するには、ローを選択して[ロー]メニューで[添付]を選びます。

2. メディア・オブジェクトで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[新規] - [ショートカット]を選びます。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[新規] - [ショートカット]を選択します。
3. [ファイルを開く]を選んでファイルを表示し、ショートカットを選択します。
ビューア・パネルにショートカットが表示されます。
4. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

▶ URL またはファイルを添付するには

URL を添付すると、Web ページまたはディスクのファイルにアクセスできます。イメージとして添付できないタイプのファイルや、ビットマップなどの OLE ファイルも添付できます。

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - URL をフォームに添付するには、[フォーム]メニューで[添付]を選択します。
フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - URL をグリッド・ローに添付するには、ローを選択して[ロー]メニューで[添付]を選びます。
2. メディア・オブジェクトで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[新規] - [URL/ファイル]を選びます。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[新規] - [URL/ファイル]を選びます。
3. <URL/ファイルの追加>フォームで、ファイルまたは待ち行列を表示し、該当する URL またはファイルを選びます。フィールドに URL を直接入力することもできます。
4. [OK]をクリックします。
ビューア・パネルに URL またはファイルが表示されます。URL を添付する場合、ダウンロード・ダイアログ・ボックスが表示されます。URL が有効か確認するか、[キャンセル]をクリックできます。
5. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

メディア・オブジェクトの検索

作成日、代替キー、またはユーザー定義などの情報別に、特定のメディア・オブジェクトを検索できます。

注:

検索できるメディア・オブジェクトは、コードが既に定義されているものと、システム管理者によってすべてのユーザーに公開されているものに限りです。

▶ メディア・オブジェクトを検索するには

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - フォームに添付するメディア・オブジェクトを検索するには、[フォーム]メニューで[添付]を選択します。
フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - グリッド・ローに添付するメディア・オブジェクトを検索するには、ローを選択して[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. メディア・オブジェクトで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[新規] - [検索]を選びます。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[新規] - [検索]を選びます。
3. <メディア・オブジェクトの検索>で、次のフィールドに値を入力し、[検索]をクリックします。
 - タイプ
検索するメディア・オブジェクト添付のタイプを入力してください。QBE を使用して検索を絞り込むこともできます。

定義されたメタデータのある添付ファイルのみ表示されます。
4. 添付ファイルを選び、[選択]をクリックします。
ビューア・パネルにメディア・オブジェクトが表示されます。
5. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

添付の名前変更

添付を追加する場合は、アイコン・パネルのアイコンの下にファイル名が表示されます。アイコンの名前は必要に応じて変更できます。

▶ 添付アイコンの名前を変更するには

1. メディア・オブジェクトで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[名前の変更]を選びます。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[名前の変更]を選びます。
2. アイコンの新しい名前を入力し、終了したらフォームをクリックします。

メディア・オブジェクトの削除

添付がなくなってきた場合は、メディア・オブジェクトの削除機能を使用してオブジェクトを除去することができます。テキストは削除すると完全に消去されます。イメージや OLE オブジェクトは削除するとレコードのリンクを切断することになります。オブジェクトに対するファイルは保管されたままになります。

▶ オブジェクトを削除するには

1. ファイル添付機能が使用できるフォームで、次のいずれかを実行します。
 - フォームへの添付を削除するには、[フォーム]メニューで[添付]を選択します。
フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にあるペーパークリップ・アイコンをクリックします。
 - グリッド・ローに添付されたファイルを削除するには、ペーパークリップ・アイコンの付いているローを選択して[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. <メディア・オブジェクト>のアイコン・パネルで、削除するテキスト・アイコンを選択し、[ファイル]メニューから[削除]を選びます。
3. [メディア・オブジェクトの削除を確認]で、[Yes]をクリックします。
アイコン・パネルからアイコンが消えます。
4. 終了したら、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

テンプレートの処理

<メディア・オブジェクト>から<メディア・オブジェクト・テンプレートの処理>フォームにアクセスできます。このフォームでは、添付テキスト・フォーマットの設定を簡単にするために、テンプレートを添付、作成、修正、および削除することができます。

▶ テンプレートを作成するには

1. ファイルが添付できるフォームで、テンプレートを削除するローを選択し、[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. <メディア・オブジェクト>のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[テンプレート]を選択します。
3. <メディア・オブジェクト・テンプレートの処理>で[追加]をクリックします。
4. <メディア・オブジェクト・テンプレートの改訂>で次のフィールドに値を入力し、次にテンプレート情報をワークスペースに入力します。
 - テンプレート名称
 - 記述
5. [追加]をクリックします。

▶ テンプレートを添付するには

1. ファイル添付機能が使用可能なフォームで、テンプレートを添付するローを選択し、[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[テンプレート]を選択します。
3. 〈メディア・オブジェクト・テンプレートの処理〉で、[検索]をクリックします。
検索条件を絞るには、QBE を使用してください。
4. テンプレートのプレビューを表示するには、ロー見出しのペーパークリップ・アイコンをダブルクリックします。
5. 修正するテンプレートのローをハイライトして、[選択]をクリックします。
6. テンプレートがメディア・オブジェクトのワークスペースに表示されます。

▶ テンプレートを修正するには

1. ファイルを添付できるフォームで、テンプレートを変更するローを選択し、[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[テンプレート]を選択します。
3. 〈メディア・オブジェクト・テンプレートの処理〉で、[検索]をクリックします。
QBE を使用してさらに検索することもできます。
4. 修正するテンプレートのグリッド・ローを選んで、[選択]をクリックします。
5. 必要に応じてテンプレートを修正し、[ファイル]メニューから[保存して終了]を選択します。

▶ テンプレートを削除するには

1. ファイル添付機能が使用可能なフォームで、テンプレートを削除するローを選択し、[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[テンプレート]を選択します。
3. 〈メディア・オブジェクト・テンプレートの処理〉で、[検索]をクリックします。
QBE を使用してさらに検索することもできます。
4. 削除するテンプレートのグリッド・ローをハイライトして[削除]をクリックし、[削除の確認]で[OK]をクリックします。

▶ テンプレートを使用した添付テキストを削除するには

1. ファイル添付機能が使用可能なフォームで、テンプレートを削除するローを選択し、[ロー]メニューから[添付]を選びます。
2. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルで、削除するテキスト・アイコンを選択し、[ファイル]メニューから[削除]を選びます。
3. [メディア・オブジェクトの削除を確認]で[Yes]をクリックします。
テンプレートおよびテキスト・アイコンは表示されなくなります。

メディア・オブジェクト・プロパティの処理

〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックするとポップアップ・メニューが表示されます。このポップアップ・メニューを使って、オブジェクトを参照したり、オブジェクトによってオブジェクトのプロパティを変更することができます。各オブジェクトには固有のプロパティがあります。

オブジェクトのメタデータを定義することもできます。メタデータには、オブジェクトの記述や作成者、作成日など、オブジェクトに関する情報が含まれます。この情報に基づいてオブジェクトを検索できます。

▶ メディア・オブジェクトのプロパティを設定するには

1. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、[プロパティ]を選択します。
メディア・オブジェクト・プロパティにアクセスするには、フォームやローには添付ファイルが存在している必要があります。
2. 〈メディア・オブジェクト・カテゴリの改訂〉の[キー情報]タブを表示します。
 - フォームのキーに関する情報
3. [フラグ]タブをクリックして、次の情報を検討します。
 - テキスト項目の使用
 - イメージ項目の使用
 - OLE 項目の使用
 - RTF テキストの使用
 - 開くときにテキスト項目を表示
 - 読取専用

▶ テキスト・プロパティを設定するには

1. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[プロパティ]を選択します。
2. [JDERTFEdit Control Properties]で、テキスト・プロパティ・フォームで、[User Audit Information(ユーザー監査情報)]のフィールドを検討します。
 - Created By(作成担当者)
 - Date Created(作成日付)
 - Time Created(作成時刻)
 - Updated By(更新担当者)
 - Date Updated(更新日付)
 - Time Updated(更新時刻)
3. [Printing Information(情報の印刷)]タブをクリックして、必要に応じて次の処理を実行します。
 - 「Check to print before report item(レポート項目を印刷する前にチェック)」というオプションをチェックする
 - [Effective From(有効開始)]フィールドに値を入力する
 - [Effective To(有効終了)]フィールドに値を入力する

▶ イメージ・プロパティを設定するには

1. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[プロパティ]を選択します。
2. [JDE Image View Control のプロパティ]タブで、次の情報を検討します。
 - File Name(ファイル名)
 - Queue Name(待ち行列名)
 - Queue Path(待ち行列パス)
3. イメージにタイトルを付けるには、次のフィールドに値を入力します。
 - Description(記述)

▶ OLE プロパティを参照するには

1. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルで、OLE オブジェクト・アイコン上でマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[プロパティ]を選択します。
2. [JDE Container Control のプロパティ]タブで次の情報を検討します。
 - File Name(ファイル名)
 - Queue Name(待ち行列名)
 - Queue Path(待ち行列パス)

▶ ショートカット・プロパティを設定するには

1. 〈メディア・オブジェクト〉のアイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[プロパティ]を選択します。
2. [JDEShortCut Control のプロパティ]の[General(一般)]タブで、次の情報を検討します。
 - Menu Selection(メニュー名)
 - Selection(選択 No.)
 - Icon File(アイコン・ファイル)
 - Icon Index(アイコン・インデックス)
3. 必要に応じて、次の処理を実行します。
 - [Colors(色)]タブをクリックして、ショートカットのハイパーテキストの色を設定します。
 - [Fonts(フォント)]タブをクリックして、サイズ、フォント、太字、斜体、下線、および取消線などのフォント・プロパティを設定します。

メディア・オブジェクトへのメタデータの追加

メディア・オブジェクトには、メタデータとして情報を追加することができます。メタデータには、作成者、作成日付、およびメディア・オブジェクト添付の言語などを含めることができます。

メタデータを追加する前に、〈メディア・オブジェクト・カテゴリ固定情報〉プログラム(P00167)でメディア・オブジェクトのメタデータ・フィールドを有効にしておいてください。

▶ メディア・オブジェクトのメタデータを有効にするには

〈メディア・オブジェクト〉メニュー(GH9016)で、メディア・オブジェクト固定情報(P00167)を選択します。

1. 〈メディア・オブジェクト・カテゴリ固定情報〉で、有効にするメディア・オブジェクトを検索します。

選択したメディア・オブジェクトに関連付けられたすべてのメディア・オブジェクトのメタデータ・フィールドが有効になります。
2. メディア・オブジェクトをハイライトして[選択]をクリックします。
3. 〈メディア・オブジェクト・カテゴリの固定情報の改訂〉で、使用可能なメタデータ・フィールド・オプションの横にあるチェックボックスをクリックして、これらのメタデータ・フィールドをメディア・オブジェクトで使用可能にします。
4. [OK]をクリックします。

▶ メタデータを表示して定義するには

1. 添付のあるフォームのメディア・オブジェクト・アイコン・パネルで、オブジェクト・アイコン上でマウスの右ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから[オブジェクトに特性を割当て]を選択します。
2. 〈メディア・オブジェクト・カテゴリの改訂〉フォームで、[汎用]タブをクリックして次のフィールドに情報を入力します。
3. [OK]をクリックします。

フィールド記述

記述	用語解説
記述	メディア・オブジェクトの内容を簡単に記した記述。
作成者	メディア・オブジェクトの作成者。
作成日付	オブジェクトの作成日付。
状況	メディア・オブジェクトが使用可能かどうかを示します。

フォーム・レベルでの OLE オブジェクトの添付

フォームのベース・レベルで、リンク・ツールバーにある OLE オブジェクト・ボタンを使用して OLE オブジェクトを添付することができます。メニュー・バーおよびツールバーは、すべての標準フォームに表示されます。フォームのベース・レベルで OLE オブジェクトを添付する場合は、レコードにではなくフォームに対してだけ添付されます。[OLE オブジェクト] ボタンを使用して添付した OLE オブジェクトは、どのレコードがフォーム上に表示される場合でもフォームを開くときには常に表示されます。

▶ フォーム・レベルでの OLE オブジェクトを添付するには

1. 基本フォームで、次のいずれかを実行します。
 - [リンク]のツールバーから[環境設定] - [OLE オブジェクト]をクリックする。
 - [環境設定]メニューから[OLE オブジェクト]を選択する。
 - フォームに添付ファイルがある場合は、ステータス・バーの右にある文書アイコンをクリックする。
2. 〈待ち行列の選択〉フォームで、待ち行列を選択します。

注:

添付するオブジェクトのある待ち行列がわからない場合は、システム管理者に連絡してください。

3. 〈OLE オブジェクト〉フォームで、次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[オブジェクトの追加]を選択する。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、[オブジェクトの追加]を選択する。
4. 〈Insert Object(オブジェクトの挿入)〉で、サポートされているオブジェクト・タイプのリストから作成するオブジェクトのタイプを選択し、[OK]をクリックします。

ワークステーションまたはネットワークにインストールされている機能によって、システムごとに選択項目が異なります。

5. オブジェクトを作成します。

6. 既存のオブジェクトを添付するには、[ファイルから]を選択して、システムから添付するオブジェクトを検索して[OK]をクリックします。

添付オブジェクトを新規に作成するか既存のオブジェクトを添付するかによって、オブジェクトに関連付けられたアプリケーションがビューア・パネルに表示されるときに、ブランクのワークスペースが表示されるか既存のオブジェクトが表示されるかという違いがあります。

メニュー・バーには、埋め込まれたアプリケーションのメニュー・バーが表示されます。たとえば Excel ワークシートを選択する場合、メニュー・バーに Excel 用メニューが表示されます。

7. ビューア・パネルでオブジェクトを編集します。
8. メイン・フォームに戻るには、アプリケーション・ワークスペースにある〈OLE オブジェクト〉フォームの「X」マークをクリックします。

▶ フォーム・レベルでの OLE オブジェクトを削除するには

1. 基本フォームで、次のいずれかを実行します。
 - [リンク]のツールバーから[環境設定] - [OLE オブジェクト]をクリックする。
 - [環境設定]メニューから[OLE オブジェクト]を選択する。
 - ステータス・バーの右にある文書アイコンをクリックする。
2. 〈OLE オブジェクト〉フォームで、オブジェクトを選択して次のいずれかを実行します。
 - [ファイル]メニューから[オブジェクトの削除]を選択する。
 - アイコン・パネルでマウスの右ボタンをクリックし、[オブジェクトの削除]を選択する。
3. [メディア・オブジェクトの削除を確認]で[Yes]をクリックします。
4. メイン・フォームに戻るには、アプリケーション・ワークスペースにある〈OLE オブジェクト〉フォームの「X」マークをクリックします。

差し込み印刷ワークベンチ

差し込み印刷ワークベンチは、Microsoft Word 6.0 以降の文書を J.D. Edwards のレコードとマージして、雇用に関する確認書類などを自動的に印刷するアプリケーションです。特定のアプリケーション・スイート(人事管理など)では、これらの文書が通常のワークフロー処理で使われます。どのアプリケーションが差し込み印刷文書を使用するかについては、使用するアプリケーションのガイドを参照してください。これらのアプリケーションでは、個々の差し込み印刷文書がワークフロー処理の一部として印刷され、ユーザーは作業する必要がありません。

差し込み印刷ワークベンチを使うと、J.D. Edwards ソフトウェアでのビジネス文書にテキストを追加または変更したり、新しい文書を作成したり削除したりできます。

J.D. Edwards ソフトウェアでは、差し込み印刷文書の HTML バージョンを作成して Web クライアント・ユーザーに送信することができます。差し込み印刷にテキストとフィールドを追加したら、HTML バージョンにコピーして差し込み印刷文書を Web クライアント・ユーザーに送信できます。差し込み印刷文書が作成されたら、〈Web 差し込み印刷〉プログラム (P05WEBMM) で文書が表示されます。

差し込み印刷文書の変更

〈差し込み印刷ワークベンチの設定〉(P980014)を使うと、差し込み印刷文書および差し込み印刷文書に関連付けられた Microsoft Word ファイルのプロパティを変更できます。差し込み印刷の記述を変更できますが、文書名やデータ構造体は変更できません。Microsoft Word ファイルのテキストまたは差し込み印刷フィールドは追加、変更、または削除できます。

差し込み印刷文書を変更すると、文書を HTML で保存して Web クライアント・ユーザー用に作成することもできます。

▶ 差し込み印刷文書を変更するには

注:

差し込み印刷文書の内容を変更するには、ワークステーションに Microsoft Word 6.0 以降のバージョンがインストールされている必要があります。

〈人事管理の設定〉メニュー (G05B4) で、〈差し込み印刷ワークベンチの設定〉プログラム (P980014W) を選びます。

1. 〈Web 差し込み印刷テンプレート〉で、[検索] をクリックします。
使用可能な差し込み印刷文書のリストがグリッドに表示されます。
2. 文書を選んで [選択] をクリックします。
3. 〈差し込み印刷 Web 文書詳細〉で、次のフィールドで差し込み印刷文書の記述を変更できます。
 - 記述
差し込み印刷文書の記述を入力します。

注:

文書名やデータ構造体は変更できません。文書名やデータ構造体のいずれかを変更する場合は、新しい差し込み印刷文書を追加する必要があります。「差し込み印刷文書の追加」を参照してください。

4. [OK]をクリックします。
5. <差し込み印刷 Web テンプレート>で、文書を選んで[ロー]メニューから[テンプレート編集]を選択します。
テンプレートは Microsoft Word メディア・オブジェクトとして表示されます。
6. <差し込み印刷 Web テンプレート>で、Microsoft Word の書式設定機能を使ってテンプレートを編集します。
7. 文書の差し込み印刷フィールドを変更します。新しいフィールドを挿入するには、Microsoft Word のツールバーの[Insert Marge Field(差し込みフィールドの挿入)]リストからフィールドを選びます。
フィールドはテキストと同じように削除できます。
8. HTML バージョンの文書をコピー/貼り付けるには、文書の内容をハイライトしてコピーし、ツールバーの[HTML テンプレート編集]をクリックします。
Microsoft Word 文書が表示されます。
9. 内容を Word 文書に貼り付けます。
10. [ファイル]メニューから、[Web ページとして保存]を選択して Word を終了します。
11. <差し込み印刷 Web テンプレート>で、[OK]をクリックします。

参照

- Microsoft® Word の使い方については、Microsoft® Word のガイド

差し込み印刷文書の追加

J.D. Edwards ソフトウェアには、事前定義された差し込み印刷文書がインストールされています。アプリケーションではこれらのドキュメントが使用できます。ただし、文書を別に追加する場合は、<差し込み印刷ワークベンチの設定>を使用する必要があります。それと同時に、差し込み印刷文書と(人事管理のような)特定アプリケーションのワークフロー処理をリンクさせるビジネス関数を作成または変更する必要があります。J.D. Edwards ソフトウェアのデータ構造体を理解していることも必要です。

注意:

差し込み印刷文書、J.D. Edwards のビジネス関数およびデータ構造体に関係するため、文書の追加はシステム管理者または IT 担当者だけが行うようにしてください。ビジネス関数およびデータ構造体については『開発ツール』ガイドを参照してください。

▶ 差し込み印刷文書を追加するには

1. 〈人事管理の設定〉メニュー(G05B4)で〈差し込み印刷ワークベンチの設定〉プログラム(P980014)を選択します。
2. 〈Web 差し込み印刷テンプレート〉で[追加]をクリックします。
3. 〈差し込み印刷 Web 文書詳細〉で、次のフィールドに必要な内容を入力し、[OK]をクリックしてください。
 - 文書名
差し込み印刷文書の名前を入力します。10文字以下で指定してください。
 - 記述
差し込み印刷文書の記述を入力します。
 - 待ち行列名
フィールドに“OLEQUE”を入力します。これはシステムで既に設定されているパス・ロケーションです。これが差し込み印刷が保管されるロケーションとなります。自分用の待ち行列を使用する場合は、他のユーザーが差し込み印刷文書にアクセスできるように、セントラル・サーバーにセットアップしてください。OLEQUE のパス情報は、メディア・オブジェクト待ち行列テーブル(F98MOQUE)に保存されています。
 - データ構造体名
差し込み印刷文書で使用するデータ構造体名を入力してください。データ構造体には、差し込み印刷文書で使用できるすべてのフィールドが含まれています。

[区切り文字の指定]が表示されます。ここでは、フィールドとヘッダー・ファイル間で区切文字としてシステムが認識するテキスト記号が指定されます。差し込み印刷では、ヘッダー・ファイルを使用して差し込み印刷で使用したフィールドを指定します。ヘッダー・ファイルは自動的に作成されます。
4. [区切り文字の指定]で次の情報を[フィールド区切り文字]に次の記号を入力してください。
 - |

[区切り文字の指定]が表示されます。ここでは、データ・ファイルのデータ間で区切文字としてシステムが認識するテキスト記号が指定されます。差し込み印刷では、ヘッダー・ファイルを使って差し込み印刷文書で使用したフィールドを指定します。データ・ファイルは自動的に作成されます。
5. [Data Record Delimiters]で[Field delimiter]フィールドに記号 (|)を入力し、[OK]をクリックします。

〈差し込み印刷 Web テンプレート〉フォームに新しい Microsoft Word 文書が表示されます。
6. Microsoft Word の書式(設定)コントロールとツールを使用して、文書のテキストを入力します。
7. 文書に差し込み印刷フィールドを入力します。

OneWorld フォームに埋め込まれた Microsoft Word のツールバーに表示される[差し込みフィールドの挿入]リストからフィールドを選択すると差し込みフィールドを文章中の指定した場所に挿入できます。テキストの場合と同じように入力できます。

使用できるフィールドは、文書用に指定したデータ構造体によって決定されます。

- HTML バージョンの文書をコピー/貼り付けるには、文書の内容をハイライトしてコピーし、ツールバーの[HTML テンプレート編集]をクリックします。

Microsoft Word 文書が表示されます。

- 内容を Word 文書に貼り付けます。
- [ファイル]メニューから、[Web ページとして保存]を選択して Word を終了します。
- 〈差し込み印刷 Web テンプレート〉で、[OK]をクリックします。

この新しい差し込み印刷文書をアプリケーション・ワークフローで使用するには、文書に関連付けられたビジネス関数を変更する必要があります。

注:

ビジネス関数の変更については『開発ツール』ガイドの「ビジネス関数」を参照してください。

差し込み印刷文書の削除

〈差し込み印刷ワークベンチ〉を使用して差し込み印刷文書を削除する方法について説明します。

注意:

差し込み印刷文書を削除する前に、アプリケーション・ワーク・フロー処理で印刷が設定されていないことを確認してください。

▶ **差し込み印刷文書を削除するには**

〈人事管理の設定〉メニュー(G05B4)で、〈差し込み印刷ワークベンチの設定〉プログラム(P980014)を選びます。

- 〈Web 差し込み印刷テンプレート〉で、[検索]をクリックします。
使用可能な差し込み印刷文書のリストがグリッドに表示されます。
- 〈Web 差し込み印刷テンプレートの処理〉で、文書を選んで[削除]をクリックします。
メッセージ・ボックスが表示され、選択したドキュメントを削除するかどうか確認されます。
- [OK]をクリックします。

対話型バージョン

バージョンとは、ユーザーが定義する一連のアプリケーション・スペックを意味します。ユーザーは、スペックの一部を変更することにより、対話型アプリケーションの実行を制御できます。対話型バージョンは、通常はメニュー選択としてアプリケーションに関連付けられており、ワークステーションで実行されます。

処理オプションは、バージョンごとに異なる値を指定できます。処理オプションで指定した値は、アプリケーションの実行時に対話型バージョンに渡されます。

バージョンはアプリケーションのスペックを変更することなく、アプリケーションの動作を制御できます。実際のバージョン・テーブルの作成、修正、保存ディレクトリの決定は、通常はシステム管理者が行います。バージョンは、J.D. Edwards ソフトウェアのリリースをアップグレードしても、そのまま使用できます。

対話型アプリケーションの起動時には、バージョン・リストが表示されることがあります。これは、アプリケーション設計者が処理オプションをアプリケーションに添付した場合にだけ表示されます。システム管理者がメニュー・デザイン時にアプリケーションを非表示で実行するよう設定した場合、アプリケーションの起動時にはバージョン・リストは表示されず、デフォルトのバージョンが実行されます。アプリケーションのセキュリティ割当てによっては、ユーザーが目的に応じて異なるバージョンを選択したり作成したりできます。

たとえば〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)では、〈対話型バージョン〉オプション(P983051)に処理オプションが添付されていないため、アプリケーションにバージョンがない場合を例にとります。ただし、〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)に処理オプションが添付されていない場合は、システム管理者がアプリケーションにバージョンを添付しないとアプリケーションが正しく開かれません。そうでない場合は、アプリケーションが正常に開かれていません。システム管理者は複数のバージョンを作成して、各バージョンにそれぞれ異なるスペック(セキュリティ・レベル)が含まれるようにすることができます。

処理オプションによるバージョン制御

バージョンで定義した処理オプションはアプリケーションの実行を変えるパラメータの集まりです。機能的には、初期化(.INI)ファイルやコマンド行の引数に似ています。これらの処理オプションを使うと、アプリケーションを開くときのパラメータを指定できます。たとえば、表示フォームの選択、フィールドの表示または非表示の指定、オーダー処理順序定義のデフォルトの状況変更、およびフィールドに表示されるデフォルト情報の設定などを指定できます。

処理オプションを使って、次のようなランタイム一時変更を設定することができます。

- アプリケーションの機能を変更します。たとえば、オーダー保留のロジックをオンまたはオフに設定できます。オーダーを入力してから、ピッキング・リスト印刷を自動的に行うかどうか指定することもできます。
- デフォルト値を変更します。たとえば受注入力では、伝票タイプの値のデフォルト(受注入力または見積り)などを設定したり、行タイプ(在庫や非在庫項目など)を設定したりできます。
- フィールドの表示の制御。たとえば処理オプションを設定して、原価フィールド、価格フィールド、またはコミッション・フィールドなどを表示または非表示にすることができます。

処理オプションのないアプリケーションもあります。Solution Explorer で[編集]メニューから[プロンプト] - [処理オプション] (OneWorld エクスプローラで[編集]メニューから[プロンプト] - [処理オプション])がグレー表示されている場合は、アプリケーションに関連付けられた処理オプションがないか、またはシステム管理者によって処理オプションが使用不可にされています。処理オプションを対話型アプリケーションに添付してから、バージョンを使用してください。

システム管理者は、アプリケーションのバージョンに対するアクセスを制限できます。この場合、Solution Explorer でメニューから[プロンプト] - [処理オプション] (J.D.Edwards エクスプローラで[編集]メニューから[プロンプト] - [処理オプション]オプション)はグレー表示されます。ユーザーが対話型バージョンからアクセスが制限されているバージョンを開こうとした場合、セキュリティ・メッセージが表示され、バージョンへのアクセス権がないことを警告されます。

対話型バージョンとバッチ・バージョンの違い

対話型バージョンには、処理オプションとユーザー一時変更があります。処理オプションでは、データの選択と順序設定を行うことができます。また、対話型バージョンではチェックインやチェックアウトは行いませんが、バッチ・バージョンのローカルスペックは、チェックインやチェックアウトが必要です。

参照

- 処理オプションおよびバージョンの管理については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「セキュリティ」

対話型バージョンの処理

対話型バージョンの処理を行う場合、処理オプション、バージョン詳細を変更し、バージョンをコピーまたは作成します。対話型バージョンは、システムがバージョンを実行できるように Solution Explorer でメニュー選択に関連付ける必要があります。

Solution Explorer でバージョンを表示するには、[編集]メニューから[バージョンの表示]を選択するか、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈対話型バージョン〉プログラムを選択します。バージョンにフィルタをかけると、使用するバージョンのみを表示することができます。バージョン表示にフィルタをかけるには、[フォーム]メニューの[表示オプション]の中から1つを選びます。

参照

- 指定した対話型およびバッチ・バージョンの処理オプションの内容を表示するレポートの作成については「処理オプション・レポートの作成」

対話型バージョンのバージョン詳細の処理

バージョン詳細を使うと、バージョン・タイトルを変更したり、処理オプションの表示の有無、またはセキュリティ・レベルを指定することができます。バージョンが最後に修正された日および修正したユーザー名を含む情報を検討できます。

注:

セキュリティ・レベルによっては、バージョン詳細情報を変更できない場合があります。

▶ 対話型バージョンでバージョン詳細を処理するには

1. 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈対話型バージョン〉プログラム (P983051) を選択します。
2. 〈対話型バージョンの処理〉フォームで、[対話型アプリケーション] フィールドにプログラム ID を入力して [検索] をクリックします。
たとえば、〈受注オーダー入力〉アプリケーションのバージョンを検索するためには、“P4210” と入力します。
3. グリッドで、コピーするバージョンを選択します。
4. [ロー] メニューから [バージョン詳細] を選択します。
5. 〈バージョン詳細〉では、次の情報を変更できます。
 - バージョン・タイトル
バージョンに関する情報を入力します。
 - プロンプト・オプション
プログラム実行時の決定方法を指定します。処理オプションなし、非表示で実行、または実行時に処理オプションを表示する、のいずれかを選択できます。
 - セキュリティ
バージョンのセキュリティを決定します。ユーザーによって決定され、アプリケーションのセキュリティには関係ありません。セキュリティ・レベルおよびバージョンのセキュリティ・レベルによっては、バージョン詳細の処理が実行できない場合があります。
 - クライアント・プラットフォーム
入力した値によって、バージョンが Windows クライアント・ユーザー、Web クライアント・ユーザー、または両方に使用可能かどうかを決定されます。デフォルトでは、Windows と Web の両方のクライアントに設定されています。
6. 必要に応じて、フォームに表示されるその他の情報を検討します。

フィールド記述

記述	用語解説
バージョン・タイトル	バージョン番号の横に表示されるバージョンの記述。バージョン・タイトルとレポート・タイトルは異なります。このフィールドでは、バージョンの用途を記述します。たとえば、ピッキング・リストを作成するアプリケーションのバージョンの1つは[ピッキング・リスト - 会計]、もう1つは[ピッキング・リスト - 在庫管理]とすることができます。
プロンプト・オプション	プログラムの実行時に処理オプションを表示するかどうかを指定します。有効な値はユーザー定義コード(98/GR)に定義されています。 blank = 処理オプションを無効にする 1 = 処理オプションを表示しないでプログラムを実行する(非表示実行) 2 = 処理オプションを表示する
セキュリティ	このフィールドでは、レポート・バージョンのユーザー・アクセスを制限できません。次の値を使用します。 0 セキュリティなし。処理オプション値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、どのユーザーでも行うことができます。新しいバージョンを追加する場合のデフォルトです。 1 中レベルのセキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンの削除は、最後に変更したユーザーだけが行うことができます。バージョンのインストール、コピー、転送、実行は、どのユーザーでも行えます。JDE デモバージョンはこの形態で出荷されます。 2 中レベルから完全セキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、およびバージョンの転送、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。バージョンのインストールやコピーは、どのユーザーでも行えます。 3 完全セキュリティ。処理オプションおよび詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。
作成者	ユーザー・プロファイルを識別するコード。
最終更新者	アプリケーションまたはバージョンを最後に修正したユーザーのユーザーIDを示します。
前回変更	アプリケーションまたはバージョンが最後に変更された日付。
パス・コード	インストール・アプリケーションの場合、環境名はプラン名とも呼ばれ、インストール/再インストールのための環境を識別します。環境またはバージョン・アプリケーションの場合、アプリケーションまたはバージョンのスペック・データの場所を識別するパス・コードです。

対話型バージョンのコピー

既存のバージョンをコピーして、その設定を目的に応じて修正することができます。コピーされたバージョンには、既存のバージョンの処理オプションの値が継承されます。

バージョンをコピーする際は、セキュリティを新しいバージョンに追加してください。セキュリティ設定には「セキュリティなし」から「完全セキュリティ」まであります。「セキュリティなし」の場合、どのユーザーでもバージョンを修正したり、実行したりできます。「完全セキュリティ」の場合は、バージョンの修正を前回は行ったユーザーだけがそのバージョンを修正し、実行することができます。

注:

セキュリティ・レベルおよびバージョンのセキュリティ・レベルによっては、バージョンをコピーできない場合があります。

▶ 対話型バージョンをコピーするには

1. 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈対話型バージョン〉プログラム (P983051) を選択します。
2. 〈対話型バージョンの処理〉フォームで、[対話型アプリケーション] フィールドにプログラム ID を入力して [検索] をクリックします。
たとえば〈住所録〉プログラムのバージョンを検索するには、“P01012” と入力します。
3. グリッドで、コピーするバージョンを選択します。
4. [コピー] をクリックします。
5. 〈バージョン・コピー〉で、次のフィールドに入力し、[OK] をクリックしてください。
 - 新しいバージョン
バージョンの ID を入力してください。
 - バージョン・タイトル
バージョンに関する情報を入力します。
 - セキュリティ
バージョンのセキュリティを決定します。
6. 〈対話型バージョンの設計〉で、次のいずれかを選択します。
 - バージョン詳細
〈バージョン詳細〉フォームにアクセスしてバージョンを変更します。

注:

バージョンの変更については「対話型バージョン用バージョン詳細の処理」を参照してください。

- 処理オプション
バージョンの処理オプションを変更します。
 - 実行
バージョンを実行します。
7. 対話型バージョンを変更したら、[OK]をクリックします。

対話型バージョンの作成

既存バージョンを使用せずに新規にバッチ・バージョンを作成できます。バッチ・バージョンを作成する際、新規バージョンにセキュリティを設定できます。セキュリティ設定には「セキュリティなし」から「完全セキュリティ」まであります。「セキュリティなし」の場合、どのユーザーでもバージョンを修正したり、実行したりできます。「完全セキュリティ」の場合は、バージョンの修正を前回行ったユーザーだけがそのバージョンを修正し、実行することができます。

▶ 対話型バージョンを作成するには

1. 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈対話型バージョン〉プログラム (P983051) を選択します。
2. 〈対話型バージョンの処理〉フォームで、[対話型アプリケーション] フィールドにプログラム ID を入力して [検索] をクリックします。
たとえば、〈受注オーダー入力〉アプリケーションのバージョンを追加するには、“P4210” と入力します。
3. [追加] をクリックして、新しいバージョンを作成します。
4. 〈バージョンの追加〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - バージョン ID
バージョンの ID を入力してください。
 - バージョン・タイトル
バージョンに関する情報を入力します。
 - プロンプト・オプション
プログラム実行時の処理オプション表示を指定します。処理オプションなし、非表示で実行、または実行時に処理オプションを表示する、のいずれかを選択できます。

バージョンの追加時には空白は使用できません。対話型アプリケーションのすべてのバージョンに処理オプションが添付されている必要があります。
 - セキュリティ
バージョンのセキュリティを決定します。

5. 〈対話型バージョンの設計〉で、次のいずれかを選択します。

- バージョン詳細

〈バージョン詳細〉フォームにアクセスしてバージョンを変更します。

注:

バージョンの変更については「対話型バージョン用バージョン詳細の処理」を参照してください。

- 処理オプション

バージョンの処理オプションを変更します。

- 実行

バージョンを実行します。

6. [OK]をクリックします。

参照

- メニュー項目へのバージョンの添付については『システム・アドミニストレーション』ガイドの「メニュー設計」
- 「対話型バージョンの処理オプション」

バッチ・バージョン

バッチ・バージョンとは、バッチ・プログラムに関してユーザーが定義する一連のスペックを意味します。これらのスペックはバッチ処理を制御します。通常、バッチ・バージョンはレポートまたはバッチ処理と関連付けられて、J.D. Edwards のエンタープライズ・サーバー上でバッチ・ジョブとして実行されます。

レポート用バッチ・バージョンは、基本レポート(またはバッチ・スペック)とは別のファイルに含まれる事前定義済みのスペックを表します。これらのスペックはレポートのロジック機能と外観を制御します。バージョンには処理オプションのデフォルト値およびレポート設計に関する追加設定が含まれます。アプリケーションのセキュリティの割り当て方によっては、ユーザーが目的に応じて異なるバージョンを選択したり作成したりできます。

バージョンは、レポート機能を修正する有効で便利な方法です。通常、最初のバッチ・バージョンは管理者によって制御、作成、修正、検索されます。バッチ・バージョンは、J.D. Edwards ソフトウェアや特定のアプリケーションを新しいリリース・レベルにアップグレードしても、修正なしでそのまま適用できます。

バッチ・アプリケーションを実行する(バッチ・ジョブを投入する)には、バッチ・バージョンを使用する必要があります。レポートの設計によっては、そのバージョンの処理オプションを一時変更するオプションがあります。この他、データ順序設定およびデータ選択の実行、デフォルト・ロケーションの一時変更、基本レポートの基本レイアウトの一時変更を行うこともできます。

たとえば、同じ会計情報をアメリカとフランスの2つの子会社用に作成すると仮定します。まずアメリカ用バージョンを作成して、特定の期間の会計情報をドルで表示し、アメリカ用の用紙サイズに合わせてレポートのフォーマットを設定します。次にフランス用バージョンを作成して、異なる期間に対して会計情報を仏フランで表示し、ヨーロッパの用紙サイズに合わせてレポートのフォーマットを設定できます。フランスの子会社に対しては、フランス用バージョンにデータ項目を加えることにより、追加情報を表示することもできます。

バッチ・バージョンの特徴

バッチ・バージョンには、次のような特徴があります。

- バージョン・レベルでのデータ順序。たとえば小切手の場合、日付または小切手番号順にソートすることができます。住所録レコードの場合は、従業員か得意先別にソートしたり、アルファベット順にソートすることができます。
- バージョン・レベルでのデータ選択。たとえば、ビジネスユニット 10-30 および 70、カテゴリが「1 = 北」であるすべての住所録レコードなど、どのレコードを取り込むかを指定できます。
- バージョン・セクション・レベルでの追加または一時変更。レポート設計者は、バージョン・セクション・レベルで、基本レポート・セクションの機能を追加したり一時変更したりできます。これらのセクション・レベル一時変更は、個々のセクションにのみ適用される点でバージョン・レベルの一時変更とは異なります。セクション・レベルでは、セクション・レイアウト、データ選択、データ順序設定、イベント・ルール、データベース出力を一時変更できます。基本レポートにある機能は削除できません。
- 特定の処理オプション値。たとえば、処理オプションを設定し、〈仕訳の転記〉を実行してデフォルトとは異なる勘定科目コード形式で印刷することができます。

バッチ・バージョンの処理オプションには、次のような機能があります。

- 機能の変更。たとえば、レポートを実行してから、レコードを実績ファイルに除去するよう、処理オプションを設定することができます。
- 入力パラメータの変更。処理オプションを設定し、レポートの処理に使用するカテゴリ・コードを指定できます。
- 日付の定義。処理オプションを設定し、レポートを実行する会計年度を定義できます。[売掛金経過計算]レポートでの経過日数を定義することもできます。

Web クライアントによるバッチ・バージョンの作成

Web クライアントを使用する場合は、Web クライアントで〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで[追加]または[コピー]オプションを使用して、新しいレポートのバッチ・バージョンを作成します。新しいバッチ・バージョンは Web のみであることが示されます。Web のみのバージョンでデータ選択や、順序、処理オプションを変更するには、[ロー]メニューから[データ選択]、[データ順序設定]、または[処理オプション]を選択します。

Web クライアント以外の環境で Web のみのバージョンを実行するには、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を使用してバージョンをチェックアウトしてから、標準クライアントでチェックインします。〈オブジェクト管理ワークベンチ〉により自動的に、標準クライアントで動作するように Web のみのバージョンが変換されます。

Web のみのフラグを完全に削除するには、eGenerator ツールを使用してバッチ・バージョンを作成してください。eGenerator ツールが実行されるマシンにはスペックが必要なため、eGenerator ツールを実行する同じマシンで変換プロセスを実行するか、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉で[取得]を使用して、eGenerator ツールを実行しているクライアントにスペックを取り込みます。

Web のみのフラグが付いている場合、バッチ・バージョンはコピーできません。

参照

- eGenerator の使用については、『Web サーバー・インストール』ガイドの「OneWorld/ERP のシリアル化されたオブジェクトの生成」

バッチ・バージョンの処理

バッチ・バージョンの場合も、チェックインやチェックアウトを実行したり、バージョン用にチェックアウトしたものを消去したりするのに、オブジェクト・ライブラリアンと同じ処理が使用されます。このツールを使用して、ワークステーションとサーバー間の移動を制御します。バッチ・バージョンはバッチ・アプリケーションから直接投入されます。

バッチ・バージョンを作成すると、基本レポート・スペックと同様に、そのバージョンに対するスペック・レコードは、ユーザーのワークステーションにのみ存在します。バージョンを他のユーザーが使用できるようにするには、そのバージョンをサーバーにチェックインする必要があります。バージョンをチェックインすると、バージョン・スペック・レコードが、現行環境のパス・コードに従ってセントラル・オブジェクト・データソース(サーバー)にコピーされます。

バージョンにはチェックインした後も、一定の変更を加えることができます。たとえば、処理オプションを変更すると、ローカル・バージョンをチェックインしなくても変更が反映されて、すぐに有効となります。これは、バージョンの処理オプションが、サーバーのバージョン・リスト・テーブル(F983051)に保存されたバージョン・レコードに、フィールドとして直接保管されているためです。

バッチ・バージョンをセントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)にチェックインすると、そのバージョンをインストールしたユーザーは最新のバージョンにアクセスできます。複数ユーザーが同じバージョンを同時にチェックアウトすることはできません。〈バージョン詳細〉フォームには、バージョンをチェックアウトしたユーザー名が表示されます。

新規バッチ・バージョンは、既存バージョンを使用せずに作成することができます。たとえば、既存バージョンのレイアウトまたはデータ選択を使用しないために新規バージョンを作成する場合などがあります。新規バージョンを作成する際は、基本レポートによるスペックを使用します。

基本(テンプレート)レポートを変更した場合は、一時変更を含むバージョンを作成しない限り、基本レポート用に存在するすべてのバージョンに対してその変更が「プッシュ」されます。

バージョンをコピーすると、コピーしたバージョンには既存バージョンと同じデータ選択およびデータ順序が継承されます。

参照

- 一時変更については『エンタープライズ・レポート・ライティング』の「バッチ・バージョンの設計変更」

バッチ・バージョンの実行

バッチ・バージョンがフォームに関連付けられている場合、フォームの[レポート]メニューからアクセスして、表示および印刷することができます。基本レポートおよびレポート・バージョンは、メニュー上にアイコンとして表示されます。

ほとんどの場合、バッチ・バージョンは処理が効率的に行われるように、エンタープライズ・サーバーに投入します。バッチ・バージョンはデフォルトではサインオンした環境で実行されますが、投入時にもこのロケーションを一時変更することができます。バッチ・ジョブをエンタープライズ・サーバーに投入すると、レポートをプレビューでき、〈サーバーの処理〉プログラム(P986116)を使用して、待ち行列にあるジョブの実行状況をモニタリングすることもできます。

エンタープライズ・サーバーにレポートを投入する際に、そのレポートが現在使用しているワークステーションにない場合は、そのスペックを使用するワークステーションに転送するために、セントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)は、最初に JITI(ジャスト・イン・タイム・インストール)を実行します。JITI 実行後、ワークステーションはエンタープライズ・サーバーへの投入を続行し、ローカル・バージョン・スペック(バージョンに加えた変更)がエンタープライズ・サーバーに転送されます。

バッチ・バージョンに Web のみのフラグが付いている場合や、ファット・クライアント上でバッチ・バージョンを実行している場合は、ファット・クライアント・バージョンに変換してから実行してください。Web のみのバッチ・バージョンを変換するには、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉を実行してバージョンをチェックイン/チェックアウトしてください。

参照

- バッチ・バージョンの実行については『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「レポートの投入」
- 〈サーバーの処理〉プログラムについては「*Configuration Planning and Setup (構成設定プランニングおよびセットアップ)*」パッケージに含まれる『システム・アドミニストレーション』ガイドの「*サーバー・プログラムの処理*」

バッチ・バージョンの処理フォームへのアクセス

〈バッチ・バージョンの処理〉フォームは、バッチ・バージョンを管理する際のエン트리・ポイントで、さまざまな方法でアクセスすることができます。

▶ バッチ・バージョンの処理フォームにアクセスするには

J.D. Edwards Solution Explorer を開きます。

〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から、〈バッチ・バージョン〉プログラム (P98305) を選択します。

〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームが表示されます。

関連タスク

〈バッチ・バージョンの処理〉にアクセスするには次の方法もあります。

- バッチ・アプリケーションのメニューをハイライトして、[編集]メニューから[プロンプト] - [バージョン]を選択します。
- バッチ・アプリケーションを右クリックして、表示されるプルダウン・メニューから[プロンプト] - [バージョン]を選択します。バッチ・アプリケーションに関連するバージョンがない場合、そのバッチ・アプリケーションにバージョンをコピーまたは追加して、バージョンを実行する必要があります。
- 〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈バッチ・バージョン〉プログラム (P98305) を選択します。

バッチ・バージョンの設計変更

バッチ・バージョン用のスペックを変更する場合、基本 (テンプレート) レポートを変更する必要はありません。スペックはバージョン・レベルで一時変更できます。バッチ・バージョンに加えたスペック変更は、その基本レポートに基づいた他のバージョンには影響しません。また、基本レポート・レベルでスペックを変更しても、その変更はユーザーが一時変更したバージョン・スペックには反映されません。

バージョン・レベルでスペックを変更する場合、〈バージョン詳細〉フォームの [バージョン詳細] フィールドに、修正内容を記入しておきます。記述欄には、基本レポートのスペックとバージョンのスペックの違いを記述しておくことをお勧めします。

レポート・バージョンでは次の項目を変更できます。

- Section Layout (セクション・レイアウト)
- Section Data Selection (セクション・データ選択)
- Section Event Rules (セクション・イベント・ルール)
- Section Database Output (プリンター時変更)
- Section Sort Sequence (セクション・ソート順序)

注:

Web クライアントを使用している場合、バージョンに Web のみのフラグが付いていなければ、バージョンにはランタイム変更のみ行うことができます。ランタイム変更は維持されません。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』の「バッチ・バージョン用バージョン詳細の処理」

はじめる前に

- スペックの一時変更は、バージョン・レベルでのみ行います。一時変更用バージョンをコピーまたは作成するには、『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのコピー」または「バッチ・バージョンの作成」を参照してください。
- 一時変更用バージョンを作成するには、〈Report Design(レポート設計)〉にアクセスする前にバージョンをチェックアウトします。詳しくは『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウト/チェックイン」を参照してください。
- レポート設計ツールが開いている場合は閉じてください。

▶ バッチ・バージョンの設計を変更するには

バッチ・バージョン)プログラム(P98305)を実行してレポートのバージョンを検索/実行します。また、バージョン詳細情報、データ選択、データ順序も修正できます。

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、次のフィールドに値を入力します。

- バッチ・プログラム ID

たとえば、〈One Line Per Address〉プログラムのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。

2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 表示するバージョンを指定するには、[フォーム]メニューから次のいずれかを選択します。

- 使用可能なバージョン(ワークステーションで使用可能)
- マイ・バージョン(作成したバージョン)
- すべてのバージョン(バッチ・アプリケーションに存在)

すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

Web クライアントを使用していない限り、どのバージョンでも削除できます(アプリケーションやユーザー・セキュリティによって異なります)。Web クライアントを使用している場合は、Web のみのフラグが付いたバージョンのみ削除できます。ただし、マシンにないバージョンを削除しようとする、警告メッセージが表示されます。

4. グリッドで、処理するバージョンを選択します。

- [ロー]メニューから[上級]を選択します。

注:

次のステップを実行する前に、バッチ・バージョンをチェックアウトしておく必要があります。

- [上級]オプションで、[ロー]メニューから[バージョン設計]を選択します。

〈Report Design〉が開き、そのバージョンのレポート・スペックが表示されます。

- 〈Report Design〉で、セクションをクリックして、[Section]メニューから[Override Version Specifications]を選択します。

〈バージョン・スペックの一時変更〉にアクセスして変更する一時変更を選択するまで、セクションに変更を加えることはできません。

セクションへの一時変更は、そのセクションに対してのみ有効です。他のセクションは、別に一時変更する必要があります。

- いずれかの一時変更を選び、[OK]をクリックします。

注:

バージョン・スペックを一時変更する場合、基本(テンプレート)レポートでそれらのスペックを変更しても、このバージョンには反映されません。たとえば、[Section Data Selection (セクション・データ選択)]をオンにしてバージョンのデータ選択を変更し、後で基本レポートのデータ選択を変更しても、バージョン・レベルでのデータ選択にはその変更は反映されません。

- Section Layout (セクション・レイアウト)

バッチ・バージョンでカラムを削除、追加、またはカラム見出しを変更する場合、この一時変更を選択します。

- Section Data Selection (セクション・データ選択)

顧客情報のみまたは従業員情報のみを表示するバージョンなど、特定のデータ選択を行うバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。

- Section Event Rules (セクション・イベント・ルール)

指定パーセント以上の昇給のあった社員を表示するバージョンなど、特定のイベント・ルールを使用したバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。

- Section Database Output (プリンター一時変更)

デフォルト・プリンタ以外のプリンタから印刷するバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。ページ・ヘッダーなどのセクションをこのプリンタから印刷する場合、それらの各セクションのスペックも同様に一時変更する必要があります。

- Section Sort Sequence (セクション・ソート順序)

基本レポートとは異なるソート条件を持つバッチ・バージョンが必要な場合、この一時変更を選択します。たとえば、住所番号ではなく名称でバージョンをソートすることができます。

9. 変更は、ローカル・ワークステーションのバージョンにのみ影響します。これらの変更を他のユーザーも使用できるようにするには、バージョンをチェックインする必要があります。バージョンをチェックインしない場合は、チェックアウトを消去して他のユーザーがこのバージョンをチェックアウトできるようにしてください。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」
- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「チェックアウトしたバージョン・レコードの消去」

バッチ・バージョンに対する処理オプションの変更

既存のバッチ・バージョンの処理オプションは、必要に応じて変更することができます。たとえば、処理オプションを変更して、フィールドの表示/非表示を切り替えたり、オーダー処理順序定義を変更することができます。ただし、処理オプションのないバッチ・バージョンもあります。住所リストの出力などのように、特殊プロンプト処理が不要な場合がその例です。

処理オプションを変更すると、変更は各 UBE の実行用に保管されます。バージョンに対するその他の変更とは異なり、処理オプションを変更するのにバージョンのチェックインおよびチェックアウトは必要ありません。処理オプション値を変更しても、その変更はそのバージョンを使用する他のユーザーには適用されません。

Web クライアントを使用している場合、Web のみのバージョンの処理オプションは、実行時とバージョン・スペック内のどちらでも変更できます。バージョンが Web のみでない場合、処理オプションは実行時のみ変更できます。実行時の変更は維持されません。

注:

ZJDE または XJDE のプレフィックスを含む J.D. Edwards デモ・バージョンは変更できません。バージョン番号、バージョン・タイトル、オプションのプロンプト表示、セキュリティ、および処理オプションの値を変更するには、これらのバージョンをコピーするか、または新規バージョンを作成する必要があります。

はじめる前に

- 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームの[ロー]メニューの処理オプションからアクセスする場合、使用するマシン用にバージョンをチェックアウトする必要があります。『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」を参照してください。

フィールド記述

記述	用語解説
プログラム ID	<p>対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラムの ID は P4210(対話型)、〈請求書印刷〉プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。</p> <p>T プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。</p> <p>SS 2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。</p> <p>XXX プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。</p>
ユーザーID	アプリケーションまたはバージョンを最後に修正したユーザーのユーザーIDを示します。
前回修正日付	アプリケーションまたはバージョンが最後に変更された日付。
セキュリティ	<p>このフィールドでは、レポート・バージョンのユーザー・アクセスを制限できません。次の値を使用します。</p> <p>0 セキュリティなし。処理オプション値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、どのユーザーでも行うことができます。新しいバージョンを追加する場合のデフォルトです。</p> <p>1 中レベルのセキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンの削除は、最後に変更したユーザーだけが行うことができます。バージョンのインストール、コピー、転送、実行は、どのユーザーでも行えます。JDE デモバージョンはこの形態で出荷されます。</p> <p>2 中レベルから完全セキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、およびバージョンの転送、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。バージョンのインストールやコピーは、どのユーザーでも行えます。</p> <p>3 完全セキュリティ。処理オプションおよび詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。</p>

バージョン ID	アプリケーションやレポートの実行方法の指定に使用するユーザー定義のスペックです。バージョンを使用することで、ユーザー定義の処理オプション値やデータ選択、順序オプションなどをグループ化して保存します。対話型バージョンは(通常、タスクレベルで)アプリケーションと関連付けられています。バッチバージョンはバッチ・プログラムまたはレポートと関連付けられています。バッチ・プログラムを実行する場合はバージョンを選択する必要があります。
チェックイン・パスコード	インストール・アプリケーションの場合、環境名はプラン名とも呼ばれ、インストール/再インストールのための環境を識別します。環境またはバージョン・アプリケーションの場合、アプリケーションまたはバージョンのスペック・データの場所を識別するパス・コードです。
ロケーション	ロケーションあるいはマシンキーは、ネットワーク(サーバーまたはワークステーション)上のマシン名を示します。
パス・コード	インストール・アプリケーションの場合、環境名はプラン名とも呼ばれ、インストール/再インストールのための環境を識別します。環境またはバージョン・アプリケーションの場合、アプリケーションまたはバージョンのスペック・データの場所を識別するパス・コードです。
チェックアウト済み	バージョンのチェックアウトが可能かを示します。1人のユーザーのみがそのバージョンをチェックアウトすることができます。 Y 現在バージョンはチェックアウトされている。 N 現在バージョンはチェックアウトされていない。
サーバー使用の可否	バッチ・バージョンをサーバーからインストール可能かどうかを示します。 Y = サーバーからインストール可能 N = サーバーからインストール不可
サーバー前回更新日付	アプリケーションまたはバージョンがサーバーにチェックインされた日付。

▶ バッチ・バージョン用の処理オプションを変更するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。
たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
または、[フォーム]メニューから[表示]を選んで次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン
ワークステーションで使用可能なすべてのバージョンが表示されます。
 - マイ・バージョン
作成したバージョンのみ表示されます。

- すべてのバージョン
バッチ・アプリケーションに存在するすべてのバージョンが表示されます。すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。

3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。

〈バッチ・バージョンの処理〉フォームには、ローカルで作成したバージョンを含めて、使用しているワークステーションで使用できるバージョンのみが表示されます。別のマシンで作成されたバージョンは、セントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)にチェックインすると、このフォームに表示されます。

4. [ロー]メニューから[処理オプション]を選択します。

このバージョンに処理オプションがない場合、または処理オプションを変更できないようにセキュリティが設定されている場合は、そのようにメッセージ・ボックスが表示されます。そうでない場合は、そのアプリケーションに関する〈Processing Options(処理オプション)〉フォームが表示されます。このフォームでは、レポートの処理方法を制御する値を定義することができます。

〈Processing Options〉フォームへは、次のような方法でもアクセスできます。

1. J.D. Edwards Solution Explorer の[編集]メニューから[プロンプト] - [処理オプション]を選択する。
2. J.D. Edwards Solution Explorer でバッチ・アプリケーション名を右クリックして、表示されるプルダウン・メニューから[プロンプト] - [処理オプション]を選択する。
5. 各タブをクリックして、タブの情報を表示/変更します。
タブの数が多く、一度に全部を画面に表示できない場合、左右の矢印ボタンがフォームに表示されます。他のタブを参照するには、この矢印ボタンをクリックしてください。フォームの端をポイントしドラッグして〈Processing Options〉フォームのサイズを変更するか、またはスクロールバーを使って、他のタブにある処理オプションを表示します。
6. 必要に応じて処理オプションの値を変更し、をクリックします。

データ選択およびデータ順序の設定

レポートに出力するレコードを限定するための条件を、バージョンごとに指定できます。たとえば、ニューヨークの顧客だけを表示するようにデータ選択を指定できます。また、レポート上のデータ表示順序を指定することもできます。たとえば、検索タイプ、住所番号、従業員名の順でレポートに表示するレコードをソートできます。

データ選択およびデータ順序を設定する場合、〈バッチ・バージョンの処理〉フォーム(ここでの説明を参照)、または〈バージョン・プロンプト〉フォームから処理できます

Web クライアントを使用している場合、Web のみのバージョンのデータ選択およびデータ順序設定は、実行時とバージョン・スペックのどちらでも変更できます。それ以外のバージョンでは、実行時のみ変更が可能です。実行時に指定した変更は、バージョンには保存されません。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「レポートの投入」

はじめる前に

- 〈バッチ・バージョンの処理〉フォームの[ロー]メニューからデータ選択およびデータ順序にアクセスする場合、使用するマシンにバージョンがチェックアウトされている必要があります。『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」を参照してください。

▶ バッチ・バージョンのデータ選択およびデータ順序を設定するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。または、[フォーム]メニューから[表示]を選んで次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン
ワークステーションで使用可能なすべてのバージョンが表示されます。
 - マイ・バージョン
作成したバージョンのみ表示されます。
 - すべてのバージョン
バッチ・アプリケーションに存在するすべてのバージョンが表示されます。すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。バージョンはチェックアウトされている必要があります。
4. [ロー]メニューから次のうち 1 つを選択してください。
 - データ選択
〈Data Selection(データ選択)〉フォームが表示されます。
 - データ順序設定
〈Data Sequencing(データ順序設定)〉フォームが表示されます。

テーブル変換/バッチ・アプリケーションを処理する際に、[データ選択]および[データ順序設定]メニュー選択がグレー表示されますが、これはこの 2 つがテーブル変換には適用されないためです。
5. これらの変更を他のユーザーも使用できるようにするには、バージョンをチェックインする必要があります。
変更は、ローカル・ワークステーションのバージョンにのみ影響します。バージョンをチェックインしない場合は、チェックアウトを消去して、他のユーザーがこのバージョンをチェックアウトできるようにしてください。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」
- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「チェックアウトしたバージョン・レコードの消去」

処理オプションのレポート作成

このタスクでは、対話型およびバッチ・アプリケーション用の処理オプションに関するレポートの作成方法を説明します。このレポートには、各バージョンで設定された処理オプションのタブ、テキストと共に値が表示されます。バージョンによっては処理オプションのないものもあります。

注意:

この処理はローカル(使用するワークステーション)で実行してください。

▶ 処理オプションのレポートを作成するには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉または〈対話型バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドまたは[対話型アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈General Journal by Batch(仕訳帳(バッチ別))〉レポートのバージョンを検索する場合は、“R09301”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。
3. 次のいずれかを実行します。
 - [ロー]メニューから[処理オプション]を選択し、バージョンのデフォルト値を表示します。
 - [ロー]メニューから[印刷オプション]を選択します。
 - バージョンを選択せずに、[フォーム]メニューから[PO(処理オプション)の印刷]を選択します。
4. 〈レポート出力先〉で、次のオプションのいずれかを選んで[OK]をクリックします。
 - 画面
 - プリンタ
 - CSV へエクスポート
5. 次のオプションを選んで、関連付けられたフィールドに値を入力してください。
 - OSA インターフェイス名
6. [OK]をクリックします。
レポートが表示されます。

テーブル変換バージョンのプロパティへのアクセス

この操作は、テーブル変換プログラムにのみ該当します。バージョンのプロパティには〈テーブル変換プロンプト〉フォームからアクセスすることができます。また、〈バッチ・バージョンの処理〉フォームからプロパティに直接アクセスすることもできます。

参照

- 〈テーブル変換プロンプト〉フォームについては『テーブル・コンバージョン』ガイドの「テーブル・コンバージョンの投入」

▶ テーブル変換バージョン用プロパティにアクセスするには

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム]メニューから次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン(ワークステーションで使用可能)
 - マイ・バージョン(作成したバージョン)
 - すべてのバージョン(バッチ・アプリケーションに存在)すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。バージョンはチェックアウトされている必要があります。
4. [ロー]メニューで[プロパティ]をクリックします。このメニュー項目は、テーブル変換プログラム・バージョンでのみ使用することができます。〈プロパティ〉フォームが表示されます。
5. 変更は、ローカル・ワークステーションのバージョンにのみ影響します。これらの変更を他のユーザーも使用できるようにするには、バージョンをチェックインする必要があります。バージョンをチェックインしない場合は、チェックアウトを消去して他のユーザーがこのバージョンをチェックアウトできるようにしてください。

参照

- テーブル変換プロパティの変更については『テーブル・コンバージョン』ガイドの「テーブル変換の投入」
- バージョンのチェックインについては『エンタープライズ・レポート・ライティング』の「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」
- チェックアウト・レコードの消去については、このセクションの「バージョンのチェックアウト・レコードの消去」

バッチ・バージョンのバージョン詳細

バージョン詳細を使用して、タイトル、プロンプト・オプションまたはセキュリティ・レベルなどのバージョンに関する情報を検討します。レポートに表紙を印刷するかどうかも指定できます。

はじめる前に

- バージョン詳細を処理する前に、バージョンをチェックアウトします。『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」を参照してください。

▶ バッチ・バージョンのバージョン詳細を処理するには

〈レポート・ライター〉メニュー (GH9111) から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション] フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021” と入力します。
2. [検索] をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム] メニューから次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン (ワークステーションで使用可能)
 - マイ・バージョン (作成したバージョン)
 - すべてのバージョン (バッチ・アプリケーションに存在)
すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。バージョンはチェックアウトされている必要があります。
4. [ロー] メニューから [バージョン詳細] を選択します。
このフォームでは、バージョンのタイトル、バージョンによる処理オプションの使用、バージョンのセキュリティ・レベルなどの情報を変更できます。また、レポートに関する監査情報も表示できます。
5. 〈バージョン詳細〉では、次の情報を変更できます。
 - バージョン・タイトル
 - プロンプト・オプション
このバージョンに処理オプションがついている場合にのみ、次の情報を修正または実行してください。
 - セキュリティ
 - バージョン詳細
 - 表紙印刷
 - ジョブ待ち行列

[ジョブ待ち行列]フィールドを空白にした場合、エンタープライズ・サーバーの jde.ini の設定が読み込まれます。ジョブを AS/400 に投入した場合、ユーザー・プロファイルを基にチェックしてジョブ待ち行列を選定します。

- クライアント・プラットフォーム
6. 必要に応じて、フォームに表示されるその他の情報を検討します。
 7. [OK]をクリックします。
 8. このバージョンをチェックインして、他のユーザーも使用できるようにします。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」

フィールド記述

記述	用語解説
バージョン・タイトル	バージョン番号の横に表示されるバージョンの記述。バージョン・タイトルとレポート・タイトルは異なります。このフィールドでは、バージョンの用途を記述します。たとえば、ピッキング・リストを作成するアプリケーションのバージョンの1つは[ピッキング・リスト - 会計]、もう1つは[ピッキング・リスト - 在庫管理]とすることができます。
プロンプト・オプション	プログラムの実行時に処理オプションを表示するかどうかを指定します。有効な値はユーザー定義コード(98/CR)に定義されています。 空白 = 処理オプションを無効にする 1 = 処理オプションを表示しないでプログラムを実行する(非表示実行) 2 = 処理オプションを表示する

セキュリティ	このフィールドでは、レポート・バージョンのユーザー・アクセスを制限できません。次の値を使用します。
	0 セキュリティなし。処理オプション値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、どのユーザーでも行うことができます。新しいバージョンを追加する場合のデフォルトです。
	1 中レベルのセキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンの削除は、最後に変更したユーザーだけが行うことができます。バージョンのインストール、コピー、転送、実行は、どのユーザーでも行えます。JDE デモバージョンはこの形態で出荷されます。
	2 中レベルから完全セキュリティ。処理オプションの値および詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、およびバージョンの転送、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。バージョンのインストールやコピーは、どのユーザーでも行えます。
	3 完全セキュリティ。処理オプションおよび詳細値の変更、チェックインおよびチェックアウト、バージョンのインストール、転送、コピー、削除、実行は、最後に変更したユーザーだけが行えます。
バージョン詳細	基本レポートスペックとバージョンレベル・レポート・スペックの一時変更スペックや機能の違いを入力するフィールド。バージョンの開発者は、入力された情報を参照することによって、このバージョンと基本レポートの機能の違いを容易に理解できます。基本レポートには存在しないセクションをバージョンに追加した場合の追加内容などを入力してください。また、基本レポートとは異なる処理を行うように変更した内容も入力してください。たとえば、データ順序設定やデータ選択に基本レポートとは異なる基準を使用している処理を入力します。
表紙印刷	使用可能な場合にレポートの表紙が出力されます。
ジョブ待ち行列	ジョブが投入された論理待ち行列。

バッチ・バージョンのコピー

既存のバージョンをコピーして、その設定を目的に応じて修正することができます。コピーしたバージョンには、基本レポートのプロパティおよびコピー元のバージョンのプロパティが継承されます。Web クライアントを使用してバージョンをコピーする場合、新しく作成するバージョンは Web のみのバージョンになります。Web のみのバージョンはコピーできません。

バッチ・バージョンをコピーする際、新規バージョンのセキュリティ・レベルを設定する必要があります。セキュリティ・レベルには「セキュリティなし」から「完全セキュリティ」まであります。「セキュリティなし」の場合、どのユーザーでもバージョンを修正したり、実行したりできます。「完全セキュリティ」の場合は、バージョンの修正を前回は行ったユーザーのみがそのバージョンを修正し、実行することができます。バージョン・セキュリティは「セキュリティ・ワークベンチ」とは異なります。セキュリティ・ワークベンチは、アプリケーションなどの J.D. Edwards ソフトウェアのオブジェクトに対してセキュリティを設定する場合に使用します。

参照

- セキュリティ・ワークベンチについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「システムのセキュリティ」

▶ バッチ・バージョンをコピーするには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. [検索]をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム]メニューから次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン(ワークステーションで使用可能)
 - マイ・バージョン(作成したバージョン)
 - すべてのバージョン(バッチ・アプリケーションに存在)
すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
4. ツールバーの[コピー]をクリックします。
5. 〈バージョンのコピー〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - 新しいバージョン
 - セキュリティ
 - バージョン・タイトル
6. [OK]をクリックします。
〈バッチ・バージョン設計〉フォームが表示されます。このフォームでは、[バージョン詳細]を選択してバージョン情報を変更するか、[実行]を選択して新しいバージョンを実行することができます。
7. 〈バッチ・バージョンの設計〉で、[OK]をクリックしてバージョンをクリックします。
バッチ・バージョンを保存するために[OK]をクリックすると、そのバージョン・スペックが現在使用しているワークステーションにない場合は、そのスペックをワークステーションに転送するために、セントラル・オブジェクト・データ・ソース(サーバー)で最初に JITI(ジャスト・イン・タイム・インストレーション)が実行されます。
8. 新しいバージョンをチェックインして、他のユーザーがこのバージョンを使用できるようにします。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」

フィールド記述

記述	用語解説
新しいバージョン	バージョンを識別する ID。プログラムに複数のバージョンを設定する場合、この ID により各バージョンを識別します。

バッチ・バージョンの作成

レポート・テンプレートのスペックのみに基づいたバッチ・バージョンを新しく作成することもできます。コピーの場合と異なり、新規バッチ・バージョンを作成する場合、新規バージョンに継承されるバージョン一時変更はありません。

バッチ・バージョンを Web クライアントを使用して作成した場合、このバージョンには Web 専用フラグが付きます。

新しくバッチ・バージョンを作成する際、バージョンにセキュリティ・レベルを設定する必要があります。セキュリティ設定には「セキュリティなし」から「完全セキュリティ」まであります。「セキュリティなし」の場合、どのユーザーでもバージョンを修正したり、実行したりできます。「完全セキュリティ」の場合は、バージョンの修正を前回は行ったユーザーのみがそのバージョンを修正し、実行することができます。詳しくは、セキュリティ・フィールド記述を参照してください。バージョン・セキュリティは〈セキュリティ・ワークベンチ〉とは異なります。セキュリティ・ワークベンチは、アプリケーションなどの J.D. Edwards ソフトウェアのオブジェクトに対してセキュリティを設定する場合に使用します。

参照

- セキュリティ・ワークベンチについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「システムのセキュリティ」
- Web のみのバージョンについては『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「Web クライアントによるバッチ・バージョンの作成」
-

▶ バッチ・バージョンを作成するには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームの [バッチ・プログラム ID] フィールドで、新しくバッチ・バージョンを作成するバッチ・プログラムの ID を入力します。
 - バッチ・プログラム ID
2. [追加] をクリックします。

3. 〈バージョンの追加〉で、次のフィールドに値を入力します。
 - バージョン ID
 - バージョン・タイトル
 - プロンプト・オプション

バージョンを設定するバッチ・プログラムに処理オプションが存在しない場合、[プロンプト・オプション]フィールドは無効となります。処理オプションの添付は、バッチ・アプリケーション・テンプレートに対してのみ可能です。これは、〈Report Design〉で行います。
 - セキュリティ
 - ジョブ待ち行列
 - バージョン詳細
4. 必要に応じて次のオプションを選択します。
 - 表紙印刷
5. [OK]をクリックしてバージョンを保存します。
6. 作成したバージョンをチェックインして、他のユーザーが使用できるようにします。

参照

- 『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョンのチェックアウトまたはチェックイン」

フィールド記述

記述	用語解説
プログラム ID	<p>対話型プログラムまたはバッチ・プログラムを識別する番号。たとえば、〈受注オーダー入力〉プログラムの ID は P4210(対話型)、〈請求書印刷〉プログラムの ID は R42565(バッチ)です。プログラム ID の桁数は固定ではなく、TSSXXX の形式で構造化されています。</p> <p>T プログラム名の最初の英字が、P はプログラム、R はレポートなどそのタイプを示します。たとえば、P4210 の P は、これがプログラムであることを示します。</p> <p>SS 2 番目と 3 番目は数字で、システム・コードを示します。たとえば、P4210 の 42 は、このプログラムがシステム 42(受注管理システム)に属していることを示します。</p> <p>XXX プログラム名の残りの数字は固有のプログラムまたはレポートを示します。たとえば、P4210 の "10" は、受注オーダー入力アプリケーションであることを表します。</p>

バージョン ID	アプリケーションやレポートの実行方法の指定に使用するユーザー定義のスペックです。バージョンを使用することで、ユーザー定義の処理オプション値やデータ選択、順序オプションなどをグループ化して保存します。対話型バージョンは(通常、タスクレベルで)アプリケーションと関連付けられています。バッチバージョンはバッチ・プログラムまたはレポートと関連付けられています。バッチ・プログラムを実行する場合はバージョンを選択する必要があります。
プロンプト・オプション	プログラムの実行時に処理オプションを表示するかどうかを指定します。有効な値はユーザー定義コード(98/OR)に定義されています。 ブランク = 処理オプションを無効にする 1 = 処理オプションを表示しないでプログラムを実行する(非表示実行) 2 = 処理オプションを表示する
表紙印刷	使用可能な場合にレポートの表紙が出力されます。

バッチ・バージョンのチェックアウト/チェックイン

〈Report Design〉を使用してバッチ・バージョンを修正したり、[ロー]メニューのオプションでデータ選択やデータ順序を設定するには、最初にそのレポート・オブジェクトをチェックアウトする必要があります。チェックアウトすることによって、セントラル・オブジェクト・ロケーションからワークステーションにスペック・レコードがコピーされます。これはユーザーのパス・コードに基づいて行われます。表示されるのは、そのセントラル・オブジェクト・パス・コードにあるバージョンのみです。バージョンをチェックアウトするまでは、〈Report Design〉にアクセスできません。複数ユーザーが同時に同じバージョンをチェックアウトすることもできません。

バージョンをチェックアウトしても変更しない場合は、他のユーザーがそのバージョンをチェックアウトできるように、チェックアウト・レコードを消去してください。基本レポート(テンプレート)に対して変更を加えるには、まずバージョンをチェックアウトする必要があります。バージョンの実行時に、データ選択、データ順序設定、一時変更ロケーション、処理オプション値の変更を行う場合は、バージョンをチェックアウトする必要はありません。ただし、〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームでデータ選択またはデータ順序設定を変更する場合は、チェックアウトおよびチェックインを行い、他のユーザーがその変更を使用できるようにする必要があります。

バージョンをチェックインする前に、バージョンに対して恒久的な変更を加えていいかどうかを確認してください。バージョンをチェックインすると、バージョンのスペックがセントラル・オブジェクト・ロケーションにコピーされます。それまでのバージョンのスペックは、新しいスペックに変更されます。ワークステーションにあるバージョンのスペックはそのままです。

Web のみのバージョンを変換して Web クライアント以外のクライアントで実行するには、バージョンをチェックインして再度チェックアウトしてください。Web のみのインジケータを完全に削除するには、eGenerator ツールを使用してバッチ・バージョンを作成してください。

バッチ・バージョンのチェックインまたはチェックアウトは、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)または〈バッチ・バージョンの処理〉プログラム(P98305)で行うことができます(次のタスクで説明)。

参照

- eGenerate の使用については『Web サーバー・インストール』ガイド

▶ バージョンをチェックアウト/チェックインするには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力して[検索]をクリックします。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
3. [ロー]メニューから[上級]を選択します。
〈上級操作〉フォームが表示されます。このフォームでは、バージョン用レポート・スペックの設計、バージョンのチェックインおよびチェックアウト、バージョンのチェックアウトの消去などを行うことができます。
4. 〈上級操作〉フォームで、バージョンを選択してチェックアウト/チェックインします。
5. [ロー]メニューから[バージョンのチェックアウト]または[バージョンのチェックイン]を選択します。
6. [OK]をクリックします。

バージョンのチェックアウト・レコードの消去

バッチ・バージョンをチェックアウトできるのは、一度に 1 ユーザーのみです。チェックアウトしたユーザーがチェックアウト・レコードを消去すると、別のユーザーがバージョンをチェックアウトできるようになります。バージョンのチェックアウト・レコードを消去すると、そのバージョンはチェックインできません。ただし、ワークステーションにチェックアウトしてあるレポート・スペックはそのまま使用できます。

チェックアウトの消去を実行すると、サーバー側のチェックインおよびチェックアウト・レコードの状況が変更されます。バージョンのチェックアウトを消去すると、バージョン・リスト・テーブル(F983051)の[チェックアウト]フィールドが Y から N へ更新されます。また、このバージョンの[ロケーション]フィールドの値は、バージョンをチェックアウトしたワークステーションからセントラル・オブジェクト・サーバー名に変更されます。

バッチ・バージョンのチェックインまたはチェックアウトは、〈オブジェクト管理ワークベンチ〉プログラム(P98220)または〈バッチ・バージョンの処理〉プログラム(P98305)で行うことができます(次のタスクで説明)。

▶ バージョンのチェックアウト・レコードを消去するには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション]フィールドにアプリケーション ID を入力して[検索]をクリックします。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021”と入力します。
2. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
3. [ロー]メニューから[上級]を選択します。

〈上級操作〉フォームが表示されます。このフォームでは、バージョン用レポート・スペックの設計、バージョンのチェックインおよびチェックアウト、バージョンのチェックアウトの消去などを行うことができます。

4. 〈上級操作〉で、消去するチェックアウト・レコードを選択します。
5. [ロー]メニューから[チェックアウトの消去]を選択します。

バッチ・バージョン・プログラム(P98305)の処理オプションの変更

このタスクでは、〈バッチ・バージョン〉プログラム(P98305)の処理オプションを変更する方法について説明します。

処理オプションを変更すると、変更は各 UBE の実行用に保管されます。バージョンに対するその他の変更とは異なり、処理オプションを変更するのにバージョンのチェックインおよびチェックアウトは必要ありません。処理オプション値を変更しても、その変更はそのバージョンを使用する他のユーザーには適用されません。

参照

- バッチ・バージョンの処理オプションの変更については、『エンタープライズ・レポート・ライティング』ガイドの「バッチ・バージョン用処理オプションの変更」

▶ バッチ・バージョン・プログラム(P98305)の処理オプションを変更するには

J.D.Edwards の Windows 環境で、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー(GH9011)から〈バッチ・バージョン〉を選択して、[プロンプト] - [処理オプション]を選択します。

1. 〈Processing Options〉フォームで、次のフィールドに値を入力します。
 - 確認ボックス
ローカル・スペックの上書き/削除確認ボックスを使用可能にするには“Y”または“1”を、使用不可にするには“N”または“0”を入力します。確認メッセージを使用できるようにすると、ローカル・マシンでスペックを上書きまたは削除する際に確認メッセージが表示されます。たとえば使用可能に設定しておく、バッチ・バージョンのチェックアウト時に確認ボックスが表示されます。
 - ジョブ・スケジュール
バッチ・バージョンの実行時(投入後すぐにバッチ・バージョンが実行される)にユーザーがそのスケジューリングをできないようにするには“0”(またはブランク)を、スケジューリングできるようにするには“1”を、どのような場合もバッチ・バージョンをスケジューリングさせる場合には“2”を入力します。
2. [OK]をクリックします。

参照

- バッチ・バージョンのスケジュール方法に関する完全な情報については、『システム・アドミニストレーション』ガイドの「ジョブのスケジューリング」

バッチ・バージョン・スペックのエンタープライズ・サーバーへの移動

バッチ・バージョン・スペックは、バッチ・バージョンを実行せずにエンタープライズ・サーバーに移動できます。この処理が必要になるのは、別のバッチ・バージョンに呼び出されるバッチ・バージョンを修正した場合のみです。バージョンを修正したら、次の方法でそのバッチ・バージョンを呼び出すバッチ・バージョンと同じロケーションにスペックを移動します。これにより、バッチ・バージョンの実行時に、更新されたスペックが呼び出されるようになります。

▶ バッチ・バージョン・スペックをエンタープライズ・サーバーへ移動するには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、必要に応じて次のフィールドに値を入力します。
 - バッチ・プログラム ID
2. [バッチ・アプリケーション] フィールドにバッチ・アプリケーションの ID を入力してから、〈検索〉をクリックしてそのバージョン・リストを表示します。
3. 投入するバッチ・バージョンを選び、[選択] をクリックします。
4. 〈バージョン・プロンプト〉で、[フォーム] メニューから [上級] を選択します。
5. 〈上級バージョン・プロンプト〉で、次のオプションをチェックして [OK] をクリックします。
 - バージョン・スペックのみを投入
バッチ・バージョン・スペックを指定したエンタープライズ・サーバーに移動するには、このオプションをオンにしてください。
 - ロケーション一時変更
〈JDE データ・ソース〉フォームにアクセスし、バッチ・バージョン・スペックをエンタープライズ・サーバーのどのロケーションに移動するかを指定するには、このオプションをオンにしてください。
6. 〈バージョン・プロンプト〉で、[投入] をクリックします。
7. 〈JDE データ・ソース〉で、バッチ・バージョン・スペックを移動する先のエンタープライズ・サーバーを選択し、[選択] をクリックします。

指示したバッチ・バージョンは実行されずに、指定したエンタープライズ・サーバーにこのバッチ・バージョンのスペックだけが移動されます。待ち行列のジョブ進捗状況は、〈サーバーの処理〉フォームでモニタリングできます。

参照

- 〈サーバーの処理〉フォームについては『システム・アドミニストレーション』ガイドの「サーバー・プログラムの処理」

フィールド記述

記述	用語解説
バージョン・スペックのみを投入	<p>ワークステーションからエンタープライズ・サーバーにバッチ・アプリケーション・バージョンのすべてのスペックをコピーするかどうか指定するオプション。[一時変更ロケーション]オプションを使用すると、エンタープライズ・サーバーを指定できます。</p> <p>データ選択およびデータ順序設定にはこのオプションを使ってバージョン・スペックを投入しないでください。既存のバージョンのデータ選択やデータ順序設定以外に新しいバージョンを作成したり修正した場合は、エンタープライズ・サーバーでバージョンを実行する際に新規または修正したスペックを使用するには、ワークステーションからエンタープライズ・サーバーにバージョンのすべてのスペックを投入してください。</p>

バージョン・スペックの一時変更

レポート・バージョンを実行する場合、バージョン・スペックによりレポート・テンプレート・スペックが一時変更されて実行されます。レポート・テンプレート・スペックを変更した場合は、それをバージョン・スペックに反映する必要があります。

レポート・テンプレートでバージョン・スペックを上書きするタイミングは、たとえばレポート・テンプレートを変更した後でバージョン・レベルに変更をプッシュ・ダウンする場合などがあります。バージョン・スペックを一時変更しなかった場合は、レポート・レベルの変更は反映されません。

注意:

レポート・テンプレートに表示されない情報がバージョンに含まれている場合、バージョンでスペックを一時変更してもこの情報は表示されません。

▶ バージョン・スペックを一時変更するには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈レポート・ライター〉メニュー(GH9111)から〈レポート設計ツール〉を選択します。

1. 〈レポート設計〉で、バージョン・スペックを一時変更するレポートのセクションを選択します。
2. [Section(セクション)]メニューから[Override Version Specifications(バージョン・スペックの一時変更)]を選択します。

セクション・タイプに応じて、該当するセクション・フォームが表示されます。

3. 次のオプションを選び、[OK]をクリックします。
 - セクション・レイアウト
 - セクション・データ選択
 - セクション・イベント・ルール
 - セクション・データベース出力
 - セクション・ソート順序

テンプレート・スペックによりバージョン・スペックが上書きされます。

レポートまたはバージョン用の BrowsER へのアクセス

〈BrowsER〉は、レポートやバージョンのイベント・ルールを表示し、レイアウトを設計するためのアプリケーションです。〈BrowsER〉には、バッチ・アプリケーション内のセクション構造が表示されます。セクションは、各セクションのイベントおよびイベント・ルールと共に階層型構造で表示されます。設計ツールで追加作業をしなくても、イベント・ルールを使用可能にしたり、使用不可にしたりできます。これは、特定のイベント・ルールをデバッグする際に便利です。

参照

- 〈BrowseER〉の使用については『開発ツール』ガイドの「BrowseER」

▶ レポートまたはバージョン用に BrowsER にアクセスするには

J.D.Edwards の Windows 環境では、〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈バッチ・バージョン〉を選択します。

1. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、[バッチ・アプリケーション] フィールドにアプリケーション ID を入力します。たとえば、〈One Line Per Address〉レポートのバージョンを検索したい場合は、“R014021” と入力します。
2. [検索] をクリックして、使用中のワークステーションで使用可能なバージョンを検索します。表示するバージョンを指定するには、[フォーム] メニューから次のいずれかを選択します。
 - 使用可能なバージョン (ワークステーションで使用可能)
 - マイ・バージョン (作成したバージョン)
 - すべてのバージョン (バッチ・アプリケーションに存在)すべてのバージョンを表示した場合、処理できるバージョンは黒いテキストで表示されます。
3. グリッドで、処理するバージョンを選択します。
4. [ロー] メニューから [上級] を選択します。

〈上級操作〉フォームが表示されます。このフォームでは、バージョン用レポート・スペックの設計、バージョンやレポートのチェックインとチェックアウト、およびバージョンのチェックアウトの消去などを行うことができます。
5. 〈上級操作〉で、[フォーム] メニューから [レポートとブラウザ ER] または [バージョン・ブラウザ ER] を選択します。

[レポート BrowsER] を選択すると、レポート用のイベント・ルールを使用可能/不可にすることができます。[バージョン BrowsER] を選択すると、レポートの特定バージョンでイベント・ルールを使用可能または不可にすることができます。テーブル変換バッチ・アプリケーションの場合、[バージョン BrowsER] ボタンはグレー表示されますが、これはテーブル変換に適用されないためです。

処理オプション

処理オプションは、対話型またはバッチ・プログラムに対して指定するパラメータです。

処理オプションは、特定の機能を実行するようシステムに指示を送るために使用します。プログラムに処理オプションがある場合、プログラムを実行または投入する前に必須または任意の処理オプションをプログラムに設定できます。

同じプログラムを使って異なる処理を行う必要がある場合は、プログラムに異なるバージョンを作成できます。これらの固有の処理オプションを同じアプリケーションの各バージョンに設定できます。処理オプションを変更すると、そのバージョンを使用しているすべてのユーザーに影響します。変更された後にそのバージョンを使用するユーザーは、新しい処理オプションを使用することになります。処理オプションを使用すると、同時に実行する別のプログラムのバージョンを指定することもできます。

注意:

XJDE バージョンは J.D. Edwards が所有するものと定義されています。アップグレード中、システムによりバージョンは上書きされます。これらのバージョンはテンプレートとしてのみ使用してください。

ZJDE バージョンはデフォルトとして使用され、通常、別のアプリケーションから呼び出される対話型アプリケーションまたはバージョンです。これらのバージョンは通常、メニューに添付されています。バージョンに対しては処理オプションが設定可能です。メニューから呼び出されると、事前定義された処理オプション値に基づいて、対話型アプリケーションが処理オプションのプロンプトなしで実行されます。

処理オプションの機能

処理オプションでは、次の処理を行います。

- デフォルト値の設定
- 異なる会社やユーザーに対するアプリケーションのカスタマイズ
- フォームやレポートのフォーマットの制御
- 集計が発生するページ区切りや位置の制御

処理オプションは、システムではタブ付きのフォームとして表示されます。タブは、処理および機能ごとに処理オプションを系統立てて構成しています。各処理オプション・タブには次の内容が含まれません。

- 標準または固有のタブ名
- 処理オプションのタイトル
- 有効な値のリスト
- オンライン・ヘルプ(拡張処理オプション)

オンライン・ヘルプには[F1]キー、または右クリックでメニューから[ポップヒント]を選んでアクセスできます。用語解説テキストには、処理オプションの機能、または各値を使用した場合の結果が説明されています。

処理オプションのタイプ

処理オプションの2つの標準的なオプションは、「拡張」と「非拡張」です。

拡張処理オプションは、ユーザー情報に関する詳細が提供されます。たとえば、タブでフィールド名と有効な値を見て、処理オプションの使い方を決定したり、詳細を表示するために処理オプションで[F1]キーを押すと、オンライン・ヘルプにアクセスすることもできます。処理オプションは、J.D. Edwards の新しい標準として拡張されています。拡張処理オプション・フォームには、番号、簡単なタイトル、および値のリスト(使用可能な場合)が表示されます。これらの処理オプションにはオンライン・ヘルプがあります。

非拡張処理オプションでは、簡単な記述だけが提供されています。フィールドにタイトルがない場合もあります。フィールドには番号が付けられ、各番号には必要な説明(通常、値の説明)が表示されます。処理オプションの番号はすべてのタブに表示されることがあります。フィールドには、通常、データ項目が添付されていますが、拡張処理オプションと同じ命名規則は適用しません。

処理オプションの例

次の例では、拡張処理オプションの例を示しています。

日付	処理	登録	再計算	レポート
1. 新規雇用者に対する強制加入およびデフォルトプラン 0 = 登録しない 1 = 登録する				
2. 再雇用者に対する強制加入およびデフォルトプラン 0 = 登録しない 1 = 登録する				
3. 異動者に対する強制加入およびデフォルトプラン 0 = 登録しない 1 = 登録する				
4. 活動中従業員に対する強制加入およびデフォルトプラン 0 = 登録しない 1 = 登録する				

次の例では、拡張処理オプションの例を示しています。

The screenshot shows a dialog box titled "Processing Options" with three tabs: "Defaults", "Eligibility", and "Run Reports". The "Eligibility" tab is active. It contains three numbered instructions and corresponding input fields:

- 1. Enter value to specify first day services are performed for wages. '1' = Original Hire date (DSI), '2' is Date Started (DST). Default value is '2' (DST).
Value:
- 2. Enter from and through dates to select newly hired employees.
From Date:
Through Date:
- 3. Enter a '1' to report on the parent company. '0' is the default and the employee's home company will be used.
Reporting Company Flag:

At the bottom, there are three buttons: a green checkmark button labeled "OK(O)", a button labeled "ヘルプ(H)", and a red X button labeled "キャンセル(C)".

処理オプションの処理

処理オプションには次の2つのオプションがあります。

- メニューによる処理
- バージョン・リストによる処理

メニューによる処理オプションの処理の仕方

オブジェクトの処理オプションには、メニュー・バーからアクセスする方法と、オブジェクトを右クリックしてアクセスする方法があります。いずれの場合も、[表示]のサブメニューにアクセスします。サブメニューのプロンプトには、次のオプションが含まれています。

値	処理オプションを指定します。
バージョン	実行するオブジェクトのバージョンを選択します。バージョン設計時の設定によっては、バージョンを選択した後に処理オプション画面が表示されたり、[ロー]メニューからの変更が可能になります。
データ選択	対象レコードの選択条件を指定します。
データ選択および処理オプション	対象レコードの選択条件を指定したうえで、処理オプションの値を指定します。

メニューから処理オプションを実行する場合、メニュー・レベルで定義された処理の詳細が先に表示されます。オブジェクトによっては、選択できないオプションもあります。

参照

- 「対話型バージョンのバージョン詳細の処理」

対話型バージョンの処理オプション

バージョンで定義した処理オプションはアプリケーションの実行を変えるパラメータの集まりです。機能的には、初期化(.INI)ファイルやコマンド行の引数に似ています。これらの処理オプションを使うと、アプリケーションを開くときのパラメータを指定できます。たとえば、表示フォームの選択、フィールドの表示または非表示の指定、オーダー処理順序定義のデフォルトの状況変更、およびフィールドに表示されるデフォルト情報の設定などを指定できます。

処理オプションのないアプリケーションもあります。[編集]メニューの[プロンプト] - [処理オプション]がグレー表示されている場合は、処理オプションがアプリケーションに関連付けられていないか、システム管理者がアプリケーションのバージョンを保護している可能性があります。ユーザーがアクセスを禁止されているバージョンを(対話型バージョン)から開こうとすると、セキュリティ・メッセージが表示され、バージョンへのアクセス権がないことを警告されます。

対話型アプリケーションのバージョンを使用する場合は、まず処理オプションを設定してから使用してください。

処理オプションを使用すると、対話型プログラムを条件に応じて設定できます。対話型バージョンの処理オプションには、次のような機能があります。

- 機能の変更。たとえば、オーダー保留をオンまたはオフにするために処理オプションを設定できます。処理オプションにより、オーダーを入力してからピッキング・リスト印刷を自動的に行うかどうかも指定できます。
- デフォルト値を変更します。たとえば、伝票タイプの値のデフォルト(受注入力または見積り)を設定したり、行タイプ(在庫や非在庫項目など)を設定したりできます。

- フィールドの表示の制御。たとえば処理オプションを設定して、原価フィールド、価格フィールド、またはコミッション・フィールドなどを表示したり、非表示にしたりできます。

▶ 対話型バージョンの処理オプションを起動するには

1. Solution Explorer のタスク・ビューで、処理オプションを設定するアプリケーションを選びます。
2. アプリケーションを右クリックして、[プロンプト]から[処理オプション]を選びます。

3. <Processing Options(処理オプション)>で、値を入力して[OK]をクリックします。

バッチ・バージョンの処理オプション

必要に応じて、既存のバッチ・バージョンに対する処理オプションを変更することができます。たとえば、処理オプションを変更して、レポートの日付の範囲を指定できます。ただし、処理オプションのないバッチ・バージョンもあります。住所リストの出力などのように、処理オプションのフォームを表示する必要がない場合があります。

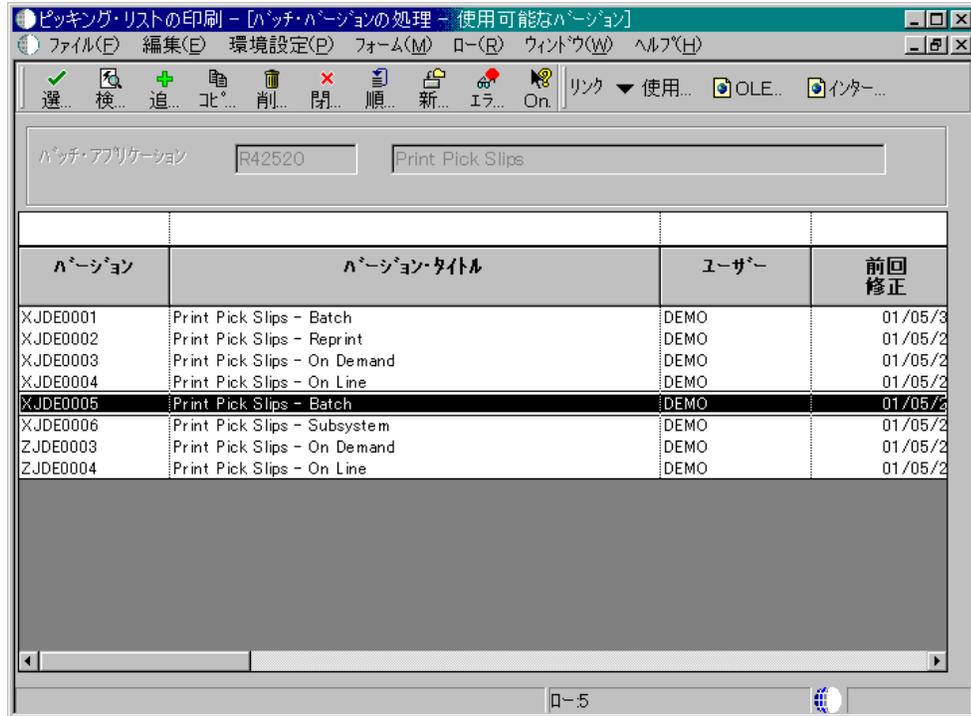
バッチ・バージョンの処理オプションには、次のような機能があります。

- 機能の変更。たとえば、レポートを実行してからレコードを履歴ファイルに移動するように設定したりすることができます。
- 入力パラメータの変更。レポートの処理に使用するカテゴリ・コードを指定できます。

- 日付の定義。レポートを実行する会計年度を定義できます。レポートに含める従業員情報を指定したりすることもできます。

▶ **バッチ・バージョンの処理オプションを手動で起動するには**

1. Solution Explorer で、処理オプションを設定するアプリケーションを選びます。
2. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉フォームで、レポートまたは別のアプリケーションを検索してクリックします。



3. 〈バッチ・バージョンの処理 - 使用可能なバージョン〉で、[ロー]メニューから[処理オプション]を選びます。

Processing Options

編集 | 表示 | 処理 | 通貨 | バージョン

1. 開始「次の状況」(必須)

1. 終了「次の状況」(必須)

3. 一時変更用「次の状況」

4. 「次の状況」の更新

フラグ = 行状況を更新する
1 = 行状況を更新しない

OK(O) ヘルプ(H) キャンセル(C)

4. <Processing Options(処理オプション)>で、値を入力して[OK]をクリックします。

マスター・ビジネス関数(MBF)の処理オプションの使用

マスター・ビジネス関数(MBF)の目的は、請求書や伝票、仕訳などの伝票入力に関する標準ビジネス・ルールをセントラル・ロケーションに置いて使用することです。

マスター・ビジネス関数(MBF)の目的は、請求書や伝票、仕訳などの伝票入力に関する標準ビジネス・ルールをセントラル・ロケーションに置いて使用することです。たとえば、仕訳入力の MBF は次の仕訳入力プログラムで使用されます。

- 仕訳入力(P0911)
- 税付き仕訳入力(P09106)
- 仕訳のバッチ処理(R09110Z)
- オフライン仕訳バッチ処理(R09110ZS)
- 定期仕訳の計算および印刷(R09302)
- インデックス計算および印刷(R093021)
- 変数配賦計算および印刷(R093022)

▶ **マスター・ビジネス関数のバージョンおよび処理オプションを検討するには**

〈システム・アドミニストレーション・ツール〉メニュー (GH9011) から〈対話型バージョン〉プログラムを選択します。

1. 〈対話型バージョンの処理〉フォームで、[対話型アプリケーション]フィールドにプログラム番号を入力して[検索]をクリックします。たとえば、“P0900049”と入力します。
2. バージョンを選択します。
3. 選択したバージョンの処理オプションの設定を表示するには、[ロー]メニューから[処理オプション]を選択します。

参照

- 『開発ツール』ガイドの「処理オプション」
- 特定のマスター・ビジネス関数については、関連するアプリケーションのガイド

ユーザー定義コード

J.D. Edwards のほとんどのフォームにはフィールドがあります。フィールドには、任意の値を入力可能なものと、値をリストから選ぶものがあります。UDC(ユーザー定義コード)は、特定のフィールドで使用されるビジネス・ニーズに合わせて定義したコードです。UDC を使うと、データをカテゴリに分けることができ、フォームに確実に入力することができるようになります。値はリストからのみ選べるため、UDC はフィールドに含まれるデータを簡素で統一のとれたものとし、データの妥当性を検証することもできます。

J.D. Edwards のアプリケーションの、ユーザー定義コードが添付されたフィールドは、ビジュアル・アシストを使って指定できます。ビジュアル・アシストは、タブを使用するかフィールドをクリックすると表示されます。ユーザー定義コード・フィールドに入力する値がわからない場合は、そのフィールドにカーソルを置くと表示されるビジュアル・アシストをクリックすることにより、〈ユーザー定義コードの検索/選択フォーム〉にアクセスできます。このフォームでは、このフィールドで有効なすべてのユーザー定義コードが表示され、そこで選択した値がフィールドに入力されます。そして、有効な値を選択できます。

J.D. Edwards には事前定義された UDC がありますが、UDC の多くはビジネス・ニーズに依存するため、ニーズに合うように自由に再設定できます。したがって、システムの UDC には追加、変更、または削除できるものがあります。J.D. Edwards ソフトウェアをアップグレードしても、カスタマイズされた UDC はそのまま残ります。

参照

次のトピックを参照してください。

- 「UDC、UDC タイプ、およびカテゴリ・コード」
- 「例:住所録のユーザー定義コード」
- 「UDC および UDC タイプの変更」
- 「UDC のカスタマイズ後の継続作業」
- 「ユーザー定義コード・テーブル」

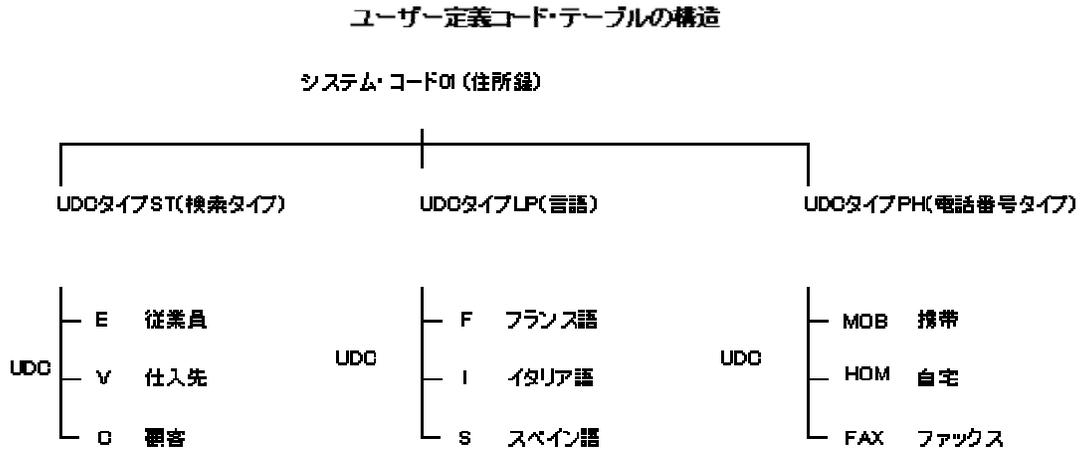
UDC、UDC タイプ、およびカテゴリ・コード

UDC(ユーザー定義コード)は、特定のフィールドで使用されるビジネス・ニーズに合わせて定義したコードです。UDC は、2つの部分から構成されます。最初の部分はコードで、フィールドに入力する文字から構成されます。2番目の部分は記述で、コードの説明をするテキストから構成されます。たとえば、〈住所の処理〉フォームでは、[検索タイプ]フィールドにコード“A”を入力すると“Applicant”を意味します。このコードは、住所録レコードの一部として保管されます。

UDC タイプとは、フィールド入力として使用できる UDC 値の集まりです。UDC タイプは、2文字のコード・タイプと記述から構成されます。UDC タイプの例としては、「ST - Search Type(検索タイプ)」および「UM- Units of Measure(計量単位)」があります。UDC タイプは UDC リストと呼ぶこともあります。

各 UDC タイプは J.D. Edwards システム・コードと関連付けられています。UDC のセットは、そのシステム・コードとコード・タイプで識別できます。たとえば、検索タイプ(コード・タイプ ST)の住所録(システム・コード 01)は、UDC 01/ST として参照されます。

次の図では、ユーザー定義コードの構造を説明します。



さらに、J.D. Edwards では多くの場所でカテゴリ・コードが使用されています。カテゴリ・コードとは、必要に応じてカスタマイズ可能なユーザー定義コードの一種です。コード・タイプと記述は変更できます。また、コード値は再定義できます。たとえば、コード・タイプ記述がカテゴリ・コード 01 というユーザー定義コードがあった場合、その記述を変更し、コード値を再定義することができます。

例:住所録のユーザー定義コード

ユーザー定義コードは J.D. Edwards のあらゆるシステムで使用されます。たとえば、住所録システムでは[検索タイプ]というユーザー定義コードを使って住所レコードを分類します。使用可能な検索タイプ・コードは、〈住所録の処理〉フォームの[検索タイプ]フィールドでビジュアル・アシストをクリックすると表示されます。出荷時の検索タイプとしては次のようなコードが定義されています。

- A - 応募者
- C - 顧客
- V - 仕入先
- E - 従業員

これらのコードを各住所レコードに割り当てることにより、住所レコードを効率的に分類できます。ユーザー定義コードは追加したり変更したりできます。たとえば、検索タイプに「S - 学生」というコードを追加することもできます。

ユーザー定義コードは次のようなフィールドにも使用されます。

- 県/郡コード
- 計量単位
- 伝票タイプ
- 言語

フィールドのビジュアル・アシストをクリックすると、〈ユーザー定義コードの選択〉フォームが表示されます。

UDC および UDC タイプの変更

J.D. Edwards ソフトウェアにはユーザー定義コード・タイプが事前定義されています。この中にはハードコード化されたものもあります。ハードコード化されたユーザー定義コードはその値をそのまま使用しているアプリケーションがあるため、削除しないでください。ハードコード化されていないユーザー定義コードは、必要に応じて変更することができます。

ユーザー定義コードの追加、変更、削除は、次の手順で行います。

- ユーザー定義コードおよびコード記述の変更。たとえば、ユーザー定義コード(01/ST)について、医療機関ではカテゴリをさらに正確に記述するために「C - Customers(顧客)」を「P - Patients(患者)」に変更して使用します。
- ユーザー定義コード・タイプの追加。たとえば、教育機関では検索タイプ・リスト(01/ST)に「S - Students(学生)」というユーザー定義コードを追加できます。
- ユーザー定義コード・タイプからのユーザー定義コードの削除。たとえば、特定のユーザー定義コードを使用できないようにするには、該当するユーザー定義コード・タイプからそのコードを削除します。

U ユーザー定義コード・タイプを変更、追加、削除は、次の手順で行います。

- ユーザー定義コード・タイプのコード・タイプおよび記述の変更。特定のカテゴリ・コード全体をカスタマイズする際に便利です。
- UDC タイプの追加。たとえば教育機関では、学生を識別するために、「MA - 専攻」というユーザー定義コード・タイプを作成して、次のようなコードを定義できます。
 - LA - 人文
 - MA - 数学
 - CS - コンピュータ・サイエンス
 - EN - エンジニアリング
 - MD - 薬学
- ユーザー定義コード・タイプの削除

ユーザー定義コードを変更する場合の注意点

ユーザー定義コードの変更は、データの整合性に大きく影響するため、注意深く計画を調整したうえでのみ行ってください。ユーザー定義コードを追加または変更すると、変更した時点以降にはそれらのコードがデータ入力時の検証に使用されますが、既存のレコードには検証が及びません。この結果、本稼働用環境でユーザー定義コードを変更すると、データの整合性が失われる場合があります。

たとえば、住所録システムでは検索タイプを使用して住所レコードを分類します。たとえば、システム導入後は検索タイプに「C - Customers(顧客)」を使用してレコードを入力し、その後、「C - Customers(顧客)」を「P - Patients(患者)」に変更したとしても、変更以前に検索タイプ「C」として入力した住所レコードの検索タイプはCのままです。住所録システムでこれらのレコードを表示したときに、「C」は無効なため[検索タイプ]フィールドの値が正しくないというエラー・メッセージが表示されます。

ユーザー定義コード・テーブル

ユーザー定義コードおよび UDC タイプを作成したりカスタマイズしたりするには、〈ユーザー定義コード〉プログラム(P0004A)を使用します。ユーザー定義コードに関する情報は次のテーブルに保管されます。

- ユーザー定義コード・タイプ(F0004)
- ユーザー定義コード(F0005)

ユーザー定義コードのカスタマイズ

ユーザー定義コードの多くは業務要件に応じて変更して使用します。したがって、ユーザー定義コードの変更、追加、および削除が必要になります。これはカスタム・プログラムを作成したり、J.D. Edwards ソフトウェア自体を変更したりすることなく、J.D. Edwards ソフトウェアをカスタマイズするための仕組みで、J.D. Edwards ソフトウェアをアップグレードしても、カスタマイズされたユーザー定義コードはそのまま保存されます。

ユーザー定義コードの変更

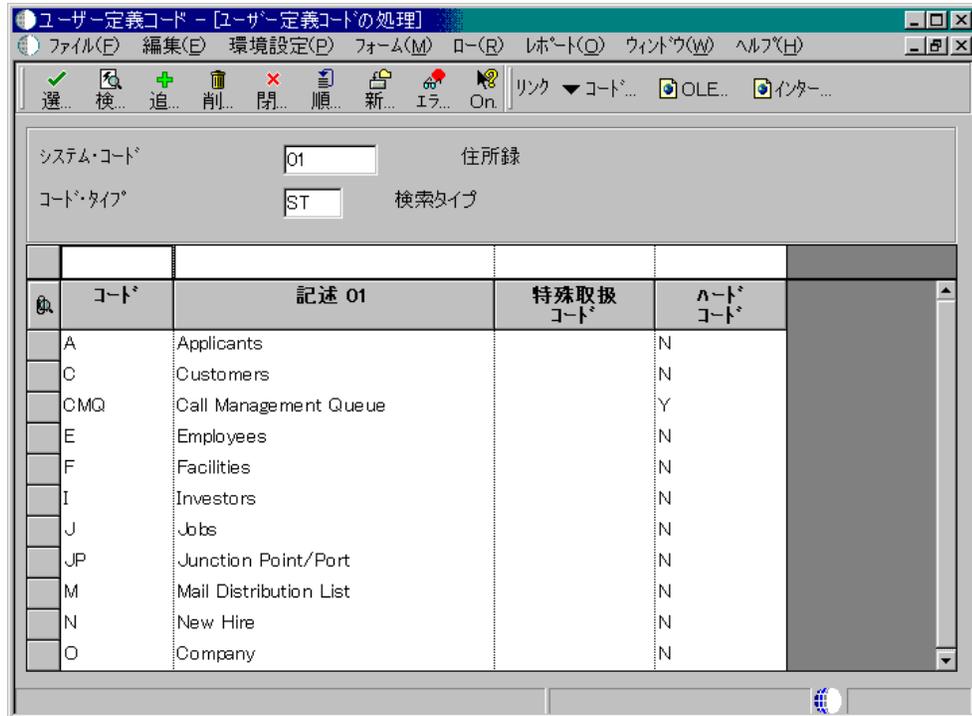
ユーザー定義コードは、コードと記述の 2 つの部分で構成されます。コードはフィールドに入力する文字コードで、記述はコードの内容を説明するテキストです。コードと記述は両方とも変更できます。たとえば、検索タイプには「C」というコードと「Customers(顧客)」という記述で定義されます。医療機関では、このコードと記述をそれぞれ「P」と「Patients(患者)」に変更することができます。

▶ ユーザー定義コードを変更するには

システム・セットアップ・メニューで UDC を変更するプログラムを選びます。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、次のフィールドに入力して[検索]をクリックします。
 - システム・コード
 - ユーザー定義コード

たとえば、住所録の検索タイプ(01/ST)のリストを表示するには、[システム・コード]フィールドに“01”、[ユーザー定義コード]フィールドに“ST”と入力します。



2. 変更するコードをハイライトして、[選択]をクリックします。



3. 〈ユーザー定義コード〉で、次のフィールドに入力し、[OK]をクリックします。

- コード
- 記述 01
- 記述 02
- 特殊取扱
- ハードコード

フィールド記述

記述	用語解説
システム・コード	システム・コードを示すユーザー定義コード(98/SY)
ユーザー定義コード	ユーザー定義コードを含むテーブルを示すコード。このテーブルは UDC(ユーザー定義コード)タイプともいいます。
特殊取扱	<p>特定のユーザー定義コードの値に対して、特別の処理条件を指定するコード。このフィールドに入力する値は、各ユーザー定義コード・タイプに対して固有にしてください。</p> <p>特殊取扱コードはさまざまに使用されます。たとえば、使用言語に定義された特殊取扱コードは、その言語がダブルバイトかどうか、または大文字が含まれていないかどうかを指定します。このフィールドをアクティブにするには、プログラミングが必要です。</p>
ハードコード	<p>ユーザー定義コードがハードコード化されているかどうかを示すコード。チェックマークの場合、選択されていればハードコードされていることを意味します。有効な値は次のとおりです。</p> <p>Y ハードコードされている</p> <p>N ハードコードではない</p>

ユーザー定義コードの追加

既存のコードが業務にそぐわない場合は、ユーザー定義コード・タイプにユーザー定義コードを追加できます。たとえば、ビジネス・パートナーの住所レコードを識別する必要がある場合は、検索タイプ(01/ST)に「B - ビジネス・パートナー」というユーザー定義コードに追加できます。

はじめる前に

- すべてのユーザー定義コードはユーザー定義コード・タイプに属します。ユーザー定義コードを追加するユーザー定義コード・タイプを確認してください。ユーザー定義コード・タイプを新しく作成する方法については、「ユーザー定義コード・タイプの追加」を参照してください。

▶ ユーザー定義コードを追加するには

該当するシステムのシステム・セットアップ・メニューで、ユーザー定義コードを表示するプログラムを選択します。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、次のフィールドに入力して[検索]をクリックします。
 - システム・コード
 - ユーザー定義コードユーザー定義コードを追加するユーザー定義コード・タイプを入力します。
2. 〈ユーザー定義コードの処理〉で、[追加]をクリックします。
3. 〈ユーザー定義コード〉フォームのグリッドの最後にある空白行をカーソルを移動します。

注意:

空白・コード(最初のグリッド行に表示される)が定義されている場合は、これを上書きしないように注意してください。また、新しいコードは、グリッドの最後に追加するようにしてください。空白・コードの[記述]フィールドにはピリオドのみが入力されています。

4. 次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - コード
空白を有効とするには、このフィールドを空白にしてください。
 - 記述 1
空白を有効とするには、このフィールドの最後のスペースに任意の文字(ピリオドなど)を入力してください。
 - 特殊取扱コード
 - ハードコード

フィールド記述

記述
コード

用語解説

ユーザー定義コードテーブルの有効なコードのリスト

記述 1

ユーザー定義名称または備考。

ユーザー定義コードの削除

UDC から UDC タイプを削除する場合は注意して削除してください。UDC は、システム管理や運用の一環としてのみ削除してください。たとえば、「F - Facilities (施設)」というユーザー定義コードをユーザーに使用させたくない場合は、このユーザー定義コードを削除できます。

特定のユーザー定義コードを削除しても、それはユーザー定義コード・タイプから削除されるだけで、既存のレコードに割り当てられたユーザー定義コードは削除されないことに注意してください。

注意:

ハードコード化された値は J.D. Edwards アプリケーションの実行に必要なため、削除しないでください。コードがハードコード化されているかどうかは、〈ユーザー定義コード〉フォームの [ハードコード化] フィールドによって識別できます。

▶ ユーザー定義コードを削除するには

システム・セットアップ・メニューで UDC を変更するプログラムを選びます。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、次のフィールドに入力して [検索] をクリックします。
 - システム・コード
 - ユーザー定義コード
2. 〈ユーザー定義コードの処理〉のグリッドで、削除するユーザー定義コードをハイライトして、[削除] をクリックします。

注意:

ユーザー定義コードを削除する前に、その影響について十分調査してください。ユーザー定義コードはいったん削除すると、再度追加しない限り回復することはできません。

3. [削除の確認] ダイアログ・ボックスで [OK] をクリックすると、選択したユーザー定義コードが削除されます。

ユーザー定義コード・タイプのカスタマイズ

ユーザー定義コード・タイプは、フィールドの値として使用できるユーザー定義コードを定義するためのコードです。ユーザー定義コード・タイプは、2 文字のコード・タイプと記述から構成されます。ユーザー定義コード・タイプの例として、検索タイプや計量単位があります。ユーザー定義コード・タイプは UDC タイプとも呼ばれます。

各ユーザー定義コード・タイプは J.D. Edwards システム・コードと関連付けられています。ユーザー定義コード・タイプは、システム・コードとコード・タイプを使用して識別します。たとえば、検索タイプはシステム・コード 01 (住所録) のコード・タイプ ST なので、ユーザー定義コード (01/ST) と表記します。

ユーザー定義コード・タイプの変更

既存のユーザー定義コード・タイプのコードおよび記述は変更できます。通常、ユーザー定義コード・タイプは、ユーザー定義コードの内容をわかりやすくするために、記述のみ変更します。たとえば、取引回数によって顧客を分類化する場合は、カテゴリ・コード 01 の記述を「取引規模」と変更することができます。次に、そのユーザー定義コード・タイプの個々のユーザー定義コードをカスタマイズして、次のようにすることができます。

- H - High-volume customer (大口顧客)
- M - Medium-volume customer (準大口顧客)
- L - Low-volume customer (小口顧客)

ユーザー定義コード・タイプを変更する場合は、十分注意したうえで行ってください。ユーザー定義コード・タイプを変更すると、変更前のユーザー定義コード・タイプを使用している既存のレコードが無効になります。

ユーザー定義コード・タイプを変更するのと同じ手順で、ユーザー定義コードを表示することもできます。

▶ ユーザー定義コード・タイプを変更するには

システム・セットアップ・メニューでユーザー定義コードを表示するプログラムを実行します。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[コード・タイプ]を選択します。
2. 〈ユーザー定義コード・タイプの処理〉フォームで、次のフィールドにシステム・コードを入力して、[検索]をクリックします。
 - システム・コードシステム・コードに既に存在するユーザー定義コード・タイプが表示されます。
3. 変更するユーザー定義コード・タイプをハイライトして、[選択]をクリックします。
4. 〈ユーザー定義コード・タイプ〉で、次のフィールドに入力し、[OK]をクリックします。
 - コードタイプ

注意:

J.D. Edwards では、ユーザー定義コード・タイプを変更しないことをお勧めします。ユーザー定義コード・タイプを変更すると、変更前のユーザー定義コード・タイプを使用している既存のレコードが無効になります。

- 記述
- コード長
- 2行目入力(Y/N)
- 数字(Y/N)

フィールド記述

記述	用語解説
コードタイプ	ユーザー定義コードを含むテーブルを示すコード。このテーブルは UDC(ユーザー定義コード)タイプともいいます。
コード長	ユーザー定義コードの長さ(最大 10 桁)。
2 行目入力(Y/N)	有効な値は次のとおりです。 Y 記述の 2 行目をユーザー定義コードフォームに表示させる。 M 保守フォームでのみ 2 行目を表示する。この機能はあまり使用しませんが、在庫製品コードなどで適用することがあります。値が M の場合、記述の 2 行目は〈ユーザー定義コードの選択〉フォームには表示されません。 N 〈ユーザー定義コードの選択〉フォームの記述の 1 行目のみを表示する。
数字(Y/N)	ユーザー定義コードが数字か英数字のどちらかを指定します。有効な値は次のとおりです。 Y = 数字(右詰め) N = 英数字(左詰め)

ユーザー定義コード・タイプの追加

ユーザー定義コード・タイプを使用してデータを分類したいが、既存のユーザー定義コード・タイプに適切なものがない場合は、ユーザー定義コード・タイプを追加できます。たとえば、教育機関では、「専攻」というユーザー定義コード・タイプを追加して、専攻別に学生を分類することもできます。

- LA - Liberal Arts(人文)
- MA - Mathematics(数学)
- CS - Computer Science(コンピュータ・サイエンス)
- EN - Engineering(エンジニアリング)
- MD - Medicine(薬学)

注:

ユーザー定義コード・タイプを追加する場合は、そのユーザー定義コード・タイプを使用する J.D. Edwards アプリケーションもそれあわせて変更する必要があります。UDC タイプをフィールドに関連付ける方法については『開発ツール』ガイドの「UDC 編集コントロールの作成」を参照してください。

J.D. Edwards アプリケーションの変更は技術知識を要するため、新しいユーザー定義コード・タイプを追加するのではなく、既存のユーザー定義コード・タイプ(カテゴリ・コードなど)を変更することをお勧めします。詳しくは「ユーザー定義コードの変更」を参照してください。

▶ ユーザー定義コード・タイプを追加するには

システム・セットアップ・メニューでユーザー定義コードを表示するプログラムを実行します。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[コード・タイプ]を選びます。
2. 〈ユーザー定義コード・タイプの処理〉フォームで、次のフィールドにシステム・コードを入力して、[検索]をクリックします。
 - システム・コード
3. [追加]をクリックします。
4. 〈ユーザー定義コード・タイプ〉で、グリッドの最後のブランク行までスクロールします。
5. 次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - コードタイプ
 - 記述
 - コード長
 - 2行目入力(Y/N)
 - 数字(Y/N)

ユーザー定義コード・タイプの削除

ユーザー定義コード・タイプを削除する場合は、十分影響を調査したうえで行ってください。J.D. Edwards アプリケーションおよびデータベースのデータの整合性は、既存のユーザー定義コードとユーザー定義コード・タイプに依存しています。ユーザー定義コードの削除は、システム管理や運用の一環としてのみ行ってください。

注意:

J.D. Edwards アプリケーションに必要なため、ハードコード化された値は削除しないでください。コードがハードコード化されているかどうかは、〈ユーザー定義コード〉フォームの[ハードコード化]フィールドでわかります。

はじめる前に

- ユーザー定義コード・タイプに定義されているすべてのユーザー定義コードを削除します。ユーザー定義コードの削除方法については「ユーザー定義コードの削除」を参照してください。

▶ ユーザー定義コード・タイプを削除するには

システム・セットアップ・メニューでユーザー定義コードを表示するプログラムを実行します。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[コード・タイプ]を選択します。
2. 〈ユーザー定義コード・タイプの処理〉フォームで、次のフィールドにシステム・コードを入力して、[検索]をクリックします。
 - システム・コード
3. 〈ユーザー定義コード・タイプの処理〉フォームで、削除するユーザー定義コード・タイプをハイライトして、[削除]をクリックします。

注意:

このコード・タイプを削除するかどうか確認してください。UDC タイプはいったん削除すると、再度追加しない限り回復されません。

4. [削除の確認]ダイアログ・ボックスで[OK]をクリックすると、選択したユーザー定義コード・タイプが削除されます。

ユーザー定義コード記述言語の変更

J.D.Edwards ソフトウェアを複数の言語で使用する場合は、ユーザー定義コードおよびユーザー定義コード・タイプの記述言語を変更することができます。ユーザー定義コード記述は、各ユーザーのユーザー・プロファイルで指定された言語で表示されます。たとえば、ユーザー定義コード記述を次のように設定できます。

- コード:E
- 英語での表記:Employees
- スペイン語での表記:Empleados

このようにすると、各ユーザーはコードの記述テキストを自分が使用したい言語で表示することができます。

〈UDC 値代替記述〉プログラム(P0004D)は、次のテーブルに翻訳記述を保管します。

- ユーザー定義コード翻訳記述 (F0004D)
- ユーザー定義コード翻訳記述 (F0005D)

▶ ユーザー定義コード・タイプの記述言語を変更するには

システム・セットアップ・メニューでユーザー定義コードを表示するプログラムを実行します。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、[フォーム]メニューから[コード・タイプ]を選択します。
2. 〈ユーザー定義コード・タイプの処理〉フォームで、次のフィールドにシステム・コードを入力して、[検索]をクリックします。
 - システム・コード
3. 変更するユーザー定義コード・タイプをハイライトして、[ロー]メニューから[使用言語]を選択します。
4. 〈UDC の翻訳記述〉フォームで、ブランクのローの次のフィールドに情報を入力してください。
 - 言語
 - 記述フィールドに使用する翻訳記述を入力します。

フィールド記述

記述 言語	用語解説 フォームおよびレポートで使用する言語を指定するユーザー定義コード(01/LP)。指定する言語は、システム・レベルまたはユーザー使用言語に設定されている必要があります。
記述	ユーザー定義名称または備考。

▶ ユーザー定義コードの記述言語に変更するには

システム・セットアップ・メニューでユーザー定義コードを表示するプログラムを実行します。その他の方法として、略式コマンドに“UDC”と入力することもできます。

1. 〈ユーザー定義コードの処理〉フォームで、次のフィールドに入力して[検索]をクリックします。
 - システム・コード
 - ユーザー定義コード
2. 変更するコードをハイライトして、[ロー]メニューから[使用言語]を選択します。
3. 〈UDC の翻訳記述〉フォームで、ブランク行の次のフィールドに値を入力して[OK]をクリックします。
 - 言語
 - 記述フィールドに使用する翻訳記述を入力します。

CNC の基礎

CNC (Configurable Network Computing/コンフィギュラブル・ネットワーク・コンピューティング)とは、ネットワーク中心のソフトウェア・アーキテクチャを意味します。CNC では、ユーザーがタスクに関連するプラットフォームやデータベースの知識がなくても、構成可能な分散型アプリケーションを各プラットフォームで実行できます。CNC によって、テクノロジーが変化しても、ビジネス・ニーズに合ったタスクを遂行することができます。ユーザーはアプリケーションを再設計することなく、新しいテクノロジーを採用できます。

J.D. Edwards のソフトウェアには次のコンポーネントがあります。

設計ツール J.D. Edwards には、対話型アプリケーションやバッチ・アプリケーションおよびレポート作成に使用する統合ツール・セットがあります。

アプリケーション J.D. Edwards が提供する対話型アプリケーションとバッチ・アプリケーションにより、ビジネス・ニーズに対応した処理を行います。たとえば「購買オーダー入力」や「総勘定元帳転記」などがアプリケーションの例です。

J.D. Edwards ファウンデーション・コード J.D. Edwards ソフトウェアの中核コードで、対話型アプリケーションとバッチ・アプリケーションの両方の実行に必要な基本プログラムです。

J.D. Edwards ミドルウェア J.D. Edwards ソフトウェアが提供するミドルウェアは、データベース、オペレーティング・システム、ハードウェア、メッセージ・システム、テレコミュニケーション・プロトコルに依存しないアプリケーション・コーディングを実現します。これによって、プラットフォームに依存しないビジネス・ソリューションが可能になります。

参照

- 『CNC インプリメンテーション』ガイドの「CNC インプリメンテーション」および関連するトピック
- 『パッケージ管理』ガイドの「パッケージ管理ガイドの概要」および関連するトピック
- 『システム・アドミニストレーション』ガイドの「オブジェクト管理ワークベンチ構成の理解」
- 『サーバー&ワークステーション・アドミニストレーション』ガイドの「サーバー&ワークステーション・アドミニストレーションの概要」および関連するトピック

CNC の利点

J.D. Edwards ERP の CNC (コンフィギュラブル・ネットワーク・コンピューティング) アーキテクチャには次のような利点があります。

- ネットワーク中心のソフトウェア
- 柔軟な レバレッジ・テクノロジー
- ワールドワイドなビジネス・サポート
- 継続作業なしのカスタム・ソリューション

ネットワーク中心のソフトウェア

ネットワーク中心のソフトウェアを使用すると、統一されたインターフェイスを作成し、多様なプラットフォームで構成されるネットワーク環境をサポートできます。プラットフォーム間で互換性を持つことにより、次のような環境が実現できます。

- サポートしているすべてのアプリケーションで、拡張機能をすぐに使用できます。次に説明する項目の変更は、ネットワーク内のすべてのアプリケーションに反映されます。
 - ビジネス・オブジェクト
 - ビジネス・ルール
 - 処理モード
 - ハードウェアおよびデータベース
- プラットフォームに依存しない J.D. Edwards ERP のビジネス・スペックまたはミドルウェア。これらは、マルチベンダー、マルチプロトコル環境において、ベンダー間、プロトコル間の差異を統合する共通 API の汎用セットから構成されています。この統合により、開発者は個々のプラットフォームに特有の問題を理解したり、プラットフォーム別にプログラミングを行う必要がなくなります。
- インターネット・テクノロジー(ブラウザ・インターフェイスなど)のサポート

柔軟なレバレッジ・テクノロジー

設計ツールを利用すると、プログラミング言語に関する深い知識がなくてもアプリケーションを作成できます。J.D. Edwards ERP ツールではコードは隠されていて、開発者は現在のビジネス・ニーズに合ったアプリケーションの作成に集中し、アプリケーションのソース・コードに変更を加えることなく、業務要件の変更に対処できます。

J.D. Edwards ERP は、オブジェクト・ベース・アーキテクチャおよびイベント・ドリブンな構造により、ビジネス・プロセスの効率化を実現します。開発者は、1 度作成したオブジェクトを他のアプリケーションで再利用できます。再利用により、開発の効率化とともに J.D. Edwards アプリケーション全体の一貫性を高めることができます。

J.D. Edwards ERP のイベント処理は、コマンドやキー・ストロークだけでなく、フィールド単位でも行われます。たとえば、フォームのフィールド間を移動する場合、カーソルがフィールドを出た瞬間に情報が処理されます。フォーム上で次のフィールドに移動すると、入力されたフィールドにエラーがあればすぐに検知され、フィールドが赤くハイライトされます。

J.D. Edwards ERP のユーザー・インターフェイスはアプリケーション間で共通なので、あるフォームから次のフォームへ移動する際の操作もアプリケーション間で一貫しています。

ワールドワイドなビジネス・サポート

J.D. Edwards ERP では、同時に複数の通貨や言語を使用することができます。また、サーバーからノート型 PC およびさまざまなプラットフォーム上で使用することができます。このようなスケーラビリティを備えていることにより、出張中でもシステムに接続してレコードを入力することができます。さらに、更新されたレコードをインターネット経由で送信し、ファイルを最新の情報へとアップデートすることもできます。

注:

J.D. Edwards ソフトウェアの ERP 8.0 以降では、WorldSoftware との共存はサポートされていません。WorldSoftware A73 から ERP 9.0 への移行については J.D. Edwards までお問い合わせください。

継続作業不要のカスタム・ソリューション

ビジネス・アプリケーションをカスタマイズしても、J.D. Edwards ERP を新しいリリースにアップグレードする際の継続作業はほとんど必要ありません。J.D. Edwards ERP のツール・セットは概念を使用可能なビジネス・ソリューションに変換する「アイディア実行者」となります。企業内で一貫性を保ちながら、変化するビジネス要件に対応する柔軟性を維持し、アップグレードに必要な時間を最小限に抑えることができます。J.D. Edwards ERP では、次の分野をアップグレードの際に継続作業なしにカスタマイズできます。

- 用語一時変更
- ユーザー一時変更
- バージョン
- 処理オプション
- コード生成プログラム

CNC の基礎

CNC アーキテクチャは、次の要素を基礎にしています。

- オブジェクト・ストレージ
- セントラル・オブジェクト
- 複製オブジェクト
- 環境
- パス・コード
- オブジェクト構成マネージャ (OCM)
- データ・ソース

オブジェクト・ストレージ

J.D. Edwards ERP では、セントラル・オブジェクトと複製オブジェクトという 2 つの一般的なストレージ・フォーマットでいくつかの機能に対応しています。

セントラル・オブジェクト

オブジェクトをデプロイメント・サーバーに保管し、次のことを実行できます。

- デプロイメント
- 再デプロイメント
- 開発

セントラル・オブジェクトは、J.D. Edwards ERP の各オブジェクトのオブジェクト・スペックと、コードで生成されたオブジェクトの C 言語コンポーネントで構成されています。セントラル・オブジェクトのスペックはデプロイメント・サーバーまたはエンタープライズ・サーバーのいずれかのリレーショナル・データベースに保管されます。コードで生成されたオブジェクトの C 言語コンポーネントは、デプロイメント・サーバーのディレクトリに保管します。

オブジェクトを組織全体に展開するには、J.D. Edwards ERP がセントラル・オブジェクトから作成するパッケージを定義します。各パッケージにはセントラル・オブジェクトのコピーが含まれています。このコピーは、オブジェクト・スペックおよび、コンパイルまたはリンクされた C 言語コンポーネントで構成されています。J.D. Edwards ERP は、このコピーされたオブジェクト・スペックをディレクトリに保管可能なフォーマットに変換します。ワークステーションとエンタープライズ・ロジック・サーバーはこのパッケージを受け取り、それぞれのローカル・ディレクトリに保管します。

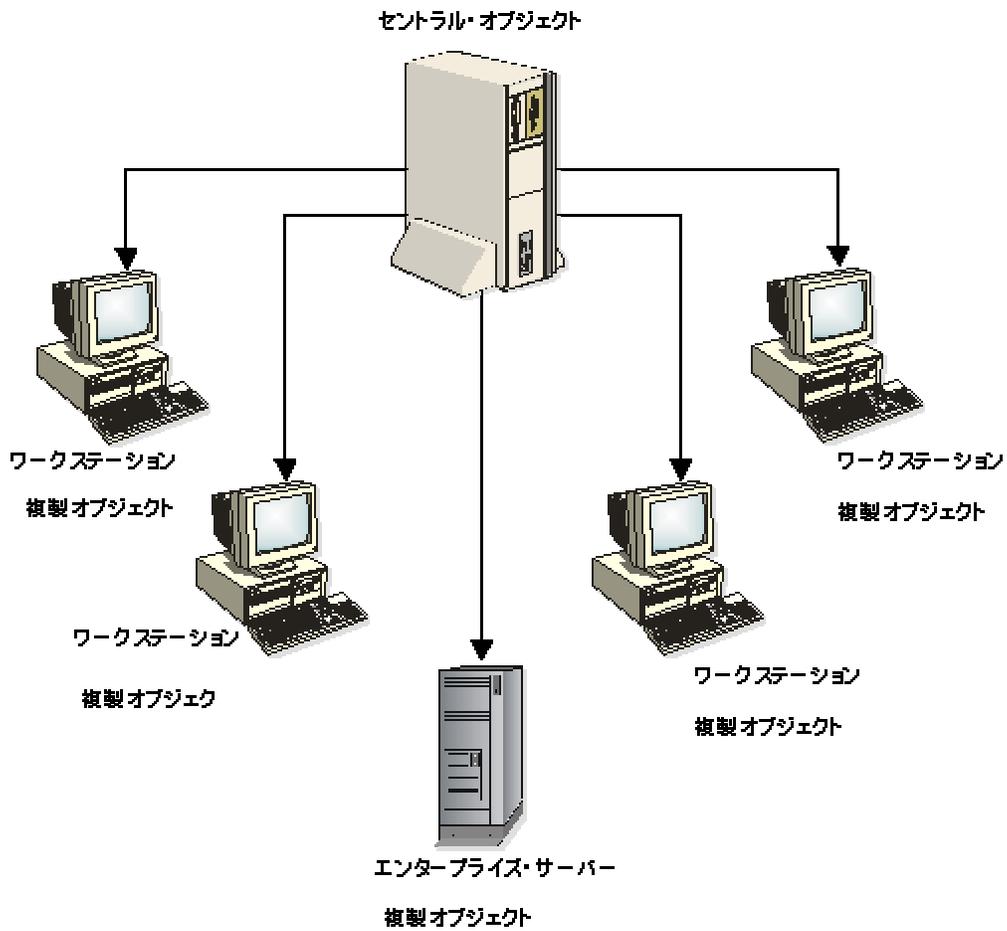
複製オブジェクト

複製オブジェクトはセントラル・オブジェクトから作成します。複製オブジェクトは、各ワークステーションかエンタープライズ・ロジック・サーバーのどちらかのディレクトリ、あるいはその両方に 1 セット保管します。ランタイムの J.D. Edwards ERP には(ワークステーションまたはエンタープライズ・ロジック・サーバーにより)処理されるオブジェクトのスペックが必要です。たとえば、ワークステーションで〈住所録〉アプリケーションを実行するには、そのワークステーションにオブジェクト・スペックと住所録アプリケーション、データ辞書項目やテーブル、ビジネス・ビューなど住所録で使用するオブジェクト用にコンパイルされた DLL(ダイナミック・リンク・ライブラリ)が必要です。実際のデータがある物理テーブルは別のプラットフォーム上のデータベースに存在するため、アプリケーションを実行するには、物理テーブルを記述するオブジェクトの 1 セットをワークステーションまたはエンタープライズ・ロジック・サーバーのディレクトリに保管する必要があります。

J.D. Edwards ERP のワークステーションまたはエンタープライズ・ロジック・サーバーには、セントラル・オブジェクト 1 セットに対して 1 セットの複製オブジェクトを保管することができます。たとえば、開発環境と製作環境で別々のセントラル・オブジェクトを使用する場合があります。開発環境を分離すれば、カスタム修正が簡単に行えるようになり、組織内の別の環境で使用されているオブジェクトとの整合性を維持できます。

次の図では、セントラル・オブジェクトと複製されたオブジェクトとの関係を説明しています。

例:セントラル・オブジェクトと複製オブジェクト



環境

J.D. Edwards ERP の環境とはポイントの集合で、各ポイントはデータと J.D. Edwards ソフトウェアオブジェクトの位置を示しています。環境によって次の情報が定義されます。

- データはどこにあるか
- ロジックを処理するマシンはどれか
- 処理中のオブジェクトはどのディレクトリにあるか

J.D. Edwards ERP という環境は、データとロジック・オブジェクトとの橋渡しを行います。たとえば、購買管理システムでは次のような情報が提供されます。

- データはどこにあるか** ユーザーが[検索]ボタンをクリックして購買オーダーを検索すると、環境によってどのデータベースのテーブルを検索するかが確定されます。
- ロジックを処理するマシンはどれか** オーダーを入力して[OK]をクリックしたときに、トランザクションを記録するのに必要なロジック(マスター・ビジネス関数)処理をどこで行うか、またオーダーを記録するトランザクション・テーブルがどこに存在するかが環境によって確定されます。
- 処理中のオブジェクトはどのディレクトリにあるか** ユーザーID とパスワードを入力する際、どの環境にサインオンするかを選択する必要があります。複数セットのオブジェクトがある場合は、環境を選択することにより J.D. Edwards ERP で実行されるオブジェクト(オブジェクトの存在するディレクトリ)が確定されます。このロケーションはパス・コードと呼ばれ、これはライブラリ・リスト・マスター(F0094)で定義されます。

パス・コード

パス・コードとは、デプロイメント・サーバーのセントラル・オブジェクト、またはロジック・サーバーあるいはワークステーションの複製オブジェクトのロケーションを示します。パス・コードは、セントラル・オブジェクト 1 セットにつき 1 つ存在します。たとえば、ユーザー向けに展開するソフトウェアの更新用にオブジェクトを 1 セット確保し、大規模な拡張用にオブジェクトを 1 セット確保する、ということもできます。

オブジェクトやパス・コードは、次のロケーションに置くことができます。

- デプロイメント・サーバー** 開発オブジェクトのスペックのセントラル・セットが存在します。すべての開発はこのロケーションで行われます。パス・コードは、このスペックとデプロイメント・サーバー上の C 言語コンポーネントとを接続します。
- ワークステーション** J.D. Edwards ERP のランタイムで使用される複製オブジェクトが存在します。
- ロジック・サーバー** ロジック・サーバー上でのロジック処理に J.D. Edwards ERP が使用する複製オブジェクトのセットが存在します。

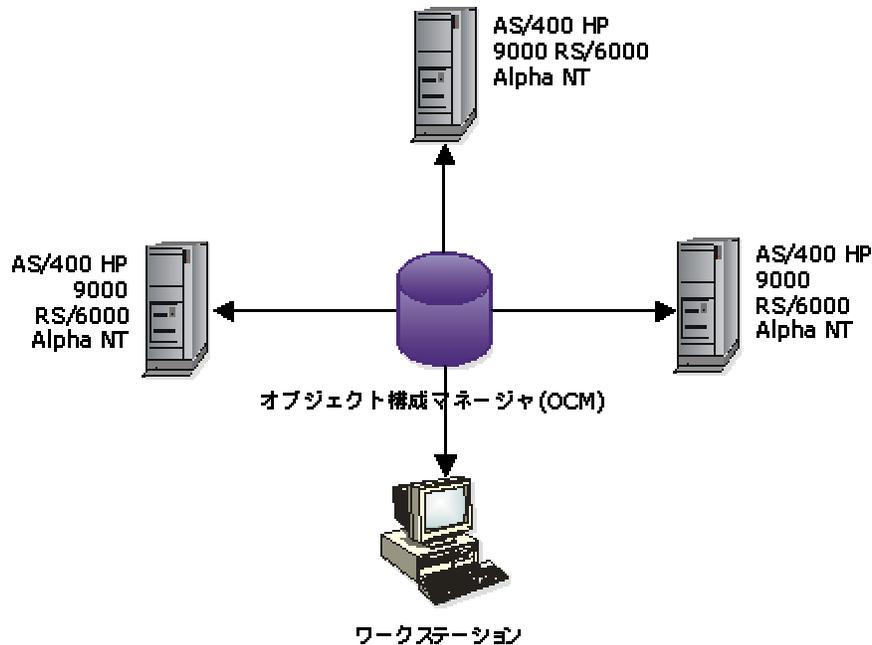
オブジェクト・パス・マスター(F0094)には、J.D. Edwards ERP のオブジェクト・セットおよびロケーションをトラッキングするパス・コードが含まれています。

オブジェクト構成マネージャ(OCM)

オブジェクト構成マネージャ(OCM)とは、分散処理と分散データをランタイムで構成するツールです。OCM を使用するのにプログラミングの必要はありません。オブジェクト構成マネージャ(OCM)は、オブジェクト・マップ・テーブルを使用して、環境、ユーザーに合った正しいデータ、バッチ処理、ビジネス関数を見つけます。オブジェクト構成マネージャは、ランタイム・アーキテクチャのコントロール・センターです。J.D. Edwards ERP による分散ロジックの実行に必要なプラットフォームとデータの検索には、常にオブジェクト構成マネージャが使用されます。

次の図は、オブジェクト構成マネージャがどのようにロジックとデータを接続し、処理しているかを示しています。

オブジェクト構成マネージャ(OCM):データおよびロジックへの接続



どの環境にも、関連するオブジェクト構成マネージャのマッピングがあり、その環境における分散データおよび分散処理のロケーションが示されます。

次の等式はオブジェクト構成マネージャ、パス・コード、環境の関係を示します。

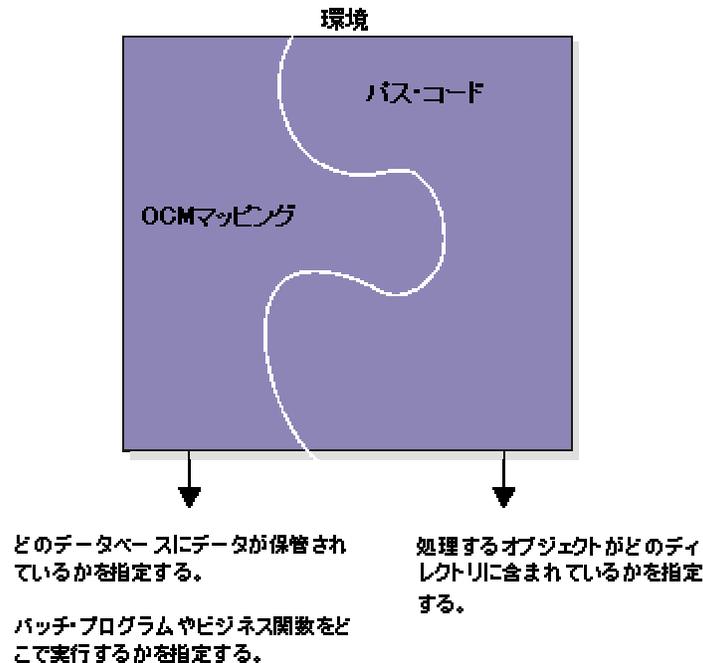
$$\text{環境} = \text{パス・コード} + \text{OCM マッピング}$$

パス・コードでは、次の情報が提供されます。

- 処理中のオブジェクトはどのディレクトリにあるか
- OCM マッピングによって、次のことがわかります。
- どのデータベースにデータが保管されているか
 - バッチ・プログラムやビジネス関数をどこで実行するか

次の図は、環境を作成する際に J.D. Edwards ERP がどのように OCM マッピングとパス・コードの関係を使用しているかを示しています。

OCMマッピングとパス・コードを使用した環境の作成



データ・ソース

データ・ソースとは、分散処理またはデータの特定のロケーションを意味します。J.D. Edwards ERP データ・ソースには次のものがあります。

- 特定のロケーションにあるデータベース(全体)でデータベースのタイプは無関係。たとえば特定ディレクトリにある Microsoft Access データベースまたは特定ライブラリにあるデータベース DB2/400。
- ロジックを処理するエンタープライズ内の特定のマシン

プラットフォームとデータ・ソースはともに機能するので、ロジックを処理するサーバーとデータを保管するデータベースの両方を定義する必要があります。1つのデータベース管理システム(DBMS)に複数のデータベースがある場合、J.D. Edwards ERP には各データベースを定義してください。

Microsoft の ODBC データ・ソースと J.D. Edwards ERP のデータ・ソースは異なります。ODBC データ・ソースが Client Access、Rumba、SQL Server、Access などのサードパーティ・コミュニケーションを使用してデータベースにアクセスするインターフェイスを定義するのに対して、J.D. Edwards ERP のデータ・ソースは J.D. Edwards ERP で使用するデータ・ソースとロジック・サーバーの両方を定義します。

次に J.D. Edwards ERP で使用可能なデータ・ソースについて説明しています。

Oracle DBMS	Oracle DBMS 用の J.D. Edwards ERP データ・ソースは、ORACLE コネクト・ストリング (Oracle Connect String) とテーブル・オーナー (Table Owner) へのポインタとなります。
SQL Server DBMS	SQL サーバー・DBMS (SQL Server DBMS) 用の J.D. Edwards ERP データ・ソースは、SQL サーバー・データベース (SQL Server Database, ODBC データ・ソース) とテーブル・オーナー (Table Owner) へのポインタとなります。
DB2/400 DBMS	DB2/400 DBMS 用の J.D. Edwards ERP データ・ソースは、RDB ディレクトリ入力およびライブラリ (ODBC データ・ソース) へのポインタとなります。
MSDE DBMS	MSDE (Microsoft Data Engine) 用の J.D. Edwards ERP データ・ソースは、MSDE データベース (OLEDB データ・ソース) へのポインタとなります。

オブジェクト・デプロイメント

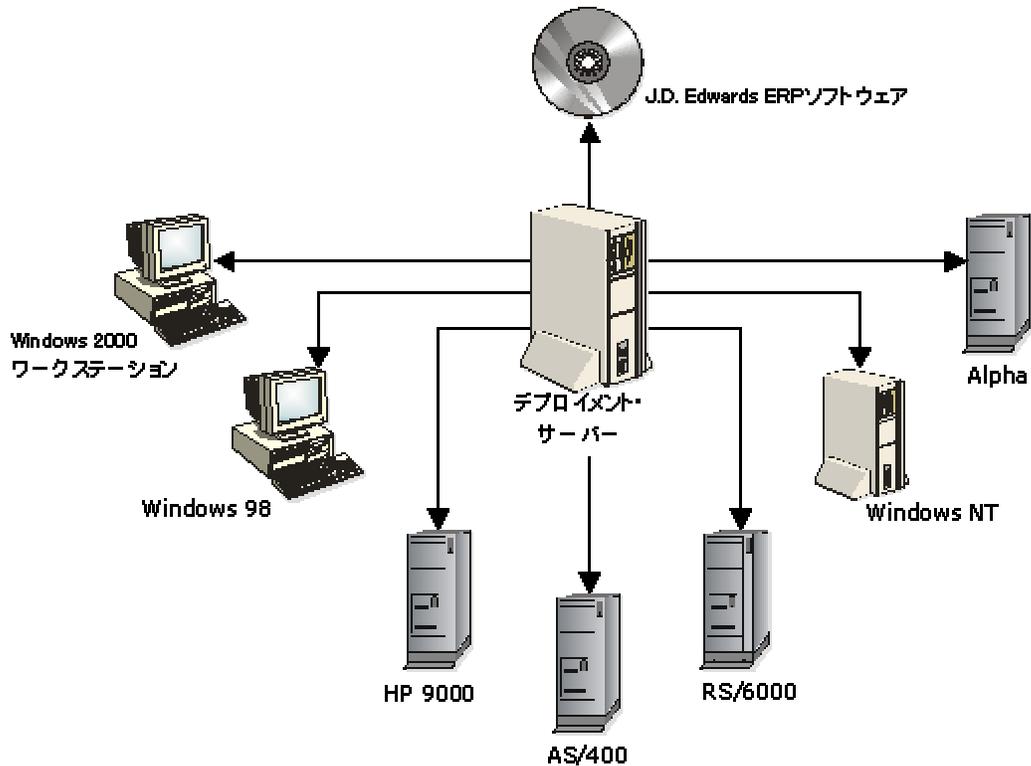
J.D. Edwards ERP をワークステーションとサーバーに展開するには、次のいずれかの方法を使用します。

- ワークステーションとサーバー・マシンへの初期インストール
- ワークステーションへのワークステーション・インストール
- ワークステーションへのアプリケーション・インストール
- ワークステーションへのジャスト・イン・タイム・インストール

初期インストール

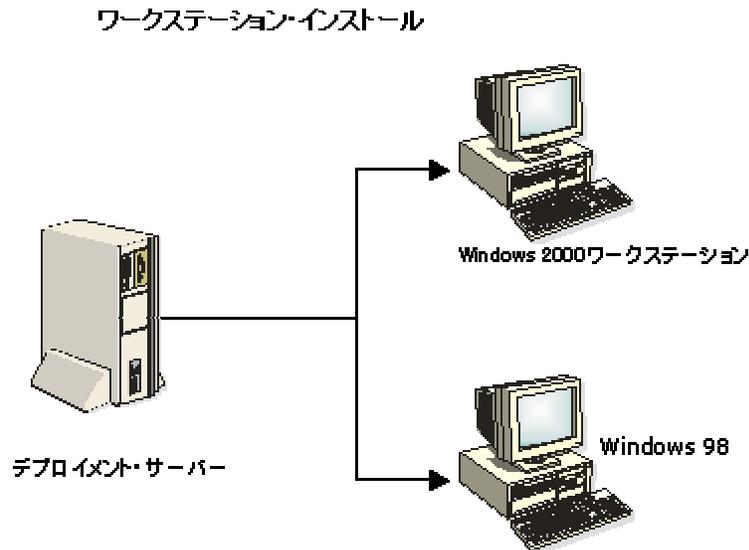
インストール処理は、デプロイメント・サーバーを使用して行われます。デプロイメント・サーバーのインストール・プログラムにより、J.D. Edwards ERP インストール・ソフトウェアが CD-ROM からデプロイメント・サーバーにコピーされます。デプロイメント・サーバーからこのソフトウェアを、エンタープライズ・サーバーやワークステーションに展開します。

J.D. Edwards ERPインストール・プロセス



ワークステーション・インストール

ワークステーション・インストールでは、指定したパッケージを使ってソフトウェアをインストールします。パッケージには、ワークステーション・インストール・プログラムがローカル・コンピュータに展開する必要コンポーネントをどこから探してくるかという説明が含まれます。



各パッケージは、ある時点におけるセントラル・オブジェクトの記録となります。セントラル・オブジェクトの修正は、パッケージを作成して充分テストした後で行います。修正オブジェクトは、別のパッケージを作成してユーザーが使用できるようにするまでユーザーのもとには届きません。パッケージを作成する場合は、セントラル・オブジェクトをパッケージ自体にコピーします。これにより、J.D. Edwards ERP がランタイムで読み込むことのできる複製オブジェクトが格納されます。

アプリケーション・インストール

個々のアプリケーションへの変更をすばやく展開するためには、アプリケーション・インストールを使用します。ワークステーションではアプリケーション・インストールが開始され、デプロイメント・サーバーがアプリケーションを実行するのに必要なすべてのオブジェクトを収集して配信します。

アプリケーション・インストールを行うと、次の利点があります。

- すべてのオブジェクトをインストールする必要はなく、変更されたアプリケーションをインストールするのに必要なオブジェクトだけをインストールすることができます。
- アプリケーションの変更を展開する前に新しいパッケージを作成し、グローバル・ビルドを実行する必要がありません。
- 開発者とテスト担当者は、セントラル・オブジェクトにチェックインされた変更をマシンにロードすることができます。

ジャスト・イン・タイム・インストール

ジャスト・イン・タイム・インストールでは、アプリケーションを最初に使用しようとしたときにワークステーションに必要なコンポーネントがインストールされます。たとえば、新しいアプリケーションを含んだカスタム・メニューをワークステーションに展開すると、ユーザーがそのアプリケーション・メニューをクリックした時点で自動的にそのオブジェクトがワークステーションにインストールされます。

ホット・キー

J.D. Edwards ERP では、フォーム上のメニューやボタンを選択するのに、マウスでクリックするほかにアクセラレータ・キー(キーボードのキーを組み合わせることで押すこと)を使用することができます。システム標準のプッシュボタンにはすべてホット・キーが付いています。

ホット・キーが存在する場合は、コントロールまたはメニューのコマンドの後にカッコ付きで単語の先頭文字に下線が付いています。たとえば[検索]ボタンの場合、“検索(I)”というように“I”という文字が付いています。この場合、[Alt]キー+ [I]キーを押すことにより検索を行えます。

ホット・キーは Windows クライアントと Web クライアントの両方で使用できます。

注:

Web クライアントでは、[Alt]キーを使用するすべてのホット・キーの組合せは左側の[Alt]キーでのみ動作します。右側の[Alt]キーは外国語の特殊文字を入力するために予約されています。

テキストの選択

ホット・キー	操作
Shift + *	右側 1 文字テキストをハイライトする
Shift + *	左側 1 文字テキストをハイライトする
Shift + Ctrl + *	単語の終わりまでのテキストをハイライトする
Shift + Ctrl + *	単語の先頭までのテキストをハイライトする
Shift + End	行末までのテキストをハイライトする
Shift + Home	行頭までのテキストをハイライトする
Shift + *	複数行を 1 行上方向に選択する
Shift + *	複数行を 1 行下方向に選択する
Shift + マウス・クリック	テキスト範囲をハイライトする。テキストの先頭でクリックして [Shift]キーを押したままで、テキストの最後でまたクリックする。

キーボードのショートカット

ホット・キー	操作
F1	フィールド・ヘルプにアクセスする
Ctrl + Backspace	挿入ポイントの左側 1 文字を削除する
Ctrl + Delete	挿入ポイントの右側 1 文字を削除する
Ctrl + X	選択テキストを切り取る
Ctrl + V	切り取った/コピーしたテキストを貼り付ける
Ctrl + Y	前の処理を繰り返す
Ctrl + C	選択テキストをコピーする
Ctrl + Z	最後の処理を元に戻す
Ctrl + S	作業を保存する
Alt + M	[フォーム]メニューを開く
Alt + R	[ロー]メニューを開く
Alt + P (Web クライアントのみ)	[レポート]メニューを開く
Alt + O (Windows クライアントのみ)	[レポート]メニューを開く
Alt + L	[ツール]メニューを開く
Ctrl + S (Web クライアントのみ)	コントロールの検索ビジュアル・アシストを実行する
Ctrl + F10 (Web クライアントのみ)	コントロールの検索ビジュアル・アシストを実行する

移動

ホット・キー	操作
タブ	次のフィールドまたはボタンに移動する
Ctrl + Tab	QBE からグリッドへ、およびグリッドから次のフィールドまたはボタンへ移動する
Shift + Tab	前のフィールドまたはボタンへ戻る
Shift + Ctrl + Tab	グリッドに対して後退する、またはグリッドから QBE へ移動する
・ または ・	グリッドの 1 カラム左/右のカラムにカーソルを移動する
・ または ・	1 行上/下のグリッド行にカーソルを移動する
Page Up または Page Down	グリッドに前/次のページのレコードを表示する

Ctrl + ←	1文字左にカーソルを移動する
Ctrl + →	1文字右にカーソルを移動する
Ctrl + Q	QBE で最初に使用できるフィールドにカーソルを移動する
Ctrl + G	編集可能なグリッドでは、最初の編集可能なセルにカーソルを移動する。編集不可のグリッドでは、グリッドの最初の行のロー・セレクタにカーソルを移動する。

ボタン

ホット・キー	操作
Alt + A	追加
Alt + C	閉じる/キャンセル
Alt + F4	閉じる/キャンセル
Alt + D	削除
Alt + F	検索
Alt + O	OK
Alt + S	選択

カレンダー・ツール用キーボードのショートカット

ホット・キー	操作
Page Up または Ctrl + ↑	前月に移動する
Page Down または Ctrl + ↓	翌月に移動する
→ または ←	週を移動する

メディア・オブジェクト・テキスト用キーボードのショートカット

ホット・キー	操作
Ctrl + B	選択したテキストを太字にする
Ctrl + I	選択したテキストを斜体にする
Ctrl + U	選択したテキストに下線を引く
Ctrl + Shift + L	プレットを作成する
Ctrl + Tab	テキスト編集フォームを終了して、タブ・シーケンスにある次のオブジェクトを表示する

グリッド内での移動

グリッドで使用できるキーボードコマンドは次のとおりです。

ホット・キー	操作
Shift + . または Shift + ^	複数ローを選択するのに使用する。入力不可のグリッドでのみ使用可能。
Ctrl + Page Up または Home	ローの最初のセルに移動する。
Ctrl + Page Down または End	ローの最初のセルに移動する。
Ctrl + Home	最初のローとカラムのセルをアクティブにする。
Shift + Tab	前のセルへ移動する。移動の順番は左方向から上方向。データ入力可能なグリッドでのみ使用可能。
Ctrl + Tab	グリッドから出て、フォームの次のコントロールに移動する。
Shift + Ctrl + Tab	グリッドから出て、フォームの前のコントロールまたは QBE(存在する場合)に移動する。
F2	アクティブなセルの最後のテキストにカーソルを移動する。データ入力可能なグリッドでのみ使用可能。
Ctrl + X	セルにある現在の選択またはデータをクリップボードにコピーする。
Ctrl + V	クリップボードのデータを現在のセル位置に貼り付ける。
Ctrl + C	セルにある現在の選択またはデータをクリップボードにコピーする。
Esc	編集モードを使用できないようにする(変更した内容が、前のセルの値で置換される)。データ入力可能なグリッドでのみ使用可能。
Shift + [Space Bar]	現在のローを選択する。データ入力可能なグリッドでのみ使用可能。

J.D. Edwards ソフトウェアのシステム

次に J.D. Edwards ソフトウェアのシステム・コード一覧を示します。

システム・コード	システム名
00	基本環境
01	住所録
02	電子メール
03	売掛管理
0301	与信管理
03B	拡張売掛管理
03C	在庫管理システム
04	買掛管理
05	時間会計/人事管理基本
05A	OneWorld 人事/給与管理ファンデーション
05C	OneWorld 人事/給与管理ファンデーション(カナダ)
05T	時間入力
05U	OneWorld 人事/給与管理ファンデーション(アメリカ合衆国)
06	使用不可
07	給与計算
07S	給与計算 SUI
07Y	U.S. Payroll Year End(給与計算/アメリカ合衆国年度末)
08	人事管理
08B	福利厚生管理
08C	OneWorld 人事管理(カナダ)
08H	健康および安全
08P	所属管理
08R	採用管理

08U	OneWorld 人事管理(アメリカ合衆国)
08W	給与管理
09	一般会計
09E	仮払精算
10	財務諸表等
10C	複数事業所の連結
11	多通貨処理
11C	現金主義会計
12	固定資産
13	工場/設備管理
14	予算作成
15	不動産管理
16	収益性分析(EPS)
17	カスタマー・サービス管理
17C	コール管理
18	リソース・スケジューリング
19	ユーティリティ CIS (コンピュータ情報システム)
30	製造データ管理 - 組立製造
3010	データ製造管理 - プロセス製造
31	製造現場管理
3110	データ製造制御
32	コンフィギュレーション管理
32C	Custom Works
33	能力所要量計画(CRP)
34	所要量計画
34A	上級計画&スケジューリング

35	統合施設計画
36	予測管理
37	品質管理
38	契約管理
39	上級在庫評価
40	在庫/OP 基本
4010	上級価格調整
41	在庫管理
41B	バルク在庫管理
42	受注管理
42A	セールス・フォース・オートメーション
42E	ECS 受注管理
43	調達管理
44	外注管理
4401	建築管理
44H	建築管理
45	上級価格設定
46	倉庫管理
47	電子データ交換(EDI)
48	作業オーダー処理
48S	サービス請求
49	上級輸送管理
50	作業原価(ベース)
51	作業原価計算
52	契約請求
53	変更管理

55 - 59	クライアント用に予約済み
60 - 69	J.D. Edwards カスタム用に予約済み
70	多国籍製品
71	クライアント・サーバー・アプリケーション
72	World Vision
73	製造および流通補足製品
74	ローカライゼーション(EMEA)
74H	ローカライゼーション(ハンガリー)
74I	ローカライゼーション(アイルランド)
74L	ローカライゼーション(ポルトガル)
74N	ローカライゼーション(北欧)
74P	ローカライゼーション(ポーランド)
74R	ローカライゼーション(CIS)
74S	ローカライゼーション(スペイン)
74T	ローカライゼーション(トルコ)
74Z	ローカライゼーション(チェコ)
75	ローカライゼーション(アジア太平洋地域)
75H	ローカライゼーション(タイ)
75I	ローカライゼーション(インド)
75K	ローカライゼーション(韓国)
75T	ローカライゼーション(台湾)
76	ローカライゼーション(南米)
76A	ローカライゼーション(アルゼンチン)
76B	ローカライゼーション(ブラジル)
76C	ローカライゼーション(コロンビア)
76H	ローカライゼーション(チリ)

76P	ローカライゼーション(ペルー)
76V	ローカライゼーション(ベネズエラ)
77	給与計算(カナダ)
77Y	給与計算(カナダ年度末)
79	変換ツール
80	ナレッジ・マネジメント
81	ドリーム・ライター
82	ワールド・ライター
83	管理レポート - ファスター
84	分配データ処理
85	カスタム・プログラミング
86	電子文書交換
87	JDE 内部使用
88	先読み除去システム
89	変換プログラム
91	ドキュメンテーション
92	コンピュータ支援設計 (CAD)
93	コンピュータ支援プログラミング
94	セキュリティ管理
95	スリーパー(現在システム 96)
96	コンピュータ・オペレーション
97	ソフトウェア・インストール
98	テクニカル・ツール
98E	電子バーストおよびバインド
98FT	フォーム・タイプ
98SA	サンプル・アプリケーション

99	テクニカル・ツール - 内部使用
99D	テクニカル・ツール - DASD サイズ
99M	テクニカル・ツール - マスター/更新
B	翻訳
B1A	中国語 - 簡体字
B1B	中国語 - 繁体字
B1E	英語
B1F	フランス語
B1G	ドイツ語
B1I	イタリア語
B1J	日本語
B1P	ポルトガル語
B1S	スペイン語
B2A	オランダ語
B2D	デンマーク語
B2F	フィンランド語
B2N	ノルウェイ語
B2S	スウェーデン語
B3C	チェコ語
B3H	ヘブライ語
B3R	ロシア語
BC1	中国語 - 簡体字
BC2	中国語 - 繁体字
BCR	チェコ語
BDN	デンマーク語
BDU	オランダ語

BFI	フィンランド語
BFR	フランス語
BGR	ドイツ語
BHE	ヘブライ語
BIT	イタリア語
BJP	日本語
BNO	ノルウェー語
BPO	ポルトガル語
BRU	ロシア語
BSP	スペイン語
BSW	スウェーデン語
D3N	dcLINK(データ収集)
H01	住所録(ALL Mailを含む)
H03	売掛管理
H03B	拡張売掛管理
H04	買掛管理
H05	独立型会計
H07	給与計算
H08	人事管理
H09	一般会計
H12	固定資産
H13	工場/設備管理
H15	不動産管理
H30	製造データ管理 - 組立製造
H301	データ製造管理 - プロセス製造
H31	製造現場管理

H311	データ製造制御
H32	コンフィギュレーション管理
H33	能力所要量計画(CRP)
H34	所要量計画(DRP/MRP/MPS)
H35	統合施設計画
H36	予測管理
H40	在庫/OP 基本
H41	在庫管理
H415	バルク在庫管理
H42	受注オーダー処理
H43	購買オーダー処理
H44	契約管理
H44H	建築管理
H45	売上分析
H46	倉庫管理
H50	作業原価(ベース)
H72	クライアント/サーバー
H73	CS - A/P 伝票入力
H74	CS - 給与時間入力
H75	CS - 受注入力
H76	CS - トレーニングと開発
H78	CS - 出張費管理
H79	CS - 予測管理
H90	OneWorld ツール
H91	設計ツール
H92	対話型エンジン/オブジェクト・ライブラリアン(OL)

H93	データベースおよび通信
H94	バッチ・エンジン
H95	テクニカル・リソース/アプリケーション
H96	デプロイメント
H97	ベンチマーク/パフォーマンス
H98	インターネット
H99	製品バージョン・コントロール
H99P	テクニカル・ツール - OWPVC 内部使用
JE42	受注オーダー/価格設定
JE44	流通契約
JE48	自動出荷システム
KZ1	PC 予算アップロード(A3 から A5)
KZ2	買掛管理への PC データ入力
KZ3	給与計算への PC データ入力
SY	システム
Z101	MTI 電子流通
Z102	CRES
Z91	システム/システム・コード

